
転生先は“ネギま”じゃなくて真恋姫！？

大喰らいの牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生先は“ネギま”じゃなくて真恋姫!?

【Nコード】

N4958V

【作者名】

大喰らいの牙

【あらすじ】

えー、この作品は現在連載中の“ネギまと転生者”の主人公が“ネギま”の世界に転生するはずが、間違って“真恋姫”に転生するお話です。

※注意!! 作者は原作を知りません!

所々おかしいところがありますが、許してください。

それと、この注意書きを読んでいるながら、批判や中傷的な感想を送ってくる方には申し訳ないですが即座に削除させていただきます。

そのご理解してください。

【追記】 11月4日 現在

北郷抹殺完了！！

転生先は・・・（前書き）

ようやく形になったので投稿をしました。

イエーーーーー、（。人（。ノーーーーー
ーイ

スマン、はちゃけすぎた。

これは小説のあらすじでも紹介しましたが、“ネギま”と思ったら
“真恋姫”の世界に転生してしまうお話です。

原作をプレイしたことがないので、製作に時間がかかってしまうた
め、不定期更新になりやすいですが、それでもいいよ。という方は
駄文ですが付き合っていてください。

転生先は・・・

キャラ設定

主人公 蒼騎 真紅狼 《あおき しんくろう》

年 外見は21歳だが精神年齢は600歳越え。

身長 180cm

容姿は鋼殻のレギオスのリテンスをイメージ。

ただ、眼の色は『直死の魔眼』発動時は蒼それ以外は真紅。

能力

KOFのオズワルドの戦闘術 “カーネフェル” を使える。

武器 トランプ

鋼殻のレギオスの天剣受授者の技全てを使える。（その他の劉技も使用可能）

武器 リンテンスの鋼糸と刀の天剣

戦国BASARA2の武将の武具と衣装に各武将の技が使える。

身体は「紅」に出てくる、『崩月流』の身体の構造となっています。
右手に角あり。

FF6advansの召喚獣と魔法が制限なしで発動可能となる。
（詳しくは“ネギまと転生者”の設定2を見てくれ。）

死にかけたときに何故か「直死の魔眼」も持つことになる。
それに応じて、『七夜』の体術を使用可能になる。

召喚獣に関してですが、直接戦うことはありません。
ちよつと、素材を貰う程度。

あと、作中にFFシリーズである武器を手に入れます。
ヒント デイシディアに出てくるキャラの武器。

一瞬でバレそうだな。ちなみにその武器は私の持ちキャラです。

こんな感じですがよろしくお願いしますm（　　）m
ではちよつと冒頭を入れます。

「無事じゃ、怪我ひとつない。」

「そうか、よかったよ。」

と言った後、俺は光に包まれ、新しい生を得た。

「む？しまった、送る場所を間違えてしまったわい。・・・まあ、
あ奴なら大丈夫じゃろ。」

この一言により真紅狼は正規の手続きを踏まずに送られたため身体
に異変が生じているとは思わなかった。

転生中・・・

「・・・っう！！いででで！？何が起こったんだ？」

と目覚めはとてつもなく最悪だった。
だが、最悪なのはこれからだった。

「どこ、ここ？」

目覚めたとき森の中に居た。

「というか、俺の体が何故縮んでいる？」

21歳ぐらいに設定してもらったはずなのに、今の姿はだいたい9歳ぐらいになっていた。

近くでなにやら物音がしたが、転生後の謎の激痛により再び意識を落としてしまった。

「・・・人が倒れている！？アナタ、その傷どうしたの！！母上！！」

「そんな大きな声を出してどうしたの、華琳？・・・あらあら。華琳荷物を持ってちょうだい。私はこの子をおぶります。」

「はい。母上。」

というやり取りをやっていたが、真紅狼には聞こえているハズがなかった。

真紅狼はこうして、後に「霸王」と呼ばれる少女と出会った。

転生先は・・・（後書き）

ようやく投稿だ！！

すみません、本当は二話一気に投稿したかったんですが、力尽きました。

主に、睡眠的な意味で・・・

“ネギま”じゃなくて“真 恋姫無双”に転生?! (前書き)

二話目でーす。

熱中症になりかけました。・・・あぶねっ！
水分補給はこまめにやりましょう。

“ネギま”じゃなくて“真 恋姫無双”に転生?!

（真紅狼side）

「おう?!ここはどこだ...?」

「神の領域じゃ。」

「よう、じいさん。あつてすぐに言いたいことあるんだけど、言ってもいいか?」

「...それは勘弁してh「却下」」

「俺をどこに飛ばした?」

「スマン、転生先まちがえてしもうた。」

「...どこに飛ばした?」

“真 恋姫無双”っていう世界じゃ。」

「なにそれ?」

「三国志は知つとるじゃろ?」

「ああ、魏、呉、蜀のことだろ?」

「そうじゃ。お主のいるところはそれじゃ!」

「...は?」

「なんじゃが、それは本来の三国志とは少し違うようじゃ。」

「どこが違うんだ?」

「なんでも、その世界は“外史”と呼ばれているらしい。」

“外史”ってなに?」

「異世界というものらしいぞ、今回は有名な武将がすべて女らしい。」

「

マジかよ。全員女か...。男の立場低そうだな。

「じゃ、次だ。俺の体が縮んだのは?」

「うむ。正規な方法で転生しなかったのが原因で転生したときに法則が乱れたようじゃ。」

つまり、あれか。」

宇宙の法則が乱れ始めた!!

『アルマゲスト』!!

でも、俺はくらったのか？

「一応成長はするんだよな？」

「ああ、成長するが、21歳までな。そこからは肉体の成長は止まるがの。」

「ああ、さいですか。」

「あと、そうじゃ。能力の一部が今使用不能になっておる。」

「え、どれが？」

「まず、鋼糸の使用が不可じゃが、刀の方は・・・大丈夫じゃ。あとは魔法じゃな。これは全て使用不可だ。17歳を超えれば、鋼糸は完全に使えるようになるのじゃが、魔法は21歳にならないければ無理だ。」

鋼糸が使えなくなるのは痛いな。

「まあ、しょうがねえか。使えないならしばらくは身体を鍛えながら、“カーネフェル”や“崩月流”に“七夜”の体術に専念するか。」

「あと、これは追加じゃ。“カーネフェル”で使用するランプじゃが無限に出てくるから無くなるってことはないぞ。」

「おお、ありがたい。」

三国志ってことは漢王朝の時代だしな、ランプなんて代物あるわけないし、どう調達するか困っていたが、悩みが一つ消えた。

「む、そろそろ起きるがよい。長く寝過ぎると身体が固くなって動きを取り戻すのに大変じゃ。」

「うい。」

「じゃ、第二の人生楽しむがよい。」

「おう。」

そのあと、俺は目を閉じた。

＼真紅狼side out＼

＼曹操side＼

母上が運んできた男の子は未だに目を開けなかった。

私より年はだいたい三つ上ぐらいであった。

見慣れない服を着ていた。

「・・・うあ？」

「母上、意識が戻りました。」

「あらあら、目が覚めたかしら？」

と母上は安心できるような声で男の子に声をかけた。

「・・・ここは？」

「森の中では危険なので私の家に来てもらいました。」

「態々、すみません。」

「いいえ。大丈夫ですよ。」

「それでも助けていただいて有難うございます。」

と男の子は身体を無理に起こして、見慣れぬお辞儀をしていた。

「・・・っう」

「無理はいけないわ。さて、華琳。私は水を汲んできますので、少しの間お願いね。」

「はい、母上。」

「では、いつてきます。」

そういい、井戸の方に水を汲みに行った。

そのあと、一気に静かになる。

私はさっきから気になっていたので聞いてみた。

「アナタ、どこから来たの？」

「ここよりもずっと東から来た。」

「というと、呉から？」

「違う、それよりもっと東だ。海を渡った先に島国がある、そこからやって来た。」

「そんな国あったかしら。」

「“日本”と呼んでいた。」

「ふん。歳は？」

「九つだ。」

「私より三つ年上・・・。」

思っていた通り、年上だった。

また、新しい疑問が生まれたので聞いてみた。

「それじゃあ、アナタの服装はその国の物なの？」

「ああ。」

「随分と奇抜ね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「最後にいい？」

「なんだ？」

「アナタのn・・・「只今、戻りました」お帰りなさい、母上」
名を聞く直前で母上が帰って来た。

（曹操side out）

（真紅狼side）

目が覚めた俺は、いきなり声をかけられビックリしたが、その声の持ち主を見ると金髪で“深窓のお嬢様”という感じの女性だった。

うん？金髪？

・・・待て待て！

ここは三国志じゃなかったか！？

なんで、金髪なんてものがあるの?!

これが、ジイサンの言ってた“外史”ってやつか。

・・・改めて凄いと思った。

その女性の娘が色々質問してきたので、嘘はなるべく付かずに答えた。

さすがに、未来から来たとかは言わなかったけど・・・。

最後に聞きたいことがあったみたいだが、この娘の母が帰って来た。俺は汲んできてもらった水を受け取り、水を飲んだ後「貴方のことを聞きたい」と言われたので話すことにした。

（真紅狼 side out）

（彗琳 side）

水を汲み終え、家に着いたときには華琳と話していた。

だけど、痛みのせいなのかどこか、無理して喋っていることが何となくだけど、わかった。

そして、なによりも分かったことはおそらくこの子には家族と呼べるものが居ないことが分かった。

華琳が家族のことを話していると、彼はどこか羨ましそうで儚げな眼をしていた。

「只今、戻りました」

華琳は一旦質問を止めた。

私は汲んで来た水を竹筒に入れ、飲ませた。

「そろそろ落ち着いたなら、貴方のことを聞きたいのだけどいいかしら。」

「はい。」

「私から名を言うわ。彗琳よ。華琳の母です。」

「私は姓が曹、名は操、字は孟徳、真名は華琳よ。」

この娘がああ曹操!?!?!マジ?

ちょっと、凄い現実を目のあたりにして呆けていたが、正気に戻りこちらにも名乗ったが、真名ってなに？

「俺は蒼騎 真紅狼だ。」

「姓が蒼で、名が騎かしら？」

「いえ、違います。字が蒼騎、名が真紅狼です。」

「真名はないの？」

「その真名ってなんですか？」

「神聖な名とでも言っておこうかしら。真名はその人が認めた相手のみに教える名よ。勝手に真名呼んでしまうと首を斬られてしまうから気を付けてね。」

「はい。となると、俺の真名は真紅狼ですよ。」

「・・・！何も知らずに真名を教えていたの？」

「いえ、俺の国では真名というのは無く、字と名だけです。そして、名がある意味真名に当たります。」

「そう、変わっているのね。」

“変わっている”と言われたが、なんとも複雑な気分だ。

「じゃあ、真紅狼と呼ぶわね？」

「はい。俺は彗琳さんと呼びます。キミは「華琳よ」いいのか？神聖な名なんだろう？」

「貴方だって、真名も知らずに堂々と真名を教えたんだからこれで差し引きなしよ。」

「じゃあ、華琳でいいか？」

「ええ。よろしくね、真紅狼。」

「挨拶も終わったところで話を再開するわね。・・・いきなり失礼なことを言うのだけど真紅狼くん。貴方、家族いないでしょ？」

「えっ？」

「・・・！？」

真紅狼の目は見開き、「どうして分かった」という目でこちらを見

ていた。

「華琳が家族について話している時、貴方の目は羨ましそうに見ていたわ。そこから、考えると貴方は家族というものを知らないのでは？ ってね。」

「……」

真紅狼くんは黙っていた。

「出来れば、貴方の口から話してくれたら有難いんだけど、ダメかしら？」

もちろん、言いたくことの無いことは言わなくていいわ。……どう？」

「……ふう。いいですよ。お話します。」

「そう。有難う。」

「ただ……」

「どうしたの？」

「ただ、これを聞いた後が怖くて……」

「大丈夫よ。」

と優しい瞳で答えてあげた。

「華琳 side out」

「真紅狼 side」

「家族がない」……か。

俺はそんな目をしていたのか……。

親しいモノ程、未練を残しやすいっていうのかな？

吹っ切ったと思ったんだがなあ。

「……俺はどこにでもいる家庭に生まれました。父も母も心身ともに強くちよっとやそこらのことじゃ、負けないぐらいに。ですが、俺が四つのときに盗賊に殺されました。そのとき、両親はなんとか

俺だけ命がけで逃がしてくれました。ですが、そのあとの1年は親戚の者に次から次へとたらい回しにされ、挙句の果てには腫れ物扱いされたり、理不尽な暴力を受けた時もありました。・・・そして六つの時に一人で生きるために“人”として生きるために、“殺す”練習を始めました。それから一年が経った頃に、その親戚の者を殺しました。そこから二年は力を付けながら、親戚の者を殺しまわりました。ささやかな復讐です。・・・これが全てです。」

まあ、時代と年、両親の死因は嘘だが、それ以外は事実だし。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人は今の話を聞いてから一言も喋っていない。

やはり、拒絶するか。こんな話をすれば。

と自嘲気味に嗤っていると慧琳さんがいきなり抱きついてきた。

「!？」

え、ちょ、何故に!？

「辛かったでしょ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「泣きたいときに泣いた方が楽になるわよ？」

「・・・泣きたくても泣けないんですよ。俺。」

「えっ？」

「なんというか、両親が死んだときだって泣けなかった。多分俺は、“悲しい”という感情が欠落してんだと思います。俺は壊れてしまったんですよ。・・・辛いはずなのに泣けず、心の中に溜めていき、それが入りきれなくなり内側から破裂して修復不可能のところまで壊れた。」

「・・・ねえ、貴方。私たちの家族にならない？」

「・・・話し聞いてました？」

「聞いていたわ、けど誰だって幸福を望んでもいいはずなのに貴方

にはそれがない。だからね、私たちが貴方に幸福を上げるわ。」
と拒否は許さないという目でこちらを見ていた。

最初は無視しようと思ったが、すごい見つめられていて居心地が悪くなったので諦めた。

「わかりましたよ。家族になります。」

「嬉しいわ。では、改めてよろしくね。真紅狼？」

「はい。義母さん。」

「そう言えば年は九つって言ってたから、華琳の義兄ね」

「あー、そうですね。よろしくな、華琳？」

「はい、義兄さん。」

「不思議な気分だな。」

「兄弟はいなかったの？」

「生憎、一人っ子です。」

「そうなの。」

「おっと、いけない。忘れるところだった。」

「何を義兄さん？」

「まあ、挨拶をな。」

「挨拶？」

「・・・この度、本日から曹家の家族と成りました、蒼騎 真紅狼
です。末長くよろしく願います。」

と礼儀正しく、正座をし、深く挨拶をした。

このやり取りに慧琳と華琳はポカンとしていた。

「真紅狼、それは？」

「俺の両親が教えた礼儀の一つです。」「世話になる相手には必ず礼
儀正しく挨拶をしろ」・・・と。」

「・・・いい両親だったのね。」
と言ってくれた。

（真紅狼 side out）

“ネギま”じゃなくて“真 恋姫無双”に転生?! (後書き)

華琳の母親の名はオリジナルです。

スミマセン!!

最初は「星琳」にしようと思ったんですが、それだと星と被ってるのでこちらの「慧」に変えました。

ここで一つ報告があります。

私は『姓・名・字』が全く分らないんです。

分かっているのは『曹操』と真名の『華琳』とかはwikiに載っていたので分かるんですけど、正式の名は全然分かりませんので詳しく知ってる方いますか？

知っている人はメールしてください。

ついでに誤字脱字があれば、それも指摘してくれたら有難いです。

真紅狼、傷を負う（前書き）

すみません！

お待たせしました！

第三話をどうぞ！

真紅狼、傷を負う

（真紅狼 side）

家族になってから、四年が過ぎた。

時間圧縮されている？それはどこぞの魔女の技だ！

・・・スマン、なんか電波が入った。

四年が立ち、俺は13になり、華琳は10になった。

その間に、幼馴染というか曹家の部下をやっている者の娘ともいつの間にか遊ぶようになった。

「雅、お前もうちょいお淑やかに出来ないのかよ？」

「いいでしょ。真ちゃん、元気が一番だよ！」

「いや、まあそうだけだよ。・・・華琳も何か言ってやってくれよ。」

「うーん。彼女が一番の売りだから私は何も言えないわ。」

「・・・味方がいない！！」

とこのような会話がほぼ毎日のように続いていた。

俺も飽きないな・・・。

しかし、この四年でだいぶ生活が変わった。

俺がこの世界の生活の仕方もあるが、一番の変わりは華琳だった。

華琳は曹家の後継ぎの為か、義母さんの家に来るのもまばらになっていき、俺と会うのも数カ月に二、三回だった。

まあ、それは仕方がないことなので別に気にしてない。

こんな感じなので、一度目の少年時代は裏の世界で過ごしているため二度目の少年時代ぐらい楽しく過ごしていききたいと思い、遊び相手を探していると見つかったわけだ。

彼女は義父の部下の娘さんらしく、家もこの近くにあるらしい。

ときどき、こちらの方までやってきて遊んでいたのを偶然にも出会った。

そこからは容易に想像できると思うが、仲良くなる↓華琳が来た↓紹介する↓今に至るってわけだ。

しかし、今日は遊びに夢中だったのか森の奥まで入り込んでいた。それが拙かった。次の瞬間、衝撃の出来事が来た。

ウオオオオオオオ！！！！

「「「!?!?!」」」

餌を求めてやってきた巨大な熊が出てきた。

大の大人をゆうに超えるほどの大きさだった。

華琳たちは突然出てきた熊に怯えて動けていなかった。

「華琳！そこを動くなよ！！！」

叫んだが恐怖のあまり聞こえていなかった。

雅は俺の近くに居たため、背に隠して守っていたが華琳は俺たちと離れていた為か、守れなかった。

「あ、ああ・・・」

華琳は必死に足に力を入れようとしている。

熊が一步、また一步と華琳に近づいていき残り100mというところで華琳は恐怖に耐えられなくなり、熊に背を向けて逃げた。

「きゃあああああああああ！！」

「止せ、華琳！今、熊に背を向けるな！k「ドスンッ！」マズイ！！」

華琳が背を向けて逃げたのを見て、完全に熊の標的とされてしまった華琳を庇うように熊と華琳の間に割り込んだが、その時すでに樹木を一撃で薙ぎ倒す程の腕が振り降ろされていた。

ブォン!!

「グアァァ!!」

華琳を護るために背中であけた。

「え?・・・に、義兄さん!」

「いい・か、華琳。一・度しか言わな・いから・よく聞け。熊・
・は背・を見せた・奴を「っう。」本能的に・。「ハァハァ」
、襲う。だか・ら・逃げる・時・は背を見せ・ず、熊から
意識・を逸らさず・ゆっくり下がるんだ。分かったな?
それと、・・・れよ。」

「・・・(コクコク)」

「俺がアイツの・・・氣を引く。その内に・・・逃げろ。」

「・・・(フルフル)!!」

「行くんだ!! 雅!! 華琳を連れて義父さんと呼んで来い!!」

雅は熊に背中を見せずに華琳のところまで来て、華琳の手を取って
ゆっくりと下がっていった。

華琳は最後まで俺を置いて行きたくないらしく抵抗していたが、そ
れも敢無く終わった。

「さて、華琳たちもいなくなったし、第二ラウンドといこうか。」
そう言って、右腕の肘から角が出現した。

「往くぞ!」

と言って熊の元に駆け寄った。

く真紅狼side outく

く華琳sideく

私は熊に出会ってから、恐怖のあまり動けず義兄さんの声も聞こえ
てなかった。

頭を支配しているのは恐怖と死の二つのみだった。

そんなとき熊が私の方にゆっくりと歩み寄って来た。
怖い、怖い、怖い！！

私は怖さのあまり、熊に背を向けて逃げた。
義兄さんのところに。

熊は追ってきて、腕を振り上げていた。

私……死ぬのかな？

と思って目を瞑った。だが、しかし一向に痛みは来ることがなく代わり呻き声が聞こえた。

「ぐう！！」

恐る恐る目を開けてみると、義兄さんに護ってもらっていた。

「え？……に、義兄さん！？」

何故？どうして義兄さんが？

そんな不思議な顔をしていたのか、義兄さんはこの場から去る方法と一言言った。

「……それと、兄ってのは妹や弟を護るために先に生まれてくるんだ。俺は生まれてはいないが、お前の義兄だ。だからさ……護らせてくれよ。」

「……（コクコク）」

そのあとは義兄さんが囧になるといい、置いていくことが出来なかったが先程言われたことを思い出し、ここは我慢して、雅と共に急いで家に帰った。

（華琳 side out）

（雅 side）

真ちゃんが熊の一撃を受けた後、私は急いで華琳様に駆け寄り、手

を取った。

「行くんだ!! 雅!! 華琳を連れて義父さんと呼んで来い!!」
「.....」

私は無言で答えたが、真ちゃんが私を信じてくれるということが分かり、私は華琳様の手を取って、その場を離れようとしたが華琳様はその場を離れたくないらしく最初は抵抗していたが、ほんの一瞬间何かを思い出した後、抵抗を止め下がってくれた。

そして、私たちは急いで家まで帰り、父に「熊が出た。真ちゃんが私たちを逃がす為に足止めをしている。助けてください!!」と話したら急いで部下たちを呼び、救出と熊の討伐に向かった。

真ちゃんの場合まで案内したがそこで目にしたのは双方ともに倒れている姿だった。

＼雅side out＼

＼真紅狼side＼

「往くぞ!」

俺たちは同時に走り出していたが、俺は『旋剄』で脚力を大幅に強化していた為、熊の繰り出す一撃よりも早く右腕を振るった。

ブオン!.....ゴキッ!

ザシュッ!

「ぐお!?!」

「グウオオオオ!?!」

当たった瞬間骨が折れる音がした。だが、熊も負けておらず当たる瞬間真紅狼の顔目掛けて前右腕が降り降ろされていた。

傷口からは血が飛び出ていて当たりに撒き散らかしていた。

「(これ以上“剄”の力を使うと出血多量で死ぬな、これは。あと

二回ぐらいだな。一つは移動用・・・あとは！」
その後、両腕から剄を纏い始めた。

「剛力」・・・
ボウ！

「徹破」・・・
キュウン！

「咬牙！！」
ゴォウ！！

『旋剄』で熊の懷に潜り込み、そのまま腹に一発叩き込んだ。
『剛力徹破・咬牙』は外側から衝剄と徹し剄を同時に叩きこみ、内外同時破壊する技だ。

これが腹に決まり、熊は倒れた後動かなくなった。

同時に俺も力の出し過ぎと傷のせいで動かなくなった。

そのあと、遠くから声がしたが俺はすでに意識が途切れていた。

（真紅狼 side out）

（華琳 side）

義兄さんのところに辿り着いた時には熊は腹がへこんでおり、息絶えていた。

だけど、義兄さんも傷のせいで倒れており、急いで駆け寄った。

「義兄さん！！」
声をかけたが返事がなく、もっと大きな声をかけた。

「義兄さんっ！！！！」
「・・・あ。」

「生きてる。まだ生きてる！！早く馬を」

そのあと、義兄さんは急いで村に戻り、偶然立ち寄っていた医者
に治療され、命を取り留めた。

そのあと、私、雅、義兄さんは母上、父上に思いっきり怒られ、
義兄さんなんかは目を覚ましたところを母上に顔を叩かれていた。

「真紅狼！！どれだけ心配させれば気が済むんですか！！」

「・・・華琳達を護る為だったんだ。」

「それでもです！！貴方は私よりも先に死ぬつもりですか！！」

「・・・」

「・・・二度とこんな真似はしないでください。」

と母上は涙を浮かべながら、義兄さんを抱きしめていた。
そこに父上が声をかけた。

「・・・真紅狼、一発だ。」

ボコッ！

「ぐっ！」

「これだけだが、私の気持ちが分かるな？」

「・・・ああ。」

「そうか。では帰るぞ。華琳。」

「はい、・・・父上。」

「・・・真紅狼。伝言だ。」

「・・・なんだ。」

「お前を治療してくれた医者の方からだ。」

【背中の傷と顔の傷は治らず、一生残るでしょう。】

「だそうだ。」

「・・・・・・・・分かった。」

「義兄さん。では。」

「ああ。」

こうして、義兄さんは私たちを助けてくれた代わりに顔と背中に傷を負うこととなった。

（華琳 side out）

その二ヶ月後、母上が病で亡くなった。

真紅狼、傷を負う（後書き）

新キャラの説明

姓…碧

名…羅

字…桜楼

真名…雅

年齢…9

武器…少し幅のある刀と小太刀

父親が曹家の部下をやっている、真紅狼達を見つけ仲良くなり今に至る。

キャラ説明はこんなもんです。

というか今回の文ですでに登場する武器が分かったかもしれませんがね。

顔に傷があり、かつFFの武器と言えば、アレしかねえ。

母の死（前書き）

続けて投稿でいい。

母の死

（真紅狼 side）

今、曹家の親しい者だけ集めて葬儀を開いてる。

様々な人が来ていた。

生前、義母さんに世話になった者、義父さんの部下、近くの豪族などが来ていた。

その者たちは義母さんにお辞儀した後、義父さんそして華琳に礼をしたあと、俺に対してはひそひそと話していた。

内容は想像できた。

「奴を引き取ってから、彗琳さんの体調がおかしくなった」

「奴は疫病神だ」

「アイツが殺した」

のだと謂われの無い中傷だった。

が、別に何を言われようが俺は一向に構わなかった。

今から始まったわけではないのだ。この類は。

四年前から、謂われ続けてきたものであった。たまに義母さんの中傷もあったが、義母さんは「大丈夫ですよ」と優しい顔をしていた。だから、せめて今日ぐらいは中傷も批判も無い一日を過ごして欲しかった。

だが、それをブチ壊すグズがいた。

地位がちよっと高い豪族だった。その豪族は以前義母さんに叱られたことがあってそれを根に持っていたらしい。義母さんが死んだことを良いことにたくさん暴言を吐いた。

「ようやく死んでくれたぜ、この女。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「こいつが拾ったっていう、クソガキが不幸をもたらしてくれたおかげでしょう。」

一気に視線が俺に集まるが別に構わない。問題はコイツをどうやって“殺す”かだ。

「だいたいこの女大した地位もないのに生意気なんだよ」と言いたい放題だった。

義父さんも言い返せなかった。まだ曹家はこの豪族よりも若干位が低いからだ。

そこに華琳がその豪族の立ちふさがった。

「母上に謝れ！」

「あん？なんだクソガキ誰に口を聞いてるんだ!!」

バシッ！

「きゃあ!!」

華琳は豪族による裏拳で思いっきり壁にぶつかり、蹲っていた。その後の行動でこの豪族の未来が決まった。

「子が子なら、母親も母親だな「ドガッ！」」

義母さんの棺に足蹴りを放った瞬間、俺はスイッチが入った。

＼真紅狼 side out＼

＼華琳 side＼

母上が死んだ。

皆は義兄さんのせいだと噂しているが、元より母上は身体が弱かったのを知っていた。だから、本来は義兄さんのせいではないのだ。だけど、その内の一人の男が母上を侮辱し、故人に暴力を振るった。

それを私は許すことが出来なかった。

「母上に謝れ！」

「あん？なんだクソガキ誰に口を聞いてるんだ！！」

バシッ！

「きゃあ！！」

ひと思いにひっぱたいてやろうと思ったけど、敵わなかった。
さらに母上を侮辱した時、義兄さんが動いた。

・・・何かを纏って。

（華琳 side out）

（真紅狼 side）

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ゆっくりと俺は歩み寄る。

片手には『七つ夜』と書かれた短刀を持ちながら・・・。

豪族は調子に乗っているせいか気が付かない、この場が一人の少年から溢れるほど滲み出る“死”のオーラで包み込まれていることを。少年の顔を長く見てきた者しか・・・いや、それすら分からないかもしれない。

少年の眼が“真紅”から“蒼”に変わっていたことを。

「・・・・・・・・殺す」

この呟きを聞きとれた者はどれほどいようか。
すでに真紅狼は姿を消していた。

気が付いた時には、豪族の目の前にいた。

「・・・・・・・・斬る」

閃鞘・七夜

「・・・ハハッ・・・ハ？」

ザシュ！

「ぐあ！？」

そこからの光景は酷いものだった。簡単に人を殺せるほどの力があるのにそれをせず、豪族を蹴っていた。

「ぎゃああああ！！！」

「・・・・・・」

もうすでに男の姿は満身創痍だった。

至る所に切り傷があり、全身から血が流れ出ていた。

しかも、片足のアキレス腱を切っており、まともに動けるものではないのに真紅狼の蹴りは止まらず、もっと加速していった。

・・・が、すでにコイツに興味が無くなったのか、仕留める気だった。

だが、そこに歯止めをかけたモノが居た。

「止めろ、真紅狼！」

「・・・・・・」

「慧琳はそんなことを望んでいないハズだ！！！」

「・・・・・・そんなこと俺には関係ない。俺が殺したいから殺す。ただそれだけだ。」

「・・・義兄さん」

「・・・」

「義兄さん、もう止めてください。母上も怒ってくれたことには感謝してるはずです。」

「・・・・・・・・（スッ）」

真紅狼は構えてた短刀を降ろし、元に戻った。

「分かった・・・止めにしよう。・・・だが、ケジメは付けさせて貰う。」

素早く短刀を構え、痛みに呻いていた男の元に突っ込んだ。

「極彩と散れ・・・」

たった一瞬だったが、その間の出来事は真紅狼本人しか知らない。
ただ、違ったとすれば、真紅狼の立ち位置だけが、そのあと事が動き出す。

ゴトツ・・・

「「「「え？」」」」」

「ぎゃあああああああああ！！！！」
あまりの痛みにとうちまわっている豪族。

「受け取れよ、アンタへの手向けの花だ」

真紅狼はそう言い残し、壁によっかかっていた。

「お、俺の腕があああああ！！」

豪族の右腕は綺麗さっぱり両断されていた。

真紅狼は豪族とすれ違った際、肩の付け根からバツサリと「死の線」をなぞって斬ったのだ。

その腕は二度と使い物にならないように。

こうしたあと、豪族は急いで自分の土地に帰っていった。

騒然とした葬儀も終え、真紅狼は家に帰り、旅を出ることを決意し

た。

だが、その前に一週間ほどゴミ掃除に手間がかかり、出立するのに遅れ、華琳に発覚されることとなった。

（真紅狼 side out）

母の死（後書き）

ゴミ掃除とは言わなくても分かりますよね？

そして、真紅狼は旅に出ます。・・・ようやく。

前回は剽でしたが、今回は七夜インストールです。
さて、通り名をどうしようかな？

あ、しばらく真恋姫に集中するので他の三作品の投稿がまばらになります
が許してください。

勢いを殺したくないもので。

旅に行ってきます(前書き)

ヒヤッハー！連日投稿だー。

旅に行ってきます

（真紅狼 side）

家の掃除も終え、義母さんに旅に出ると報告もして、いざ旅に出ようとしたら華琳にバレた。・・・チクシヨウ。

なんでも、雅が女の勘という物で分かったらしい。

こんなときに働くんじゃないよー！！

そして、現在正座中・・・。

「義兄さん、そんな荷物持ってどこに行こうとしてたんですか!？」

「いや、あのな先週斬った豪族が死んだから、俺追われる身となつたし、ほとぼりが冷めるまで、旅という名の諸侯を回ろうかと・・・」

「ダメです。」

「なぜ!？」

「そんな残念な顔をされても、無理なものは無理です。」

「雅、お前は俺の味方をしてくれるよな!？」

「ごめんね、真ちゃん。今、私華琳様の部下だから味方できないんだ。」

「くっ!だがしかし!!ここで華琳は夢を終わらせたくないだろう?」

「!!」

「俺が出ていかなければ、朝廷の官軍がやってくる。今の曹家じゃ太刀打ちは出来ねえ。俺が各地を転々と移動していくうちに朝廷が手出しできないほどの勢力を持てばいいじゃないか。」

と打開策を持ちかける。

「・・・ですが。」

「確かにそうですね。」

「雅!？」

「確かに真ちゃんのことにも一理あります。どうでしょう? 華琳様ここは一つ真ちゃんの案に乗ってみては?」

「・・・分かりました。だけど噂などが消えたら必ず戻ってきてください。」

「ああ、必ず戻ってくるよ。」

こうやってうまく道を切り開いた俺は荷物を持ち、この世界に来た時の姿で許昌を出た。

出る途中、二人の双子とすれ違ったがそれが曹操の部下である、夏侯惇と夏侯淵だとは真紅狼はまだ知らなかった。

＼真紅狼side out＼

＼華琳side＼

行ってしまった、義兄さん。

少しでも早く戻って欲しい為に戦力を増強することや政策を創りださなきゃ。

「雅。・・・頑張るわよ」

「そうですね。真ちゃんが少しでも早く戻ってこれるように頑張るでしょう。」

とお互い意気投合した後、侍女から「謁見をお願いしてきた者が来た。」という知らせを受け、行った後なかなかの武だったので部下とした。

二人の名は夏侯惇と夏侯淵で真名は春蘭と秋蘭だった。

＼華琳side out＼

＼真紅狼side＼

旅に出た俺は、まずどこに行くかで迷っていた。

「西涼か呉か・・・。まあ、西涼から回って、そこからはどうにでもなるだろ。」

道中移動しながら、体を鍛えながら、野盗を潰したりして路銀を稼いでいた。

中には、技の実験台になってもらったりした。極死とか極死とか極死とか。

しばらく経ち、西涼に行く途中で寄った陳留で鍛冶屋があったのでそこに寄ってみた。

この時代の武器の情報が欲しかったからだ。

曲刀から槍、斧、剣など色々あったが俺はそこでとんでもない物を見つけた。

「・・・なんで、これがこんなところにあるんだ・・・!?!」

そこで見たのは銃と剣が複合されたモノだった。

「ガンブレード”!!」

（真紅狼 side out）

旅に行ってきます（後書き）

短いですが、次回はメツチャ長いです。・・・多分。

その武器の名は・・・（前書き）

今週は真恋姫週間です。

しかし、ちゃんと他の作品も創っていますので待っててください。

その武器の名は・・・

＼真紅狼side＼

「“ガンブレード”！！」

奥の方に飾ってあった武器をよく見たが、どこからどう見てもあの“ガンブレード”だった。

その発した言葉に興味を示した鍛冶屋の主が訪ねてきた。

「・・・アンタ、この武器を知ってんのかい？」

「ああ、知ってる。コイツの正式名称も。」

「・・・・・・・・なら、持ってみろ。」

「え？」

「アンタがコレを知ってるなら、持ったときに何かしら起こるはずだ。だから持ってみろ。」

と鍛冶屋の主はガンブレードを棚から取り出し、俺に渡してきた。

＼真紅狼side out＼

＼親方side＼

今日も客が来ないから店を閉めようと思ったら、入口に小僧が立っていた。

普段なら追い返しているが、この小僧からは何かしら追い返すことが出来ず、むしろ「何かが起こる」とどこかで言っていた。

その小僧が奥の棚を見た瞬間、目を開き、その武器の名？なのか分からないが呟いていた。

「“がんぶれーど”」

と意味は分からなかったがどうやら知っていたみてえだ。

ほんの出来心だった。「コイツにあの武器を持たせてみたい」とい

うのが頭の中で囁いた。

「アンタがコレを知ってるなら、持ったときに何かしら起こるはずだ。だから持ってみろ。」

そして、俺は小僧に武器？を渡した。

その後起きた光景は、死ぬまで忘れないものとなった。

（親方 side out）

（真紅狼 side）

鍛冶屋の主から渡されて、持ってみた。

シャラン・・・

そんな音が鳴り響いた。

聞くだけで、緊張が高まった。

俺は、あの言葉を言ってみた。それで姿が変わるかどうかを知りたかったからだ。

「獅子の心!!」

その瞬間、ガンブレードは鈍い銀色の光沢から澄みきった蒼と変わった。

「・・・やはりな」

「はは、これはすげえ。・・・持っていけ。」

「は？」

「その武器を持って行け。代金はいらん。」

「・・・いいのか？」

「ああ、いいモン見れたしな。それを代金とさせて貰う。」

「感謝する。」

「良いつてことよ。そうだ、お前さん名は？」

「・・蒼騎 真紅狼だ。」

「そんじゃ、真紅狼。また会えると良いな。」

「ああ。そうだな。」

そうして、俺はガンブレード『ライオンハート』を手に入れた。

夜、寝ていたら予想通り、ジイサンが呼び起こした。

「要件は分かっておるな？」

「ああ、『ライオンハート』のことだろ？」

「うむ。」

「なんでこの世界にあるんだよ？」

「知らんが、たまに別世界の物が流れてしまう時があるのじゃ。」

「それじゃ、コレもその一環ってことか？」

「そうじゃ、しかも流れついてしまった物は二度とその世界から持ちだすことは出来んのじゃ。」

「じゃあ、元の世界に戻せないってことか。」

「そうじゃ。」

元に戻せないって届くか分からんがFF8の皆さん・・・スミマセン。

あ、でもアルティミシアからは感謝されるかもしれん。

「分かった、ジイサン。コレは俺が使わせてもらう。」

「お主の手になれば安全じゃろ。」

「じゃ、帰るわ。」

「うむ。済まなかったの」

そうして話しを終えた俺は再び目を閉じた。

次の朝から俺はガンブレードを使った戦闘法を練習した。

なんせ、“フェイテッドサークル”を試しに撃ったところ凄まじい

轟音と衝撃が俺の体を襲った。

そのときの反動でまさか肩が外れるとは思わなかった。

そこから五年間みっちりガンブレードの戦闘法を体に染み込ませていた。

さらには、スコールの服も再現した。

素材には一日一分だけだが、召喚獣の召喚に何とか成功出来た俺はちよつとずつだが体毛や鱗、牙などを分けてもらうことにした。ただし、やった後の反動は凄まじく、その後はぶっ倒れていた。

キング・クリムゾン！！

五年後・・・

時間が飛んだ？

話すことなんか無いよ。修行の一点のみだし。

未だに役人は俺を追ってるらしい・・・ご苦労様です。

俺はガンブレード専用のホルスターを創り、格好もあの『スコール・レオンハート』のような格好をしてる。

だけど、その格好の生地などは全て召喚獣の一部を分けてもらい製作した。

腰の辺りの白い毛はユニコーンの毛を分けてもらい、ズボンやジャケットはバハムートの古い鱗やカブトレパスの皮、ゾーナ・シーカのマントなどで創っているため、そこらへんの服よりも強靱かつ丈夫な防具となってしまった。

冗談抜きに鎧がいらぬレベルの性能だ。

さらには妖術なんか常に無効化する。

「さて、さすがにここの地に留まるのはもう危険だな。・・・最初の目的地、西涼に向かいますか。」

移動中・・・

目的地、西涼に着いたのは良かった。

だけど、街に行くには森を通らなくてはならなかったので横断して
いたら、いきなり横の茂みから槍を突き付けられた。

なんでも、この辺りに熊が出現するらしい。

熊かぁ、良い思い出はないな。

「で、俺を熊と間違えたことに対しての謝罪は？」

「だから、済まなかったと言ってるだろ！」

「お姉さま、何をしてるんですか？」

と茂みからさらにもう一人出てきた。

「蒲公英、コイツをどうにかしてくれ!!」

「え……。この人って確か……。……。あ！」

と何かに気が付いたらしい。

「この人、曹家の人間じゃない？ 噂では顔に傷があり、目は真紅だ
って！」

「お、お前曹家の人間だったのか?!」

「一応名乗っとくか、蒼騎 真紅狼だ。」

「……。蒲公英、“曹”とは一言も言っていないぞ？」

「アレ？ おかしいな？」

「確かに俺は曹家の人間だが、まだ“曹”の名を貰ってないんだよ。
取り敢えず、どこか休めるところに西涼に連れて行ってくれないか
? ……目的地がそこなんぞ。」

「なら、ウチに来い。礼もする。」

「そうさせてもらおうかな」

ようやく西涼に着いた。

あー、長い旅だったな。

「お姉さま、謝らないの？」

「持て成しをすれば、許してくれるだろ。」

となんか俺に聞こえないようになんか喋っていた。
なんだろうね？

＼真紅狼side out＼

その武器の名は・・・（後書き）

イエィ！！ようやく出ました。

作者の持ちキャラはスコールです。

ビートフアングが弱くなりましたが強いことには変わりないです。
ちなみに戦闘法はディシディアの戦闘法ですのでその辺は突っ込まないでください。

西涼で馬を貰う。(前書き)

今回は真紅狼専用の馬が貰えます。

西涼で馬を貰う。

（馬騰side）

娘たちが帰って来たと思ったら、どうやら曹家の兄に刃を向けたらしい。

しかし、曹家の兄と言えば今、朝廷から追われている身ではなかったか？

その真偽も確かめるべく、私は会ってみた。

「どうも、私が西涼の領主をやっている、馬騰と申します。」
と軽く挨拶をした。

さあ、どう反応する？

「ご丁寧にも。俺は蒼騎 真紅狼だ。」

「『蒼騎』？・・・私の記憶が確かならば、貴方は『曹家』の人間のはずでは？」

「ああ。確かに俺は曹家の人間だが、“曹”の名を貰ってないんだよ。」

「・・・そうですか。もう一つ聞きたいのですがよろしいか？」

「どうぞ」

「貴方は今でも朝廷に追われているのでは？」

「まあ、な・・・だから、こうして旅をしながら逃げているんじゃないか。」

なにやら言葉が途切れた。

訳ありだなこれは。

「出来れば、追われている理由をお話してくれませんか？」

「・・・」

「重要な部分は省略しても構わないですよ。」

「簡略に言うと、近くを治めていた豪族に喧嘩売った。」

なにか含みのある言い方をしていたが、聞き出すのも失礼にあたると感じたので追及はしなかった。

（馬騰side out）

（真紅狼side）

ここで待っていてくれ。と言われたので待つことにした俺は辺りを見てみると馬が治めている土地というだけであって。馬が多い。

そんなことを考えていると、領主が出てきた。

名は馬騰というらしく、あの二人の伯母に当たるらしい。

自己紹介をしてきたが、・・・これは試されてるな。

試されているということが分かったので、至って“普通”に対応した。

その後、まあ追われている理由を聞いてきたので、メツチャ簡単にまとめた。

一から説明するのも面倒なんで。

そんなやり取りを終えた後、馬騰がこんな提案をしてきた。

「して、真紅狼殿。一つ頼みがあるんですがよろしいか？」

「俺に出来ればですが。」

「なに、ウチの娘と手合せをお願いしたいんですよ。」

「手合せねえ。・・・何考えてやがる。」

「・・・ウチの娘はいかんせん怖いもの知らずでしてね。世の中はもっと広いことを教えてやりたいんですよ。」

「なるほど。・・・やr「やってくれたら、曹家に西涼の馬を送るぞ?」・・・ふむ。」

西涼の・・・しかも、馬が育てた馬か。良い条件だな。

「まあ、いいだろう。受けるか。」

「そうかい。では今すぐにでも始めよう。」

と言って、俺に外に出るように促した。

＼真紅狼 side out＼

＼馬超 side＼

馬騰伯母さまから呼び出された私は嫌だけど、呼びかけに応じた。

「伯母さま、来たよ。」

「よく来た。翠」

「翠？」

「おや、まだ真名を教えていなかったのかい？」

「教える必要がないだろ。伯母さま。それで要件というのは。」

「そうだった。翠、真紅狼と手合せをしな。」

「「はい？」」

私とついてきた蒲公英は口を揃えて、疑問形？で答えた。

「なんでアタシがコイツと戦わなければならないんだよ！」

「それは「俺がお前もよりも強いからだ」だそうだ。」

ちよつと、「カチンッ！」と来た。

お前がアタシよりも強い？

武器も持たないでいい度胸じゃないか。

「武器も持っていない奴に負けないよ、アタシは！！」

「吼えることだけなら誰でもできるぞ？」

とさらに挑発してきた。

「泣いても許さないからな」

「お前こそ泣くなよ？」

と真紅狼の言葉が発し終えたあと、アタシは動いた。

＼馬超 side out＼

（馬岱side）

私は、今お姉様と真紅狼の試合を見ているが、一方的だった。最初は、武器も持たない真紅狼なんか一瞬でやられる。と思っていたが、実際は違った。

お姉様の槍は一度も真紅狼を捉える事が出来ず、全て避けられるか弾かれるのどちらかだった。

しかも、弾いた後は軽い反撃までしていた。

「お姉様が・・・傷モノにされている。」

「してねえよ!？」

「そ、そうだぞ!! 蒲公英。そして、いい加減武器を持て、真紅狼!!」

「武器を持ったら、一瞬で終わるぞ?」

「そう簡単にやられるわけない・・・!？」

気が付いたら、お姉様の首の部分に刀があった。

「なっ?!」

「これで、分かったろ?」

「ア、アタシは認めない! こんなこと認めない!!」

「なら、全力で打ち込んでみる。」

「なに?」

「全力で打ち込んでみる。って言ったんだよ。自分の力がどれほどの力なのか教えてやる。」

「な、舐めるなー!!」

と、感情的になったお姉様は槍を振り降ろした。全力で。

活剷衝剷混合変化

金剛剷

槍が真紅狼さんにぶつかる瞬間、金色の何かが真紅狼さんを包み、お姉様の槍を弾き返しながら吹き飛ばした。

「これで分かったか？武器を持っても持たなくても、お前に勝てるということと同時にお前は井の中の蛙だったことを」

「……………(泣)」

あ、お姉様がちょっと泣いてる。

＼馬岱side out＼

＼真紅狼side＼

「なんで泣くんだよ。」

「う、うるしゃい！……うう、グスッ」

「ホントですよ、お姉様。」

「蒲公英もうるさい」

「さっきのなんだい？」

と伯母さまが聞いてきている。

あ、私も興味がある。

「あー、内緒で。」

「どうしてもかい？」

「まあ、教えてもいいんですけど、“氣”を使えなきゃ使うことが出来ないんで。」

「なら、仕方ないか。」

「で、報酬の方なんですが……」

「ああ、今度持っていこう。そうだアンタ一緒に行かないかい？」

「あー、このあと呉の方にも行きたいんでちょっと。」

「そうかい。」

「俺の名を出してくれれば、多分曹操に伝わると思うんで。」

「もし、伝わらないようでしたら、碧羅に伝えてくれ。」

「碧羅ね。」

「あ、俺専用に馬を一頭欲しいんだが、いいか？」

「それなら……見て行きなよ。」

移動中・・・

馬舎に来た俺たちは、目の前に広がるのは馬だらけ。スゲー数だな。見回す中に一頭だけ群れから離れている、漆黒の馬がいた。

「馬騰、あの馬は？」

「ああ、アレかい？あの馬は少し自己意識が強くてね。他の馬とも交わらないし、あたしたちも扱いに困っていてね。近づこうとすると、追い返すんだ。」

「へえ・・・」

と言って俺は真っ直ぐそいつの元に向かった。

「お、おい危ないぞ!？」

「・・・・・・」

辿り着いた俺は、その馬に触れようとした。

「よ、止せ・・・？」

その馬は暴れず、むしろ、何かを見極めているような感じがした。その後、その馬は俺に対して頭を垂らした。

「馬騰！俺はコイツにするぜ！」

「ああ、持って行きな。」

「お前の名は“黒鷹”だ。そして俺は真紅狼だ。よろしく頼むぜ？」

「ブルルル・・・」

「おう。頼むぜ。さて、そろそろ、呉に行こうかね。」

「なら、私たちと途中まで一緒に行こうか。」

「はいよ。」

俺は黒鷹に乗り、馬騰ともに途中まで一緒に旅をし、呉へ行く分かれ道で別れた。

「じゃ、俺はこっちだから・・・」

「ああ、また今度逢おうじゃないか。」

と言ってお互い向かう目的地の道に入った。

＼真紅狼 side out＼

別れた後、数週間かけて、呉に着いたんだが・・・。

また、武器を向けられた。

またかよ！！

西涼で馬を貰う。(後書き)

次回は呉ですよ

真紅狼、孫策に会う。(前書き)

限界まで・・・飛ばすぜ!!

真紅狼、孫策に会う。

＼真紅狼side＼

どうも、現在絶賛刃物を突き付けられている最中だ。
なんで、こう突きつけられるんだろうね？

顔の傷か？ そうなのか？

それはどうでもよくて、突きつけている相手は褐色肌の女性だ。
しかも、服装から見て、それなりに地位が高そうだ。

なんというか、下手打ったらメンドイことになりそうだ。
どう対応しようかな？

＼真紅狼side out＼

＼????side＼

冥琳と二人で出掛けていたら、いかにも賊っぽい男に出会った。

「貴方、ここで何をしてるの？」

「いや、各地を見て回る旅をしていると言うのかなあ？」

「はつきりしないわねえ。」

「まあ、各地を旅しているしがない旅行者だよ。」

「じゃあ、その旅行者に聞いわ、貴方ここがどこか知ってるの？」

「呉だろ？ 孫策が治めている。」

「そうよ。旅行者さん・・・いや、“真紅の殺人鬼”？」

「・・・！！ その名を知ってるってことは刺客、もしくは孫家に近い者か。」

と言って、彼が纏っているオーラが変わった。

「ここで貴方を倒せば、名声を得られるわ・・・ね！」

言い終わると同時に私は“南海霸王”を抜き、そのまま袈裟斬りをした。

だけど、その攻撃は失敗した。

振り降ろしている途中で私の武器は空中で止まり動かなくなり、そのまま“真紅の殺人鬼”は私の武器を素手で掴んで奪い取り、私を蹴り飛ばした。

「きゃあ!!」

「いけね、つい無意識にやっちゃった。」

「アレが無意識なんて悉く、規格外ね。貴方」

「おい、大丈夫か？」

「あら、敵かもしれない相手を心配するなんて余裕ね？」

「余裕もへったくれもあるか、得物が無い相手を痛めつける趣味はねえ。しかも相手が女性ならなおさらだ。で、アンタは何がしたいんだ？」

「それはもちろん貴方を倒して、名声を・・・」
「ゴッソッ!」
「いったーい!」

小競り合いで気が付かなかったがいつの間にか話している女性の後ろに黒髪でメガネをかけた女性が叩いていた。

「いったい何をしている、雪連。」

「???? side out」

「???? side」

二人で先代の墓参りに行った後、帰り際雪連とはぐれてしまった。

いや、雪連が何かを発見したみたいでその元に向かった。

私はゆっくりと向かった。

その場に着いたときちょうど、雪連が振り降ろす瞬間だった。

振り降ろした得物は空中で止まると言う不可解な現象が起こり、しかも素手で

得物を奪い取りそのまま蹴り飛ばしていた。

あり得ない光景を見た私は一瞬、呆けたがすぐに意識を取り戻した。

「というか、あの顔の傷……。どこかの探し人の情報と似ていなかったか？」

「どこだっけ？」

「……………」

あ、思い出した。曹操が出した探し人の情報だ。

「いったい何をしている、雪連。」

「???? side out」

「真紅狼 side」

「いったい何をしている、雪連。」

と雪連と呼ばれた女性の頭を叩き、小競り合いを止めてくれた。

「いったーい！何するのよ、冥琳！！」

「身内がとんだ御無礼を。つかの事を聞きますが、曹家の兄である。蒼騎殿ではありませんか？」

「何故、俺の名を？」

「曹家が探し人の情報を各地に回している故……」

「あー、マズイな。」

「貴方、曹家の人間だったの?!」

「おう。まだ“曹”の名は貰っていないがな。」

「まさか“真紅の殺人鬼”が曹家の長男だったとはな。」

「色々あったんだよ。」

「詳しく聞きたいものですね。その色々(…)の部分を」

「止めとけ、お前らには一生縁のない話だ。」

と俺は冥琳と呼ばれた女性の探りをかわしていく。

そんなとき、近くで足音がした。

「雪連と冥琳って言ったか？そこの二人、ちよいとこっちに来い。」
「「?」?」

「団体さんのお出ました。」

と言った後、山賊団と思われる集団が2, 30人出てきた。

「へへっ、見ろよ。孫策と周瑜、それに曹家の長男がいるぜ！」

「しかも、その内一人は朝廷から追われていて、生け捕りにすればたっぷりと報奨金が出る。」

「いや、待て。曹家の長男は監禁して曹操を強請ろうぜ。たくさん払ってくれるぜ、絶対。」

「そうだな。そうしようぜ！」

「おい、お前ら！！男は生け捕りだ！！」

と戦力差で勝っているという妄想に囚われている山賊どもはすでに勝っている様子だった。

「オイ、お前。」

「あ？」

「てめえだよ。そこのちよび髭。」

「なんだと？」

「誰を強請るって？」

「ああ？曹操に決まってるんだろ。」

「そうか・・・なら何されても文句はいえねえよな？」

「寝言は寝て言え、ガキが！！やっちなえ！！」

「「ウオオオ！！」」

「お前ら、孫策と周瑜だったのか。で、どっちがどっち？」

「そんなこと聞いている場合じゃないでしょ!？」

「あ、大丈夫だから。」

「は？」

「一応警告しといてやるか。山賊どもそこから先一步でも踏み出し

た瞬間、バラバラ死体が出来上がるから死にたくなかったら止めときな。」

「どうしましょう？頭。」

「はったりに決まってるだろ。いけお前ら！」

「忠告はしたから恨むなよ？あ、孫策と周瑜はもうちょい俺に寄って。巻き込みかねないから。」

言った後、二人は近づいてきた。

体の一部が俺に当たっているんだが、スゲェポリウムだな、オイ・・・ゴホンッ！

俺たちの周りに即座に鋼糸を展開し、山賊の頭っばい奴以外を残して、残りは裁断した。

「なあ・・・！？」

「あーあ、だから言ったのに。バカだねえ。」

さっきまで2、30人居たはずの山賊団は一瞬で一人まで減っていた。

この現状を見ていた孫策と周瑜は口が塞がっていない。

まあ、こんなの見せたらそうなるか。

さて、残した雑魚は極死の練習台になってもらうか。

＼真紅狼side out＼

＼孫策side＼

「寄ってきて」と言われたので私と冥琳は蒼騎に寄った。

その後、一斉に襲いかかって来た山賊どもが裁断され、細切れとなって消えた。

信じられなかった、この光景が。

もし、これが私に向けられていたら私はこの地に立って居られなかった。

そんなことを考えると体が震えてきた。

蒼騎の横顔を見ると嗤っていた。

その表情に私は“恐怖”を覚えそうになった。
冥琳を見てみると、冥琳も同じようだ。

「（ねえ、冥琳。）」

「（なんだ、雪連。）」

「（私、絶対蒼騎の前で、曹操の陰口を言わないことにするわ。まだ死にたくないし）」

「（奇遇だな、私も同じことを考えていた。）」
そう二人は心に決めた。

＼孫策side out＼

＼真紅狼side＼

「さて、残りはアンタ一人。」

「舐めてんじゃねえ!!!」

「まあ、待て。アンタの処刑方法はすでに決まってるんだ。そんなに慌てなくてもちゃんとお仲間のところに逝けるさ。」

「処刑」という言葉に反応して、逃げだしていた。

「逃がさねえよ。」

懷から取り出した短刀を上に向けて、言い放った。

『極死————七夜!!』

短刀を投げつけ、逃げていく山賊は短刀を弾いて余裕を取り戻した時、すでに俺はコイツの頭の上に居た。
そして、そのまま首を力の限り振った。

ゴキッ!

と何かが折れる音がした後、その男は死んだ。

男が倒れると同時に地面に着地し、七夜が言うセリフを言った。

「救われないな……オレも、オマエも」
「本当に救われないな。」

「今の何？」

「ん？」

「今の何って聞いているの。」

「ああ、暗殺者の業かな。」

「貴方、暗殺者だったの？」

「色々と技術を持っているんだよ、俺は。だから、様々な戦いが出るんだよ。」

「さっきの業、教えて欲しんだけど。」

「無理。」

「そんなバツサリと言わないでよ。」

「人間の限界以上の動きをしてんだ。無理に決まってるだろ。」

「ええ」

「ええ。じゃない、取り合えず腹が減ったから。メシ喰わせて。」

＼真紅狼 side out＼

真紅狼、孫策に会う。（後書き）

年はすでに17歳を超えている為、鋼糸は解禁です。
ガンブレードは魔法がまだ解禁していない為、使用制限がかかっています。

天の御遣いの噂（前書き）

ようやく天の御遣いの噂に関われた。

通り名“真紅の殺人鬼”は本来「殺人鬼」の部分が「死神」でしたが、それにしちやうと「ラグナ・ザ・ブラッドエッジ」になってしまったので止めました。

天の御遣いの噂

（真紅狼 side）

山賊どもを始末した代わりに飯を食わせてもらった後、紹介したいから来てくれと言われたので、取り敢えず王の間に向かった。

「来たぞ、孫策。」

王の間に来てみると、うん、呉の将達がそろっていたんだよ。

「改めて紹介するわ。姓は孫、名は策、字は伯符、真名は雪蓮よ」

「真名まで預けるなら、私も預けよう。姓は周、名は瑜、字は公瑾、真名は冥琳だ。」

「策殿が少し前に会った男に真名を預けるほどの男か。なら儂も預けよう。」

姓は黄、名は蓋、字が公覆、真名は祭じゃ。よろしく頼む。」

「私は真名はちよつと。姓は周、名は泰、字は幼平です。」

「・・・姓は甘、名は寧、字が興霸だ。」

「わ、私は姓が呂、名は蒙、字が子明です。」

「私は姓が陸、名が遜、字は伯言です。」

「・・・」

「蓮華も挨拶しなさいよ。」

「・・・姓が孫、名は権、字が仲謀だ。」

呉の有名な武将が勢ぞろいだね。これは。

というか、さっきから睨んでくる者が二人に興味を持つ者が一人、怖がっている者とマイペースの奴が一人か。

取り敢えず、俺も名乗るか。

「俺の名は蒼騎 真紅狼だ。姓と名はねえ。字が蒼騎で、真名は真紅狼だ。」

・・・それと、七年前まで“真紅の殺人鬼”って呼ばれていた。」
と意を決して言ってみたところ、反応する者が三人出た。

「なっ！」

「・・・(スッ)」

「ほう？お主があ・・・」

一人はすでに臨戦態勢か。悪くない、良い反応だ。

「待て。俺は孫家に飯を奢ってもらったんだ。殺しはしねえよ。」

「信じられるか！！姉様、なんでこんな奴を招き入れたんですか！？」

「いや、だってねえ。山賊達から助けってもらったし。」

「礼の一つや二つしておかなければ、孫家の名が下がりますよ？蓮華様。」

「ですが！！」

「安心しろ。どうせ長く留まるつもりはない。あと少し休ませてもらった後出ていくよ。」

「あら、そうなの？」

「待ってる奴がいるしな。というか、これ以上放置していたら何されるか分かんねえし。」

「残念だ、このまま留まってくれたら、“天の御遣い”になってもらおうと思っただが・・・」

何になってもらおうだって？

「“天の御遣い”ってなに？」

「お主知らんのか？」

「知らん。長い間体鍛えていたから、全然情報を聞いてなかった。」

「管輅という自称占い師が占った予言がコレだ。」

『黒天を切り裂いて、天より飛来する一筋の流れ星。流星は天より御遣いつれて現れ、乱世を鎮静す』

「とな。」

と詳しく教えてくれる冥琳。

「俺じゃねえだろ、それ。だいたい俺は流星から来たか？」

“外史”とは言え、メルヘン過ぎんだろ。この予言。

「言いたいことは分かる。だが、これにはまだ続きがあつてな。」
「はい？」

『・・・またもう一人の御遣いは“死を語る魔眼”を持ち、乱世に隠れた闇を“殺”しせしめん。しかし、その者人には非ず。』

「だって。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

オイオイ、その管輅って奴なんちゅうピンポイントな予言してくれるんだ。

メツチャ当たってんぞ。

「まあ、噂だからね。噂の真偽を確かめようと各国が躍起になっているわけよ。」

「で、もう一人の御遣いが俺じゃないかって。か？」

「そうよ」

「そんな“死を語る魔眼”なんていう大層な物を持ちちゃいないよ。
(持ってるけどよ)」

「だが、そんなときにかつて朝廷を騒がせた“真紅の殺人鬼”に出会ったら、そう思うだろう？」

「思わない方がおかしいな。しかし、天の御遣いと言っても“善”と“悪”が混じってんな。」

「どういうこと？」

「前者は“英雄”と呼ばれるだろうが、後者は間違いなく批判されるぞ。そいつが“人”ならよかったが、“人”じゃ無いんだぜ？ 乱世を治めてくれた奴が“人”では無いということに民衆は反発するだろうな。」

「・・・!!」

「確かに・・・」

このことに気が付いたのは雪連と冥琳の二人だった。

「さて、挨拶も終わったし、巷の噂も聞けたし、そろそろ帰らねえと。世話になったな。孫S・・・いや、雪連に冥琳」

「真名で呼ぶんだ？」

「教えてもらったのに呼ばない方が失礼だろ？」

「確かにね、縁が合ったらまた逢いましょう、真紅狼。」

「おう。じゃあ、失礼する。」

と言って、俺はここに来る前に貰った、路銀を袋に入れ、黒鷹を馬舎から出し呉を後にした。

＼真紅狼side out＼

＼雪連side＼

「行っちゃったわね、真紅狼」

「ああ。」

「でも、なんかどこかで逢える気がするのよね。別な形で。」

「そうか。それよりも御遣いの噂の時の表情が気になるな。」

「どうしたの、冥琳？」

「噂で“死を語る魔眼”と私が言ったとき、僅かに表情がぶれていたんだ。ほんの僅かだがな。・・・アレはなにかしら知っている顔だったな。」

「・・・今度逢ったときに聞きましょうよ。」

「そうしよう。では、雪連仕事をしてもらうぞ。」

「え〜〜〜!!」

＼雪連side out＼

真紅狼が出た後、王宮に悲鳴が響き渡った・・・

天の御遣いの噂（後書き）

次から、黄巾党編に入ります。

遅いのか早いのか、わかんねえな。

次話は出来次第投稿します。

最近この頃思うこと、ジェクトみたいな親父が欲しいなと思う自分。

あーあ、出会っちゃったか。(前書き)

頑張って、本日二話目

あーあ、出会っちゃったか。

（真紅狼 side）

俺は呉を出て、華琳のところに帰る道中、賊？っぽいやつらに襲われた。

いや、曖昧だと言われても、だって頭に黄色い布を被ってたんだぜ？

誰だって疑う。賊かどうかを。

裁断した後、情報を集めようと近くの街に向かい、集めたところ最近各地を騒がしている者たちを“黄巾党”というらしい。

ちなみに華琳の情報も聞いた。

今は陳留の勅史をやっているらしい。出世したなあ。

なるほど、この前襲ってきたのは“黄巾党”というのか、ただのバカ集団だと思ってしまった。

陳留まであと少しのところ、ちかくで戦闘音がしていたのでそちらに行ってみると少女一人で5、60人の黄巾党を相手していた。

「やあああ！！」

と掛け声を出しながら、八人は軽く吹っ飛んでいた。

だが、さすがに多勢に無勢だったのが無謀だったのか、立てなくなっていた。

俺は急いでその子の元に向かった。

（真紅狼 side out）

（??? side）

また、黄色い布を被った集団が村を襲ってきた。

ボクしか村には戦える人がいないし、官軍は信用できない。だけど、連日襲ってきてさすがに辛い。

そんなことを考えてしまったのがいけなかったのか、一気に疲労が

襲ってきた。

そのタイミングを狙われたのか武器を振り降ろしていた。

あ、ボク死んじゃうのかな？

「「ガシッ！」ハイちよつと待った。」

「「へ？」」

ボクを助けたくれたのは真紅の眼で黒と白の服を着た男だった。

「???? side out」

「華琳 side」

義兄さんが旅に出てからもう八年が経ち、私は陳留の勅史になった。雅も将軍として立派になり、部下からも慕われている。

最近巷で噂されている“天の御遣い”の噂とかがあるけど、そんなことより義兄さんを見たという情報はないのかしら？

そこに兵から報告が来た。

「申し上げます！この近くにある村に黄巾党が出現しました！」

「なら、春蘭に行かせて討伐しなさい。部隊の編成は任せるわ。」

「はっ！！失礼します。」

「・・・華琳様。」

「何、桂花？」

「ここ最近元気が無いように見えるのですが・・・」

「あら、そう見えた？」

「はい。何か悩みごとですか？私でよろしければ聞きますが？」

「まあ、ちよつと、探している人がいるんだけどね。なかなか見つからないのよ」

「探している人ですか・・・。どのような方なんですか？」

「私のあn「失礼します！夏侯惇将軍から早馬が来ました！」・・・要件は？」

「討伐に向かったところ、討伐されておりなんでも討伐した者は七

年前、朝廷を騒がした“真紅の殺人鬼”だそうです！」

「「!？」」

“真紅の殺人鬼”・・・それは義兄の異名。義兄さんがこの近くに居る。

「今すぐ、私と碧羅將軍の出撃準備を下さい!」「はっ!」・・・桂花はここに残って、黄巾党の情報を集めなさい。」

「分かりました。」

「では、行ってくるわ。」

義兄さん・・・八年も放っておいたツケは大きいわよ。

く華琳side outく

く真紅狼sideく

「なんだデメエは？」

「お前ら、恥ずかしくないの? 大の大人が大勢で女の子に襲うなんて、人として最低だぞ?」

「うるせえ! お前もやってやる! 死ねえ!!」

「気の短い奴だな。」

襲いかかってきた奴の武器を弾き落とした後、足払いでこけさせ、その後、そいつの足を掴み、ジャイアントスイングで集団の方に吹き飛ばした。

さすがに人が飛んでくるとは思っておらず、ボーリングのピンのように次々と巻き込まれながら倒れていった。

・・・よっしゃ! ストライク!!

それは置いといて、倒れた隙を狙い、鋼糸を展開している右手を地面に叩きつけた。

「往くぞ。・・・オオオ!」

倒れている黄巾党の周りを地中から何本もの鋼糸が囲んでいく。いつの間にか黄巾党の連中は見えなくなっていた。

『繰弦曲・崩落』

その檻は次第に小さくなっていき、中の連中を衝剄で轢き潰した。終わった後には肉片も骨も残っておらず、あるのは血の海だけだった。

＼真紅狼 side out＼

＼??? side＼

助けてくれた男の人の力は凄かった。

万人が押し掛けても、絶対に勝てないほどの力だった。それに、最後の技なんか凄いから恐怖に変わっていた。一瞬で人が消えた。

「・・・大丈夫か？」

いきなり声を掛けられた。

どう反応していいか分からない。

「へあ、あ？」

「・・・大丈夫か？」

「あ、はい。大丈夫です。・・・ボクを殺すんですか？」

「何故、助けたのに殺さなきゃならないんだ？」

「だって、あんなのを見たら、「殺される」と思って。」

「あの技を使うのは相手が外道共だけだ。・・・特に他人を平気で貶す奴ぐらいさ。」

「じゃあ、殺さないんですか？」

「殺さねえよ。取り敢えず一難去ったし、休んでいい？」

「え、でも、さっきの奴らがまた来たら・・・」

「大丈夫だ。この村の周りを俺の武器が檻を張ってあるから、入ろうとすれば一瞬で分かる。」

「それでも一応、ボクは門のところで見張ってます。」

「気を張り過ぎて、倒れるなよ？」

「はい。あ、助けて貰ったんでボクのお兄さんに預けます。」

姓は許、名は？、字は仲康、真名が季衣です。」

「おう。俺は蒼騎 真紅狼だ。真名は真紅狼だ。」

「真紅狼お兄さんでいいですか？」

「あ、お兄さんは付けるのか。」

「はい。付けます。」

[illegible]

「すまん、ここに黄巾党が現れたという情報を受けてきたのだが黄巾党はどこだ？」

「もう、追い払ったというか倒しましたが？」

許? side out

夏侯惇 side

黄巾党が出現したという報せから目的の村に着いた。

だが、周りを見回しても黄巾党はいなかった。

居るのは、一人の女の子と男。

こいつらが追い払ったとは思えない。

「誰がやった。」

「俺」

「貴様がやったのか？」

「おう。バッサリと」

「お兄さん。バツサリとは違うんじや・・・」

「バッサリでいいだろ？説明したって理解できねえと思うし。」

「お兄さんがよければ、ボクはいいですけど、この人が納得するか・
・」

「貴様、私をバカにしてるのか？」

「どう捉えるかは、ご自由に。」

「よほど、死にたいようだな。貴様！！」

と私は七星餓狼に手をかけ、奴の首を目掛けて剣を振った。

ガキンッ！

「おいおい、危ないな。」

「そう言う貴様はちゃんと防いでいるじゃないか。・・・見慣れぬ剣だな。」

「俺専用の武器だ。」

「構えろ。いくぞ！」「止め！！」「華琳様！？」

打ち合いが始まる瞬間、我らの主である華琳様からの制止だった。

（夏侯惇 side out）

（真紅狼 side）

突然の制止を求める声が聞き覚えのあるというか、華琳の声だった。

ヤバイ、実にヤバイ。

だが、まだ気付かれていない。

今なら、逃げられる。

と思ったときすでに遅かった。

「どこに行くのかしら？真紅狼？」

凄いオーラがひしひしとこっちに伝わってくる。

・・・スゴイ痛い。

逃げようと後ろに逃れようとしたら、目の前に雅が往く手を防いだ。
逃げられねえー！！

「どこにいくのかな？真ちゃん？」

「真ちゃん、言うな。雅」

「真紅狼、前を向きなさい。」
「・・・ハイ」

バシンッ！

家族からのビンタはとてつもなく痛い。
想いとかが籠っているからだな。目には若干涙があった。

「心配したんですよ。義兄さん」

「すまなかった。」

「おかえりなさい。」

「ああ、ただいま。」

＼真紅狼 side out＼

あーあ、出会っちゃったか。(後書き)

多分今日はここまでだと思います。

技の説明

『繰弦曲・崩落』

鋼糸で編んだ網に相手を閉じ込め、その鋼糸すべてから内向きに衝剄を放つ

真紅狼、曹家の名を貰う。（前書き）

これから投稿するのは、土日
に投稿できなかった分です。
すみません。

真紅狼、曹家の名を貰う。

（真紅狼 side）

季衣が曹操軍に入り、俺たちは陳留に帰っていたんだが、帰るまでが大変だったんだよ。

「華琳、もうちょい離れてくれない？」

「嫌です。」

とさつきからこの調子だ。

ちなみに黒鷹の上だ。

前に華琳、その後ろに俺という図になっている。

そして、さつきから殺気を俺に向けてんのが春蘭と呼ばれていた女性だ。なんつーか、迫力のある眼力なんだよ。

「華琳様、少しいいですか？」

と後ろから物静かな女性が聞いてきた。

「何、秋蘭？」

「そちらの男は“真紅の殺人鬼”と呼ばれている男ですが、知り合いませんか？」

「秋蘭、その異名を二度と言わないことよ。私にも限度という物があるわ。」

「は、はい！ 申し訳ありません。」

「とはいえ、この人を知りたがっているのは事実ね。この人は私の義兄よ。」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

状況が読み込めないのかしばらく沈黙が続いた。

この後が簡単に予想できるって素晴らしいね。

「華琳、耳をふさいでろ。」

「何故ですか？」

「衝撃波が飛んでくるから。」

「??:?」

頭を傾けながらも、耳をふさいだ華琳。
その後、予想通り衝撃波が飛んで来た。

[illegible]

キーンツ！！

「ぐおお!!」

本当にこれ兵器並みの威力だな。
華琳は無事なようで。

「え、えっと、それは本当ですか？」

「私が嘘を言ったことがある？」

「ないですが、それでも・・・」

「信じられない？」

「はい」

と姉妹は同時に返事をする。

「まあ、そうなるわな」

「だけど、事実よ。受け入れなさい。」

「雅も知っていたのか？」

「私と華琳様と真ちゃんとは幼馴染なんだ！だから知ってるよ、春蘭。」

と平然という雅。

「義兄さん、一応紹介してください。」

「はいよ。俺の名は蒼騎 真紅狼だ。さっきも言った通り、華琳の義兄だがまだ曹家の名は貰っていない。」

「貰ってない？とはどういうことですか？」

秋蘭が不思議そうに聞いてくる。

「なんとか貰う前に、出奔したからだな。」

「そうですね。」

「そうだよねぇ」

と三人はしみじみと頷く。

「で、そちら方の名は？」

「申し遅れました、私は姓が夏侯、名は淵、字が妙才、真名は秋蘭と申します。」

「そして、私は姓が夏侯、名は惇、字は元讓、真名が春蘭だ。」

「俺の事は真紅狼で構わないぞ。春蘭と秋蘭は俺がなぜ“真紅の殺人鬼”って呼ばれているか、知ってるだろう？」

「ええ、確か近くの豪族を皆殺した、と。」

「そ、ちよつと殺さなきゃならない理由が出来てね。それで追われるようになって、貰う前に出たというわけさ。」

「義兄さんには謝らなくてはならないですね。」

「なんでだよ？」

「義兄さんは曹家を代表して殺しに行ったんですよ？それに父上が言っていました。」

『真紅狼がいかなかったら、俺が殺しに行っていた。それをアイツに全てを投げつけてしまった。すまない』

「と言ってました。」

「別に気にしてないのに。」

「それでもです。すみませんでした」

と華琳が謝っていた。

この光景に春蘭たちは驚いていた。

この状況を打開させるために、頭を撫でてやった。

「ひゃっ!？」

「俺がいいって言ったんだから、それぐらいの意思は聞いてくれよ。」

そういいながら、俺たちは陳留に着いた。

＼真紅狼side out＼

＼桂花side＼

私の主、華琳様が帰って来た。

集めた情報を報告しようと向かったら、あの華琳様が男に抱きついていたので見て、気を失いそうになった。

「誰よ、あの男。あんなに華琳様と親しそうに!!」
そしたら、向こう側から、秋蘭が歩いてきた。

「秋蘭!」

「桂花か、なんだ?」

「あの男、何者よ?」

「華琳様の兄上らしいぞ。」

「・・・は?」

「信じられないかもしれないが、事実だ。」

「華琳様が言ったの?」

「ああ、しかも華琳様の父上も知っているらしい。」

「他には誰が知っていたの?」

「雅と曹家の侍女たちや兵たち、特に中堅兵と古参兵は知っていたらしい。」

「それで、先程から侍女たちが騒いでいたのね。」

「では、私は訓練場に向かわなければならぬからな。」

「なんで訓練場に行くの？」

「姉者が手合せしたいと言ってな。それならば、将全員集まるようにと華琳様がな。」

・・・これはチャンスかもしれないわね。その男には悪いけど、兄としての威厳を失ってもらうわ。

「見学しに私も行くわ。」

「めずらしいな、お前が興味を出すなんて。」

「私は曹操軍の軍師よ？ 仲間の実力をみなければ、策を練ることも出来ないでしょ？」

「ふむ、確かに一理あるな。では行こうか。」

「ええ。」

（桂花 side out）

（真紅狼 side）

黒鷹を馬舎に入れてきた後、一時的にあてがわれた部屋を使っていた。

一週間以内には用意すると言っていたが、豪華な造りになってそうだな。

俺は取り敢えず、着替えることにした。

スクールの姿から、リテンスの姿にズボンを穿いた後、上を着替えようとしたとき誰かが入って来た。

見てみると、華琳だったが背中の傷を見てからどこか気まずそうな表情をしていた。

「あっ・・・」

「ん？・・・華琳か。どうした？」

「いえ、訓練場まで一緒に行こうと思ったんですが・・・。」

「背中の傷を見て動けなくなった。と？」

「・・・(コクン)」

背中には三本の爪痕がくつきりと残っている。
まったく、気にするなって何度も言ってるのになんで気にするかね？
華琳のせいじゃないのに。

「何度も言うが、華琳。気にするな。」

「でも・・・」

「アレだ、この傷は男の勲章だと思ってくれよ。」

「・・・分かりました。それで兄さんの曹の名なんですが・・・」
「うん？貰うの？」

「兄さんは曹家の長男ですよ？自覚を持ってください。」

「善処します。」

「曹真ということになります。」

「曹真ね。分かった。これからは曹真と名乗るか。あ、でも“蒼騎”
の名は捨てないからな？」

「いいですよ。では行きましょうか？」

「おう。」

「あ、今日の夕餉のときに旅の内容教えてください。」

「はいはい。」

八年の内容を思い出しながら、訓練場に向かった。

＼真紅狼 side out＼

真紅狼、曹家の名を貰う。（後書き）

はい。曹家の名を貰いました。今まで華琳は真紅狼を「義兄さん」と呼んでいましたが、曹家の名を貰った為これからは「兄さん」と呼びます。

そして、華琳は二人っきりの時は甘えます。

第三者がいる場合は真紅狼と呼び捨てになりますが・・・

手合せ（前書き）

ドンドン投稿するぜ！

手合せ

「真紅狼 side」

「で、そちらの方は？」

「私は姓が荀、名は？、字が文若と申します。軍師をやってます。」

「なるほど、俺の実力を測りに来たな？あ、曹真だ、真名は真紅狼だ。」

「ええ、仲間の実力が分からなければ、策も練れませんから。」

「丁寧な言葉は使わなくてもいいぞ？普通に喋っても構わないし。」

「・・・そういうことよ。分かった？」

「はいよ。でだ、最初は誰だ？」

「私だ。」

と前に出てきたのは春蘭だった。

「んじゃ、やりますか。」

「・・・武器はどこにある？」

「ここにあるじゃん。」

と言ってアクセサリを見せてやった。

「兄さん、これは？」

「アクセサリだな。」

「なんだそれは？」

「これは、超刀のアクセサリだな。」

腰の辺りに五つある内の一つを選んだ。

「私をバカにしてるのか？」

「一応、刃が無い武器を選んだつもりなんだけど？」

「後悔するなよ？」

「そっちな。」

＼真紅狼side out＼

＼春蘭side＼

訓練場に集まるようにしてもらった私は真紅狼が持っていた武器に興味があつた。

だが、実際に戦う武器は装飾された貴金属だった。
私をバカにしているとしか思えない。

華琳様には悪いが、叩きのめさせて貰う。

愛用の武器、『七星餓狼』を構えた。

「双方、準備はよろしいわね？」

「おう。」

「はい。」

「では、始め！！」

＼春蘭side out＼

＼桂花side＼

二人が武器の話し合いでこの男の武器はなんと、装飾された貴金属。
この男、頭おかしいんじゃないかしら？

でも、これで華琳様はこの男を幻滅するはず！

私が手を出す必要がなくなって有難いわ。

そんなことを考えていた私だったが、この男が武器を出した瞬間、
一瞬で全てが瓦解した。

＼桂花side out＼

＼真紅狼side＼

「始め！！」

開始と同時に春蘭は大振りで武器を振りまわしていた。

右へ左へと、それを軽やかに避けていく。

「くそ、ちょこまかと!!」

「大振り過ぎだから、当たるわけないだろ。」

「それなら・・・これはどうだ!!」

上から袈裟切りを避けた。が、それは計算済みだったのか地面にぶつかる前で止まり、そのまま手首を捻り、素早く振り上げてきた。

「・・・!こいつは驚いた!」

「そう言っておきながらちゃんと避けてる癖に」

「だが、今のは見事だ。」

「武器も出してない奴に言われても、嬉しくはない。」

「なら、武器を出してやるよ。」

といい、俺はある武器をイメージし、叫んだ。

「『絢麗豪壮』!!」

肩に担いだ状態で出てきたのは『天運転如』だった。

「さて、お望み通り武器を出してやったぜ?」

「何だそれは?」

「コイツが俺の武器の一つ『超刀・朱槍』だ。」

皆、この武器を見て驚いている。

それはそうだ。

なんせ、コイツの特徴は人の丈よりも遥かに大きいことだった。

「あ、華琳達もうちょい下がって。」

「はい?」

「そこ当たるかもしれないから。」

「・・・この辺でいい?」

「そこから、前に出るなよ？」

ガラゴロガラ・・・

「これだぁ!!」

とおみくじを引いた。

そこには「大吉」と書かれた太い棒が出てきた。

「お、大吉だ!!」

「何か関係あるのか？」

「大吉だと、このように太さが吉よりも若干太く、敵をふっ飛ばしやすいんだよ。吉は標準的な大きさだ。そして、凶は延べ棒みたいで敵もふっ飛ばしにくいんだ。まあ、これは運が絡む武器だな。」

「そうなのか・・・それはいいとして、そんなに間合いを開けて大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題無い」

「そこからの間合いjy・・・!？」

ブンッ!

「間合いが何だって？」

「クッ!!」

春蘭は侮っていた。

真紅狼がこの武器を充分に扱えないことを。

だが、それは間違いだった。

一步も移動せずに真紅狼の得物は春蘭を捉えていた。

春蘭は一度距離を離そうとするが、真紅狼の攻撃は止まらずそのまま追撃した。

横薙ぎに一閃した後、上から叩きつけ、そのまま右と左と掬い上げるように武器を振りまわし、最後に大きく振り降ろしていた。

一撃ごとに地形が変わるほどの地面が砕かれていく様子を見て、春蘭はだんだん焦りの表情が出てきた。

「（なんとか、懷に潜り込めれば!!）」
と思っていた矢先に真紅狼に隙が出来た。

この隙を利用して、春蘭は一気に距離を詰めたがその隙はワザと開けられたものだった。

「隙を見つけたのはいいが、残念だ。」

『押しの一手』

真紅狼は『天運転如』押すように持ち代え、逆に春蘭に突撃し勢いよく上にかち上げた。

「ぐっ!!」

「はぁ! せいっ! お終い!!」

空中に打ち上げた後、武器を右に左に振った後、地面に叩き落とした。

「ぐぁぁぁ!!」

「こんなもんかな。」

と地面に降りた俺は武器を地面に刺し、それに背を預けるようによりかかった。

く真紅狼 side outく

く華琳 sideく

試合が始まり、最初は春蘭が押していた。

だけでも、兄さんが武器を取り出した瞬間、一気に流れが変わった。最初に私たちを驚かせたのが武器の大きさだった。

兄さんの背よりも大きい武器を軽々と振りまわしていた。

次に驚いたのが、間合いだった。

武器には各種にあった間合いが存在するが、あの武器には間合いの範囲があり得なかった。

普通の槍の長さの二倍近い間合いが兄さんの武器の間合いだった。

最後に、その威力だった。

一撃一撃が地面を砕くほどの威力。

私たちは、戦闘が終わった後には何も言えなかった。

「こんなもんな。」

と言って兄さんは武器に寄りかかっていた。

「春蘭・・・大丈夫？」

「あ、はい。しばらくすれば立てます。」

「どうだ、俺の実力は？」

「何というか予想外です。」

桂花に至っては、「あり得ない光景を見た。」という表情をしながら、頭に手を当てていた。

桂花。わかるわ、その気持ち。

「まあ、まだ色々あるけどな。」

「・・・まだあるんですか?!」

「あと、これが四つほど」

「・・・もう何も言いません。」

（華琳 side out）

（真紅狼 side）

そんな風に呆れるなよ。華琳。

「ま、追々見せるさ。ところで春蘭。」

「なんだ？」

「お前の武器どこかしら調子が悪いだろ？」

「・・・気付いたのか？」

「なんというか、刃を護るような戦いをしてたし。それに秋蘭も。」

「私ですか？」

「さっき、チラッと見たんだが弓の弦、擦り切れているだろ？」

「よく分かりましたね。」

「俺が新しく新調しとこうか？ 形はそのまま鍛え直すと言う形で。」

「

「「いいんですか？」」

「構わねえぞ？」

なにやら二人で話し合っていた。

そこに、華琳が入って来た。

「兄さん、私も鍛え直して欲しいんですが・・・」

「武器は何？」

「鎌です。」

「分かった。他に欲しいものは？」

「無いです」

「真ちゃん！ 私はねえ、幅のある太刀と小太刀が欲しい！！」

「雅は一から作らなきゃダメだから、時間がかかるが構わないか？」

「いいよ」

そんな話が終わったのか二人は「「お願いします」」と言ってきた。

「他に何かいるか？」と聞いたら、春蘭は手甲を、秋蘭は胸当てを

頼んできた。

「苟？と季衣もなにか欲しい物はあるか？」

「私はいらないわ」

「ボクは手袋を」

「分かった、創っておこう。」

「動いたら、腹減ったな。メシ食いに行こうぜ、華琳。」

「そうですね、行きましょう。」

く真紅狼side outく

手合せ（後書き）

真紅狼が持つBASARA2の武将の一つ。
前田慶次の力が登場。

『天運転如』の呼び名は「てんうんころぶがごとく」です。
これから、BASARAの武将のスタイルを出すときは四文字熟語
で表します。

管理者と会う。(前書き)

無理矢理ねじ込んだ。

時系列がおかしいと言わないで・・・。

そして華琳達の武器が凶化されました。

字が間違っている？

いえ、おかしくありませんよ？

管理者と会う。

（真紅狼 side）

手合せからすでに一週間が過ぎた。

今、俺は頼まれている武具を創るために、陳留から少し離れた山に居る。

何故なら、素材を出すのに召喚獣を見られてはならないからだ。

山に籠ってもう二週間が経ち、頼まれた武具などはすでに出来上がり、鍛え直さないといけない武器も直したのだが、ちょっと困ったことになった。

ぶっちゃけた話、強化しすぎた。

華琳の鎌『絶』は『ディアボロス』の角を溶かして使用しているが、凄い威圧感のある武器になってしまった。

春蘭、秋蘭の武器には、『フェンリル』の素材がたくさん使われている。

春蘭の『七星餓狼』にはフェンリルの牙を活かした武器となっている。

薄い鉄の扉などは両断出来るし、地面は決れる。

手甲にはミドガルズオルムの鱗を使用し、武器を使わなくても矢などを弾くことが出来、頑丈で分厚い為、剣や薙刀を防ぐことも可能となった。

秋蘭は弓の弦を強化をした。

弦の部分は『ビスマルク』の髭を使用している。

ビスマルクの髭は強靱で擦り切れることもない。

胸当てにはフェンリルの体毛と『セイレーン』の薄地を使用してい

る。

フェンリルの体毛は見た目の割に堅い為、矢などで撃たれても、体に刺さることは無い。ほんのちよつと痛い程度。そしてセイレーンの薄地は破れることが無い。

雅は幅のある太刀と小太刀

これは『ギルガメッシュ』を呼び、武器コレクターの力を借りた。
アマノムラクモ
天叢雲を貰い、それと『リヴァイアサン』の鰭や鱗を分けてもらい創った。

天叢雲と『バハムート』の角を一緒に溶かし再び打ち直した。

斬れ味が落ちることのない武器となった。

小太刀は海竜神の水の加護が働き、敵を切っても返り血が付かないものとなった。
リヴァイアサン

季衣の手袋は『ケーツハリー』の羽根を使い、手袋をしているだけで持っている物の重さを感じなくなった。軽くて丈夫。

・・・うん、やり過ぎた。

だが、出来てしまったモノは仕方がない為、持って帰ることにした。その途中で、凄いモノを見た。

某ツナギを着た男を絶対撃退できるレベルだった。

いや、ホントに。

真紅狼 side out

side

この外史のご主人様を探す為に降り立ち、各地を回っていたら前の方から巨大な力の波動を感じ行ってみたところ、この外史では存在しないハズの男を見つけた。

「貴様、何者だ？」

「・・・曹真だ。」

「嘘をつけ、お主この外史に最初からいないだろう？」

「ここが外史って知ってると思うことはアンタら、神様に近いにかか？」

「我々は“管理者”じゃ。」

「“管理者”？」

「文字通りのことじゃ。外史というのは消えやすいのでな。それを護りながら見護っていく者たちじゃ。・・・お主はなんじゃ？」

ふーん？ 大変なんだなあ。管理者も。

「俺は“転生者”だ。」

「“転生者”？」

「そうだ。俺の世界の神様が間違っって俺を殺したらしくてね、死んだあと神の領域に連れて来られて、「間違っって殺してしまったから、転生させてやる」と言われて転生したはずだったんだけどな・・・。」

「どうしたのじゃ？」

「いや、なんか時空の法則が乱れて、この世界に間違ってきてしまったんだよ。」

「それじゃ、お主は元は人間か？」

「人間だ。まあ、転生先が人外とか魔法とかいっぱいあるみたいだったから、「能力を授けるぞ」と言っっててしかも「遠慮はいらない」と言っってたから結構言っただな。」

「なるほど、それでお主からこの外史にはない力の波動を感じたのじゃな。」

「・・・ねえ、アンタ」

「どうしたのじゃ、貂蟬？」

「アンタもしかして・・・“死を語る魔眼”持ってんじゃない？」

「あー、持ってるよ。」

こやつが、自称占い師、管輅が言っていた予言のもう一人の御遣い

か。

「というか、いい加減名前を覚えておくか。本名は蒼騎 真紅狼だ。そっちの名は？」

「ワシが卑弥呼、そしてこやつが貂蟬じゃ。」

「よろしくねん、真紅狼。」

「おう。こんどはこっちから質問していいか？」

「お主の事情は分かったから、いいぞ。」

「お前らのような管理者がこの外史に降り立ったことは何かあるの？」

「私たちは“ご主人様”を探してるのよん♪」

“ご主人様”？」

「そうです。この外史の要という方でしょうか、この方が現れない限り、何時まで経っても前に進まず、停滞するだけなのです。」

「なるほどなー」

「“ご主人様”はすでにこの外史に来ていますが、まだゆっくりとしかうごいておらんのだじゃ。・・・多分、お主が会おうとしたら、黄巾討伐時に会うかもしれんな。」

黄巾党か・・・そろそろだな。

「名前って分かる？」

「北郷一刀って名よ。」

「ところで、お主はご主人様に味方するのか？」

「さあ、するのかねえ。俺は魏の人間だからな、分からねえな。」

「もし、対峙するようであるならどうする？」

「まあ、俺の『護るべきモノ』を壊さない限りは逆らう事が危険だということを手放しで追いつかせて追い返すさ。」

「そうか・・・そうなって欲しいものじゃな」

「またなんか情報が出てきたら、よこしてくれ。」

「うむ。ではさらばじゃ。」

「おう。」

そうして、ワシたちは再びご主人様を探し始めた。

その後、ご主人様が劉備のところにいるのを発見した。

く卑弥呼side outく

く真紅狼sideく

北郷一刀ねえ。

さてはて、どんな奴なんだろうか、楽しみだな。

黄巾党は最近過激になっているし、その内出会えるだろ、戦場で。
さて、待っている妹たちの元に帰りますか。

く真紅狼side outく

管理者と会う。(後書き)

武器の凶化ですが、独自設定なのでツツコまないでください。
もし、「この人の装備を強化して欲しい」という要望があれば、意見をご覧ください。

さて、次は、楽進達の登場です。・・・多分。

楽進、于禁、李典に会う。（前書き）

これが終わったら、ちょっと日常を書くので一刀達の出会いはもう少しお待ちください。

楽進、于禁、李典に会う。

（真紅狼 side）

出来あがった武具を特殊な袋に入れ、陳留に向けて帰ってた時、近くの集落で黄巾党の連中が襲っていた。

助けようと思って向かったら、三人の女性が追い払っていた。だが、黄巾党の一人が何か叫びながら逃げていった。

「おい、大丈夫か？」

「貴方は？」

「・・・真紅狼だ。」

「真紅狼さんですか。」

「今の連中は黄巾党だよな？」

「ええ、連日襲撃してきてます。」

「じゃあ、お前らは毎日ここで追い払ってんのか？」

「最初は、陳留に行くために少し休むために寄ったのですが、黄巾党の連中が攻めてきて、それからずっとここに留まっています。」

「陳留に目的があるのか？」

「曹操に仕えようと思ひまして・・・」

「・・・へえ。そう言えばさっき一人の男が叫んでいたが何言っていたの？」

「なんでも「明日、この近くに居る仲間を呼んで攻めてやる!!」と言っていました。」

「ふむ・・・俺が一人で相手をしよう。」

「無茶です!!」

「曹操に仕える前に死ぬかもしれないんだ。嫌だろ？」

「確かにそうですが・・・でも一人は無理だよ。」

「そんなに無理だと思うなら、明日集落の入り口付近で見たいればいい。この世とは思えない光景を見せてやるよ。」

三人の女性は半信半疑になっていたが、納得してくれた。
さて、使う武器は・・・ガンブレードと“カーネフェル”で対応できるだろ。

＼真紅狼side out＼

＼楽進side＼

毎日のように黄巾党の連中が攻めてきて、表情には出てないが私たちはかなり疲れていた。
そこに旅の者が来た。

真紅狼さんは旅の者だと言っていた。

私たちの事情を話すと「一人で相手をする」と言いだした。

私は正気の沙汰ではないと思い、必死に止めたが「大丈夫だ」と押し切られてしまった。

「あ、そうでした。私たちの名を言っておきます。私は楽進です。」

「私が、于禁だよ♪」

「最後にあたしが李典や！よろしくな、真紅狼。」

「おう。んじゃ、寝てろ。見張りは俺がやっつくから。」

「ですが・・・」

「寝てろ！！」

「「・・・ハイ」」

一瞬、般若の顔が出ていたが、気のせいと信じたい。

そんなことを思いながら、私たちは落ち着いて寝た。

＼楽進side out＼

次の日・・・

＼真紅狼side＼

昼よりの時刻に連中は来た。

俺は少し集落から離れて、一人のんびりとガンブレードを肩に担ぎ

ながら待っていたとき、向こうから「ズドドド・！！」という地響きが聞こえてきた。

「お前、誰だ？」

「あの集落に雇われた用心棒さ。」

「あの集落にはガキが三人居たはずだが？」

「彼女たちなら、集落を護ってるよ。俺の役目はアンタ等をここで潰すことだ。」

「お前、正気か？ たった一人で、俺達を潰すってか？」

「ああ。」

そう答えた瞬間、黄巾党の連中は全員笑っていた。

「馬鹿じゃねえか、お前。行くぞテメエラ！！」

「「ウオオオオオオオオオ！！」」

「本当にバカだよな。・・・お前らがな。」

向かってくる黄巾党の連中は真紅狼の行動が分からなかった。

なんせ、武器を上に向けていたのである。

「どうせ虚勢だ。」と思いそのまま進軍を続けていたが、次の出来事により全てが止まった。

『ブラスティングゾーン』！！

俺はガンブレードを高く上げ、『ブラスティングゾーン』と言った。次の瞬間、魔力で生成した光りの刃が黄巾党を真っ二つに両断した。

「2，30人しか殺せなかったか、縦に並んだところを狙った方が効率がいいな。」

とのんきなことを呟いていた。

黄巾党の連中は今の出来事が理解できてなかったらしく行動が出来ていなかった。

次はコレだな。

『リボルバードライブ』！！

ガンブレードを前に突き出し、闘気の力で突っ込んだ。

一人、また一人と体が削れていき、黄巾党の中心に着いた。

「一点突破に使えるな、この技は。」

ようやく、連中は俺が危険だと分かり、一斉に襲いかかって来た。だが、わざと中心に来たことまでは連中も知らなかった。

『フェイテッドサークル』！！

俺を軸にしてガンブレードを回し、そのとき撒かれた火薬を発火させた。

ゴゴンッ！！

グシャ！！

ビチャ！！

先程撒いた火薬の辺りから、円の形をしたクレーターができ、地面には無数の死体と血の跡が出来ていた。

なんせ、まともに食らえば、膝から上が弾け飛んでるんだからなあ。酷くても、上半身が無い状態だ。

この光景を見た、残りの黄巾党は蜘蛛の子のように逃げて行きはじめた。

その中で一人だけ、立ち向かってくる者が居た。

開始前に喋っていたリーダーらしき男だった。

「うおおおお！！」

「へえ、逃げないのか。」

「デメエを倒せば、どうにでもなる!!」

「なら、相手をしてやろう。・・・それでは“カーネフェル”をお見せしよう」

「^{トランフ}絵札で戦うなんて聞いたことがねえぞ!!」

「・・・余所見してていいのかな？」

そう言ったときには男の前まで潜り込み、右下、左下へとカードを振り降ろし、切り刻んだ。

「があ!!」

「逃げていれば、まだ生きられたものを・・・」

SUPER CANCEL!!!

その隙について、乱舞し男の体全体を切り刻んだ。

「ぐあああ!!」

「見せてやるよ、カーネフェルの真髄を!!」

そう言った俺は高速で突進し、みぞおちを叩き込みその場に動けなくなった男に対し、52枚のカードが絶え続けなくなり襲った。

「それでは、ごきげんよう・・・」

と片手を上に上げながら、帰っていった。

＼真紅狼 side out＼

＼李典 side＼

なんやアレ？

いきなり、剣っぽいモノから光が出てきたと思ったら、今度は剣っぽいのを突き出しながら突進してさらに連中を削った。
極め付けが最後の技や。

大きな爆音と衝撃が辺り一帯に影響を出し、あの兄ちゃんが回転した円の部分以外は地面が抉れ、黄巾党の連中の死体が築き上げられていた。

「ありえへんやろ」

そう、目の前の光景はあり得なかった。

そして、宣言通り、この世とは思えない光景だった。

辺りは血の海でちらほらと見えるのは連中の吹き飛んだ体の一部が無残な姿で転がっていた。

その中心に立つのは、黒と白の服を着た男。
まるで獅子のように紅い地面を歩く。

「紅き獅子やな・・・」

「・・・なに？真桜ちゃん？」

「いや、あの兄ちゃん。まるで獅子のように血の海を歩いているから紅い獅子のように見えてな。」

沙和は兄ちゃんの方を見ながら、頷いてくれた。

「・・・確かにそう見えるね。あっちの方から誰か来るよ！」

「また黄巾党の連中か？」

と凧も来た。

「済まない、ここに黄巾党が出現したという報せを聞いて駆けつけた。」

私は、曹操様の部下、夏侯淵という・・・黄巾党はどこに？」

「黄巾党なら先程、全滅しましたが？」

「全滅・・・？貴方達がやったのか？」

「違うの。真紅狼さんという方が一人でやったの。」

「・・・真紅狼殿がここに居るのか？」

殿？なんや、あの兄ちゃん。この姉ちゃんと知り合いか、なんかか？

「ちょうど、あそこに居ますが？」

「確かに・・・真紅狼殿だ。」

振り向いたときには、血の海を渡り終えた『紅き獅子』はこっちに気が付いた瞬間、気まずそうな表情をしていた。
なんか、あったんかな？

「よう、戻ったぜ。・・・!?」

「・・・探しましたよ、真紅狼殿？」

「・・・なんで、ここにいるんだよ。秋蘭」

（李典 side out）

楽進、于禁、李典に会う。（後書き）

別の異名を作りましたが、どうでしょう？
もし、アイディアがあるなら意見だけでも構わないので待ってます。

逃げるなら・・・いや、もう「遅いわよ?」・・・ヤッベΣ(。Д。;) (前書き)

タイトルがふざけてると思いますが、最初に浮かびました。
ということを採用した。

逃げるなら・・・いや、もう「遅いわよ?」・・・ヤッベΣ(。D。;)」

〔真紅狼 side〕

戦闘が終わり、集落に帰って来たたん、知り合いがいた。

「・・・なんで、ここにいるんだよ。秋蘭」

「黄巾党の報せを聞いて、来ました。」

「もう倒したぞ?」

「真紅狼殿が居るならそうなりますね。」

「ところで、話しは変わるんだが、ここに来たのは秋蘭お前一人か?」

「・・・はい。」

今間があつたな。

「本当の事を言えや、今間あつたら!」

「・・・ここに來てます。」

「誰が?」

「華琳様と雅が來てます。」

「・・・マジ?」

「あの・・・“マジ”というのは?」

「あ? ああ、“マジ”というのは簡単に言えば、“本当”って意味だ。」

「ええ。もうすぐ來ますよ。」

ヤバイなあ、実にヤバイなあ。一月も空けているから、説教が飛んできそうだ。

「悪い秋蘭。俺は逃げる。武具は陳留に着いてからで・・・「あ」「どこに行く気よ? 真紅狼?」

「逃げるなら・・・いやもう「遅いわよ?」・・・デスヨネー。」

後ろから声がした。

うん、後ろを振り向いたら、俺の命が終わりかねないのだよ。

（真紅狼side out）

（華琳side）

秋蘭の後を追ったら、兄さんが居たので逃げられない為に後ろからそっと近づいた。

「真紅狼、こっちを向きなさい。」

「・・・ハイ」

「私の言いたいことが分かるわね？」

「実に分かるんで、帰ってからh・・・」
「ダメ」デス（ry）

「武具を作るのに2，3週間もらうといったのはわかるわ。でもそれがどうして一月も時間がかかるのかしら？」

「いや、完成はしたんだけどね？ 試し切りで時間食った後、この集落が黄巾党に襲われているのを見て、討伐してたらこうなったとか言えないんですけど。」

「で、私たちの武具は出来ているんでしょね？」

「それはバッチリ。・・・（やり過ぎたけど）」

袋から取り出している兄さん。

なにやら、一つ一つの武器から何かの力を感じるようね。

「ほい、華琳。」

「・・・あまり変わったところありませんね。」

「形状は変えずに、強度と切れ味を追求した。・・・あと、それ、殺気とかに耐性が無い奴に向けると気を失うから。」

「へえ、じゃあ、それなりに力がありそうな奴とそうじゃない奴の見極められるわね。」

「実力を隠している奴とかには有効だな。」

「いいわね。貰っておくわ。」

〔華琳side out〕

〔秋蘭side〕

華琳様と真紅狼殿のやり取りはいつ見ても面白い。

頼んでいた武具の引き渡しか。

私の武具も取りに行かなければ。

「秋蘭！」

「真紅狼殿、ちょうど取りに行こうと思ったんですよ。」

「ちよっと待ってる。確か弓と胸当てだよな？」

「はい。」

「えーっと、・・・あった。」

「はい、これ。あと胸当てな。」

と言って、変わっていない弓と見たことの無い胸当てを渡された。

「弓は変わっておりませんな。」

「弦だけ変えた。・・・そうだな、軽く射ってみな。あの木辺りに。」

と指差した場所は普通の弓では絶対届かない距離だった。

「無理ですよ。」

「百聞は一見に如かず。やってから言えよ。」

と無理矢理射ることになった。

私は、矢を弦にかけ目一杯引こうとしたとき真紅狼殿から言われた。

「あ、そんなに引かなくてもいいぞ。普通でいい、それで届く。」

そんな眉唾なことを言われたので信じられなかったが、やってみたところ、凄まじい速さである木に刺さった。

私は何も言えなくなっていた。

胸当ては白銀の体毛に薄い布で覆われていた。

「真紅狼殿、これは？」

「その体毛結構、強度があつてさ、矢で撃たれてもほんのちよつと痛い程度なんだよね。」

「有難うございます、真紅狼殿。」

「秋蘭、そのなんだ“殿”は付けるな。」

「ですが・・・」

「なんつーか、落ち着かないからさ、呼び捨てで構わねえよ。」

「じゃあ、真紅狼。」

「おう！それでいい。」

「秋蘭side out」

「雅side」

秋蘭の武器引き渡しが終わった後、こっちに真ちゃんがこっちに来た。

「真ちゃん、私の武器はどんな感じ？」

「ほい、これが基本的にメインになる刀だな。」

「これ、すごく澄みきってるし、持っただけで力が湧いてくるね。」

「そうか・・・（そりゃ、バハムートの角が使用されているからな。）で、こっちが小太刀だ。」

「抜いてもいい？」

「いいぞ。」

私は鞘に入っていた小太刀を抜くと、綺麗な小太刀だった。

「綺麗・・・」

「その小太刀敵を切っても、返り血が付いても落ちるようになってるから。」

「じゃあ、基本的に砥がなくても、いいってこと？」

「まあ、月に一回は砥いでくれ。あと、使ったら必ず鞘に戻すこと

だな。それさえ守ってくれ。」

「わかったよ。真ちゃん。」

「真ちゃん、言うな。」

「ヤダ。」

「このやろう。」

「真ちゃん。この武器はなんて言うの？」

名前を付けなきゃ、せつかくもらったんだし。

「まだ名前はないな。」

「じゃあ、私が付けてもいい？」

「別にいいがあまり酷い名h・・・「桜狼刀だね！」聞けよ」

「もしかして、一文字ずつ取るつもりかよ？」

「うん。そうだよ。よくわかったね!!」

「是非、止めてくれ。」

「ヤーダー。」

「・・・もういいッス。」

と何かを諦めた真ちゃん。・・・悪いね☆

＼雅side out＼

＼真紅狼side＼

取り敢えず、ここに居るもの達だけだが渡した。

どうやら、気にいってくれたようだ。

創ったかいがあるもんだ。

っと、いけない。あの三人を推薦しておくか。

「曹操来てくれ。」

「何？真紅狼。」

「あの集落にいる義勇軍の三人を推薦したいんだが・・・」

「あの三人を？」

「なかなかいけるぞ。連日襲ってくる黄巾党を三人で捌いてたらし

い。」

「たった三人で・・・わかったわ、宮仕えさせるわ。」

「その内、一人は“氣”が使えるらしい。」

“氣”？」

「おう。“氣”。」

「面白いわね。」

「だろう？」

「正式に採用させるわ。取り敢えず真紅狼の部下として働いてもらうわ」

「俺も部下持ちか。ところで、俺はどの位置の役職に就くんのだ？」

「將軍よ。」

「・・・え？」

「もう一度言うは・・・將軍よ」

「マジかよ。いや、むしろ將軍の方がいいのか？」

と呟く俺。

華琳が不思議そうにこちらを見てくる。

「なによ？」

「曹操、俺部隊を創ろう思ってたが、いいか？」

「部隊？」

「俺が総隊長で五つの部隊を創ろう思っている。武器の種類に分けて作るつもりだ。」

「詳しい内容は、陳留で。」

「そうしよう。いい加減帰らないと春蘭達が暴れそうだ。」

「そうね。いや、もう暴れているかもよ？」

「やだなあ。」

と苦笑いする。

「では全員帰るわよ！！その三人はついてきなさい。」
と華琳は先頭に立って、馬を動かした。

「わかったかしら、三人とも？」

「「「はい、分かりました。」」」

「兄さんは、後で私の私室に来てください。」

「はいよ。」

こうして俺は、陳留に帰った。

春蘭、季衣に武器を渡した後、ひと月の不在の間に程？と郭嘉、典韋が華琳に仕えたらしい。その場で真名を交換した。

全員に配り終えた後、解散となり、それぞれの持ち場に帰り始めた後俺は華琳の私室に行こうとしたら、荀？に「私にも何か創ってくれ」と言われたので、了承した。

＼真紅狼side out＼

逃げるなら・・・いや、もう「遅いわよ?」・・・ヤッベΣ(。Д。;) (後書き

荀?の防具っぽいのを作成します。

あと、次から日常になるのかな?

黄巾党討伐と天の御遣いはもう少し待っていてください。

部隊設立？（前書き）

無理矢理投稿した。

ちよっと、明日から三日間投稿が出来ません許してください。

部隊設立？

「真紅狼 side」

「うゝゝむ。苟？には何を創るべきか・・・悩むなゝ。」
と移動しながら創るものに悩む、俺。

「ネコミミっぽい被り物があるから、『ケット・シー』は確定だろ。
あとは何にするかな。」

そんなことを悩みながら、華琳の私室の前まで来た。

「華琳、居るか？」

「はい、居ますよ。」

「失礼するぜ・・・と仕事中だったか。」

「いえ、もう終わりましたので。」

「そうか。先程話した件覚えてるか？」

「はい。部隊の設立ですよね？」

「そうだ。先程言ったけど、部隊の数は五つ。今のところはだけど、
総隊長は俺が務め、その下に五人の部隊長が在り、さらにその下に
部下が付くってことにしようと思ってる。」

「何故、いきなりそんなことを？」

「春蘭との手合せを覚えてるか？」

「ええ、衝撃的な手合せだったので・・・」

「そんなにか？」

「それほどです。」

こんなので驚いていたら、身が持たないぞ？

「まあ、いいか。それは置いておき、あの手合せが終わった後「あ
と四つほどある」って言ったよな？」

「はい。・・・まさか？」

お、気が付いたみたいだな。頭の回転が速いなあ。

「想像通りだ。」

「つまり、あと残りの四つと前のを合せて五つの部隊を創るってことですか？」

「そうだ。言っておくが、一つ一つの部隊の戦闘法は変わるぞ？」

「・・・他の四つはどんなのですか？」

「見たいの？」

「はい。是非。」

「・・・まだ、他人には見せたくないから、ここでいいか？」

「どうぞ。」

「んじゃ、まずは『奥州筆頭』！！」

と俺は言い、B A S A R A 2の伊達政宗をイメージし、その姿になった。

「こんなモンだ。」

「この武器は何です？」

「これは“刀”という武器だ。」

「“カタナ”ってなんですか？」

「簡単に言えば、俺の住んだ国の主流武器かな。侍が使っていた武器だ。命の次に大事なモノで『刀にはその“侍の魂”が宿る』っていう言い伝えがある。」

「そうなんですか・・・しかし、簡単に折れそうですね。」

「使い方によるな。」

「使い方一つで変わるものなんですか？」

武器なんてどれも一緒なんて顔をしているな。聞いてみるか。

「変わるぞ？・・・華琳は“剣”と“刀”の違いが分かるか？」

「いえ。」

「簡単な講座だ。最初は剣から、剣が対象の物を切るときには“押

して切る”んだ。もつと簡単に言うのと、力任せに切るって言った方がいいな。だが、刀は違う。そんなことをすれば、刃はダメになるし最悪折れる。刀が対象の物を斬る際は“裂いて斬る”んだ。力の入れ方や斬り方などの技術が必要になってくるが、習得すれば首を斬ることなんて簡単にできるぞ。骨ごとバツサリいく。」

「そこまで出来るんですか？」

「出来る出来る。習得すればだけど。」

「・・・部隊長は誰に？」

「雅にやつてもらいたいんだが了承は後からだな。断られたら俺が兼任する。」

「・・・（大丈夫だと思いますが）」

なんか呟いていたがまあ気にしない。

「この部隊は、主に接近戦で戦う。だから、敵の攻撃を捌く技術も必要だな。」

「次は？」

お次は、アレか。

「『闘魂絶唱』！！」

BASARA2の真田幸村の姿に変わった。

「・・・二槍ですか？」

「片手に一本ずつ持ち、中々遠距離からの戦闘法だ。これは片手で槍が扱えることが重要だな。」

「大変そうですね。」

「だが、慣れてもらわないとな。ちなみに今言った二つの部隊は馬も乗りこなして貰うことになる。」

「馬もですか？」

「騎馬隊としても強いからな。」

「では、次を。」

「ちゃっちゃと進まないと時間だけが過ぎていくからな。」
「そうね。」

「次は前見せたヤツだ。『絢麗豪壮』!!」
「これは・・・武器に振りまわされないってことが重要ですか？」
「そうだ。あとはこれを持てるようにすることだ。一応、部下たちには軽いモノを渡すが慣れていったら、元の重さに戻していくつもりだ。一対多のときに役に立つな。一人で、五、六人は相手にできるようになるだろ。」

「次は『天衣無縫』!!」
(イメージはB A S A R A 2のコス2のイメージで。)

「これも槍ですが、先が変わってますね。」

「これは“碇槍”だから。」

「“碇槍”？」

「槍に鎖が巻きついていいるだろ？これと先っちょは繋がれていて、切り離しが可能なんだ。だから、届かない相手にも振りまわせば届くし、地面や岩なんかに刺したまま敵にぶつけることも出来る。」

「敵の意表を突くには最適な武器ですね。」

「おう。便利だ。あとは工作を行って戦況をこちらに引き寄せるといった裏工作をも担当する。」

「・・・治水事業とかいいかも」

「そういう工業をも副業とするつもりだ。」

「では最後ですね？」

「ああ。」

「最後だ『征天魔王』!!」

(これもコス2をイメージしてくれ。b y作者)
「これは何ですか？」

と言って、銃に興味があるようだ。

「これは“銃”というんだが、造れないからちよつと無理だな。代わりに連射弓を作ろうと思っている。」

「連射弓？」

「普通の弓は一本ずつ撃っていくのに対して、連射弓はあらかじめ何本かストックを持ち、それが無くなるまで撃っていくという物だ。」

「・・・便利ね。」

「ただ、欠点があつてストック無くなれば撃てないということだ。だから、ここは代わりに“気”を扱って戦う部隊にしたい。」

“気”ということは先程入った、風^{フウ}に任せるつもりですか？」

「まあ、本人が了承すればな。ここの部隊も接近戦だが、ここは超^ス近距離格闘戦だ。求めるのは“気”が扱える者と死の恐怖を克服するして、相手の懐に潜り込むことだ。」

「懐ですか？」

「格闘だからな。直接ぶつけなきゃならないし、敵の放ってくる死の恐怖に打ち勝てなきゃ潜り込むどころか動けないからな。」

「一番危険な部隊ですね。」

「だが、両方武器を失ったときに格闘戦に慣れておけば、勝てるぞ。さて、こんなもんかな？ どうだ、華琳。設立したいんだが構わないか？」

「・・・一つ聞いていいですか？」

「なんだ？」

「どうして、兄さんは独立せず、私の元で働くんですか？」

「どうしてって、それはな、華琳に義母さんに“家族”ってものを再び与えてくれたからだな。・・・俺話しただろ？ 家族が居ないって。」

黙って聞く華琳。

「二度と取り戻せないモノだと思っていたんだけどな、それを取り戻してくれたし、何より前よりもこの生活が楽しいからだな。」

「楽しい・・・ですか？」

「復讐してあとは虚しさだけが残ったんだが、華琳達と会ってから充実した毎日が送れているから、だから、華琳の元に居るんだよ。・
・義母さんに尽くそうと思ったんだが亡くなってしまったから、お前に死ぬまで尽くしてやろうと思ったのさ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「まあ、そんなもんってうおっ!？」

華琳がいきなり抱きついてきた。

何故に!？

その時、華琳には聞こえなかったが、俺には聞こえた。扉が微かに「ミシミシ」って言う音が聞こえた。

・・・・外でアイツ等聞いてやがるな。

＼真紅狼 side out＼

＼華琳 side＼

兄さんは部隊設立の内容を楽しそうに語っていた。

將軍だから、部下を持つことは当たり前だが、まさか部隊を持ちたいというとは予想できなかった。

各部隊の特徴を聞いていくうちに、一つ疑問が浮かんだので聞いてみた。

「どうして、兄さんは独立せず、私の元で働くんですか？」

そう、兄さんの力があれば、曹家に居なくても天下を取れる実力だった。

そんな疑問に対し返ってきた答えは兄さんの“想い”というより“夢”のように聞こえた。

しかも、最後に「お前に死ぬまで尽くしてやろうと思ったのさ。」

と反則のようなことを言ってきた。
だから、私は兄さんに抱きついた。

「うおっ?!」

「ずるい。・・・ずるいですよ、兄さん。」

「ずるいって何が？」

「分かっている癖に。そんなことを言われると私が反論できないのを。」

「

「・・・まあな。」

と兄さんはおどけて笑っていた。
本当にずるい。

私は無意識のうちに兄さんに顔を近づけていき、キスしようとしていた。

兄さんも最初は躊躇いながらもいたが、近づいてきた。

あと、少しのところで突然扉が飛んだ。

「「だめだあああああああ~~~~~!!!!!!」」

「華琳side out」

「真紅狼side」

「ずるい。・・・ずるいですよ、兄さん。」

と華琳は言ったあと顔を近づけてきた。

え、ちょ、マジで!?

キスするの?!

そんなことしたら、外で聞いている連中が乱入してくるのが目に見えてるんだけど。

だが、待たせてるのもマズイからフリをするか。

あと5cm、2cmとお互いの顔が縮まっていくと同時に、扉が「ミシッ!」、「ミシミシィ!」と聞こえてくる。

1cmというところで、扉が飛んで来た。

「「「だめだあああああああああ~~~~~!!!!!!」」」

反応はしたが、対応が遅れて、顔で受ける羽目になった。

ドガッ！

「いってえ~~~~!!」

「なんで、ここに居るのかしら？雅、春蘭、秋蘭、桂花、季衣、稟風、流流、凧、沙和、真桜？（怒）」

全員居んのかよ!!

「え、え~~~~とそれはですね・・・」

と口ごもる一同。

「おおかた、春蘭か荀？が覗き見みしてたのが、次第に人が集まったってところか？」

この一言で全員が挙動不審になった。

「まあいい。ところで、雅、凧、沙和、真桜。お前ら部隊長にならないか？」

「「「え？」」」

「元々、声をかけるつもりだったんだが、どうだ？」

「やるよ。真ちゃん」

「是非、やらせてください。」

「そうか、後の二人はどうだ。」

と悩む二人。

二人で話し合っているようだが決意が決まったようだ。

「やるで！」

「私も。」

「よし、四つは決まったな。」

「あと一つはどうするの？」

「そこは適任者が出るまで俺が兼任する。各部隊の名も決めてある。」

「どんな名なの？」

「先程、四つのスタイルが見せただろ？それからイメージしたものだ。」

『蒼龍隊』、『紅虎隊』、『翠鳳隊』、『紫鯨隊』、『黒獅子隊』

「この五つだ。そして、戦闘法をこの四人に当てはめるとこうなる。」

『蒼龍隊』・・・雅

『紅虎隊』・・・沙和

『紫鯨隊』・・・真桜

『黒獅子隊』・・・凧

「というわけだ。『翠鳳隊』は俺が受け持ちだ。いいか？」

「「「はい。」」」

「それから、各隊が分かるように陣織を創っておくから期待してくれ」

「こんな状況を余所に言うけど、一番最初にこの部屋を覗き見たのは誰？」

本当に流れをぶった切るな。

全員が苟？を指差した。

「そう、桂花貴方なのね。これはお仕置が必要ね。」

「は、はい？」

なんで、顔が赤くなってんだ？
それをよそに秋蘭と雅が寄ってきて耳打ちしてくれた。

「真ちゃん、あのね。」

「真紅狼、あのな赤くなっているのはある理由があるんだ。」
「理由？」

「うん、華琳様はたまに閨を私たちの内の誰かと過ごす時があつてね。」

「桂花はそれに呼ばれたのだ。」

「・・・それ本当？」

「「本当」」

・・・義母さん、華琳が変な方向に育ってしまった。
八年間も放っておいた俺が悪いのか？ そうなのか？

「ダメージを負ってますね。」

「負ってるね。」

Orzになっている俺だったがよろよろと立ち上がり、もう一つ提案した。

「華、華琳。俺の家造っていい？」

「家ですか？」

「そう、家。俺の住んでた時の家。」

「・・・興味あるからいいですよ。ただし、完成したら呼んでください。」

「分かった。明日から、造るか。あと、募集もしないと。」

「ということで皆、それぞれの仕事に戻りなさい。」

部屋から出ていくメンバー、俺も家を建てるため、土地の見極めしようとしていた。華琳に囁かれた。

「兄さん、さっきの続きはまたどこかで・・・。」

・・・マジっすか？

＼真紅狼 side out＼

部隊設立? (後書き)

キスすると思ったか!?

しねえよ!!

でも、近いうちにするつもりだけど・・・

「ちょっとマテや、作者あ!!」

どこから入って来た!?

「気合でなんとかなった。」

お前はラカンかよ。

「さっきの事本当か?」

もう一人増やすつもりだけど・・・

「止めてくれない?!」

だが断る!!

「よろしい、ならば戦争だ!!」

ドガッ! バキ! ドガガガッ!

華琳「なにやら二人が暴れているけど、これで終わりよ。また次回待ってね」

自宅が完成、そして訓練開始!! (前書き)

随分間が空きましたが投稿します。

・・・スママセン

自宅が完成、そして訓練開始!!

（真紅狼 side）

一か月間で家は完成した。

時間が飛んでる？それはアレだ、ご都合主義ってことで頼む。

場所は、だいたい華琳の宮殿から約10分ぐらいのところだ。

水はけや日当たり、風通しなどを見極めていくと、ここしかなかったんだ。

モデルは武家屋敷をイメージしてくれ。中庭と庭をも造った。

中庭は簡単な川を創った。

野菜を冷やす為に、それ用の籠も造った。

庭には自家栽培が出来るように畑を創っておいた。

一度、やってみたかったんだよね。自家栽培ってやつを。

部屋は全て畳だ。

畳とか栽培用の種とかはジイサンに頼んで輸入した。

あと瓦もな。

こういう木造建築ってのはシロアリや害虫などの被害が酷いがそこは特殊な術式を使い、この家から10km以内に入った害虫どもは『イフリート』の炎か『シヴァ』の氷か『ラムウ』の雷で消し炭になるようにしている。

もちろん家には被害が出ないように細工もしている。

自家栽培はトマトに茄子、じゃがいも、かぼちゃ、きゅうり、キャベツなど色々と栽培中だ。無農薬の為、有機栽培だな。

あと、家を造りながら部隊の募集をかけたところ、結構来た。

まず、最初に得意な武器を言ってもらい、そこから振り分けた。

各部隊約100人前後だが、風が率いる『黒獅子隊』のみは30人程度しか集まらなかったが、30人も集まった方が奇跡である。

見立てでは5人超えれば、上出来だったんだが案外いるものだな。

そんなわけで、まあ最初は挨拶をした。

「ようこそ！曹操軍の中でも特異な部隊『神狼』へ！！俺はこの『神狼』の総隊長を務める、曹真だ。まだ部隊長は決まっていないが『神狼』の一つ『翠鳳隊』も兼任で務めている。さて、『神狼』の五つの部隊ではそれぞれ決まった武器を使うが、その代り使い方が特殊だ！だが、諸君には慣れてもらわなければならない。それが基本になるからだ！」

と言った後、場はざわつく。

「本来なら今日から訓練に入りたいが、ここに来るまでに疲れている者もいるだろう。だから、明日から訓練を始める。あと、この『神狼』に入るにあたって、絶対に守って欲しい規則がいくつかある。これを護れなければ即刻除隊させてもらう。」

集まっている者たちはこころして聞いた。

一つ、常に正々堂々と。

一つ、喧嘩をするなら、総隊長に申請すること。

一つ、曹操軍に居るからって民に偉そうな態度で接するな。

「ここから重要だよく聞け！！」

一つ、人を殺すことに慣れるな。

「最後はこれだ。」

一つ、必ず生きて帰ってこい！

「以上だ。では、解散!!」

と言ってぞろぞろと集合場所の時刻と場所を聞き、出ていった。
とまあ、こんな感じだ。

次の日から、まずは体力づくりをしてもらった。

二週間ほど、体力をつけなければ武器を操れないし、持久戦にも耐えれないからだ。

それから、各隊を見て回り、どんな武器を操るのか。など聞かれた
為、一から教え理解してもらって行った。

特に『黒獅子隊』は“気”を操るため風の指導もそうだが俺も指導
してやった。

この部隊には是非とも覚えて欲しい技があるからだ。

技とは『金剛剋』。ただし、“気”で扱えるように俺が独自にアレ
ンジしたものを教えた。

一人の武官が疑問に思い聞いてきた。

「この『金剛剋』ってのは攻撃用ですか？」

「いや、防御技だが、覚えというて損はない。」

そういうと何人かが騒ぎ始める、「防御技なんて覚えたくない」と。
風はその武官たちを窘めようとするが、俺は止めた。

「お前たちなn・・・「そうだな」？」

「確かに防御技を覚えたくないという奴もいるだろう。だから、教
えてやるよ。この技がどれほど優秀かを。ルールは簡単、俺VSお
前ら全員だ。」

「「「なっ!?!」」」

驚く『黒獅子隊』のメンバー。

「舐めてんのか!?!」

「本気だぞ？」

「やってられるか!!！」

「文句言う暇があったらかかってきたらどうだ、雑魚共？」

軽い挑発に耐えられなくなった武官たちは俺を囲み、一斉に襲いかかって来た。

それを一つ一ついなしながら、打ち合いが続いた。

俺はワザと背中との隙を見せた。それをチャンスだと思った武官は正拳突きを叩き込もうと背中に触れる瞬間見えない壁に遮られて弾き飛ばされた。

活剗衝剗混合変化 金剛剗

「うあっ!!？なんだ今のは!!！」

「これが『金剛剗』だ。」

防御と同時に全体に衝剗を弾き飛ばし、俺の周囲に居る奴ら目掛けて放つ技……

接近されていて身動きが取れないときや敵の攻撃の嵐を抜ける時など様々な場面に活用できる汎用性の高い技だ。

「どうだ？これでこの技の重要性が分かったろ？」

「……ああ。舐めた口を聞いて済まなかった。」

と謝る一人の武官。

「いや、キミたちのいうことも一理ある。疑問に思ったらいつでも応えよう。」

「「有難うございます!!！」」

「……じゃあ、風。金剛剗の練習を頼むぞ？」

「はい。真紅狼さん。」

「頼んだ。そうだな……あと三時間ほどで今日の訓練は終了だ。無理はするなよ？」

「「はい！」」

と言って、『黒獅子隊』を後にし、残りの四部隊を回った。

各部隊最初の訓練の為、ぎこちない動きだったが終わりの方にはスムーズに動いていた。

そして各部隊を回り、三時間後全部隊を集め、訓練終了の知らせを出し解散させた。

「今日はここまでだ。最初はそんなに長くやらん。まずは訓練に慣れてもらうことに専念してもらいたい。ちゃんと、体を休めるように。では、解散！」

ぞろぞろ各部隊のメンバーはそれぞれの場所に帰り始めた。俺も自宅に帰ろうとした瞬間、雅、凧、真桜、沙和に呼び止められた。

「「「真紅狼」」」

「おう、おつかれさん。」

「華琳様のところに行くんじゃないの？」

「自宅が完成したからこれからはそっちに帰るんだよ。」

自宅が出来たということを聞いて驚く四人。

そこに悪魔の呟きが来た。

「真ちゃんの家、行ってみたいなあ。」

「私も興味があります。」

「私も」

「ウチも興味があるな！」

そんなキラキラした目でこっちを見るな。

・・・ダメだ。ここで「いいぞ。」って言ったらやな予感がする。そこに追い打ち・・・いや、止めの一言が飛んで来た。

「・・・私も行ってみたいわね。真紅狼。」
振り向くと華琳が居た。

Oh・・・orz

「いつの間に居た？」

「少し前に」

「・・・あー、はいはい。いいですよ。勝手に来い。」

ということで曹操軍の武官文官をご招待した。

＼真紅狼side out＼

＼華琳side＼

今日は兄さんが創った部隊の訓練初日・・・。

宮廷から眺めているが、それぞれの部隊が体力づくりで忙しくしている。

とある部隊で兄さんは戦っていると姿を見えた。

「何アレ？」

「どうしたんですか、華琳様？」

秋蘭は聞いてくる。

「兄さんが一気に周りの人間を吹き飛ばしてのを見てね。ちょっと疑問に思ったのよ。」

「・・・あとで直接聞いてみたらどうですか？」

「それもそうね。」

「あ、終わりますね。」

「なら、行きましょうか？」

「「はい」」

と眺めるの止め、兄さんのところに向かった。

兄さんのところに向かっていると、「家が完成した。」という話をしていたので私は興味があり、後ろから声をかけた。

「・・・私も行ってみたいわね。真紅狼。」

と一言。それが止めだったらしく。諦めていた。

「・・・あー、はいはい。いいですよ。勝手に来い。」

そういうやり取りがあった後、向かった先はこの国では見慣れない屋敷だった。

（華琳side out）

（真紅狼side）

というわけで、華琳達を家にご案内中。
なにも無いけどさあ。

「ほい。ここだ。」

と立ち止り指を指した。

様々な感嘆の声が聞こえた。

「兄さん、これが兄さん住んでいた国の家ですか？」

「まあ、そうだな。」

そこには立派な門があり、どっしりと待ち構えていた。

「立ち話もなんだし、中に入るか。」

「そうですね。」

玄関まで来たときに言った。

「あ、靴は脱いでくれ。今後俺の家に来るときは玄関で靴を脱いで入ることだ。」

「」「」「分かりました。」「」「」

そういつて、全員は靴を脱ぎ、中に入った。
廊下を歩き、様々な部屋を見せた後、居間に案内した。

「この部屋が基本的に朝餉や夕餉を食べる部屋で共有空間みたいな場所だ。」

「ここで、食べるんだ。」

「質素ですが、落ち着きますね。」

「下に敷かれているのはなんだ？」

「畳だ。」

「タタミ？」

「畳ってのはそうだな・・・絨毯だと思ってくれ。」

説明するのにメンドイしな。

「そうか分かった。」

「それじゃ、ちょっとここでくつろいでくれ。俺は着替えてくる。」

「分かりました。」

「出歩いてもいいけど、奥の方まで歩きまわるなよ？迷いかねないんだから。」

「「はい。」」

着替え中・・・

「まだですかね？」

「もうそろそろでしょう。」

「・・・すまん。待たせたな。」

と俺は手にお茶を淹れて戻って来た。

「兄さん、遅いですよ。・・・?!」

「スマン、ちょっとお茶請けとお茶に時間を食ってな。」

「真紅狼、お前こんなに華琳様を待たせてそんな・・・なんだその

格好は？」

「ん？ああ、これを見せるのは初めてか。」
俺は男用の着物に着替えて戻ってきていた。

「兄さんそれは？」

「これは着物って言ってな。俺が家に居る時に着る服だ。」
といいながら、一人づつにお茶と水羊羹を配っていく。

水羊羹は完成した際、ジイサンに貰った。

「急な招待だったからいいモノが無くてな……。まあ、こんなものでも良ければどうぞ。」

「これは……。どうやって食べるのだ？」
と羊羹を指差す、秋蘭。

「竹串があるだろ？それで一口サイズに切って食べるのもよし。一気に一口でも食べてもいいぞ。」

と食べ方をレクチャーした後、春蘭や凧は一口で食べていたが、その他のメンバーは一口サイズに切ってから食べていた。

「どうだ、味は？」

「甘すぎず、苦すぎずさっぱりしていておいしいです。」
「しかも、お茶にも合います。」

「風ちゃんも初めて食べるモノですがおいしいですね。」

「そいつはよかった。」

「兄さん……。これなんて言うんですか？」

「これは水羊羹っていう茶菓子だ。」

「作れますか？」

「まあ、なんとか。」

「今度また作ってください、食べたいです。」
と可愛い妹に頼まれたので、了承した。

「分かった。作っておこう。・・・さて、こんな感じだな。」

「そろそろ時間だし。帰るか？」

「そうですね。帰りましょうか、華琳様？」

「春蘭たちは帰りなさい。私は今日ここに泊まるわ。」

「はい。・・・。「え」？」

「聞こえなかったのかしら？ 私はここに泊まるって言ったのよ？」

「いやいや！ 華琳お前何言ってるの？！」

「いいじゃないですか、兄さん。」

「いや、よくねえよ？！ こんな古風な家に泊るより豪華な宮廷に戻って寝た方がいいだろうが！」

「別に気にしてないですけど・・・？」

「ええええ。秋蘭もなんか言ってくれよ。」

「まあ、私は華琳様が言うのであれば、止めはしませんが・・・。」

「味方がいねえ！！！」

「そういうことだから、よろしくね？」

「「「はい。」」」

「もう決定事項かよ！！！」

虚しく真紅狼の意見は却下された。

「じゃあ、真紅狼。華琳様を頼むぞ。」

「華琳様、明日の朝また逢いましょう。」

「真ちゃん、またね。」

と言ってそれぞれは帰っていった。

華琳を溺愛している桂花は終始黙っていたが、よく見てみると風、真桜、沙和、季衣によって口をふさがれていた。

ああ、望みは最初から無かったんですか・・・。

どうみても、計画的な犯行です。本当にありがとうございました。・・・チクショーが！！

「さて、どうしよっかなあ？」

「夕餉はどうするんですか？」

「それなんだよな。完成したばっかで食糧のことを考えてなかったんだよな。」

「じゃあ、食べに行くんですか？」

「まあ、そうなるな。」

「なら、宮廷で私の料理を食べてくれませんか？」

「ん？華琳、お前料理出来るの？」

「はい。それなりに。」

「じゃあ、食べさせて貰おうかね。」

「腕が鳴りますね。」

と言って俺は着物のまま、宮廷に向かった。

（真紅狼 side out）

自宅が完成、そして訓練開始!! (後書き)

次なんです、風呂イベントを入れるか入れないかで迷ってます。
要望があれば、入れます。

想い（前書き）

投稿できるやつは全て投稿します。

想
い

真紅狼 side

宮廷で華琳の手料理を食べ、一息つき自宅で風呂に入ろうと思ったとき華琳がついでに「風呂に入っていきませんか？」と誘われた。

「それって、混浴じゃないよな？」

「混浴ですよ？」

「いや、無理だから」

「いいじゃないですか、兄妹ですし」

「よくねえよ?！」

「じゃあ、先に兄さんが入ってきてください」

「……絶っ対に入ってくるなよ？」

「わかってますよ」

という形で何故か華琳専用の風呂に入ってる俺。
どうしてこうなった？

そんな風に思つてると外が騒がしかった。

「
・
・
・
だから」

「
・
・
でも」

「それより入るわよ」

ガラツ
・
・
・

「・・・・・・・・よう」

「真ちゃん何してんの？」

「雅、華琳はどこ行つた？」

「華琳様ならもうすぐ来るよ」

「言っといてくんない、上がってr「兄さん」」

「兄さん、すみません。春蘭たちがどうしてもいうので」

「お前・・・謀ったな」

「で、春蘭たちは？」

「そこで固まってるよ」

固まった春蘭たちが徐々に動き始めた。

「「ぎゃあああああ！！！」」

「なんで、ココに真紅狼が居る！？」

「このヘンタイ！」

「お兄さん、大胆ですねー」

「だから、出たかったのに」

「私が誘ったのよ」

「「えっ！？」」

「ダメかしら？」

「華琳様が誘ったなら・・・」

「文句は言いませんけど・・・。こっちを見ないでよ！？」

「見ねえよ」

と俺は言い、端の方に向かった。

数分が経ち、気まずい空気だったので出ることにした。

「華琳、俺はもう出るぞ」

「はい。なら、着替えて待っていてください」

「はいはい」

俺は湯船から出る時、迂闊にも背中を華琳達の方に見せてしまった。

「お、おい。真紅狼」

「なんだ、春蘭？」

「その背中の傷、どうした？」

「（しくじった・・・、春蘭達が居るのを忘れていた）」
この背中の傷を見て、華琳と雅以外はびっくりしていた。

「真紅狼」

「秋蘭も知りたいのかよ」

「ああ」

興味があるという目でこちらを見ているが、この場では話すつもりはなかった。

「あー、まあまた今度な」

といい颯爽に風呂を出ていく真紅狼だった。

＼真紅狼 side out＼

＼華琳 side＼

兄さんが入ってから、私は兄さんが逃げられないように逃げ道をふさぐ工作をおこなった。

「雅、春蘭達を連れて、風呂に行きなさい」

「はい。でもなんでまた？」

「たまには皆で入るのもいいでしょう？」

「それもそうですね」

怪しむ必要もなかったので雅は疑わず、すんなりと行動に移った。

そして、策が上手くいき私は今、春蘭たちと兄さんで風呂に入ることに成功した。

「兄さん、失礼します」

「お前・・・謀ったな？」

「なんのことやら」

と問いただす兄さん。

気まずい空気だったのか兄さんは「風呂を上がる」と言ってきたので待つように言い返した。

湯船から上がるときに背中が傷が見えてしまった。

・・・何度見ても、あの傷を見ると嫌な気分になってしまう。

春蘭たちは初めて見る傷に、驚きを隠せないでいた。

傷の事を聞こうと春蘭や秋蘭は質問していたが、兄さんは答えずにそのまま出ていった。

「はぐらかされたな」

「ああ。だが、なにか思っただけで答えなかったのかもしれないぞ、姉者」

「“なにか”ってなんだ？」

「それは私に聞かれても」

「真紅狼も色々あったのだろうか・・・。どうなんですか、華琳様？」

「兄さんからは聞いていないわ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

雅は黙っていた。

あの傷を創ってしまったの原因が自分たちにあるなどと言えなかったからである。

「私もそろそろ上がるわね、兄さんを待たせるわけにはいかないし」
「そういう華琳は雅たちも早く出た。」

「華琳side out」

「真紅狼side」

風呂から出て、少し涼んでいたらしばらくしてから華琳がやって来た。

「兄さん」

「おう。で、俺の家で寝るのか？」

「当り前です」

「当り前なのかよ……。取り敢えず帰るか」

うまく宮廷で寝かせようと思ったが華琳の意思は固かった。

移動中……

俺の部屋で二つに並んだ布団に華琳、そして俺は寝た。

「そんじゃ、おやすみ」

「はい、おやすみなさい、兄さん」

そういつて、俺たちは寝た。

＼真紅狼side out＼

＼華琳side＼

兄さんは布団の中に入った瞬間、向こう側を見ながら寝ていた。

私は初めてな為、なかなか寝付けず、兄さんが寝ているのを確認した後一人呟いた。

「兄さん。私は兄さんが好きですよ」

そう一言呟いた。

そう、私は兄さんが好きだ。

私が傷つかない為に、兄さんは何もかも背負って私を護って来た。

私はそれが嬉しかった。だけど、私も今は何かを背負う覚悟は持っている。

兄さんが旅に出ている間に様々なことがあり、背負わなければなら
ない事もあった。

初めて背負ったときには重さで潰されそうになったが、今は周り
に頼もしき部下がいるから、潰されずに耐えられることも出来た。
だから・・・

「兄さんはもうなんでもかんでも一人で背負わなくていいんですよ
」

とその呟きが真紅狼に聞こえていたのかは神の知るところであった。
最後に華琳ははっきりと言い、そして目を閉じた。

「私は兄さんと共に歩みたいです」

〈華琳 side out〉

想い（後書き）

なんつーか、下手だな。
こういう話を創るのが。

次から、一刀たちが出ます。
ようやく本来の主人公が出てくる・・・。
遅いなあ

砦落としは斬新な方法

砦落とし

（真紅狼 side）

朝、目が覚めたときはまだ辺りは若干暗く、華琳も未だに寝ていた。華琳を起こさないように、部屋から抜け出し、汗を流した。

その後、リテンスの姿に着替え、畑に水を撒き育てている野菜は順調に育っていた。

「・・・育つとる育つとる。あともう少しだな」

「・・・兄さん、お早うございます」

「おう、おはようさん。顔洗うか？」

「はい」

「冷たいから、気を付けろよ」

「くく！ スッキリしました」

「それじゃ、宮廷に行きますかね」

「そうですね」

宮廷に着くと、中が慌ただしくなっていた。

「どうしたんだ？」

「あ、真紅狼に華琳様。来てたんですか」

「今さっきね。で、どうしたの？ 秋蘭」

「いえ、昨夜の内に書物が一つ紛失したようです」

「どんな書物なんだ？」

「『太平要術』と呼ばれる書物です」

「どんな内容だったんだ？」

「人心掌握の内容が書かれていた書物です」

「人心掌握ねえ。・・・（なんだこれは、魔力？ いや、妖力の

残り滓がわずかに感じられる」

目に見えないが、魔力を有している真紅狼だけが気付いた。

「どうしました、兄さん？」

「いや、なんでもない。ポーっとしてしまった」

「・・・取り敢えず、朝議を始めるから、秋蘭皆を呼んでちょうだい」
「はい」

妖術か・・・。

まためんどくさいことになりそうだ。

＼真紅狼side out＼

＼華琳side＼

書物が無くなっている事を知った私と兄さんは、突然兄さんの顔が難しい顔をしていた。

「（これは、なにか起きそうな顔ね）」

兄さんは気付いていないが、たいてい面倒事が起きる前の兄さんの顔は険しい顔をしている。

兄さんはバレていないと思っているようだが、長く付き合っている者には案外分かりやすい表情をしているのである。

「・・・取り敢えず、朝議を始めるから、秋蘭皆を呼んでちょうだい」

「はい」

「ほら、兄さん行きますよ！」

「分かったから、引っ張るな！」

昨日の告白から想い切って兄さんの手を引っ張っていく私。

・・・まるで恋人みたい。

＼華琳side out＼

＼真紅狼side＼

朝議の内容は『黄巾党』についてだった。

今朝早くだが、『黄巾党』の大きな集団が二つあり、どちらも砦を持っているようだった。

「砦とは、厄介ね・・・」

「・・・華琳様、一つ策があります」

「言ってみなさい、桂花」

「真紅狼を使うのはどうでしょう？」

「ん？ 俺？」

「そうよ」

「何故、真紅狼なのかしら？」

「真紅狼は未だに過去の異名が残っています。ここで新しい異名を広げて過去の異名を払拭させることと、うまくいけば情報も聞き出せるかもしれません」

「前者は納得できるけど、後者はどういうこと？」

「『黄巾党』は大きな集団です。誰かしら、頭が居る筈です。しかし、私たちはその情報を知りません。そこで、真紅狼が一人で砦攻めした時に、相手が油断してポロっと口に出すかもしれないので、それを逆手に取るんです」

「そんなの許せるハズがないでしょう？ 確かにそろそろ真紅狼に一つぐらい大きな勲功を挙げて欲しいけど・・・」

と華琳は俺の身を心配しているようだが、華琳の言ってることにも一理あるな。

「まあ、俺は別に構わないが・・・」

「真紅狼、いいの？」

「まあ、体を動かさねえと鈍っちまうからな」

「でも、一人よ？」

「大丈夫だ、適当に何人か捕まえてから情報吐かせて、潰すし。武勲も一つぐらい挙げないとダメだろ？」

「それを言われると、そうだけど・・・」

「じゃ、決まりだ・・・桂花、砦の場所は？」

「ここから、西に出て、山に入ってすぐよ」

「分かった、支度してくる」

「しょうがないわね、全員聞きなさい！ 私たちはこれから黄巾党の討伐に入る！ 各々、準備を怠らず、迅速に動きなさい！！」

「「「はっ！！！！」」」

雅達の動きが活発になり、準備を始める各々。

相変わらず、華琳が言う 것처럼 になってるな。

「華琳、俺は先に行って砦を落としてくる」

「分かりました」

「途中、轟音が聞こえても気にするなよ？」

「大丈夫です。兄さんの無茶苦茶な戦闘にはもう慣れました」

「微妙に言葉に棘を感じるだが・・・」

「気のせいです」

「ま、行ってくる」

うーむ・・・、これは怒ってるな。

（真紅狼 side out）

（??? side）

俺たちは、戦乱を鎮めるために義勇軍として戦っている。

各地を転々としながら、黄巾党を倒してきたがさすがに食糧が尽きはじめた。

そこで、軍師の朱里の提案でこの近くを治めている魏の曹操と共闘させてもらうことにした俺たちは、曹操軍を探した。

したら、なんとこの近くに黄巾党達が居るので討伐に向かう所に出くわした。

星の友人が曹操軍に居ることが分かり、口添えしてもらい、黄巾党討伐までだが、一緒に戦ってくれることとなった。

「私は曹操よ。貴方、誰？」

「失礼ですぞ！ 天の御遣い様に向かって！」

と愛紗が怒るが、俺は「初対面だし構わない」と言っておけた。

「俺は“天の御遣い”を名乗ってる北郷一刀って言っただ。よろしくな！」

「貴方が噂の“天の御遣い”ねえ・・・」

そう言って、ジロジロと見てくる曹操。

「まあ、いいわ。進軍の速度を落とさないでよ？ もう一つの方も今頃落としかかっているし・・・」

曹操がそう呟いた後、山の方から轟音が何度も鳴り響いていた。

ドォーン！！

ドゴン！！

バキバキバキ！！

俺たちは何事だと思って慌てたが、曹操軍の兵士たちは全然驚いておらず、むしろ「派手にやってるな～」という顔をしていた。

一体、誰がやっているんだ？

「一刀side out」

「真紅狼side」

桂花の情報通りに西に出て、山に入ったんだが、一向に砦が見えない。

「山に入る前には砦がチラッと見えたんだが・・・どこだ？」
呟く俺。

そこに近くで複数の声が聞こえたので、『殺到』を使いながら近づいた。

「今日もなかなかの量をブン盗ったな！」

「砦に居る奴らも驚くな！」

「あー、はやく天和ちゃん達に逢いたいな」

「俺は地和ちゃんだな！！」

「馬鹿か、お前ら人和ちゃんこそが最高だろうが」

「「「なんだと！？」「」」」

「やる気か？！」

とアホみたいに大声で喋っている黄巾党の連中。

というか、主格犯の名前・・・いや、多分真名が分かったし、さっさと、砦を落とすか・・・

そこで、俺は黄巾党の連中の後ろから現れ、声をかけた。

「情報提供ご苦労さん」

「「「「！？」」「」」」

「ところで、その三人の名ってなんていうの？」

「お前は誰だ！？」

「曹真。で名前は？」

「曹家の長男か！」

「ご名答、で名前を言えって」

「誰が、貴様なんぞに・・・」

そう言っているのは多分、このグループのリーダーらしき男だったが、それを親切な方が(?)教えてくれた。

「天和ちゃん達の名前は“張三姉妹”って言われてるんだ！」

「ご丁寧にどうも」

「お前はバカか！ 今コイツは曹真と名乗っただろうが！！」
情報提供してくれた奴に怒鳴るリーダー、分かるよその気持ち。

「まあ、俺にとっちゃどうでもいいんでさっさと帰れ、落とし行くから・・・」ガシッ!」

そう言い、黄巾党の連中を思いっきり、砦の方に投げ飛ばした

「「「「へっ?!」「」「」」

ブンッ!

「「「「なああああゝゝ!?!」「」「」」

「よし、無事に逝ったな」

今ものすごい発音がおかしかった気がするがまあ、いいや。
その後の行動はすでに決まっていたので、準備を素早く済ました。

「さて、出来た出来た。うまく当たればいいが・・・」

そう言って、真紅狼は『活剗』を使い、筋力などを強化し隣に置いてある丸太

を持ち、それを黄巾党がいる砦に向かって、投げた。

「第一投行きまゝす。・・・そいやっ!」

ブンッ!

バゴンッ!!

ガラガラ・・・

「む。当たっているが、ちょっとズレたな・・・」

投射角を調節している真紅狼に対して、黄巾党の連中はパニック状態になっていた。

「第二投目・・・どりゃっ!」

ブンッ！

バキバキッ！

ボゴオン！

次から次へと真紅狼の居る地点から、巨木の槍が何本も砦に向かって、飛んでいきその槍が、城壁にあちこち刺さっているという奇怪の光景が誕生した。

「最後、第十投目・・・せいやあ！」

バキィン！

最後の槍も見事に当たり、生き残りが居ないか確認するため、鋼糸を展開しながら、砦に入っていた。

その後、砦には断末魔と絶望と恐怖が生き残っていた者たちに襲いかかった。

「ふう、終わったあー。あー、眠い！」

フラフラになりながらも、黒鷹に乗りながら、華琳の元に帰っていた。

「黒鷹、なるべく早めに頼む。」

「ブルルウ・・・」

黒鷹は返事をしたあと、いつもよりも早いスピードで華琳達の元に向かった。

俺が帰った時には、華琳達も砦を落としていたらしく、いいタイミングに帰って来た。

しかし、見知らぬ者たちが居た為、どこかの諸侯と手を組んで居る

のかな？と思いつながら、華琳に報告しようと陣に向かっていたら、いきなり刃を突き付けられた。

「貴様のような者が、“天の御遣い”様が居られる陣に近づくな！
」

またか・・・（落）

（真紅狼 side out）

砦落としては斬新な方法（後書き）

“二度あることは三度ある” っていういますよね？
次回はそれです。

作中に出てきている砦とは、所々がボロボロになっている城を棲家
にしていますのでご注意を

二度あることは二度ある（前書き）

なんとか投稿出来た・・・。

二度あることは三度ある

「??? side」

私たちは、乱世を治めるべく義勇軍を募り、各地で騒がしている黄巾党を討伐してきたが、さすがに食糧が尽きはじめた時、陳留で勅史をやっている曹操軍が居り、共同戦線を張ることで一時の間が食糧が確保できるという結論に至った私たちは、曹操に頼み込んだ。このとき、星の友人が曹操軍に仕官しているらしく、口添えなどをしてもらい。

共同戦線を張ることが出来、食糧も分けてもらえた。

だが、戦果はいまいちだった。

曹操が指揮している部隊『神狼』という五部隊がほとんど、活躍を奪ってしまったからだ。

そんなとき、賊らしき男が“天の御遣い”様と桃香様、曹操が居られる天幕に向かっていた。

そこで、私は大声で叫んだ。

「貴様のような者が、“天の御遣い”様が居られる陣に近づくな！
！」

かなり大声を出したので曹操達にも桃香様たちにも聞こえる筈だ！
事実、「何事だ？」と言って人が集まって来た。

「……………またかよ。チクショウ、泣きたくなってきた」

「貴様のような賊がここに居るべきではない！ 早々に立ち去れ！
！」

「人の話を聞けよ、頼むから」

「黙れ！ 聞く耳持たん！！」

そう言って、愛刀を持ち、振り降ろす瞬間鈍い音が聞こえた。

ガキーン！！

「なっ！？」

いつの間にか、賊の手には見たことも無い大きな槍みたいなもので防いでいた。

「愛紗、止せ！ その方は曹操殿の兄上らしいぞ！」

「な、コイツが！？」

「私の友人にも確認が取れた。間違いない」
事を見守っていた曹操が喋った。

「関羽。貴女、私の兄に何しているのかしら？」

＼関羽 side out＼

＼真紅狼 side＼

華琳のところに行こうとした瞬間、黒髪でポニーテールの女の子が立ちふさがった。

「貴様のような者が、“天の御遣い”様が居られる陣に近づくな！
」

また勘違いかよ！

俺、ホンツツトに賊とかに間違われるな。

アレか？

顔の傷か？ そうなのか？

「……………またかよ。チクショウ、泣きたくなってきた」

「貴様のような賊がここに居るべきではない！ 早々に立ち去れ！」

「人の話を聞けよ、頼むから」

「黙れ！ 聞く耳持たん！！」

あー、うぜえ。

なんかさあ武器持って迫ってきてるんだけど……

あ、振りかぶりやがった。

「（天衣無縫）」

手には『長槍 鬼神』を持って、防いだ。

あー、もう！

誰でもいいから、この勘違い娘を止めてくれ！

そのあと、お仲間が止めてくれたらしい。

「関羽。貴女、私の兄に何しているのかしら？ そして、兄さん。

お帰りなさい」

「おう、ただいま。黒鷹、馬舎の方に行っていていいぞ。御苦労、休んでくれ」

「……ブルウ」

そう言うと、一人でに向かって行く黒鷹。

めんどくさいし、さっさと報告するか。

お客さんも居るし。

「そんじゃま、報告会といこうかね」

「はい」

「黄巾党の頭の名は“張三姉妹”って言われてるらしい、多分真名だと思っんだが、天和、地和、人和だってよ」

「それをどこで？」

「親切な方（笑）が教えてくれた」

「張三姉妹」……聞いたこと無いわね」

「元々、旅芸人だったらしいぞ？　なんでここまで膨れ上がったのかは分かんが……、ところでアンタ等どちらさんで？」
今更な質問をぶつけるが、わからんものはしょうがない。

「私は劉備と申します」

ツインテールで桃色の髪をした子が言った。

「…関羽だ」

納得いかない様子で言った。

「張飛なのだ」

元気いっぱいですね。

「諸葛亮　孔明と申します」

二人帽子を被ってる内の一人が言った。

というか、この子があの孔明！？

「？統　士元でしゅ」

あ、囁んだ。

「趙雲　子龍です」

先程、関羽を止めてくれた子か、マジ助かった。

「んで、馬超と馬岱ね」

「よ！　また会ったな、蒼騎」

「ひさしぶり」

蒲公英、お前本当に軽いな……

「最後の俺が皆から“天の御遣い”って言われてる北郷一刀だ。よろしくな！」

……間違いなく、学生服だね。

いつから、三国志に学生服が出てくるようになったんだ？

ばつと見て……ただの高校生だな。

よし、無視しよう。

「そういうアンタは誰なんだ？」

「俺は曹真。曹操の兄だ」

「そういうことよ。先程の件、まだ私は許してはいないわよ？」

あらら、我が妹は凄い怒ってるし、春蘭達も怒ってる。

別にいいのに……。

「私に策があります」

そう言ってきたのは、孔明だった。

「策ねえ、言ってみなさい」

「この近くにある砦を私たちが落として見せますの：」「必要無い」
なんですって？」

「必要無いって言ったんだよ。俺が落としてきたし」

「そ、そんな虚言信じません！」

「季衣」

「はい、お兄さんなんですか？」

“轢き潰した”って言えば分かるな？」

「あー、理解できました。お兄さんはちゃんと、砦を落としていますよ」

「季衣は知ってるの？ 兄さんがどうやって砦を落としたのかを」

「はい、華琳様。以前助けてもらったときに見せてもらいました」

「嘘だと思ふなら、砦に行つて見てこい。目印もあるぞ」

嘘は言っていないよ？

目印は異様な光景だけだね。

「報告会は終わりだ。解散でいいのか？」

「ええ、有難うございます、兄さん。これで会議は終了よ」

劉備たちは、もう一つの砦がどんな様子か、見に行きたい。
慣れてない奴が行くと、吐くぞ？

「兄さん、私たちも行っているのですか？」

「悲惨だから、行かない方がいいと思うぞ？ 多分飯が喉に通らないかもな」

「……なら、止めておきます」

「それがいい」

（真紅狼 side out）

実際に、見に行った劉備たちは目にした光景を見て、しばらく食事が取れなかったらしい。
だから、言ったのに。

「止めとけ」って……

二度あることは二度ある（後書き）

死体なんかありませんよ？

全員肉片すら残っておらず、血だけがある状態です。

砦の中は血で真っ赤です。

転生者・・・そして、化物

「一刀side」

曹真が落とした砦を行ってみた。

中は悲惨なものだった。

辺り一帯が人の血で撒き散らしており、外の壁は巨木の槍が何本も刺さっていた。

砦の中を除いた愛紗たちは、途中から目を逸らし、憤りを覚えていた。

俺たちは砦に火を放ち、この存在を無くした。

「曹真め、ここまでやるとは……」

「……ご主人様、奴は一体何者でしょうか？」

「……聞いてみるか」

「ば、化物とかだったら、どうするの？ ご主人様？」

桃香は恐る恐る聞いてきた。

「化物だったら、追いだして曹操達を救うさ！」

「討伐しないのですか？」

「さすがに、この惨状を見たら真正面からの戦いは無理だから、横から攻める。」

「追い出してから、叩くとかしてね」

「……なるほど、では、策を練ります」

「頼むよ、朱里。さあ、帰ろうか」

砦を後にする俺達。

俺は“天の御遣い”……つまり、“英雄”だ。

だから、俺は“化物”^{ソウシン}を追い出し、人々を救わなきゃならない！

＼一刀side out＼

＼真紅狼side＼

劉備たちが帰ってきた後、俺を見る目が変わっていた。

なんというか、怯える目や嫌悪する目だった。

まあ、慣れてるからいいけどよ。

そこに“天の御遣い（笑）”がやってきた。

「曹真、アンタ一体何者なんだ？」

「ただの人間だが？」

「ただの人間があそこまで行為出来る筈がない！」

「なら、……殺人鬼かな？」

そういつて、そのような雰囲気醸し出し始める俺。

それに反応して、奴の周りに居る関羽たちが臨戦態勢になっていた。

「だいたい、“学生服”を着ている奴なんか、信じられるか」

「！！　なんで、曹真アンタは“学生服”の事を知っている？！」

「……さあな。（よし、喰いついたな）」

そして、言うだけ言った俺はその場を去った。

夜、華琳達が居る天幕から離れ、人があまり近づかない森に一人佇んでいた。

そのとき、後ろの茂みから「ガサッ！」と言う音の後、出てきたのは北郷一刀だった。

「……なんか用か？」

「曹真。アンタはなんで俺が学生だと分かった？」

「そりゃ、俺の元居た世界が現代の日本だからだ」

「アンタ、一体……？」

「俺の本来の名は蒼騎 真紅狼で……転生者だ」

「なら、蒼騎。……転生者とはなんだ？」

「転生者とは言葉通り、別の世界で一度死んで、生き還り、違う世界で第二の人生を歩む者のことを言う」

「なら、お前の持っている力って奴も誰かからもらったんだな？」

「そうだな、誰かからは言わなくても分かるな？」

「ああ。聞きたいことは分かった、じゃあな」

そう言って、自分の仲間の元に帰っていく北郷……。

俺は、北郷が完全に居なくなってから、次の訪問者の相手をした。

「さて、そこで盗み聞きしている二人出て来い」

ゆっくりと出てくる人影は……華琳と秋蘭だった。

〈真紅狼 side out〉

〈華琳 side〉

夜になると、兄さんが森の方に入っていく所を秋蘭が見たという報告があり、私と秋蘭は、兄さんの後に続いて入った天の御遣いの後を追った。

二人はなにやら、話していた。

ギリギリまで近づくことで、話の内容が聞けた。

……その内容は信じがたいものだった。

『俺の本来の名は蒼騎 真紅狼で……転生者だ』

『なら、蒼騎。……転生者とはなんだ?』

『転生者とは言葉通り、別の世界で一度死んで、生き還り、違う世界で第二の人生を歩む者のことを言う』

その時点で兄さん……いや、真紅狼はこの世界の者ではないことが分かった。

「（真紅狼が、一度死んでいる?!）」

「（華琳様、大丈夫ですか!?)」

「（ええ、その後の話は?)」

「（真紅狼の身の周りの話をして、天の御遣いは去りました）」

「（私たちも引くわよ）」

そのとき、不意に声が飛んで来た。

『さて、そこで盗み聞きしている二人出て来い』

気付かれていた。

諦めて私たちは、茂みから出た時の真紅狼の表情は悟った表情だった。

「……兄さん」

「もう俺の事を“兄”と呼ぶな」

「何故ですか?」

「曹操軍全員を騙していたんだ、呼ばれる資格はないだろう?」

「……先程の話は本当か?」

「夏侯淵か。ああ、本当だ」

「何故……真名で呼ばない？」

「さっきも言ったように騙していたから呼ぶ資格が無いんだよ」

「全部話してください」

「ああ、知る権利があるな」

そこから真紅狼は語った。

自分がこの世界で生まれたのではなく、天の御遣いと同じ世界で生まれたこと。

自分が何がやってきたのか、何が起こったのか。

そして、他者を助けるために自分が代わりに死んだこと。

死んだあと、“神”に会い、様々な力を貰い、この世界に転生したことなど全てを。

「とまあ、こんな感じだ。……コレを聞いたうえで曹操に問う。俺の処遇は決まったか？」

「処遇ですか？」

「曹操……お前が望むなら、今ここで首を切り落とすし、出ていけと言うなら出ていこう。俺はどんなことにも従おう」

「……なら、なんで小さい頃、私を熊から庇ったのですか？」

「……」

「答えてください」

「……気まぐれだ」

「なら、なんで私を災厄から護ったのですか？」

「……それも気まぐれだ」

答えを繰り返す真紅狼。

「そうですか……。決まりました、処遇が」

「ようやくか……」

「真紅狼、いえ、兄さんはこの曹家の……曹操の兄として生きてください。私を護ってください」

いつの間にか、私は涙を浮かべながら、話していた。

「兄さん、顔を上げてください」

「…ああ」

パシンッ！

小気味のいい音が響いた。

私は兄さんの顔を引っ叩いた。

そして、泣きながら抱きついた。

「真紅狼、私からもだ」

秋蘭も私と同じく叩いた。

＼華琳side out＼

＼真紅狼side＼

「こんな兄だがいいのか？」

「私はそんな兄さんがいいんです」

「秋蘭もか？」

「ああ、構わないぞ」

「全く、俺みたいないな化物が華琳達のような美人に好きになるなんて、

世の間違ってるね」

「兄さんは化物じゃないです！」

「化物さ、華琳達にとっては“人間”に見えるかもしれないが、他の奴らから見れば、俺は充分“化物”なんだよ。それに“天の御遣い”の噂知ってるだろ？」

「ええ、確か

『黒天を切り裂いて、天より飛来する一筋の流れ星。

流星は天より御遣いつれて現れ、乱世を鎮静す』

『・・・またもう一人の御遣いは“死を語る魔眼”を持ち、乱世に隠れた闇を“殺”しせしめん。しかし、その者人には非ず。』
ですよね？」

「ああ、さっき北郷が御遣いだろうよ、一人目のな。もう一人は俺だよ。俺は持ってるのさ……“死を語る魔眼”ってヤツをな」
「どんなモノなんですか？」

俺は懷から短刀を取り出し、目が紅から蒼に変わっていた。

「この短刀でこの木を切れると思うか？」

「無理だろう、普通は」

「そう、無理だな。だが、俺の持つ魔眼を使って斬るところなる」

ズ・・・バァ・・・

目に視えてる“死の線”をなぞるように斬った。
そうすると、木は自然に解体された。

「馬鹿な!?!?　こんなにやすやすと!?!?」

「……これが“死を語る魔眼”の力ですか?」

「ああ、俺には“モノ”の死が視える。どんなモノでも必ず殺しきってみせる」

「……たとえなんと言われようとも、兄さんは私の兄さんです」

「全く、兄貴冥利に尽きるよ」

そう言った後、華琳は何かの覚悟を決めたような表情だった。

「……兄さん、まだ「どんなことでも従う」の言葉、大丈夫ですか?」

「ああ、大丈夫だぞ。長い間騙してきてしまったからな、華琳にも秋蘭達にも」

「秋蘭、聞いたわね?」

「はい、聞きましたが何を?」

「兄さん、私と……結婚してください」

イマ、ナンテイッタンダ?

「……なあ、秋蘭」

俺達は口が塞がらない様子だった。

「……なあ、秋蘭」

「……なんだ、真紅狼?」

「俺、今、結婚してくれて聞こえたんだが……気のせいかな?」

「安心しろ、私もそう聞こえた」

確認を取る俺と秋蘭。

「……なあ、秋蘭」

「……なんだ、真紅狼？」

「出来れば、夢であって欲しいんだが……」

「現実を見ろ、真紅狼」

思考がちよっと壊れ始めている状況だった。

「ちなみに、秋蘭は側室よ」

爆弾が再び投下されました。

「いや、その理屈はおかしいから」

「どうでもいいから、結婚してください！」

「どうでもよくねえよ！？」 色々と大事だろ！！ だいたい、秋蘭
には秋蘭の気になっている奴とかいるだろう！？」

そう言って、秋蘭を見ると顔を赤くしてこっちをみてる。

……こっちみんな。

「何故、顔が赤いんだよ、お前は？」

「……………／／／／／」

「頼むから、否定してくれよ！！」

「黙ってると言うことは、兄さんの事が好きだってことじゃないですか？」

「……本当にどうしてこうなった？」

頭を抱えながら、心の本心から言う俺。

「兄さんは言った筈ですよ？ 『どんなことでも従う』 って」

「~~~~!! あー、もう分かったよ!! 結婚でもなんでもしてやらあ!!」

若干、壊れ始めました。

「ただし!」

「なんですか?」

「俺は独占欲が強いぞ? それに耐えられるか?」

「むしろ、私は有難いです。それほどまでに私を愛してくれるんでしょう?」

「なんというか、色んな意味で強くなったな」

「…秋蘭は?」

「私も華琳様と同じ気持ちです」

「そう、なら、よろしくお願いします……真紅狼様」

「様はいらないし、普段から呼ばなくていい、というより呼ぶな。下手したら戦が起きるかも……いや、起きるなコレは絶対」

ヤバいなあ、実にヤバいなあ。

「さて、そろそろ帰るか。アイツ等も心配してるだろう」

「そうですね」

「ああ」

華琳の策略(?)により、結婚するところまで行きました。

陣に戻ると、各方面の兵士たちから奇怪な目で見られていることが分かった。

華琳の天幕まで戻り、桂花の集めた情報によると……

『曹真は化物らしい』

というような、噂が流れ始めたらしい。

ああ、それであのような目で見ていたのか。

噂の出所は十中八九、天の御遣い達が噂したな。

なかなか、小賢しいことしてくれるじゃねえか、北郷一刀。

く真紅狼 side out く

転生者・・・そして、化物（後書き）

今回はシリアスの皮を被ったシリアルです。

一刀たちの多少は見せ場を作ったらこんなに長くなった。

華琳達との結婚はまだ、公にはされません。

反董卓連合が終わる辺りに出すつもりです。

そして、次回、一刀達が外道になるかも・・・

紅き獅子（前書き）

多分、シリアス回になる・・・

紅き獅子

（真紅狼 side）

今、華琳と秋蘭を除いたメンバーが華琳の天幕に集まってる。

うん、せまい。

集まった理由は……まあ知っての通り、噂の確認だそうだ。

「で、真紅狼。兵たちの間で流れている噂は本当なのか？」
顔をずいっと寄せて訪ねてくる春蘭。……顔が近いぞ。

「まあ、そうだな。俺は化物だ」
そういうと華琳の顔が歪んでいた。

「そうか、なら……死んでもらおう！」
「色々過程をすっ飛ばしすぎだろ?!」

「勝手に殺さないでくれない？」

「か、華琳様はコイツを庇うんですか!？」 我々を騙していたんですよ!？」

「私と秋蘭は皆よりも先に聞いたわ……その上で兄として生きて欲しいと命じたわ」

「まあ、ここに居る全員に俺の前世を話してやるよ……」

説明中……

説明してる間、華琳と秋蘭を除くメンバーは聞いていくうちに様々な表情を見せていた。

驚愕する者、泣く者、黙る者、憎む者……様々な表情が見れた。

「……………こんな感じだ。さて、コレを聞いて真名で呼ばれたくない者は手を上げてくれ、挙げた者には今後一切真名では呼ばないことを誓おう」

「「「「「……………」」」」」」

「躊躇いなく手を挙げていいんだぞ？ 俺はお前らを騙していたからな……」

それでも、聞いたメンバーは手を挙げなかった。

「手を挙げなかったという事は、皆いいのね？」

「「「「はい！！」」」」」

「ですって、兄さん」

「……………本当に全く物好きだね、お前らは…………」

そう、本当に物好きな奴らだよ……

「次は兵士たちか…………」

「……………そうですね」

「悪いんだが……………今から集合かけてくれないか？」

「分かりました」

華琳は曹操軍の兵士全員を呼び集めた。

「皆、よく集まってくれた。これから、真紅狼から話がある。心して聞いてくれ！」

「曹真……いや、蒼騎 真紅狼だ。皆、噂で気になっているかもしれないが、あの噂は本当だ」
そう言うのと、ざわつく。

「そこでだ、提案がある。これは『神狼』の全部隊に関係のあることだ。

……総隊長が“化物”だと嫌がる者は明日までに各部隊長に申し
てくれ。

すぐさま、『神狼』の隊から春蘭隊などの方に移すつもりだ。

抜けたからと言って、俺はそいつを責めないし、文句も言わない、
俺にはその資格がないからな。

あと、残ってくれた者たちからの暴力も振るわせないこと誓う。

「自分は上が化物の奴でも構わない」と言う奴だけ残ってくれ。

一日しかないが明日の朝までには決めてくれ、以上だ。

最後に、ここまで『神狼』について来てくれたことに感謝する！」

俺は未だにざわついている部下たちには顔を向けず、その場から去
った。

部下たちは「お前……どうするよ？」とか「考えどころだな……」
という声がちらほら聞こえたが、明日の朝になれば結果が分かるの
で聞かなかったことにした。

真紅狼 side out

一刀 side

俺は真紅狼に正体を明かされた後、すぐさま朱里達に話して「何か
に使えないか？」と聞いたところ「それなら勝手な噂を流して追い
出しましょう」という策が出て、すぐさま行動に移った。

流した噂はすぐさま広がり、大きく膨れ上がっていった。
俺はその現状を見て、思わずニヤけてしまった。

「よくここまで、大きくなったな……」

「ええ、本当にここまでなるとは……さすがご主人様ですね」

「愛紗か……アレから曹真はどうしてる？」

「なにやら演説をやった後姿を消しました」

「これで、少しは曹操軍も魔の手から救われたかな？」

「ええ、そうですね。……そろそろ、戻りましょう。桃香様が心配します」

「ああ、そうだね（分かるか、化物？^{ソウシン}これが“天の御遣い”の力だ！ お前みたいな化物はこの外史に必要なんだよ！！）」

一刀は自分は“英雄”だと思い込んでいた。
当然の事をしたと…、そう思い込んでいた。
だが、近い未来とてつもないしっぺ返しを喰らう事とはこれっぽっちも思っていなかった。

（一刀 side out）

（真紅狼 side）

演説を終え、人気の無い場所に居た。
自然と悲しくなってきた、いつの間にか涙がこぼれた。
転生する前の自分が見たら、なんて言うか。
そう思うと「弱くなったな」というのが感想だった。

「…………兄さん」

華琳が気が付くと後ろに居て、声を優しくかけてきた。

「華琳か……、どうしたんだ？」

泣いてるところを見せたくなかったから、顔は向けなかった。

「……兄さんは、なんであの男に自分の正体を話したんですか？」

「俺は根っからの悪党以外は、最初の一度だけは必ず信じてやることにしてるのさ」

「……………」

「まあ、それで約束を守ってくれるなら信頼はしたかもしれないが、アイツ等は手を弾いたからな、今後連中から手を差しのべられても俺は見向きもしないし、手を伸ばすつもりもない」

当り前の話だ。

手を払った相手に、再び手を差し伸ばす奴なんかバカだ。

俺はそうして転生する前は生きてきた。

復讐するのに裏の世界に入った時、裏切りなんて日常的だった。

なら、最初から信じず裏切られること前提で付き合った方がよっぽど楽だし、面倒くさいことも起きずに済むからだ。

だが、今は護らなければならぬ者達が居るため、随分変わったがな……。

（真紅狼 side out）

（華琳 side）

演説が終わった後、兄さんを追いかけた。追いついた時の兄さんの後姿は、“悲哀”しかなかった。その姿を見るだけで、胸が苦しくなった。

常に傷つきながらも私を護ってくれた兄さんの姿が、ここまでかく見えたのが悲しかったから。

「……兄さん」

優しく声をかけた時には、兄さんの顔から流れる雫が一瞬見えた。兄さんは涙を見せ無いように顔をこちらに向けなかった。話した理由を聞いてみた。

「まあ、それで約束を守ってくれるなら信頼はしたかもしれないが、アイツ等は手を弾いたからな、今後連中から手を差しのべられても俺は見向きもしないし、手を伸ばすつもりもない」
これを聞いた瞬間、もう何も言えなくなっていた。
傷つくかもしれないのに、人を信じて裏切られる。
そんな行為を繰り返していたら、感情が欠落するのも当然だ。

「…兄さん、泣いてもいいんですよ？」

「なんで泣かなきゃならないんだよ？」

「辛いんじゃないんですか？」

「辛くねえよ」

兄さんは気付いていなかった、どんな状態に顔がなっているのかを。

「……涙が出てますよ？」

「あ？ ……なんで出てんだ？」

「辛いからに決まってるからじゃないですか」

「辛くねえっていつてんだろ！」

「今なら、泣いてもいいじゃないですか？」

「……華琳、来てくれ」

「…はい」

「スマンが少し……みっともない…姿を……見せるから………傍に居てくれ」

「……はい、何時でもいますよ」

そう言った後、兄さんは私の両肩に手をかけて、顔を俯かせ………泣いた。

「あ……あ………あああああああ！！」

溜まりに溜まった涙が地面に落ちていく。

このとき、私は決めたのだ。

兄さんが辛い思いをしないように、私も兄さんを護っていこう、と。

〈華琳side out〉

〈真紅狼side〉

あれから、泣き続けた。

今は溜まったモノがなくなり、スッキリしている。

「あー、思い返したら妹の目の前で泣くなんて、恥ずかしくて別の意味で泣きたくなってきた」

「……大丈夫ですよ、この場所では“妹”じゃなくて“妻”として
いますから」

「それでも恥ずかしいんだよ。……自分の天幕で寝るか」

「あ、今日は兄さんの部屋で寝ますから」

「オイコラ、ちよつとマテや！ 自分の天幕があるだろ！ 豪華な
ヤツが!!」

「兄さん……ダメですか……」

つぶらな瞳でこっちを見てくる華琳。

なんだ、コレ？

すごい罪悪感がひしひしと湧いて出てくるんだけど……？

俺が悪いの？

おかしくね？ この状況。

「……勝手にしてくれ」

「はい、勝手にします」

俺はコートの中に華琳を入れて、天幕のところまで戻った。

だって、一緒に入ったりしたら後々面倒だろう？

その後二人は別々に寝たが、朝起きてみると何故か華琳が俺の寝床
に潜り込んでいた。

………あるえ？

とまあ、不可解な出来事が起きながらも、集合場所に向かった。
覚悟はいつでも出来ていた。

「雅達は来てたのか………」

「まあね！ あんな話聞いちゃって、最初は怒ったけど、話してくれたから許すよ」

「「「私たちも同じです」」」

「……………そうか」

そして時間になったが……………部下は誰も来なかった。

「まあ、そうだよなあ……………」

そう言いながら、顔を逸らしたら、後ろから野太い声が響き渡った。

『総隊長——————！！！！！！！！！！』

『うおおおおおおおお！！！！！！！！！！』

「……………なんで、こんなにいるんだ？」

「フフッ、それはね真ちゃん。皆で驚かそうって提案したんだよ。

しかも一人も去らずにね」

「……………提案？」

「一種の悪戯だよ」

まったくコイツらは……………

「おい、総隊長が泣いてんぞ！？」

「なに、それは本当か！？」

「嬉し泣きってやつか！！」

「うっせえ！！ さっさと持ち場につけ！ このガキ共！！」

『応！！』

全く持って、良い部下を持ったよ。

そして、今、俺は黄巾党に潜り込む為装備と言っても、ガンブレードと専用ホルスターを華琳に預けている。

「んじゃ、俺は行くぜ」

「なんで、行かなきゃならないんですか？」

「どこに居るかも分からない相手だ、場所の特定をするならこれが一番早い」

「兄さん……………ちゅっ？」

「え、は、あ？」

「これはまあ……………その……………前置きです！！」

「意味がわからねえよ」

「……………私も分かりません」

言った本人も分からないのかよ……………。

そうして、俺は黄巾党に潜入するべく荷物を預け、陣営から出ていくこととなった。

右側には華琳が率いる曹操軍が、左側には北郷たちが率いる劉備軍がいた。

その間を、堂々と歩いていくうちに突然、小石が投げられた。

ヒュッ！

多分劉備側の兵士だろう。兵士の一人が投げた直後、自分達もと劉備軍の兵士たちは小石を俺に投げつけまくった。
その内の一つが俺の頭に当たる。

ガンッ！

ポタ……ポタ……

「……………」

ジャリジャリ……

頭から血を流し始めた俺は、それでも倒れることなく歩き続けた。華琳達を見ると、春蘭を秋蘭が必死に止めて、雅を凧や真桜たち三人で押さえこんでいた。

ちょうどいい、華琳達にも三文芝居に付き合ってもらうか。左手の鋼糸を展開させて、声を届かせた。

「（華琳、聞こえるか？）」

「兄さん?! 大丈夫ですか!?!」

「（ああ、大丈夫だ。それよりもお前らも小石を投げろ）」

「何を言うんですか!?! 出来ません!?!」

「（連中に思わせるためだ。芝居を打った方が今後にも役に立つ）」

「……………しかし!?!」

「（……なら、こうしよう。この乱が終わったら、俺と華琳、秋蘭で一日のんびり過ごそうじゃないか）」

「……………分かりました。絶対ですよ?」

「（ああ、絶対だ）」
そこで鋼糸を戻し、未だに飛んでくる小石を防がず、気にせず歩いていく。

臆さない俺に業を煮やしたのか、一人の兵士が弓で射ってきた。さすがにそれはヤバいので、背中で受けた。

ザシユザシユザシユ！！

背中に受けて、倒れそうになったが、ふんじばって歩き続けた。曹操軍もちらほらと投げ始めるが、華琳の配慮か当てないようにしたらしい。

時折、見える表情は辛そうだった。

華琳なんか、爪が喰い込むほど手を握りしめていた。

そこから、数分間の仕打ちに耐え続け、出口が見えた。もうすでに俺の姿は酷いものだった。

背中には何本の矢が刺さり、頭からは血がたくさん流れていた。しかし、倒れることなく悠然と歩く姿に両陣営は息をのんだ。

まるで、獅子のように弱いところを見せず、血だらけになっても歩く猛々しい姿を誰かが呟いた……

と。

俺は陣から出る瞬間、華琳の顔を見た。

涙を流しながら、俯き、手からは喰い込み過ぎたのか血が出ていた。

何故、お前が泣く？

お前は正しいことをやったんだ、泣くことはないだろう。

一生の別れみたいな表情をするな、必ずお前と秋蘭の元に戻ってくる。

そこで、俺は気がついた。

ああ……

やっぱり一番辛いのは……

『家族の涙』

……………と。

（真紅狼 side out）

紅き獅子（後書き）

この作品の一刀は自分通りにいかなければ納得しない迷惑ヤローです。

蜀ファンの方、ゴメンナサイ

前回の最後の side の部分申し訳ありません。
混同しました。

幻真はハイスクールD×Dの主人公でした。
しかも、素でミスった・・・

命の恩人と会う（前書き）

凄い書きにくかった。

まあ、あと二、三話で黄巾党の話しは終わる予定です。

命の恩人と会う

（真紅狼 side）

あの後、血だらけになりながらも黄巾党の元に潜入するべく、俺は近くの黄巾党の集団を探した。

その間に噂は広まり尾びれまで付いて、勝手に歩きだした。

「紅き獅子は天の御遣いによって追い出された」

「曹操は獣の紅き獅子よりも美男子の天の使いを選んだ」

などと色々と酷い言われようである。

しかも、雅に与えた刀の銘が『桜狼刀』から『天桜刀』に変わっていた。

いやはや、そこまで変わるのかよ。

民の口ってのは怖いね。

血が多少収まりながらも歩く俺の先には黄巾党が居た。

しかも、何故かリーダーらしきものが一歩前に出て、手を出していた。

「辛かったろう、ここは誰であろうと差別、区別はしない。俺たちは平等だ」

「……そうか、感謝する。：「があ」っ！！」

「大丈夫か！？」 その傷どうした？！ まさか連中にやられたのか！？
おい、誰か医者 of 先生を呼んでくれ！！」

「私なら、ここにいますよ」

「先生、コイツを看てやってくれ!!」

「これは……!! 大変な状態ですね、これから治療しますので皆さんは騒がないようお願いします」

「分かった」

「では、こちらに運んでください」

そう言ってるのが誰かも分からないまま俺は目を閉じた。

く真紅狼 side outく

く華琳 sideく

兄さんが傷を負いながらも出ていき、完全に姿が見えなくなった瞬間、天の御遣いが居る劉備軍は歓声を上げていた。

そのあと、劉備たちが私たちの元の寄って来た。

「大丈夫ですか、曹操さん？」

「なんですって？」

「私たちがあの“化物”を追いました!! あの“化物”の力でおかしくなった方とか居ませんか？」

コイツらは兄さんを“化物”、“化物”と呼び始めて、挙句の果てにはあんな仕打ちまでして絶対に許さないわ!!

ここであの男を殺してやりたいけど……

それをやったら兄さんが心を殺してまで私たちにやらせたことが無駄になってしまう。

「大丈夫ですか、曹操さん？」

「……ええ、大丈夫よ。私はこれから会議があるから失礼するわ」

「はい! 一緒に乱世を平定しましょう!!」

そう言っ、後ろで劉備は自分たちが先程まで何をしていたのかを忘れるほどの笑顔を出していた。

「必ず後悔させてあげるわ……」

そう誓う華琳達だった。

く華琳 side outく

く真紅狼 sideく

気が付くとどこかの天幕に居た。

「うっ！ ここはどこだ？」

「――気が付きましたか？」

「……貴方は？」

「私はこの黄巾党で医者をやっています」

「黄巾党で医者？」

「はい…… お久しぶりですね。真紅狼君？」

「……！！ 何故、俺の名を？」

「私とあなたは一度会ってるんですよ」

「どこで？」

「貴方がまだ子供だった時、熊に襲われましたね？」

「！！ なるほど、俺を助けてくれた医者先生か…… 案外世間

つてのは狭いな」

「本当ですね。で、どうですか、傷は？」

「ああ、だいぶ良くなった。感謝する」

「……貴方がここに来たと言う事は、狙いはあの“書物”ですか？」

「そこまで知っていたのか」

参ったね、いきなり俺の目的がバレるとは……。

「アレは元々、俺達曹操軍のものだ。……それに、あの書物、結構禍々しい力を持ってたしな、面倒な事態を起こす前に片付けたいんだよ」

「しかし、彼女たちがそう簡単に手放すとは思えません……」

「手放さなきゃ、三人とも死ぬぞ？ それに集まっている親衛隊の連中も死ぬな」

「……あの書物さえ渡せば、彼女たちは助かるんですか？」

「まあ、原因の元がソコから離れば、この大群も自然消滅するだろう」

「分かりました、私がなんとか交渉しましょう」

「先生ってもしかして結構顔が効くのか？」

「ええ、これでも医者ですからね……。様々な患者が来るのでその際に仲良くなりました」

「人徳ってのは素晴らしいね」

「……では、参りましょうか」

「って、俺も行くのか?!」

「はい、だって真紅狼君の方が詳しく話せるでしょう？」

「言いだしたのは俺だし……当然か」

そう言った後、歩けるレベルまで回復した俺は、先生の後に付いていった。

先生の後に付いていくと、すんなりと張三姉妹になんなく会えた。

「失礼する……キミたちが張三姉妹か？ 俺は曹真。訳あって話しがしたい」

（真紅狼 side out）

（張三姉妹 side）

私たちは、旅芸人だったが、歌を歌ってもなかなか人が集まらなかった。

そのとき、眼鏡を掛けたお兄さんが近づいて来て、「この書物を差し上げます」そう言って、去っていった。

その後、私たちはその書物を持って、いつもどおりに歌を歌っていたら急に人が集まって来た。

「わわっ！ なにこの人の数！！」

「あの書物を渡されてから、凄い人が集まるようになったよね！？」

「あの書物が私たちの歌の力を増幅させているんじゃないかしら？」
そうして、移動しながら歌を歌い続けたら、いつの間にか大きな集団になってしまった。

皆は『親衛隊』とか言っていて、私達を守ってくれるが中には盗賊まがいな事をしている人たちもいた。

その事に気がついた私たちは、「この書物を捨てよう」という話が何度か出たが今更ここまでやってきて親衛隊の皆がどうなるのかを考えたら、捨てるに捨てきれなかった。

そんなとき、医者をやっている先生と見知らぬ男が入って来た。

「失礼する……キミたちが張三姉妹か？ 俺は曹真。訳あって話しがしたい」

「「！？」」

「曹真？！ ってことは、貴方は曹操の兄を名乗ってる人！？」

「ああ、そうだ。要件を手短に話したいんだがいいか？」

「……要件？」

「――キミたちが持っている書物を渡して貰いたい」

「何故、それを！？」

「無理に決まってんでしょ！」

「キミたちが持っている書物は碌なことにならないぞ。――今、曹操軍と義勇軍はキミたちを討伐する為に動いている。……俺がここに潜入したのもその一環だ」

「なんですって!？」

「このままではキミたちは死ぬし、親衛隊の連中も死ぬだろう。だが、その書物さえ渡してくれたら、こちらで身柄の保証はしよう。少し時間を与えるから考えてくれ」

「分かり……ました」

そう言うときさっさと出て行く曹真。

「どうするの？」

「このまま無視して、官軍を潰すわよ！」

「でも、私たちの勝手に皆を巻き込めないよ!!」

「それは……そうだけど」

「それに曹真さんは私たちの身柄を保証するって言ってたし……」

「それで、いいのね? 天和？」

「私はいいよ、地和は？」

「お姉ちゃんがいいなら……」

「なら、二人がそこまでなら私は言う事ないわよ……曹真を呼ぶわよ?」

「「うん」」

先生に言っ、再び呼んでもらった。

「決まったかい？」

「ええ、貴方にその書物を渡すわ……」「そうか」でも!」

「……なんだ？」

「最後に一度だけ皆の前で歌わせて……それぐらいはいいでしょう」

？」

「別に構わないぞ、ちゃんと渡してくれればいい話だ」

「……………有難う」

「では、俺は目立たないように木陰で見よう」
再び消える曹真。

これで、私たちの夢も終わりか……………。
あっけなかったな…。

いや、まだだ。

まだ、大きな最後の仕事が残っている。

「二人とも最後の仕事に行くよ!!」

「うん!」

「はい!」

そして、私たちは最後だからこそ、華やかで派手にやった。

＼張三姉妹 side out＼

＼真紅狼 side＼

遠くから見ているところに先生がやってきた。

「隣、よろしいですか?」

「…っと先生か、どうぞ」

「どうも。華やかですね……………」

「そうだな……………」

「曹操さんは元気ですか?」

「華琳なら元気だよ」

「ところで道中で聞いたんですが、曹操軍から追い出されたってのは本当ですか?」

「ん？ あー、あの噂ね。まあ、本当って言えば本当なんだが……」
「……なにか訳がありそうですね」

「なんというか、華琳の意思じゃなくて、第三者の策略によって追
い出されたって言った方がいいかな？」

「第三者って言う……天の御遣いという方ですか？」

「そ、信用して俺の秘密を話したんだが……見事に裏切られてね。
それによって今に至ると言うわけだ。――恩返しならぬ仇返しって
いうのかね？」

「仇返しとは……嫌ですね」

「慣れているから、別にいいんだがな」

「――真紅狼君の秘密というのは？」

「先生なら話しても大丈夫かな。……出来れば他言無用でお願いし
たい」

「分かりました……して、秘密とは？」

「俺は……この世界の人間じゃない」

「……薄々は分かってましたが、やはり……」

「先生は元々分かり切っていたのかよ！」

「どこでバレたんだ？」

「どこで、分かったんですか？」

「キミを初めて助けた時、治療中に熊にやられた傷以外の擦り傷な
どが、勝手に治ってたのを見たんですよ……」

「……そんなに早くからかよ」

「それで頭に過ったんですよ、「この方はこの世界の人間ではない
かもしれない」とね」

「なるほど、それで俺の秘密を聞いて確信を得た。……と」

「ええ」

「そんなことを話していたら、ライブが終わったようだ。」

「どうやら、終わったようだな」

「……終わりましたね」

「これから、先生はどうするよ？」

「私はそうですね……旅を続けます」

「なら、ウチに来ないか？」

「真紅狼君のところにですか？」

「ああ、ウチの軍は軍医が居ないから……どうかな？　と思って」

「それもいいですが、私……あの子達を『護る』って決めたんですよ」

「そうか……なら、仕方がないか。さて、書物の回収を………」
回収しようと思ったとき、向こう側から地和達が走って来た。

「大変だよー!!」

「どうしたんだ？　地和？」

「書物が盗まれちゃった!!」

「盗まれた………だと!!」

「……うん、歌を歌い終わって渡しに行こうとしたら、書物を渡した“お兄さん”が出てきて、「これは返して貰いますね」って言うて、盗っていっちゃったんだ……」

“お兄さん” ってのはどんな奴だった？」

「道士みたいな奴で、眼鏡かけてて若い男の人だった」

「そうか。……安心しろ、書物が無くなっても保護の件は無くさない」

「本当！？　よかったー」

「それじゃあ、俺と先生はこの集団から離れるぞ」

「ええ!？」

「いつまでもここに居ると暴動が起きかねないからな。少し離れながら後についていくだけだ」

「あ、そういうことなんだ」

そのとき、後ろから天和と人和が来た。

「話しは纏まったの？」

「だいぶな、この後の行き先だがここから北に下っていけ。そうすれば曹操軍達に会える」

「何故、会う必要があるの？　もう解散したから会う必要は無いでしょう？」

「形式上、黄巾党の終わりを見せていた方がいいからだ」

「……分かったわ」

「後の事は地和に話してあるから、そちらから聞いてくれ」

そうして、俺と先生はこっそりと黄巾党から抜け出した。

天和たちは、うまく親衛隊を誘導して華琳達の方に向かって行った。

それにしても“道士みたいな奴で眼鏡をかけた若い男”か……。

最悪、戦闘になるかもな。

＼真紅狼 side out＼

命の恩人と会う（後書き）

于吉さん、登場。

僅かだけど・・・。

次回辺り真紅狼が大暴れするかも？

最近腰が軋む・・・何故？

【追記】

若干修正

汝、かの者、怒らすことなかれ……（前書き）

連続投稿……だと……？！

真紅狼マジギレ

汝、かの者、怒らすことなかれ……

（真紅狼side）

張三姉妹はうまく曹操軍達が居る方向に誘導していた。

後ろから少し離れて付いていく俺と先生は無事に終わると確信していた。

そんなとき、地和が言っていた男が突然、天和達の前に現れ、手に持つ『太平妖術』で親衛隊を操ってりながら、奪って行った。

「……フフ、多少兵を貰って行きますよ。では、失礼………」

その場から音も無く消えた。

220

「地和が言っていたのはアイツか!!」

「天和さん達は無事ですか？」

「ああ、無事だが……奴はドコ行った?!」

現状確認していると、曹操軍の方から大きな動きと争った声が聞こえてきた。

「……華琳、秋蘭!!」

「真紅狼君は行ってください!!」

「……大丈夫なのか？」

「……護りたい人がいるんでしょう？」

「ッ!! スマン、先に行く!!」

そこまで言われて俺は急いで曹操軍に向かった。

＼真紅狼side out＼

＼于吉side＼

この『太平妖術』で私は歴戦のどの武将よりも圧倒できる力を手に入れた。

素晴らしい、実に素晴らしいですよ！

この力は！！

自分の力を示す為に、あの屈強な曹操軍を打ち負かすとしましょう。そのために少々、人を貰いますか……

「……フフ、多少兵を貰って行きますよ。では、失礼………」

そう言って転移をして、曹操軍のど真ん中に転移し力を振るった。

「敵襲！ 全員備えろ！！」

「邪魔くさいですね……行きなさい」

そう命じただけで、私の力で操られ力を増幅した男たちは曹操軍の兵士たちに将をも薙ぎ倒していた。

これで私はこの世界の神になれる！

「貴女が……曹操ですか」

「貴方、一体何者よ！」

「私は于吉と申します。……ですが、すぐに忘れると思うので覚えなくて結構ですよ」

「……ぐう！ 華琳様から離れろ！！」

「止めておきなさい、私の力であなた達は思う様に動けないんですから」

私の周りから4、5メートルは『太平妖術』の力でこの場一帯を見えない力で抑えつけている為、全員が地面に伏せている状態だ。

「とにかく、こちらの要求は曹操か劉備、そして天の御遣いの二人をこちらに渡してくれれば他の方は助けますよ？」

「こと……わるわ！　だれが貴方に屈するものですか！！」

「――気が変わりました。曹操、貴女は生かしませう、私の手によって堕ちていく姿を見たくありません」

そういつて私は曹操のそばまで行き、顎をぐいっ！と持ちあげた。

持ちあげた瞬間だった……。

この世の声とは思えないほどの怒号が聞こえたのは……………

（于吉 side out）

（華琳 side）

黄巾党の本隊に迫っていた時、いきなり陣の中心に現れた謎の集団が私達に襲いかかって来た。

最初はどうにかなっていたが、中心にいた男が何かを呟いた瞬間いきなり頭上から見えない力で抑えつけられていき、ともに立ち上がることもできなくなってしまった。

そこに例の男が私か劉備、それと兄さんと北郷さえ差し出せば他の者の命は助けると言った。

拒否する姿勢を見せると于吉は私だけ生かし、あまつさえ……

「――気が変わりました。曹操、貴女は生かしましよう、私の手によって堕ちていく姿を見たくありません」
なんて気持ち悪いことを言ってきた。

ちなみに、天の御遣いである北郷は口では「ちくしょー、勝負しろ」なんて言っているけど、まったく役に立たなかった。

……役に立たない男ね。

于吉が近づきながら、私に触れてきた。

「(…………兄さん!!)」

その想いが天に伝わったのか、向こうの丘から怒号が聞こえた。

〔華琳 side out〕

〔真紅狼 side〕

曹操軍を全体が見える丘に行くと、華琳たちが于吉によって伏せさせられていた。

そして、次の行動で俺は激怒した。

于吉が俺の女に乱暴に扱ったのだ。

「…………オオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

まるで狼のような咆哮、その声の下にいる華琳達の元に響き渡った。

「その眼鏡をかけた優男!! 何勝手に俺の女に手を出してんだ、

ゴラァ！！！！」

俺は後ろにある木々を鋼糸で伐採し、先端を尖らせ、何本かを持って于吉の元に向かった。

于吉は操っている男たちをこちらに飛ばしてきたが、そこに巨木の槍を投げ飛ばし、数人の腹目掛けて突き刺さりその辺で転がっていた。

ブンッ！

グシャブシャ！！

ドガガガガ………

于吉はその光景に恐怖し、声を震わせながら、「い、行きなさい！！」と残りの戦力を全部投入したが、ほぼ巨木の槍で突き刺されて死んでいった。

槍がなくなり、しめたと思ったのか于吉は残りの男たちをさらに強化して襲いかかって来た。

その中の一人の男が右腕で思いっきり振りかぶったのを見て、俺は逆らう事でさえ恐ろしい事を目に焼き付けさせることにした。右腕を曲げ、痛みを伴いながら角を出現させた。

「っ、がああああああ！！！」

ブチッ！
ブチブチブチ！！
にゅぶ……

肉を突き破る音が辺りに響き渡り、そこから……

右腕の肘辺りから骨——いや、角を出した。

「はあああああ………」

角を出したことによって、体が急激に熱くなり、力も急激に上昇し吐く息が白くなっていった。

ゴキッ！
ゴキゴキ………ゴキン！

硬くなった指を動かし、拳を作り、振り降ろしてくる男の拳と俺の拳をぶつけた。

ブチンッ！
ゴキ……ゴギリ！！

振り降ろした男の腕は容赦なく吹き飛び、そこから血が噴水のように飛び出ていた。しかも、衝撃が体全体に伝わり、ろっ骨や腰の骨にヒビもしくは砕いていた。

この光景に劉備軍は目を逸らしていた。
嗚咽を吐いてる者もいた。

「さて、その優男、俺はアンタに用があるんだよ」
「く、来るな!!」

腰が抜けていながらも、必死に後ずさっていた。
動きを止めるために、近くにあった小石を奴の足に向けて軽く投げた。

ゴキンッ!?

「ぎゃあああああああ?!!」
足に当たった小石はいとも容易く、于吉の足を折った。
痛みにもた回る于吉の元に一步、また一步と近づく俺。

「于吉さんよオ、まあそのあれだ。

テメエは手を出しちゃいけないモノに手を出したんだ……

だからさ——————————そ

の首、俺が貰い受ける……!!」

「待って!!」

そこには術の拘束が解けたのか、劉備が于吉を庇っていた。

「……………そこをどけ」

「待って、曹真さん！ この人は酷いことをしたけど、ここまでの必要はないよ!!」

「……ハッ、なんだ劉備？ アンタそいつを庇うのか？」

「そこまでする必要は無いって言ってるの！ この人も充分罰を受けてるし……………」

「……甘いな、そいつの目を見てみる、どうやってこの場から逃げ出すか算段している眼だ」

「……………その通りですよ。劉備さん貴女は本当にいい人だ。私が無事に逃げれる為に人質になってもらいましょうか」

そういつて痛みに耐えながら、立ち上がり劉備を突き出しながら、引こうとしていた。

「曹真って名乗りましたね、貴方。顔は覚えましたが、絶対に後悔させした後、殺して上げます」

「捨て台詞まで三流とは酷いモノだな……………劉備には悪いがコイツが生きてると俺の女に害が及ぶ為、殺すことは出来ないがケジメは付けさせて貰う」

じりじり……………

少しずつ于吉に近寄る俺は懷から短刀を忍ばせる。

「くっ！ 近寄るな！！ 近寄れば劉備の命は無いぞ！？」
後ろに下がる于吉。

于吉は少しだけ、俺から目を逸らした。

「――弔毘八仙、無情に服す」

その瞬間を狙って、高速で迫り一撃を叩き込んだ後于吉の後ろに居た。

「いつの間に後ろに！！」

「劉備も帰して貰ったがな……」

「馬鹿な！！ ちゃんと掴んでい……た……はず……？？」

ゴトツ……

于吉は左腕を見ると自分の腕が落ちていることに気がついた。
そこで疑問に至った。

「何故、自分の腕が落ちている？」と……………。

答えは簡単、真紅狼が“直死の魔眼”で死の線を沿って左腕を斬ったからだ。

この後、つんざくような悲鳴が木霊した。

「ぎゃああああ、腕が！ 私の腕がアアああああ！！」

悲鳴を上げているバカは放っておいて、華琳達が無事かどうかを確認した。

「……大丈夫か？ 華琳」

「あ、はい。大丈夫ですけど……」

「秋蘭に雅、春蘭達も無事か？」

「「「ああ（はい）」」」

「……よかった」

于吉はいつの間にか消えていて、斬られた腕も持ちかえったようだ。よし、乱も終わったし、帰るか。

「ちょっと待ってください！！」

まあ、そんな簡単にうまくいかないのが世の常である。

＼真紅狼 side out＼

汝、かの者、怒らすことなかれ……（後書き）

真紅狼がシズちゃんに見える・・・アレ？

一応このお話で黄巾党編は終わりです。

次回は劉備達と問答です。

『正義』と『悪』（前書き）

今日も投稿・・・。

『正義』と『悪』

（真紅狼 side）

于吉もぶった斬って「これでよし！」と思ったら、劉備によって止められた。

……空気を読め！！

「…なにか用か？」

「なんで…あんなことをしたんですか？」

「あんなことってどんなことだ？」

「先程の事ですっ！！」

「于吉の腕を斬ったことか？」

「それです。あの人はもう罰を受けていました……。それなのに何故、あそこまでする必要があったんですか！？」

コイツ、本当に分かっちゃいない……。。

むしろアレで済んだことが救いだと思ってもいない。

腕を斬ることでケジメをつけさせてやったんだから感謝して欲しいぐらいだ。

斬ってなかったら、角を出した腕で体の骨が全身叩き折っていたところだぞ？

斬られるよりも痛い思いをすることになるのにな……。。

「……お前らは親から習わなかったか？」「人のモノに手を出すなと……」

「習いました……。でも、それとこれは別です！！」

「――テメエだって大事な物に手を出されたら怒るだろうが、それと一緒に」

「私は許します」

「……………ハア、甘いな」

そう言うのと、今まで部外者だった連中が騒ぎだてる。

「貴様、桃香様を侮辱する気か!？」

「お姉ちゃんをバカにすることは許さないのだ!!」

「お前みたいな奴に桃香の夢が分からないクセに黙れ!!」

あーもー、イライラしてきた。

なんで、コイツラまで助けちゃったんだろ？

数分前の自分を殴りたい……………

というか、最後に言った北郷、テメエは何もやっていないんだから黙ってろ!!

「……………劉備、アンタの夢ってのはなんだ？」

「……………え？」

「夢を聞いているんだ」

「私の夢は『みんなが笑って、平和に暮らせるような世の中』を創りたいんです」

「夢幻だな、それは」

「貴様!!」

「それは……………どういう意味ですか？」

「本当に『みんなが笑って、平和に暮らせるような世の中』なんてものが創れると思うてんのか？ 無理に決まってるだろ。何かを成す為には犠牲はつきものだ……。仮に出来たとしても、どこかで破綻する……………確実にな。劉備、お前の目指しているモノは幻であり、偽善なんだよ」

「偽善じゃありません!! 私たちは現にうまくいっています!!」

本当に分かっているな。

お前はコイツラの君主だろ？

なのに何故、背負うべきモノから目を背けている？

おかしいだろ？

ダメだ、そろそろ我慢が出来なくなってきた……華琳と秋蘭が傍に居れば、多少は落ち着くかもしれないので、華琳達の傍に行こう。

「……兄さん／＼／＼／」

「……真紅狼／＼／／」

「なんで顔が赤いんだよ？」

「……．．．．．／／／／／／／／」

なんかやったか、俺？

うん、やっぱり落ち着く。

そう一息ついていたら、今度は選手交代なのか北郷が対戦相手のようだ。

＼真紅狼side out＼

＼桃香side＼

私は帰る曹真さんにどうしても聞きかった。

何故、あそこまであんな酷い仕打ちをしたのかを……

理由は子供でも分かるような理由だった。

そうすると、曹真さんは――

「甘いな」

そう一言いつてきた。

その後の曹真さんは私達を冷めるような目で見てきている。

私の夢の話しになって堂々と言ったら、私の夢を全否定するようなことを言われた。

それが悔しくて、言い返そうと思ったたらご主人様が立ち上がり「代わりに話す」と言って曹真さんと対面した。

（桃香side out）

（真紅狼side）

今度は、北郷かよ。

メンドクサイな、本当に。

「何か用か？ 役立たず」

「……………（カチン！）」

「おっと失礼、口が滑った。何か用か“天の御遣い（笑）”殿？」

「……化物には礼儀が通用しないのは当たり前か」

「こりゃ失敬」

「お前は桃香の“夢”の凄さが分からずに否定した……。まあ、化物だし『悪』だし分からないよな」

「なんだ？ 自分たちがまるで『正義』とでも言いたいのか？」

「そうだ」

「……………く、クク、ハハハハハハ！！ コイツはイイ！ 俺が『

悪』でお前らが『正義』か！！」

「なっ！？ 実際にそうだろ！ 人を無残に殺したりしてる奴が何を言ってるんだ！！」

「テメェ等みたいな“覚悟”を持っていない奴が舐めたことぬかし

てるんじゃねえ!!」

「劉備! お前に一番足りてないモノを言ってやるよ。それは“覚悟”だ。

何を成す為には犠牲を払わなければ、夢は実現しない……。犠牲を払う“覚悟”が無いんなら、今すぐ義勇軍を解散させろ。――目障りだ」

「なら、お前には“覚悟”があるのかよ!？」

「あるぞ? 俺は命を賭けてまで『護りたい者』が居る。――その為だったら俺は『悪』だろうが『化物』だろうが何にでもなる“覚悟”がある。

そしてもう一つ言っておく『正義』や『悪』なんてどれが正しいのかは一つも無い。……捉え方の違いだ」

「……だが、お前は俺にとっては『悪』だ」

「そうかい、勝手に思ってる。俺にとってはどうでもいいことだな。さて、天和達だが……劉備、アンタに保護してもらいたい」

「何故だ?」

「俺達、曹操軍じゃ常に危険なんだ。それなら一番安全なアンタらのところに保護してもらおう事が妥当だろう? ——済まないが先生、こんな決定にしまつて……」

「私はいいですよ。彼女達を保護してくれるだけで有難いですし……」

「……」

「まあ、“劉備軍”としては歓迎は出来ないが“友人”としてならいつでも歓迎するよ」

「分かりました、覚えておきます」

そう言って、俺と先生は握手した。

「これで、話しは終わりだ。劉備……次会うまでに“覚悟”を背負う事が出来るかどうか……」「真紅狼」……なんだ、桂花に風?」
最後まで言い切ろうとした瞬間、桂花達に邪魔された。

だあ！！

邪魔するなよ。――ふむ、なるほど、分かった。

「おい、北郷」

「なんだ、化物」

「平原の方にまだ黄巾党の残党がいるそうだが、アンタ達に追撃を任せるよ」

「お前らがやればいいだろうが！！」

「……手柄が欲しいのだろうか？」

「……くっ」

「食糧とかは分けて与えてやるから、追撃任務をこなせよ」

「……分かった。だけど、絶対後悔させてやる」

「デメエじゃ一生無理だ」

「そんじゃ、曹操軍はこれより帰還する！！ 全員準備に取り掛かれ！！」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

あー、疲れた。

＼真紅狼 side out＼

＼華琳・秋蘭 side＼

兄さんが助けてくれてから北郷達と問答している間、ずっと顔が赤くなっていた。

秋蘭も同じのようだ。

原因は分かっている、兄さんが丘の上で叫んだ言葉だった。

『――何勝手に俺の女に――』

兄さんは激怒していてそこまで回っていなかったと思うが、これを聞いた瞬間まったく落ち着かなくなってしまった。
秋蘭に至っては終始顔が赤くなっていた。
いつの間にか兄さんがこちらに来ていた。

「……兄さん／＼／＼」

「なんでさっきから秋蘭と共に顔が赤いんだよ？」

「……真紅狼は自分が言ったことに気が付いていないのか？」
「俺が言ったこと……？」

「……丘の上で叫んだときです」

「ん？ え、あ、——あ”？！」

どうやら、思い出したみたいで止まっていた。

「怒っていたから、無意識のうちに言っていたよ……」

「い、いえ、私も……その……嬉しかったですから／＼／＼」

「……こう堂々と言われると恥ずかしさよりも尊敬するけどな」

「……うるせえ、取り敢えず、早く帰ってあそこに居る自称“正義の味方”を平原に向かわせよう——腹が立ってきた」

「そうですね……全員、帰るわよ！！」

「「「「はっ！！」」」」」

兄さんには明日ぐらいに『約束』を思い出して貰おう。

く華琳・秋蘭 side outく

陳留に帰ってきた俺たちは外で待たせている劉備軍に食糧を分け与えて、平原に向かわせた。

その間、劉備たちは春蘭達をスカウトしていたらしい。

……スカウトという名の口説きだと俺は思うが、手が早くないか？

『正義』と『悪』（後書き）

作中で語られている『正義』と『悪』については私の勝手な見解ですので気にしないでください。

区切りがいいところまで持っていたかったので、他の作品を置いて投稿しました。

次回はのんびりな日常でも書こうと思います。

まあ、他の作品が更新してからなんですけどね……

休日（前書き）

たまにはこんな日もあってもいいと思う。

休日

＼真紅狼side＼

あの後、家に帰って風呂入ったらすぐ寝た。

……だけど、体はいつも通り朝早く起きてしまった。

あくびをかみ殺しているんだが……ふぁ、ねむ。

畑に行き、野菜が実っていたので数種類収穫して、竹籠に入れて、中庭にある冷たい小川に吊るして、冷やすことにした。

……ちなみに、昼飯のつもりだ。

一応、朝の仕事は終わったが、やっぱり眠い。

二度寝するか……zzz

＼真紅狼side out＼

＼華琳・秋蘭side＼

黄巾党の乱が終わり、無事に陳留に帰って来た。

本来なら、こういう乱があった後は、昼から政務などを始めるが今

日は朝からやっている。

理由は簡単、兄さんとの約束を果たして貰う為だった。

その為か秋蘭も朝からやっている。

ガリガリガリッ！

トントントントン！！

「そっちは終わった？ 秋蘭？」

「はい、こちらは終わりました。……華琳様は？」

「こっちもちょうど終わったわ」

「なら、今日の分はこれで終わりですね」

「じゃあ、置き手紙を書いて、行きましょるか」

「はい」

そう言って、置き手紙を書いて執務室から出て、目的地の兄さんの家に向かった。

移動中……完全な朝になったとは言えまだ人の姿はまだらだったが、私の元に数十人の民が駆け寄ってきた。

「「……曹操様、お早うございます」」

「ええ、お早う。どうしたの？」

「……曹真様が黄巾党を討伐する際、天の御遣い率いる劉備軍に酷い仕打ちを受けたと聞いて、無事かどうかをお聞きしました」

「ちゃんと無事よ、貴女は？」

「私は見舞いの品として、果物をお渡しください」

「有難う」

「私は、魚介類を箱に入れて持ってきましたので」

「ええ、本当に有難う」

そう言って、見舞いの品だけで荷車を引くほどの量になってしまい、馬を持ってきて再び兄さんの家に向かった。

「……いつの間に兄さんは民から慕われていたのかしら？」

「さあ？ 私にはご存じありませんが、それも真紅狼の惹かれる部分かもしれませんね……」

「……そうかもしれないわね」

「『勝手に入っいい』って言ってましたね、確か」

「一応、声をかけておきましようか……。兄さん、入りますよー？」

声をかけたが返事は無かった。

「今まで、ちゃんとした休みが取れていなかったから、ぐっすりと寝ているんじゃないでしょうか？」

「あー、そうかもしれないわね。家に上がりましようか」
そう言って、ちゃんと靴を脱いで家に上がり多分居るであろう居間に向かった。

「兄さん、起きてますか？」

「真紅狼、どこだ？」

そう言って、居間の途中の部屋も確認しながら居間に向かう二人。

「あ、華琳様：見つけました」

秋蘭は声をいきなり小さくしていた。

自然と私の声も小さくなりながら、どこか聞いた。

「どこに居るの？」

「あそこの庭側の通路に居ます」

向かうと、兄さんはやはり寝ていた。

それも気持ちよさそうに……

その表情を見てると、自然と心が落ち着いてきた。

——突然、ある事がしたくなったのでやってみたくなった。
兄さんを起こさないように頭を上げて、膝の上に乗せた。

所謂、膝枕と言うやつをやってみた。

「……………ん」

兄さんが突然動いたので起きたと思ったが、どうやら寝方を変えるために体を動かしたみたいだった。

今、兄さんの状態は仰向けで私との顔が近い為か、急に顔が赤くなってきた。

「……華琳様、顔が赤いですよ?」

「……物凄く赤いの? もしかして?」

「ええ、凄まじく真っ赤です。というか、私にもやらせてください」

「え、ええ、はい、どうぞ。起こさないようね?」

「はい。……………これ、いいですね」

「言葉には表現できないけど……………気持ちいいわね」

「はい。……………ふぁ」

「秋蘭も寝ていいわよ? 朝早かったし、辛いんでしょ?」

「それなら、華琳様も同じでしょうに華琳様こそ寝るべきですよ!」

「なら、二人で寝ちゃいましょうか!」

「そうですね」

そう言って兄さんを挟むように私たちは寝た。

〈華琳・秋蘭side out〉

〈真紅狼side〉

ZZZ……………

「ふぁーよく寝た……？」

起きた俺は太陽を見ると、時間的に昼だと言う事が分かった。
取り敢えず、廊下に手をつこうとした時――

むにゅ……

妙に柔らかい感触が両手に当たった。

右は揉み心地があって弾力があり、左は揉みがいのある感じだった。
しかも、その後に聞こえた声が問題だった。

「……………んぁ」

――下を見ると、俺から見て右側に秋蘭が、左側に華琳が居た。

「……………アレ？」

そして、最悪な形で事態はやってきた。

「……………ふぁーあ、お早うござい……………ま……………す？」

二人は起きた時、俺の手を見た。

両手が触れてある先は、お互いの胸を触っていた。

「.....」

「.....よう、お早う」

そう言っ、さりげなく手をどかそうすることで意識を逸らそうとしたが.....

「兄さんは私たちが寝ている間に胸を触っていたんですか？」

「.....真紅狼、触ってみて感触はどうだった？」

ダメだった。

というか、からかわれているような気がするので下手な回答をしないことにした。

「うん？ まあ、良い感触だったぞ？」

これは文句の言いようの無い回答だ！ 俺グッジョブ！！

「なら、触ってても構わんぞ？」

アルェ~~~~（³）。？

回避したはずなのに、帰って来ただど？！

ちなみに華琳は言うど.....

「兄さん.....襲いたいですか？」

と言いながら、着ている服を少し緩みながら言ってきた。

「休んでのに、また疲れるのはちょっとなあ」

「そういうの分かってましたよ、なので胸で我慢します」

「いや、その理屈はおかしい。ていうか、何時の間に着たの？」

「ほんの2、3時間前に来ました」

「一応声をかけたんだが、返事がなかったからな、勝手に上がらせてもらった」

「そのあと、兄さんを見つけて……まあ、その後は二人で一緒に寝てました」

「……さいですか」

「あ、外に民から見舞いの品を貰ってきてますので」

「はいよ、昼飯食うか」

「兄さん、一緒にいいですか？」

「どうぞ、ちよっと取ってくる」

「あ、はい」

ドタドタ・・・

持ってきたのはちよつと底が深い桶に先程まで野菜を冷やしていた川の水を入れて、その上に野菜が入った竹籠を乗せて持ってきた。

「これ、朝獲ったヤツ。先程まで冷やしてたから、冷たくておいしいぞ」

適当に取って二人に渡して、仲良く三人で昼飯を食いながら、ゆったりとその日は過ごした。

（真紅狼 side out）

休日（後書き）

短いですね・・・ごめんなさい

あと、2，3話はこれぐらいなってしまうです。
ご了承ください。

次回は街に出ます。

街にお出かけ（前書き）

休日その2です

街にお出かけ

（真紅狼 side）

俺は今、市街に向かっている。

それなりに顔を知られているし、居なかった間街の変化などを知らなかったからだ。

「久しぶりに回るなあ」

「おや？ 真紅狼殿、久しぶりですね！」

「おう！ 久しぶり、どう調子は？」

「順調ですよ！ ウチの店にまた来てください！！」

「おう、あとでな」

今度は向かい側のおばちゃんから声を掛けられた。

「あら、真ちゃん！ 帰ってきてたんかい？」

「おばちゃん、ただいま」

「また、一回りイイ男になっちゃって！！」

「そんな風に見えるのか？」

「アタシが言うんだか間違いないよ！」

「そいつは有難いね、最近はいいいモノ入った？」

「いつも通りさね」

「まあ、商売が順調なのはいいことだね」

「まあねえ。アタシはこれから店の準備しないといけないから……」

「仕事頑張って！」

「はいよ！」

再び歩き続けると民から次から次へと声をかけられる。

「真さん、怪我は大丈夫かい？」

「ああ、大丈夫だ」

「真紅狼さん！ メシ如何ッスか！？」

「あとで頼む」

「ういッス！！」

「真紅狼様、依頼された品、ほぼ出来てますよ」

「おお、そうか。全部出来たら、一度完成品見してくれ」

「分かりました、家の方に伺えばよろしいですか？」

「ああ、頼む」

そういうやり取りをしている俺は民からは「真さん」や「真ちゃん」、
「真紅狼さん」と呼ばれている。

本来なら、民には真名を教えないのだが俺はこの街の民には勝手に
呼んでも構わないと教えた。

最初は躊躇いがあったが時間が経つにつれ、皆、フレンドリーに呼
んでくれるようになった。

堅っ苦しい呼び方よりもこちらの方が、気が楽だからだ。

今回街を出掛けた理由とはある鍛冶屋に用があった。

その鍛冶屋とは俺が“ガンブレード”を譲り受けた鍛冶屋だ。

「……おやっさん、居るか？」

「——ん？ おお、真紅狼じゃねえか！！」

「お久しぶりです。……挨拶に来ました」

「すまねえな、そういえばお前さん、曹操様の兄らしいな？」

「あー、そうですが……堅苦しい呼ばないで普通に『真紅狼』でい
いッスよ？」

「でも、真名なんだろう？」

「民には普通に「真さん」とかで呼んでますよ？」

「なら、いいか」

「そうっすよ。問題ないですよ」

「ハハハハハハハハハハ！」

と二人同時に笑い出して「その後どうだったか？」などを思い出しながら話した。

「そうだ、今日はおやつさんをお願いがあっただですよ」

「なんだ改まって？」

「実は俺が率いている部隊の武器を創って欲しいんですよ」

「ほお……、詳しく話しな」

「今から出す武器を創って欲しんですよ」

「……………見せな」

そういつておやつさんから少し離れて、台の上に刀、斧槍を見せた。

「ふむ、これを創れってか？」

「……………ええ、出来ますか？」

「出来るが、鉄などが揃えられるかが、問題だな」

「その辺はこちらで揃えます」

「……あとは金だな」

「そちらも大丈夫です」

「最後に……………どれぐらい作るんだ？」

「刀は10本、斧槍は5本程なんですが……………大丈夫ですか？」

「いいぜ、その依頼を受けよう！！」

「有難うございます。明日、材料を持ってきます」

「分かった。じゃあこれからある分で試しに創ってみるぜ」

「出来るのを楽しみに待ってます」

「おう！ 楽しみに待ってろや！！」

鍛冶屋を後にした時にはすでに昼だった。

華琳達と待ち合わせしてるので少し、宮廷に急いだ。

＼真紅狼side out＼

＼華琳・秋蘭side＼

今日も昼から兄さんと過ごす為に午前中に終わらせるために書類整理を高速で行ってる。

「秋蘭、あと何枚!？」

「あと、一枚です!」

「分かったわ!!」

渡された書類に目を通して、何も問題がなかったため印を押して枚数を数えて確認したところ大丈夫だったので筆などを片付けて、兄さんの元に向かった。

「兄さん!」

「おお、お疲れさん」

「待ちましたか？」

「いや、今ちようど着たところだ」

「お昼はどうしますか？」

「今これから行くつもりだが、どうする？」

「じゃあ、兄さんと一緒に」

「はいよ、秋蘭は？」

「私もそれで構わないぞ」

「んじゃ、行くか」

移動中・・・

陳留でもっとも大きい通りに出た私たちはある光景を見て、驚いた。なんと兄さんを友人感覚で民達が話しているからだ。

「兄さん、これはどういう事ですか？」

「ん？ ああ、コレ？ 俺が皆に真名を教えた後、「呼び捨てで構わないぞ」って言ったんだよ」

「何故、そんなことをしたんだ、真紅狼？ 真名は神聖なものだろう？」

「秋蘭、俺はこの街を活気のある良い街にしたいんだよ。それには民との協力が必要不可欠だ。それなのに民から「曹真様」なんて言ってるら何時まで経っても良い街にならないだろう？ だから、真名を教えて友人関係で呼んでもらった方がいい関係も創りやすいし、色んな情報も逐一手に入るしな」

「……兄さんはそこまで考えていたんですか？」

「いや、ぶっちゃけ堅苦しいのが嫌いなだけです」

「「ぶっちゃけて何ですか？」」

「俺が居た前の世界の言葉。あれだ、天の世界の言葉って言えばいいのかねえ……」

「兄さんが前居た時の世界の言葉ですか……、意味は何ですか？」

「“ぶっちゃけ” っていうのは正しく言うと“本当のところ”とか“実際は” だな」

「なるほど……兄さん。そういう話をたまにはしてくれませんか？」

「興味あるの？」

「ああ、真紅狼の過去は聞いたがその世界がどんな世界だったのかは聞いていなかったからな。興味が尽きないんだ」

「話してもあんま面白くねえけどいいのか？」

「「ええ（ああ）」」

「取り敢えず、昼食うか」

「「ですな」」

そう言っ、朝「行く」という店に向かった。

「療、居るか？」

「あ、真紅狼さん！ メシですか！？」

「おう！ 三人なんだが席空いてるか？」

「こちらにどうぞ！……って曹操様に夏侯淵様？！」

「そう畏まらなくていいわよ？」

「で、ですが……」

「華琳がそう言ってるんだから、別に良いぞ？」

「分かりました」

療はそういうと厨房に引っこみ、代わりに若い女性が出てきて品を聞いてきた。

「何にしますか？」

「俺はチャーシュー麺で」

「じゃあ、私もそれで」

「私もそれで頼む」

「チャーシュー三つ、お願いしまーす！！」

「「「ヘイ！！」」」

注文書を厨房の台の上に置いた後、客に呼ばれたので再び接客していった。

「真紅狼さん、玲、可愛いでしょ？」

「療、お前厨房良いのかよ？」

「大丈夫ですよ、今だけですがね」

「彼女、お前の恋人？」

「いえ、俺達結婚したんですよ！！　だから嫁さんです」

「そいつはおめでとう！」

「有難うございます。真紅狼さんは結婚しないんですか？」

そう聞かれた時、横に居る二人をちら見すると若干顔が赤くなっていたので名前を出すのは止めておこう。

「あー、うん。まあ結婚はするけど相手は教えねえよ？」

「いいじゃない：「療、早く厨房に入って仕事して！」：げっ、玲？！」

「注文が溜まっているんだから、早くしてちょうだい！！」

「はい！　分かりました！！」

鶴の一声がかけられたみたい「ビュンッ！」と厨房に引っこんでいった。

「すみません、曹真様。ウチのお「待った」：何でしょう？」

「曹真様じゃなくて、真紅狼と呼び捨てでいい」

「ですが…」

「堅苦しいのは嫌いなんだよ」

「じゃ、じゃあ、真紅狼様で良いですか？」

「うーん、様じゃなくていいんだけど、まあいいか」

「真紅狼様、ウチの夫がすみません」

「いいよ、別に。誰だって気になるだろうしな。……特に後ろでさりげなく聞き耳立てている連中！！　テメエ等に言ってるんだ！　人の事よりも自分たちの嫁でも見つけろや！！」

「そりゃないですよ！！　真紅狼さん」

「うるせえ！」

兄さんは立ち上がり、後ろの客達と笑いながら喋って言った。

「曹操様に夏侯淵様よろしいでしょうか？」

「どうしたの、玲？」

「先程、真紅狼様が言っていたご結婚のお相手は失礼なら申し訳ありませんが曹操様と夏侯淵様ですか？」

「！？」

「何故、分かったの？」

「結婚したからでしょうか……相手の顔をよく見るとなんとなく分かってしまうんです」

「……なるほど、所謂“女の勘”ってやつか」

「はい、そうです。おそらく早いと思うんですが、ご結婚おめでとうございます」

「有難う、玲」

「……ああ」

「では、料理持ってきますね」

「玲！」

「はい、何でしょうか？」

「私の真名を受け取りなさい、真名は華琳よ」

「よろしいんですか！？ 私なんかに？！」

「同じ結婚する者同士であり、“友人”として受け取って欲しいわ」

「なら、私もだな。真名は秋蘭だ。よろしく頼む」

「はい、よろしく願います。じゃあ、料理持ってきますね」

玲は厨房に引っこんだと同時に兄さんも戻ってきた。

「……どうした？ 良いことでもあったか？ 顔が笑っているぞ？」

「……ええ、とても良いことがありました」

「……真紅狼には分からないかもな」

「何故に？」

「それは――女達の秘密ですよ」
「???」

そうして私たちは昼食を食べながら、午後を楽しんだ。

く華琳・秋蘭side outく

街にお出かけ（後書き）

今回は街をぶらり旅・・・

なんて、冗談やってる場合じゃないですね。

だいぶ前に出てきた鍛冶屋のおやっさん登場。

『蒼龍隊』と『紫鯨隊』の武器作成の依頼です。

残りは真紅狼が製作します。

作成時間とかご都合主義でお願いします。

次回で休日編は終わる予定です。

予想外の訪問者（前書き）

終わりませんでした・・・orz

でも、次回の終わりぐらいから多分ですけど『反董卓連合編』になると思います。

予想外の訪問者

（真紅狼 side）

おやっさんに鍛冶を頼んでから二週間が過ぎた。

その間何をしていたかった？

そりゃ、もちろん各部隊の標準武器を作成していたに決まってんじやん。

おやっさんで創ってもらった武器をモデルにして作成して、付加などはこちらでしていた。

超刀と斧槍だけは本来の長さや重さを半分にして軽くて振りまわしやすい武器に変えたけどね。

二刀と小太刀も丈夫で斬れ易いように付加してある為、よっぽど変な使い方しない限り折れないようになっている。

そして、昨日、頼んでいたモノが出来たらしくて完成品を見せてもらった。

頼んでいたものだけどいい陣織だった。

まあ、糸はケーツハリーの羽根を渡しているので軽くて丈夫で防刃使用になっていた。

現在は桂花の帽子（？）みたいな物を作成中だ。

見た目がネコミミだったのでケット・シーの力が付加されている、ケット・シーは本来『混乱』させるがこの帽子には抵抗^{レジスト}させるようにしてある。

不測の事態に陥って頭が働かない、もしくは混乱しても、それを回避し冷静に状況判断することが出来る帽子だ。

それと羽織も創った。

羽織はフェニックスの羽根を使用して、軍師だからまず襲われるってことはないと思うが、念のため衝撃を和らげる力と虫嫌いだと言っていたのでそれを寄せ付けられない力が付加されている羽織となった。ちなみに熱さは感じられず、周囲の気温に合わせて変化できる便利機能まで付けた。

——まあ、最後はやり過ぎたんだが……

全てが終わり、次の日に『神狼』の詰め所に向かい、武器と各部隊を表す羽織を渡した。

「「「「総隊長！ 有難うございます！」「」「」
と手を合せて感謝の言葉を言ってきた。

「各部隊はこれからそれを着ることだ、分かったか？」

「「「「応！！」「」「」

隊員は後ろで「カッコいい！」とか「総隊長！！」と叫んでいた。

「真ちゃん！ 有難うね！ こんなに貰っちゃって！！」

「別に構わねえよ、何時まで経っても各部隊が同じ格好ってのもいかなんか？」

「そうだけどさ、やっぱりね」

「お前も苦労する性格だな」

「真ちゃんと過ごせば誰でもなるんじゃないかな？」

「俺のせいだよ……」

「アハハ、冗談だよ！ 冗談！！ それじゃね」

からかったまま雅は自分の部隊の元に帰っていった。

その後、凧、真桜、沙和がやってきた。

「真紅狼殿」

「真紅狼さん」

「兄ちゃん」

「「有難う!!!」」

「気にいって何よりだ」

「これ、兄ちゃんがデザインしたんか？」

「デザインはな、創ったのは衣服屋の楓さんがやってくれたよ」

「真紅狼殿は民と仲がよろしいんですか？」

「おう、メツチャいいぞ? 「俺が創ってくれない?」 って言った

ら「いいですよ」その二言で契約成立した」

「凄いフレンドリーですね」

「ただなあ……」

「どうかしたの?」

「いや、色がなあ。合せる色が難しかったんだよ。特に『紅虎』と

『翠鳳』がな」

そう、とても配色が難しかったのである。

他の三つは楽だった。

各部隊のトレードマークになっている生物を浮き彫りで色を付けた。

『蒼龍』は龍の部分が蒼で、周りは白だ。

『紫鯨』は鯨の部分が紫で、周りは青だ。

『黒獅子』は獅子の部分が金で、周りは黒だ。

黒獅子の羽織だけ極道みたいに見えるが気のせいだ。

ここからが凄く難しかったんだよ、ここからが。

赤だと『紅虎』と被るためどうしても避けたかったので橙色があるかなあ? と思ったら、なんかあったので採用した。

『翠鳳』は鳳凰が橙色にして、周りは翠だ。

これで赤が滞りなく使えるので『紅虎』は紅を採用した。

『紅虎』は虎が紅で、周りが白にした。

『蒼龍』と多少色が被ってしまったが、どちらも映えるのでその辺は妥協したのである。

「……凄い考えたの」

「もう、三日ぐらい悩んだね、これに関しては」

「そんなに悩んで創られたのですか……、大切に着させていただきます！」

「気張るなよ、風。そーいや、華琳は何してるんだ？」

「華琳様なら、朝早くに袁紹に呼ばれたので向かいましたよ？」

「袁紹って、あの袁紹か？」

「はい、あの袁紹です」

「なんか、碌でもないことが起きそうな予感がする」

「止めてください、不吉なことを言うのは……」

「「……はあ」」

二人揃ってため息をついてしまった。

何せ、高飛車で自分が一番じゃないと気が済まない金ぴか娘だ……出来れば関わりたくない。

ちよっと、気が落ちている時に蒼龍隊の隊員が俺の元にやってきた。

「総隊長、言伝です」

「俺に？」

「はい。言伝を出した人はこう言っていました「私は真紅狼君の友人だ」と……」

「先生か！ どうしたんだ？」

「それが、「2，3日休まず飛ばしてこちらに来た」と言っております」

「……様子が変だな、案内してくれ！」

「はい！」

そうして急いで俺は先生の元に急いだ。

〈真紅狼 side out〉

〈先生 side〉

劉備さんのところをこっそり抜け出して、私達は“友人”である真紅狼君の元に保護を求めるため、休まず向かった。

そして、ようやく陳留に辿り着いた時はすでに空腹で倒れそうだった。

「その者、止まれ！」

「私は真紅狼君の友人です！ 真紅狼君を呼んでくれませんか！！」

「総長を呼んで来い！」

「はい！」

「お、おい？！ 大丈夫か！？」

「三日ほど休まずに来た……も………ので「バタッ……」」

「しっかりしろ！！」

力尽きそうだったときに向こう側から聞き覚えのある声が聞こえた。

「大丈夫か！？」

〈先生 side out〉

（真紅狼 side）

入口あたりに先生と荷車があった。

馬で引いてきたみたいだ。

先生が倒れたので急いだ。

「大丈夫か！？ 先生、何があった！？」

「し…真…紅狼…君、私達を保…護してく…れませんか？」

「その前になにか食わねえと！！」

次第に人が集まって来た。

そこに燎が居たので叫んだ。

「燎！ 悪いんだが簡単な物でいいから四人分の水と食糧を持って来てくれ！！」

「ういッス！！」

「先生！ しっかりしろ、食糧と水がもうすぐ来る！！」

「私はいいです…彼女達を先に…」

「大丈夫だ、四人分持って来てもらってる！！」

「真紅狼さん（様）！！」

燎と玲の二人がやってきた。

「食糧です」

「この人と荷車にいる三人にも与えてやってくれ」

「はい。貴女達もどうぞ」

「「有難うございます！！！！……ガツガツ！！」」

「先生も食えるか？」

「ええ、大丈夫です。頂きます。……もぐもぐ」

「真紅狼さん！ 水ッス！！」

「ああ、済まない」
水を先生と荷車に乗っている彼女達に渡すとひったくるように取り
一気に飲み干した。

「落ち着いたか？」

「ええ、助かりました」

「一体何があったんだ？」

「劉備のところが嫌になりましたので、抜け出して保護を求めてきました」

「……訳ありか？」

「……ええ」

「詳しい話しは俺の家で話すか、ついて来てくれ」

「馬で行っても？」

「ああ、構わない」

彼女達——天和達の表情を見ると何かに怯えた表情が時折見えた。
あのクソガキなにかやらかしたな？

その時、ちょうど袁紹の所に行っていた華琳達が帰って来た。

「——兄さん！ どうしたんですか？！」

「おかえり。華琳」

「あ、はい。ただいま戻りました。あら？ 天和達が何故ココに？」

「——保護を求めてきたらしい」

「保護？！」

華琳に駆け寄って、小声で話した。

「（訳ありみたいだ。しかも、天和達の表情をちょっと見てみる）」
「（はい）」

そこには食べ物を食べれて安堵した表情と時折体を守るように何かに怯える顔があった。

「（あのクソガキが何かやらかしたに違いない。怯えた方が尋常じゃない）」

「（――確かに何かに怯えてますね。兄さんは何があったか見当は付いてるんですか？）」

「（ほぼ八割な……。出来れば外れて欲しいがあっていたら、出会い頭ヤツをブン殴る！ 取り敢えず、俺の家に来てもらう事になったから後で華琳達も来てくれ）」

「（分かりました。では後で……）」

そう言って別れ、先生達を俺の家に案内した。

＼真紅狼 side out＼

この後、先生の話しを聞いて予想が当たっていたことに気持ち沈んだ。

……………アイツ、一回マジでブン殴る！！

予想外の訪問者（後書き）

夙たちが現代語使ってるのは、二週間の間に真紅狼が武器作成の合間に教えました。以後使って行きます。

一刀が外道化していきます。

つか、すでに分かってる方も多いかも・・・

保護の訳・・・(前書き)

次回から、反董卓編だー!!

ここまで来るのに寄り道ばかりかしてたような気がする・・・

保護の訳・・・

（先生 side）

真紅狼君に連れられて来ましたが、真紅狼君の家はこの国では見られない家の形でした。

その時の表情を見た真紅狼君は「俺が前住んでいた国の形にしたんだよ」と言っていました。

……何と言うか古風で良いですね。

今、私達は“居間”と呼ばれる場所に居ますが真紅狼君は「ちょっと待っててくれ」といって消えました。

天和さん達は初めて見る光景なのか、キョロキョロしています。

「…待たせたな、お茶ぐらいしかないが許してくれ」

「いえ、有難うございます。それで、真紅狼君……見慣れぬ姿しますね」

「ああ、これ？ 俺が前住んでいた時の服っていうかそんな感じだよ。この家に居る時は基本コレでいるよ」

「……なるほど、真紅狼君は伝統を重んじるんですね」

「まあ……な」

「では、そろそろ話を………」

「待ってくれ、あともう少しで来ると思うんだが………」

「？ 誰がです？」

その時、入口から『兄さん、来ましたよー』と言う声が聞こえました。

「入って来てくれ!!」

「曹操さん達を呼んだですか？」

「俺の一存だけでは決められないからな……その辺は勘弁してくれ」
「いえ、それもそうですね」

その後、曹操さん達がこの部屋に入って来た。

……大勢で。

「全員居るのかよ……」

「すみません、いつの間にかついてきちゃって……」

「隣の和室も使うか……」

そう言って和室の仕切りを開いてどこからか机を持って来て、お茶まで用意していた。

「じゃあ、天和。辛い思いかもしれないが何があったか話してくれないか？」

「……はい。」

天和さん達は辛そうな表情で話そうとしていました。

〈先生 side out〉

〈天和 side〉

思い出すのも嫌だけど、話さなきゃ保護してもらえるか分からないから頑張らないと……。

「では、お話します。」

……あの後、私達は平原にいる親衛隊達の方を討伐と言うより、追い払っていき無事に平原に平定しました。その後、桃香さんは平原

の相に任命されました。

そこから、桃香さん達はあの男と共に内政やらで忙しくて、私達は監視が付きましたが平和そのものだったんです。公演も何回かやらせていただきました。

だけど、しばらく経ってから、桃香さんと愛紗さんの様子が変わりました……今までは乱世を正す“仲間”だったのが“恋人”みたいな関係の距離感でした。

でも、気のせいだと思って気にしませんでした……その次の夜……あの男に……「一人で来るように」って呼び出されて……っ！！」

その後の言葉が言えなかった、言えば思い出すからだ。

あの男のいやらしい視線とか手つきが体を這い寄る感じで……。

「もういい、言うな。悪かったな、思い出させちまって……。雅、悪いが別の部屋に移してやってくれ」

「分かったよ。こっちにおいで……」

「……すみません」

私達は震えが収まるまで別の部屋で落ち着くことになった。

出る時、真紅狼さんの顔は恐かった。

（天和side out）

（先生side）

震えが収まらなくなった天和さん達を別の部屋に移してくれた真紅狼君の表情は恐ろしかった、まるでこの世の者とは思えないほどの殺気がこの場を支配していた。

現に向こう側に居る三人が気を失っていかけるほどだった。

「真紅狼君、ここからは私がお話します。聞かされた範囲ですが……」

「ああ、頼む」

口数が少なくなってきましたね。

「……天和さんは次の日から、一刀君を見ると怯えていました。理由を聞いても「何もない」の一点張りで詳しくは聞けませんでした。次は地和さんも同じように怯えていましたので、これはもう何かあったに違いないと思い、一刀君に聞いてみたんです。ですが、「何もしてないよ」と答えられました。その日の夜、今度は人和さんが一刀君の元に一人で向かった後、少し経ってから人和さんが着衣を乱れたままで帰って来たんです」

「先生、もういいぞ。……あんのクソガキ!! 関羽と劉備はどんな感じだった?」

「………というと?」

「“女”の顔になってたか?」

「……ええ。あと、おそらくですが翠さんと蒲公英さんも………」

「手が早いにも程があるだろ!?!」

「予想なので……」

話せることは話した。

後は、曹操さんがどう思うかですね。

（先生 side out）

（真紅狼 side）

天和と先生の話を聞いて、やはりゲス野郎は手を出しかけていたらしい。

「華琳、天和達はこちらで保護だが構わないな？」

「ええ、私も同意見です」

「有難うございます、本当に」

「住む場所は宮廷でいいか？」

「何故ですか？」

「俺の家でもいいんだが、あんな後だ。男と二人っきりなんて気が落ち着かないだろ？　なら、同性が多い方に住んだ方が安心できると思うしな」

「そうですね、それでよろしいですか、曹操様？」

「構わないわ、三人一緒の部屋に手配しておくわ。先生はどうするの？」

「私も宮廷の方でお願いします。ですが、同じ部屋ではなく、そこから近い部屋にして欲しいのですが……」

「安心して、ちゃんと手配しておくわ」

先生はそれを聞いて、ようやく安堵したようだ。

それにしても……アイツ自分の役目全く果たしちゃいねえ。

むしろ、欲望に走りつつあるな。

最悪、殺すか。

「アイツに次あったら出会い頭、ブン殴ろう！！」

それとも思いつき盛大に。

角を出したら、死ぬんで出さずにやろうっと。

今死なれちゃ、この世界が崩壊しかねないからな。

『じゃんけん、死ねえ！！』で有名なあの人の「フリッカーコンビネーション」でも叩き込もう、そうしよう。

全身骨折は免れないな……

「さて、腹が立つ男の話は止めにして、華琳は袁紹の所に何しに行つてたんだ？」

「話をばっさりと切りますね……」

「暗い話ばかりも嫌だろう？」

「確かにそうですが……、あ、それとあの男をブン殴るのがすぐに出来ますよ」

「どういうこと？」

「袁紹からの知らせでは「都で悪政を強いて、民を苦しめている董卓を討ちますので皆さんにお声かけてあげました」と言っていましたよ？」

「へえ、ちょうどいいタイミングじゃないか」

「しかもその場には私の他にも公孫賛、張勲、劉備もいましたので参加するんじゃないですかね」

「おお、これは北郷君、全身骨折コース一直線ですね。」

「で、何時集まるの？」

「三日後です」

「分かった、先生は悪いんだがついて来てくれるか？ 軍医として来て欲しいんだ」

「いいですよ、私の腕が必要ならばどこにでも行きます」

「天和達はここに置いていく、ヤツに出会ったら手を出しかねない」

「そうした方が安全ですね」

華琳は立ち上がり、叫んだ。

「では、全員曹操軍は三日後反董卓連合に参加する！ 全員準備にかかれ！！」

「」「」「はっ！！」「」「」「」

春蘭達はぞろぞろと俺の家を出ていった。

この場には俺と華琳、秋蘭、雅、先生と天和達が残っていた。

「雅、先生と天和達を宮廷に連れて行ってくれ。あと各部隊準備を怠らないように言っとけ」

「うん、分かった。先生に天和ちゃん達ついて来てね」

雅についていく先生は出ていくときにこっちに振り向いて……

「真紅狼君、本当に保護してくれて有難うございます」
そう言って宮廷に向かって行った。

「…………俺も“天の御遣い”らしいことしてるのかねえ？」

「…………しますよ、十分に」

「そうだぞ、真紅狼。自信を持て！」

「そうかい、そいつはよかった。さて、お二人さんは何故残ってるのかな？」

「そんなの決まってるじゃないですか」

「ああ、決まってるな」

「「一緒に寝るためですよ!!」」

「堂々と言うなよ…………というか、お前達アグレッシブすぎるだろ。」

…………取り敢えず、夕餉作るか」

〈真紅狼 side out〉

その後結局三人で一緒に寝ました。

保護の訳・・・（後書き）

華琳・秋蘭がアグレッシブになりました（笑）

・・・どうしてこうなった？！

そして、一刀はラスボスコース一直線・・・

まあ、何人かは救出します。

要望があれば言ってください。

すでに一人は決まっています（作者の勝手に）

ただ、桃香と愛紗、鈴々、多分星は無理かも？

星は分かりません、予定ですので・・・

ちよいとアンケートを・・・

毎度この作品を読んでくれて有難うございます。
作者の大喰らいの牙です。

次回から『反董卓連合編』に入るんですが、話の構成を変える予定
となっています。

理由はまあ、読んでいればご存じかもしれませんが、『まるで屑な
種馬男』……通称“マクオ”（ケン様が命名）の扱いについてです。

そのため今回は皆様にアンケートに答えてもらいたくて書かせてい
ただきました。

1, 一刀をすぐ抹殺する

2, 反董卓編が終わり次第に抹殺

3, どこでもいいや

の三つとなっています。

1の場合、洛陽に行く間に鋼糸で首をスパンツ！と行く予定です。
この場合、桃香たちが復讐者になります。言わばこのお話のボスと

してかな？

2の場合、蜀で救える女性を真紅狼が影で救いながら話しが進みます。

ちなみに当初の予定はこれで行くつもりでした。

3の場合、反董卓編が終わってから蜀の武将を救って行き、一刀十αがボスと言う事になります。

【追記】 10／15 10000現在

受付終了！！

結果発表

1・・・1票

2・・・25票

3・・・6票

となりました。

ということで2の反董卓編が終わり次第に抹殺に決定です。
ではこれから書き始めるので更新を待っていてください。

最後にアンケートに投票してくれて、皆様有難うございました。

反董卓連合・・・でも、真紅狼は救出中（前書き）

反董卓連合編の始まりです。

救出しながらの話なのですが、もしかしたらグダるかもしれません。出来るだけ、グダらせないようにしますがやっちゃったらすみません。

反董卓連合・・・でも、真紅狼は救出中

（真紅狼 side）

うい、久しぶりだ。

今俺達曹操軍と俺が率いる『神狼』は反董卓連合の集合地に居る。

まずは招集をかけた袁紹の元に向かっている。

それよりも俺はヤツに遭いたいんだが、どこに行った？

キョロキョロして探すとお目当ての者が居た。

「華琳、ちょっと用事を済ませてくる」

「え、ああ、はい。思いつきり殺って来てください」

「了解だ」

そう言っただけで、奴の元に近づき射程距離が三メートルに入った瞬間、ファーストインパクトを叩き込んだ。

「シッ！」

「がっ?!」

水月に叩きこみ、体勢を崩したのを確認した後、フリッカーコンビネーションを叩き込んだ。

「ハアアアアア!! セイツー!!」

ヒュッヒュッヒュッヒュッ.....ドゴォン!

「がア！　ぐお！？　ツは！　がはっ！？」

全体を素早く腕を振りきると同時に風なり音がなり、目で追う事が難しくなった後、トドメとして腹に正拳突きを繰り出して終えた。喰らった本人は正拳突きが入った後、勢いよく後ろに吹っ飛んだのだが…………

「？？？」

アレ？　なんか手ごたえがおかしい？

少なからず骨を折ったという感触はあるんだが、途中から全身骨折じゃなくて全身打撲って感じな感触だった。

まさか、ここにきて“主人公補正”ってやつか？

オイ、ふざけんよ？

せつかくイイ感じに決まったと思ったら、このオチはないだろ。

…………まあ、いいか。

この仕打ちは元々自業自得だし。

「…………全身骨折逝けましたか？」

「なんか、打撲に変わった」

「残念ですね。…………はやく死ねばいいのに」

「出来るだけ大声で言うのは止めるよ？」

そんな風な兄妹の会話をしてると両肩を担がれながら、こちらにか…………なんとかさんがやってきた。

「つう！？　蒼騎、一体いきなり何しやがる！？」

「え？　俺なんかやった？　華琳は俺がコイツに何かやったか？」

「いえ、兄さんは何もやってませんよ」

「桂花、お前はどうか？」

「私も何も見ていないわ」

「いやあ、最近疲れているのかな？ 幻影（笑）？ 白昼夢（笑）？ 怖いわー（超棒読み）」

白々しい程の知らないフリをする俺達、当然の如く怒り狂う劉備たち。

「貴様、ご主人様になんてことを！？」

「なにが『ご主人様』だ。くだらん事をいつまでやってる？」

「ご主人様は“天の御遣い”でもあるんだぞ！！」

「じゃあ、アレか？ お前は天の御遣いであれば従うと？ 一緒に居れば乱世を平定出来ると？」

「そうだ、だからこそ私達はここまでやってこれた！！」

「ダメだこりゃ。話すだけ時間の無駄だな……」

「じゃあ、気は進みませんが麗羽のところに行きましょう」
そう言って華琳は俺の手を引っ張っていく。

……ところで、『麗羽』ってだれだ？

向かう途中、劉備軍の中に紫色の髪で『いかにも』お姉さんと言う人が俺を見ていた。

……表情が複雑そうだな、後でお忍びで会ってみるか。

（真紅狼 side out）

（一刀 side）

いきなり、全身を殴打されて訳がわからなかった。

蒼騎は愛紗となにやら言い合っていたが見限る目で俺と愛紗を見抜いた後、去っていった。

「くそっ！ 俺が一体何をしたって言うんだよ……」

「ご主人様、大丈夫ですか？」

「ああ、全身が痛むがそれほどでもないよ……」

「それにしても白々しいことを堂々と……！！」

俺たちはちゃんと天の御遣いらしいことをやってるのに何が気に入らないんだ。

……ちよつと、仕返しするか。

「――紫苑、来てくれない？」

「一刀君、呼んだかしら？」

「うん、ちよつとね……」

これでよし。

天の御遣いである俺を怒らせた事を後悔させてやる！

（一刀 side out）

（紫苑 side）

天の御遣いが居る劉備軍に入った私達は最初はいい感じだった……
だけど、しばらくすると「本当にこの者に仕えていいのか？」とい
う疑問が少しずつ芽生えてきた。

天の御遣いである一刀君がやることは常に私たちでは思いつかない
事を考えるがその分、損が大きいことばかりでこの前も税をまた上
げていた。

民達は桃香ちゃんを慕っているから、良い返事をくれたけどその税
も本来使われているのかすら怪しい。

それに先駆けて先程の一件だ。

先程呼ばれたと思ったら、先程の男に仕返しと言うより脅しをやっ
て欲しいと言われて、頭が痛くなった。

『当てなくてもいいから、曹操の横を射って欲しいんだ』

こう言われた時は、信じられなくなったが私には拒否することが出来ない。

何故なら、娘の璃々が居るからだ。

人質ではないが、やらなければ何をされるか分からない為、私が取るべき行動は一つしかなかったのだ。

「……ごめんなさい」

私は呟いて、弓を引き絞り………射った。

矢は曹操の横を通り過ぎて、木に当たるはずだったがその矢が木に当たった音がしなかったのである。

曹操をよく見ると、隣に居た男が私の射った矢を掴んでいた。

その後、男はこちらに近づいてくる

私はこの時「終わった」と思ったが、男から掛けられた言葉に驚いた。

「……ボソッ……（アンタ、脅されてやったって感じだったな。当てるつもりは無かったんだろ？ しかも、劉備軍に本当に仕えていいのか迷ってるんじゃないか？）」

「！？……（何故をそれを！？）」

「（やはりそうか、先程アンタの顔を見た時複雑そうな表情をしてたからな……。今の劉備軍にはあまり関わりたくないんじゃないか？）」

「（ええ、でも………）」

「（なら、話があるんだが聞くつもりはないか？）」

「（……話？）」

「（アンタ、俺んところに来ないか？↑哀○ 翔風に）」

私はこの話を聞いた時、安堵出来る気持ちになった。

（紫苑 side out）

（真紅狼 side）

背後から殺気のような感じがしたのでちら見で見ると紫色の髪のお姉さんが弓を引き絞っていた。

だが、表情は陰しく射る前に唇が動いていた。

なんて言ったかは分からないが、辛そうだった。

俺は剄を使った。

内力系活剄 『照星眼』

遠距離射撃するときに使われる剄技で文字通り、視力を強化する。強化された視力で俺は矢を素手で掴み、折った。

そして、射った本人の元に近寄る前に華琳に伝言を残しておこう。突然居なくなったら何を言われるか分からんから……。

「華琳、ちょっとあそこの人、勧誘してくる」

「……何故ですか？」

「先程、華琳を当てるつもりはないと思うんだが、多分先程のバカが仕返しをやってくれなんて言われたんだらうよ」

「それを鵜呑みした人を勧誘するんですか？」

「いや、ちょっと表情をみたんだが……複雑そうな表情をしていた

から何か訳があると思うんだよ」

「なら、勧誘してきていいですよ。……兄さん、頼みましたよ？」

「了解した。――必ず勧誘しよう」

了承も取れたことだし、勧誘を始めますか！

そそくさと射った本人の元に向かい、周りに聞かれないように話すと話に乗ってくれた。

イエーイ、勧誘成功だ――！！

「アンタの名は？」

「え？ 私の姓は黄、名は忠、真名は紫苑と申します」

「俺は姓が曹、名は真、字が蒼騎、真名は真紅狼だ。普通に真紅狼って呼んでくれ。紫苑、荷物はこれだけか？」

「いえ、私の娘が……」

「……結婚してたんですか？」

「もう夫は亡くなりました……」

「すみません、失礼なことを聞いて……」

「いいですよ」

「で、娘さんは今どこに？」

「天の御遣いの天幕に……」

「分かった。ちょっと待ってろ」

そう言って、劉備軍の近くまで来たら、ある魔法を唱えた。

まさか、この魔法が役に立つなんて思わなかった。

『バニッシュ』

自分を透明にする魔法でまず気付かれない。
一応、天幕の中にスリプルを放ち、全員を寝たのを確認した後、紫苑の娘さんを探した。

『エスナ』

「キミが璃々ちゃんかな？」

「私の名前を呼ぶのは誰？」

いけね、『デスペル』かけてねえや。

デスペルをかけた後、突然姿を現した事に吃驚していた。

「どこから出たの!？」

「後で答えるよ。お兄さんとお母さんの所に行こう」

「お母さんのところ？」

「そうだよ」

「なら、行く!」

「よし、じゃあ、俺の腕の上に乗ってくれる？」

「うん」

乗ったのを確認した後、今度は二人纏めてバニシュをかけた。

移動中・・・

「お兄さんって道士なの？」

「うーん、道士じゃないんだが……そうだな、不思議な力とでも言っておこうかな」

「不思議な力……」

「あ、お母さんが見えたよ」

「あ、ホントだ、お母さん!!」

紫苑は璃々の声を聞いて、周りをキョロキョロしている。
デスペル、デスペルっと。

「璃々!!」

「お母さん!!」

俺は腕を離して上げると紫苑の元に駆け寄って行った。

「娘を救出してくれて有難うございます!」

「いんや、別に気にしなくていいぞ?」

「あ、でも、私が真紅狼君の元に行ったら、『返せ』っていつてくるんじゃないかしら」

「ああ、その事なら安心しろ。こちらに移ったのは紫苑の意志だ。

まあ、無理矢理やってくるなら、そんな時は容赦しないさ」

「でも、兵まで動かしてきたら……」

「言ってるだろ? 安心しろって。ちゃんと全員俺が“護って”やるよ」

そんな時の表情がどういったものか俺には分かるはずないがこの表情を見た紫苑は何故か、顔を赤くしていた。

………何故だ?

「さて、袁紹のところに行きますか……、気は向かないが」

「私はどうすれば?」

「あー、そうだな」

………イイことを思いついた。

「紫苑、ついて来い。アイツ等の驚いた顔を見たくなった」

「人が悪いですね、真紅狼君は……」

「なに、ささやかな反撃ってやつだ」

「まあ、でも別れの言葉ぐらいは言っておいた方が良いでしょうし、それ……」

「それに？」

「なんでもありませんよ」

「そうかい、じゃ、行こうかね？」

「ええ」

そう言って、俺たちは本部の天幕に向かった。

＼真紅狼 side out＼

天の御遣い……ざまあ。

反董卓連合・・・でも、真紅狼は救出中（後書き）

イエーイー、いきなり救出したぜーイー！！

真恋姫でもつともエロいと言われる紫苑さんを救出。
次回は種を撒くだけです。

真の“天の御遣い”

（真紅狼 side）

俺と紫苑は華琳達が居る天幕を目指した。

そしたら外に袁紹の兵だと思う二人が立っていたので、訪ねたら「ここがそうだ」と言われたので、名を告げて中に入る許可をもらった。

「…………さて、別れの言葉の準備はいいか？」

「まだ、ありませんが……覚悟なら大丈夫よ……………（ギュッ!）」

「そうか。…………ところでなんで腕を組んでるんですか？」

「だって見せつきたいじゃない？ 『この女はおれのもんだ!』ってね♪」

「やめてくれませんかねえ!？」

「いいじゃない♪」

「よくねえよ!？ 色んな意味でよくねえよ!!」

そんな話を話し合っていたら（?）、兵が「あの……入らないんですか？」と聞いてきたので俺たちは気持ちを入れ替えて、中に入った。

「…………失礼する」

中に入ると、右側には雪蓮と冥琳、少し離れて華琳、桂花達が居て、左側には屑刀とその愉快的仲間達と見知らぬ女性が居た。

正面には今回招集をかけた袁紹とその部下二人が居る。

袁紹の姿を見るが……うん、この時代にも金髪ドリル娘っているんだな。

そして、大抵の性格や行動パターンが読めたのもまた事実だ。

「……兄さん、こちらですよ」

「……ああ」

俺は桂花の横に付き、その後、続けて紫苑が入って来た。

劉備や関羽は「紫苑さん（殿）、こっちです（よー）」と手招きしているがそちらの方には行かず、反対側の右側に行き俺の左に付いた。

その光景に目を剥く、劉備たち。

「え？ な、なんで……？」

「おい！ 蒼騎、どういうことだ！？」

「どういうことって……こういう事だが？」

「……勧誘の方は成功したんですね」

「ああ、バッチリな。取り敢えず、袁紹がなにか言いたそうだから、黙るか」

その後、ようやく自分の出番が来たと言わんばかりの高飛車な声だった。

「華琳さん、お兄さんを自慢したければ、後にしてくれないかしら？ これから、大事な軍議を始めますので……、でもその前にお互い名乗っておきましょうか。では、孫策さんからどうぞ」
アレは、世間知らずお嬢様だなこりゃ……。

「私の姓は孫、名は策、字は伯符よ。よろしく」

「私か。姓は周、名が瑜、そして字は公瑾だ。よろしく頼む」
雪蓮は軽々手を振り、冥琳は礼儀正しくお辞儀をした。

「では、今度は華琳さん」

「私ね。姓は曹、名は操、字が孟徳よ」

「今度は俺か。姓が曹、名は真、字が蒼騎だ。仲良くなりたくない連中も居るがよろしく頼む」

堂々と先制攻撃を放つ。

「……姓は荀、名は？、字は文若。真紅狼と以下同文よ」

おお、今度はストレートだな。

そして、最後について先ほどこちらに來た紫苑が挨拶する。

「私の姓は黄、名は忠、字は漢升よ。……そして、私は劉備軍を抜けて……曹操軍に仕官するわ！」

「「「！？」」」」

「よろしくね、黄忠」

「はい、よろしく願います。曹操様」

このやり取りが完全な別れの証拠となった。

「……？ なにやら一揉めありそうですね、最後に劉備さんお願いしますわよ？」

「……はい。私の姓は劉、名は備、字が玄德です。よろしく願います……」

「大丈夫ですか、姉上？ 姓は関、名は羽、字は雲長だ」

「はわわ……姓は諸葛、名は亮、字は孔明です。……皆さん、よろしく願います」

「私は姓が公孫、名は？、字が伯珪だ」

「最後の俺が“（自称）天の御遣い（笑）」の北郷一刀って言うん

だよろしくな!!」

最初は沈んでいるのに最後は無理矢理ハイテンションな奴が締めたな。

というか、あのバカ新しい女性を手籠にしようと考えてやがるな…

……

新しい名称でも考えるか……

あの姿からして、天の御遣いというより、種馬だな、しかも屑で。

“まるで……屑な……種馬男”

うん、いい名じゃないか!!

我ながら良い出来だ。“マクオ”と名付けよう。

そんなことを考えていたら、なんか袁紹がこの連合を集めた意図を語っていたがどうでもいいや。

〈真紅狼side out〉

〈マクオside〉

あの紫苑がいつの間にか曹操側に移っていた。

その事実俺たちにとって信じられないことだった。

桃香はそれを聞いた時、崩れ落ちそうになっていたし、朱里はいつも持っている本を落としていた。

袁紹が語り終わってから、「この連合の総大将を決めなければなりませんの! 当然、皆さんに招集をかけたのは私なのですから私になるべきですわ!!」

と言っていたので、この場に居る全員は「どうぞ、どうぞ」と言っ
て素早く済ませた。

そして一通り済んだみたいだったので、雑談とかし始めている人も

居たので俺は問いただした。

「おい、蒼騎！ さっきの続きだ！！」

「……メンドクサイ」

「貴様、紫苑殿を誑かしてどういうつもりだ！？」

「おやおや、誑かすとは酷いな……」まるで屑な種馬男”に骨抜きされた関羽さん？」

なんで、アイツはそんなことまで知ってるんだ？！

「紫苑は自身の意志でこちら側に来たんだぜ？ なあ？」

「ええ。私の意志でこちらに来たわ」

「それを誑かすとは……言いがかりは止めてくれよ」

「だが、お前が強要したかもしれないだろ！？」

「バカか、お前は？ さっき「私の意志」って言っただろうが。それともアレか？ お前は性欲が強すぎて、三秒前の事を完全に忘れるのか？ 鶏だって三歩までは覚えていられるんだぞ？ ……それと、雪蓮と冥琳を卑猥な目で見るのを止めろ」

くっ！ 凄く腹が立つ！！

こうなったら……

「紫苑自身の口から正直に言ってくれ！ あんな男に騙されないでくれ！！」

これなら、アイツが代弁出来ないはずだ！！

「桃香ちゃん、貴女の夢はとても素晴らしいわ。……でも、その夢を叶える為の“覚悟”がないし、かず……」マクオで言っちゃまえ」

：その男の力も役にたつわけど、言葉だけならいくらでも語られるのよ。一刀君、貴方言ったわよね？ 「俺が守ってやる」って。最初は皆が“天の御遣い”というから本当に出来ると信じたけど真紅狼君と出会ってから認識を変えたわ。彼の行動や視線、そして重みのある言葉……、彼こそ“天の御遣い”にふさわしい行動をしてるのよ。だからこそ、私は曹操軍に仕官することを決めたわ。――これが私の本心よ」

信じられなかった、紫苑がそこまで思ってるなんて。

対して蒼騎は口元で微かにニヤついていた。

「マクオside out」

「真紅狼side」

紫苑の告白を聞いて、思わずニヤけてしまった。

というか、そこまで思っていたのかよ。

「紫苑は、なぜ、俺を“天の御遣い”だと思ったんだ？」

「貴方に誘われた時に、貴方の背中を見て感じ取ったのよ」

「悪いが俺は天の御遣いじゃ……「ちょっといいか？」なんだ、冥琳？」

今まで、黙秘を続けていた冥琳が口を出してきた。なんだろうか？

「先程は感謝する、正直不快だったんだ。後、その男が“天の御遣い”と言われた時に思いだしてな」

「何を？」

「以前、真紅狼が呉に来た時に質問したな……「天の御遣いではないか？」……と」

「……ああ（やな予感がする……）」

「あの予言には二人の御遣いが居ると予言していた。一人はその……マクオだったか？ もう一人は真紅狼……お前ではないか？」
「何故……そう思った？」

「——“死を語る魔眼”……」（ピクツ）」やはりそうか……、お前予言にあった“死を語る魔眼”を持ってるだろう？」

「（しくじった！ ほんの少しの動きを見破られたか）」

「どうなんだ？ 答えてくれ」

「……ハア。もも……」兄さん！？ 明かすんですか？！ ……バレちまったモンはしょうがないだろう？ ああ、持ってるよ。

——『直死の魔眼』を」

そう言って俺は目の色を真紅から蒼に変えた。

「『直死の魔眼』？」

「“死を語る魔眼”の正式名称だ。この眼には『モノ』の『死』が視えるんだよ」

「ということは、人……じゃないのか？」

「ああ。——化物だ」

「ソレはどんな力なんだ？」

「簡単に言えば、どんなモノでも殺せるってことだ。人間、馬、樹、石壁、炎、だって殺せるぞ？」

「そうか……あと、さっきお前は自分の事を化物だと言っていたが、私達は気にしていないし、真名で呼ぶなどとも言わない。今まで通りに接してくれ」

「いいのか？ 人じゃないんだぞ？」

「構わないわよ？ 命を助けてもらったお礼もあるし、先程の件もあるしね♪」

「雪蓮、冥琳……感謝する」

孫呉の二人は理解してくれたが、紫苑は戻っちまうかもしれないな。

「紫苑……は……うおっ!？」
顔が近い!! 近い!!

「やはり “天の御遣い” だったのね。——いえ、“真の天の御遣い” ね。私は貴方に一生仕官させて頂きます」

「だから名乗りたくなかったんだよ」

「好きじゃないの？」

雪蓮は聞いてくる。

「んー、何と言うかさあ、気にいらないんだよね」

「それだけ？」

「それだけ」

「……アハハ、真紅狼は面白いわね」

「今の笑うところか？」

「ゴ、ゴメン。つい面白くて……」

「まあいいけどよ。さて、質問は以上か？ 冥琳？」

「ああ。これからもよろしく頼むぞ、真紅狼」

「……はいよ。こちらもな？」

「分かってるさ」

「じゃ、お先に失礼するよ」

俺達は取り敢えずマクオ達と一緒に居たくなかった為、さっさと天幕を出ていった。

（真紅狼 side out）

俺たちが出ていった後、マクオと袁紹、そして巻き込まれる形で雪蓮達は秘密の会議をしていたらしいがどうでもいいか……

真の“天の御遣い”（後書き）

今回は幕の中での出来事です。

次回は外で探します。

あと、今回天幕であった劉備軍は救出不可能です。

現在、無理なのは桃香、愛紗、ここには居ないが鈴々、そして、朱里は救出不可能です。

それ以外はまだ、救出可能レベルとなっております。

そして屑刀に新しい名称が登場！

前にも書きましたが“まるで屑な種馬男”略してマクオ……………以後、これを表示します。

この通り名を作っていただいた、ケン様有難く使わせて頂きます。

勧誘はやったモン勝ち（前書き）

ヒヤッハー、更新だー！！

ちよつと、最近テンションがハイになってる作者です。
ここ最近、サブタイトルを付けにくくなってきた。

勧誘はやったモン勝ち

（真紅狼 side）

天幕から出た俺たちは曹操軍の陣に戻ろうとした時、そちら側で大声が聞こえたので何かあったのかな？ と思い、そちらに向かう事にした。

「……何やってんだ？」

「あ、お兄さんー、会議は終わったんですか？」

「ああ。で、風は何やってんの？」

「それがですねー、こちらの方が紫苑さんと言う方を返せとうるさいんですよ」

「ふーん？ 誰だ……って翠と蒲公英かよ」

「おや、お兄さん、知ってるんですか？」

「あー、うん、まあな。それなりにな」

「ちようどよかったです、お兄さんの口から説明してくれませんか？」

「はいよ。……勧誘出来っかな？」

「……ところでそちらの女性は？」

「姓は黄、名は忠、字は漢升、真名は紫苑と申します。劉備軍を抜けて、今日より曹操軍に仕官させていただく者です」

「「「え？」」」」

まあ、こうなるよな、普通は……

「あー！！ 紫苑ということだ！？ どうして曹操軍に入ったんだ！？」

「翠ちゃん。……今の劉備軍はどこかおかしいし、桃香ちゃんの理

想である

『みんなが笑って暮らせる世を創りたい』というのは多分叶えられないわ。

だって、本人がそれを創る為の“覚悟”を持っていないもの。……
：だからこそ、劉備軍を抜けたのよ」

「しかしだな……」

「真紅狼は何を目指してんの？」

いきなり、蒲公英が俺に聞いてきた。

「あ、俺？ んー、別に目指してるものとかはないな」

「夢とかないの？」

「何と言うか、俺が果たしかった目標はすでに果たしたからなあ。
他に目指したいものとかは無いんだよねえ」

「男なんだし何かしらあるんじゃないの？」

「そうだな。夢とかじゃないんだが、まあ一つだけあるって言えばあるな」

「聞いてもいい？」

「ここには『護りたいモノ達』が居るからな。その為には世間から
何を言われようとも護るさ、絶対にな」

「カッコいいね……ウチのご主人様とは大違いだよ」

「アレと一緒にするな。大体なアレの夢は多分、『この世界の女は
全部俺のモノ!!』みたいな感じの夢だな……しかも女、子供関
係なしに確実に抱くぞ？」

そう言うのと、ここにいる女性陣は悪寒が走ったようだ。

「すでに劉備と関羽は確実に抱いてるよ」

「なに！？ ほ、本当か?!」

「女の顔になってるし。多分次は翠か蒲公英のどちらか……もしか

は両方同時に抱くんじゃないか？」

あの顔は絶対に碌な事を考えては無い筈だ。

いやー、マジで種馬だな。いや、マクオカ。

というか、ここにまで来て女を抱くなよ。

遠足気分で来てるのなら、帰ってくれないかな。

その時、向こう側から新たに一団も混じって来た。

「ワシたちも混ざってもいいかのう？」

（真紅狼 side out）

（??? side）

会議が終わったのか曹操達は袁紹殿の天幕から出てきた、その際に何故か紫苑も後ろに付いていくように男の後ろに居た。

それを見た翠殿は曹操軍に文句を言ってくると言ってからしばらく経つが戻ってくる気配がない。

さらには主達も未だに帰ってこないなので私は翠殿の元に行くこととしました。

その時、厳顔殿に鳳統殿も一緒に付いていくと言ってきたので三人で向かった。

向かったときに話していた言葉は凄かった。

「女の顔になってるし。多分次は翠か蒲公英のどちらか……もしくは両方同時に抱くんじゃないか？」

そんなことを言ってきた。

ウチの主殿はそんなことをやっていたのか……。

ではなくて、どう入り込むか悩んでいたら厳顔殿がさりげなく声を出した。

「ワシたちも混ざってもいいかのう？」

「ん？ えーと、どちらさんで？」

「おや？ 星さんじゃないですか？」

「おお、風殿。久しぶりですな」

「元気ですか？」

「そちらも変わらないようで」

「風、知ってんの？」

「はい、以前曹操様に仕える前までは風と稟と星さんで旅をしてたんですよ」

「なるほど、旧知の仲だったわけか……」

「そうですね。でも今はちょっと会いたくなかったですね」

「何故に？」

「お兄さんは忘れたんですか？ 劉備軍が以前お兄さんにした事を？」

「「「「……………」」」」」

「あー、その件ね。別にどうでもよくね？」

風殿が言った一言で紫苑殿と私達以外は黙ってしまった。

主達はこの者に何をしたんだろうか？

鳳統殿は知ってるかもしれないから後で聞いてみるか……………。

「お兄さんはどうでもいいかもしれないけど、私達はあの時のことをまだ許したわけじゃないんですよ。だから、そんな所にいる星さんとは会いたくないですよ」

「もし、差し支えがなければ話して貰ってもよいか？」

「嫌です」

きっぱりと拒絶する風殿とは珍しい、よほどの事があったと見える。

「星side out」

く真紅狼sideく

「……いいんじゃないの？ それを聞いて勧誘しやすくなるかもしれないし」

「……勧誘とはどういうことだ？」

「……紫苑をこちら側に来たのも勧誘を受けてからだしな？」

「ええ、そうね」

「まあ、条件とかがいくつかあるがな……」

「——条件とは？」

「“今の劉備軍に本当に仕えていいのか？”とかだな。マクオが本来の役目を忘れて欲望に走ってるから、大変でしょうがないし」

「……マクオ？」

「北郷の名称……“まるで屑な種馬男”略してマクオ。お解り？」

「た、種馬って失礼ではないか？」

「毎晩、女抱ってる奴がか？ しかも、今度の目標は孫の二人と馬姉妹を抱こうとしててもか？」

「「……………」」

それを聞いた瞬間、なにも言えなくなっていた。

新事実に関が開かないらしい。

「奴はすでに種馬化してるんだよ、そんな奴が乱世を平定出来ると思うか？ 出来ねえだろ。それに加えて今までの行動を見ていると誰もが『本当に劉備軍に仕えていいのか？』と思うぞ？ だから、俺が「俺のトコロに来ないか？」と勧誘してるわけ。で一応聞くが、五人はどうする？」

「ほう……ワシらを勧誘するのか？」

「俺は本人の意思を尊重するから、嫌なら断っても構わないぜ」
五人は悩んでいるが、最初の一人は承諾の声を出した。

出した者とは……………

「私は真紅狼のところ……、魏に行くよ」

「蒲公英、お前?!」

「お姉様、私の目でも見て分かるぐらい桃香お姉ちゃん達は間違ってるよ」

「……俺の所に来ると言う事はいずれ、昔の仲間と対峙するかもしれないと言う事だぞ? それでもか?」

「うん。私も真紅狼の言う“覚悟”を持てた」

「そうか、なら俺から言う事は無いな」

蒲公英はそれなりに思う所があったんだろうな。

「蒲公英はこちらに来るとして、翠はどうする?」

「わ、私は様子を見る。……真紅狼の言う通りなのかを。そこから判断するよ」

「分かった。で、そちらの三人はどうする?」

「あ、あの……………」

とんがり帽子を目一杯被っている少女が声を出していた。

「ん? なんだ?」

「わ、私、その鳳統と申します」

「……………え、マジで?」

華琳達に顔を向けると、全員頷いていた。

ええー、この子があの鳳統?!

もう驚かないと思っていたんだが、これはビックリだー。

「あ、あの大丈夫ですか？」

「あ、ああ、大丈夫だ……。要件はなにかな？」

「あの私、曹真さんに謝りたくて……」

「何故に？」

「黄巾党の時に追い出した時の事を私は「やり過ぎです」って皆さんに抗議したんですが、聞いてもらえなくて……。あのような事をして申し訳ありませんでした」

「……劉備軍は見限っていたんだが、まだこのように子が居るなんてな。」

「……別にいいさ。八当たりは先程、しかるべき者にブチ込んだし」
「でも……！」

「鳳統は先程、謝っただろう？　なら、俺はそれでいいさ。この話はもう終わりだ、分かったかい？」

「はい。……私も魏に入ります」

「いきなりだな、オイ」

「……本当は朱里ちゃんも一緒に来て欲しかったんですが、朱里ちゃんはお主人様を信じきっているのでダメでした」

「マクオと長く居ると『正義』と『悪』の境界線が分からなくなるのは仕方がないと思うがな。まあ、よろしく頼むよ」

「はい、よろしく願います」

五人中二人は即決で一人は様子見か……

あとの二人はどうするのかな？

「お宅らはどうすんの？」

「お主、酒は飲めるか？」

「まあ、それなりに強いが？」

「ふむ、ならワシもそちらに行こうかの」

「……それが理由か？」

「それが理由でもあるが、お主と居ると面白そうだしな」

「移る理由の中で一番すごい理由が来たな」

「そういうお主も凄い名をもってるじゃろう？　なあ『紅き獅子』

……いやこちらの方がいいかの『真紅の殺人鬼』？」

「しばらく聞いていなかったな、その異名は。知ってるか？　その異名の由来を」

「ああ、知っておるぞ？　敵陣に一人で乗り込み、全て敵を皆殺しにした時の返り血を全身に浴びたことによって血染めの殺人鬼が出来上がったことを人々はこう言った『真紅の殺人鬼』と」

「……ああ、そうだ。それが由来だ。……槍を向けんな、その女」横から、白い服の来た女性が武器を持ってこちらに刃を向けていた。

「……私の『正義』を持って、貴様の『悪』を成敗する！」

あ、コイツは劉備や関羽と似ているタイプだがまだ、軽いな。

「『正義』語って『悪』をおこなう事が一番、最低だと思っただが？」

「貴様のような『悪』が語るな！」

「『悪』で結構！！　俺は『悪』の中で『正義』をおこなう。まあ、殺人鬼の言う事だし信じなくていいさ。自分の目で見極めればいい、連中の本質ってものをな。見極めたうえで来たければ、俺を呼べばいい」

話が終わったのか、マクオ達、雪蓮達は次々と袁紹の天幕を出てきた。

「……秘密の会議が終わったか。連中が来る前に帰るか」

「そうですね。体を舐めまわす視線で見られたくないですし」

「鳳統に蒲公英、えーと……「厳顔じゃ」……厳顔はついて来てくれ。残るお二人さんはよく考えればいい、じゃあな」

そう言い残し、新たな勧誘者を率いてその場を後にした。

（真紅狼 side out）

後で、マクオ共が抗議を申し立ててきたがシカトした。

その後、すぐに雪蓮が一人で来て「話がしたい」と言ってきた。

……………何だろうか？

勧誘はやったモン勝ち（後書き）

雛里、蒲公英、桔梗の勧誘に成功・・・イエーーーーー！！

文句？ 抗議？ そんなモノ知りません。

そろそろ、？水関に移らないと・・・

密告者

〔真紅狼 side〕

雪蓮を招き入れ、理由を聞くと「ここでは話しにくいから外で……」
と言う事で、マクオ達、華琳達には聞かれない場所でおかつ、連
合の天幕が見渡せる小さな丘があったのでそちらに移動した。

「さて、話とは？」

「……真紅狼たちが完全に出ていった後、私達は劉備と袁紹に同盟
を結ばないか？」と誘われたわ……………」

「へえ。で、答えは？」

「断ったわ。でも完全に断るのではなくて、曖昧に返答したけどね」
「何故？」

「今、呉は袁術の客将になっているのよ。それなのに同盟なんて結
んだら何時まで経っても独立できないじゃない」

「そりゃ、キツイなあ……………」

「でしょ？ 利用出来たら良いんだけどね」

「止めとけ、むしろ損しかしないと思うぞ？」

「そうよねえ」

「…………で、本題は？」

「あら、やっぱり気付いていたの？」

「当り前だ。まだ、何か言いたそうな雰囲気物が物凄く出てたぞ」

「真紅狼に簡単に気付かれるなんて私もまだまだ力不足ね」

「別にその辺は力不足もへったくれもないだろう？」

「本題に入るわね。あの男が提案してきたのは、“蒼騎 真紅狼を
討たないか？”よ」

「……………はい？」

俺は耳がおかしくなったのかと思い、もう一度聞いた。

「もう一度言ってくれない？」

“蒼騎 真紅狼を討たないか？”よ」

「…………ハア??」

「なんでもあの男が言うには「奴は化物で曹操軍は奴の力によって操られている。だから、俺は曹操達を救いたい」って真摯に訴えていたわよ？」

「俺には『曹操達の体を寄せ』としか聞こえんのだが？」

「安心して、私と冥琳もそう聞こえたわ。多分そう聞こえていないのは、袁紹ぐらいね」

「え、なに？ アイツ俺に喧嘩売ってんの？ いくらでも買（勝）ってやるよ、クソ野郎！！」

「私に言わないでよ……」

「あ、スマン。それを聞いた雪蓮はどうするんだ？」

「乗るわけじゃないでしょ？ 命を助けてもらったことがある人に刃を向けるなんて最低の行為じゃない」

「話に乗ったのは袁紹だけか？」

「いえ、袁術の側近である張勳も話に乗ったわね……………」

「アホコンビか……。まあ、敵じゃないな」

「そんなところよ」

「情報渡してくれて有難うな、雪蓮」

「これで貸し借りはナシね？」

「ああ、いいぞ」

雪蓮は情報を渡した後、下に居る呉の天幕を見ていた。
俺も一つ言っておくか。

「ところで、雪蓮」

「なに？」

「お前、衝動の方は治まったか？」

これを聞いた雪蓮はビックリしていた。

（真紅狼 side out）

（雪蓮 side）

天幕で話した内容をそっくりそのまま真紅狼に伝えたと今後の対応を考えているようだった。

その後、礼の言葉を言ったときだった。

「情報渡してくれて有難うな、雪蓮」

顔はこちらに向けなかったが真紅狼の“背中”が、とてもカッコよく見えた。

何故か分からないが、その“背中”に憧れもした。

そして思った――

『いつか自分もあのような姿になってみたい』

――と。

真紅狼はその後に続けていった。

「お前、衝動の方は治まったか？」

どこで気が付いたのかしら？ 私が戦いを求めているなんて……

「……………いつから分かったの？」

「初めて出会ったときから」

「そんなときから？」

「お前、俺が当時『真紅の殺人鬼』って言われたのに、挑んで来た
だろ？ それで見当は付いたんだよ。多分お前はある程度強者と戦
わないと衝動が溜まるタイプ。……だから、護衛も付けずに一人歩
きも多い。違うか？」

「そこまで分かってるなんて、真紅狼は私にその気があるのかしら
？」

「冷静に分析した結果だ。……が、付き合っても良いぜ、治まるな
ら」

そう言って、真紅狼は少ばかり離れて、向きあう。

「そう。……なら踊りの相手をしてくれるかしら？ 真紅狼？」

「お嬢さんがお望みなのであれば、是非」

キーン！！

真紅狼と私は同時に前に出て、お互いの刃をぶつけあった。

私は『南海霸王』を真紅狼は腰に付いていた剣(?)みたいなもの
で対応した。

ガキン！

ギヤリギヤリ……

ギキーン！！

私が上段、下段と振り降ろすと真紅狼は避けて、突き、横薙ぎと避ける動作が大きいもので対応してきた。

「くっ！」

かろうじて避ける私だが反撃が思う様に出来ないことが悔しかった。次第に押されていきはじめる私は、真紅狼がほんの少しの隙を出した所に勝負を掛けることとした。

そうすると、真紅狼の左側が開いていたのを見て、素早く横薙ぎを繰り出した。

「しまった……………！！！」

「殺った！！！」

右手の得物は完全に追いつかないと思っていたその時……………

「……………なんてな」

ガキーン！！

「なっ！？」

追いつかないと思っていた得物が防いでいたのである。その手には、短刀が握られていた。

「それよりも余所見していいのか？」

「えっ、あ！？」

首元には右手の得物があつた。

「私の負けね……………」

「どうだ、治まったか？」

「ええ、楽しかったわ。ところでどこから出したの？ その短刀？」

「出してないぞ？」

「え？」

「雪蓮、途中から俺が片腕だけで振っていたのに気が付かなかったのか？」

「えっ、えっ！？」

「気が付かなかったようだな、さりげなく短刀を左に持ちながら振っていた……………」

「私の横薙ぎをその短刀で防いだ。……と？」

「そうだ」

「くやし〜！！」

「楽しむのはいいけど、もうちょっと周りを見ような」

「はぁーい」

ビュウウウウー！！

「やっぱり夜は少し冷えるわね……………」

「……………ほれ」

真紅狼は自分で着ている服（？）を私に着せてくれた。

「わっ！？」

「寒いんだろ？ 着ておけよ」

「いいの？」

「『女の子は大切にしなさい』……お袋の教えでな。「寒そうな格好してたり雨に濡れたりしてたら助けなさい」って言われてたんだよ」

「いい母親じゃない……暖かい」

「……それ、やるよ」

「え！？ いいの？ 真紅狼は困らないの？」

「もう一着あるしな」

「有難う、真紅狼。大切にするわ」

私は真紅狼に貰った服を着こんだ。

（雪蓮 side out）

（真紅狼 side）

組み手が終わった後、急激に体温が冷えるのでコートをちゃんと着ようと思ったが、雪蓮が寒そうにしていたので、コートを脱いで、雪蓮に着させてあげた。

「暖かい」と言っていたのでついでに、そのままくれてやった。作ろうと思えば、創れるしね。

雪蓮は突然マクオの事を言ってきた。

「それにしても、あの男の視線は不快だったわ」

「突然何を言い出すんだ、そんなの元々だろう？」

「だってあの男に『美しい肉体ですね』とか言われたのよ？」

「……まあ、俺から見ても魅力的な体ではあるが……」

「真紅狼に言われるのとあの男と言われるのではだいぶ違うわね……あの男が言うのと悪寒が走るけど、真紅狼に言われると誘惑したくなっちゃうわ。しかもあの男、私達の胸ばかり見てくるのよ？」

そう言って胸を強調する。

——俺もそれなりに視線はソコにいきますけど……
だって、凄いデカイし、ボリュームはあるし……

「あのな、俺も男なんだよ。そういう風に強調されると嫌でも視線はいくんですけど……」

「真紅狼ならいいのよ」

「なんだ、その信用の仕方は？」

「いいじゃない、信用されているんだから」

「意味が分からん……。そろそろ帰るか、心配してるだろうし」
「そうね」

そうして、俺たちは自分たちの天幕に戻った。

……俺はその後が凄く大変だった。

例の如く、華琳、秋蘭、何故か紫苑までが忍び込んでいて、色んな意味で大変だった。

〈真紅狼 side out〉

〈雪蓮 side〉

真紅狼と別れた後、私は冥琳の天幕に向かった。

「冥琳、ただいま」

「お帰り、雪蓮。伝えてきたか？」

「ええ。色々とね……」

「そうか。……ところで、その羽織っている物はなんだ？」

「これ？ 真紅狼からもらったのよ。話していたら寒くなってきたね、着させて貰ったわ。そしたら、そのままくれたのよ」

「……雪蓮、お前、真紅狼と戦っただろう？」

「（ビクッ!）」

「戦ったのだな。その癖を直せと何度言えば……!!」

「わーわー、聞きたくないー!!」

「確かにお前の衝動を治めてくれる相手なんか真紅狼ぐらいだが……、なにもここまで来てやらなくていいだろう!!」

「だって、真紅狼から誘ったのよ？」

「……なに？」

「真紅狼が「付き合ってやるよ」っていったのよ」

「……で、結果は？」

「へ？」

「結果を聞いてるんだ、どちらが勝ったのかを」
そこまで、聞いてくるなんて珍しいわね。

「悔しいけど、負けたわ」

「……お前がか？」

「ええ、見事にやられたわ」

「実力をまだ隠していそうだな……」

「多分ね……。ねえ、冥琳」

「なんだ、雪蓮？」

「真紅狼ってそこらでは居ない男よね」

「ああ、今では珍しい奴だな。最近の男は力があると私達、女武将の体狙いで接近してくる奴がほとんどだからな。そういった点では真紅狼はないな」

「しかも、強いし、カッコいいし」

「なんだ雪蓮、惚れたのか？」

「惚れたんじゃないわよ……いえ、惚れたのかもしれないわね。
あの“背中”に……」

そう、あの“背中”に……

今まで多くのそれなりの男を見てきたが、どの男も見掛け倒しだった。

だが、真紅狼に出会ってから真紅狼が気になる様になった。

目立つ要素と言えば、両目が真紅であるぐらいだったが“背中”を見ると語っていた。

『護りたいモノの為には、例え、自分が傷ついても絶対に護りきる』
という強い意志みたいのを感じられた。

だからこそ、私はそこに惹かれたかもしれない。

「将来のことを考えると……有力候補よねえ」

（雪蓮 side out）

——真紅狼、お前はとんでもない奴を惹かれさせてしまったみたいだぞ？

密告者（後書き）

書いてたら、なんかこうなった。
本当にごめんなさい・・・

？水関陥落（前書き）

戦闘があると思った方、ゴメンナサイ。

もしかしたら、戦闘の方は反董卓編では少ないかもしれませんが。

だって、真紅狼の思惑とマクオの思惑の攻防が多いので・・・

？水関陥落

く真紅狼side

連合軍は今、董卓が居る洛陽に向かう為、最初の関門である？水関と対峙している。

見事に門は閉まったままで開けるのにも手間が掛かりそうだった。

「見事に閉まってるな……………」

「そうですね」

「もし、相手が籠城戦で挑んでくるなら、策を練らなきゃマズいな」
「桂花、風、策は何かある？」

「そうですね、もし相手が籠城戦が目的ならこちらはおびき出さないでダメでしょうね」

「挑発とかか？」

「そうね、そんなところだけど…………それが効果あるかどうかは分からないわ」

「…………あの？水関の右後ろにある丘は使えないのか？」

「一応使えるわよ？　ただ、そこはあまり意味がないと思うわ。何故そんなことを聞くのよ、真紅狼？」

「崖の斜面角がどれぐらいなのか知りたくてな……………」

この時、真紅狼以外は真紅狼の考えていることが分からなかった。

「取り敢えず、顔を合したくないが袁紹の所に行くか……………」

「そうですね……………」

あー、本当に顔を合わせたくねえ。

く真紅狼side out

くマクオside)

最初の？水関を攻略するために、俺たちは袁紹の所に集まり、会議が開かれた。

いつも通り配置は袁紹が真ん中に居て、袁紹から見て左側が孫の二人と曹操と蒼騎、ネコミミっぽい少女が居り、こちらには俺達と公孫賛だった。

「さて、？水関に来ましたが門が閉まっています！ どなたか開ける方法はありませんの？」

そう聞いてくるが、誰も喋ろうとしない。

蒼騎なんかは目を閉じて、柱に寄りかかっていた。

しかし、孫策と周瑜の胸はいつ見ても、最高だな……曹操達もイイ女ばっかだ。

手は付いてるかもしれないけど、染め上げればいいや。

早く、俺の女にモならないかな？

視線に気づいたのか、孫策と曹操が蒼騎を起こしていた。
起きた蒼騎は小さく腕を振るった。

カカツ！

「まったく、目を離したらすぐにコレだ。女性の体をいやらしく見てんじゃねえ。不愉快でしょうがないし、話が進まねえんだよ。それとも遠足気分でここに居るのか？ あ？ だったらさっさと自分の領地に帰って、関羽や劉備を抱いてろや、ボケが」

俺の目の前の机にトランプが刺さり、警告と罵倒が混ざって言い放った。

しかも、トランプはスピードのエースだった。

「なら、蒼騎は何か策でも思いついたのかよ？」

「いや、無いな。俺はお前と違って“（自称）天の御遣い（笑）”じゃないですし、マクオならとても素晴らしい策（超笑）を出せるんだろう？」

何か知らないが、バカにされている事だけは分かった。

反撃しようと言いかけようとするが、袁紹によって遮られてしまった。

「なら、劉備さんのところにお任せしましょう！　ただし！！　優雅で、爽やかに進軍ですわよ？」

そう言って会議は終了した。

曹操達は早速出ていった。

曹操軍が全員出ていったのを確認したあと、俺たちは“蒼騎”を討つ話を進めることにした。

だが、その前に……………

「どうだ、孫策考えてくれたか？　この話に乗るかを……………」

「ええ、考えたわ。この話断らせてもらおうわ」

「なら、出ていってくれ「ただし！」…なんだ？」

「内容によっては応じるわ……………」

そこからどの辺りで襲うかについて話し合った。

少しずつ蒼騎を討つ包囲網は完成をしていく……………

（マクオside out）

〔雪蓮side〕

袁紹が高々話して居る時、また視線がこちらに向いていたのに気が付いた。

やっぱり、悪寒が走るわね…………。

真紅狼を起こして止めさせてもらおう。

私は真紅狼を起こそうと思ったら、曹操も視線を感じてたらしく同じことを考えていたのか真紅狼を起こしたいようだ。

「（あら、曹操も？）」

「（そういう孫策も？）」

「（ええ、全く嫌になるわね）」

「（本当にね…… 兄さん起きてください）」

「（ん？ 会議が終わったのか？）」

「（違うわよ、あの男のいやらしい視線をどうにかしてほしいのよ）」

「（またか、学習能力ゼロだな。分かった、止めさせよう）」

真紅狼は体を起こし、あの男に警告しながら罵倒していた。

……やっぱり、真紅狼はカッコいいわね。

その後は真紅狼はあの男の攻撃をかわしながら、“門を開ける”という面倒くさい物を劉備たちにうまく押し付けたところで会議は終わった。

真紅狼達は最初に出ていった。

真紅狼は去る時、私の顔を見て小さく「…………（頼むぜ？）」と言って去っていった。

僅かに頷き、この場に残った。

マクオ達は私が情報を漏らしてるのも気付かずに話を進めていった。
——本当にバカな集団ね。

会議が終わったので、劉備軍は誘いだす為に策を練ると言って自分たちの天幕に引っこんだ。

私達はまずは呉に戻ったが、しばらくしてからお忍びで真紅狼の天幕に向かった。

今度は冥琳も一緒に向かう事となった。

（雪蓮 side out）

（真紅狼 side）

去った後、曹操軍の天幕に帰った俺たちは、袁紹の所に行く前に風沙和、真桜たちにあの丘の斜面角を調べてくるように頼んだ。

「真紅狼さん、報告です」

「ああ、どうだった？」

「それなりに急ではありましたが、最初だけであとはなめらかな坂でした。それと裏口がありました」

「なるほどねえ………」

それなら出来そうだな。

馬の訓練も充分させてあるし、そのようなシチュも何回か練習してるし。

一つの考えが纏まって居る時に黒獅子隊の兵がこちらにやってきた。

「失礼します！ 総長、呉の孫策殿と周瑜殿が来ております」

「分かった、通してやってくれ」

「はい」
すぐに雪蓮と冥琳は来た。

「随分と早いな、悪いが華琳、ちょっと外で話してくる。その間に紫苑達を集めておいてくれ」

「分かりました」

外に行き、マクオ達に見つからない場所で話した。

「今回はどこであなたを討つか？ だったわ」

「で、どこで仕掛けるって？」

「反董卓連合が解散して、帰路に就く時にだって……」

「なるほどね……、帰るときは軍の一番後ろに居るか。それなら華琳達には被害がなさそうだし」

「曹操達が大切なのね……」

「そりゃな……。こんな化物でもいいって言われちゃったからな」
生前で親族を皆殺しにして、こちらの世界でも殺しまくっている異常者が人に愛される資格を持つなんておかしい限りだ。

俺の歩いている道は他者の骸と血で出来て、一寸先が闇で見えない路だ。

最近では人を殺したいから殺すことに罪悪感すら覚えなくなってるんだぜ？

まともな精神じゃない。

「まあ、でも雪蓮達が困っていたら、多分助けられると思うぞ？」

「あら、嬉しい事言ってくれるじゃない」

報告が終わって、雑談していると門の方が騒がしかったから戻ることにした。

近くの兵に状況を聞いた。

「オイ、どうなっている？」

「総長！ 門が開きました」

「本当か!？」

「あ、はい。劉備軍が門の近くまで寄り、そこから侮辱の言葉を叫んだ後、門が開きました」

「えっ？ それマジで言ってるの？」

「…………大マジです」

「マジかよ…………、だれだ？ そんなガキみたいな言葉に引っかけたバカは？」

「華雄という武将です。あと門の向こうには張遼も確認が取れました」

「その張遼はまだ門の中に？」

「はい」

「しょうがない、前倒しになるがやるか！ 蒼龍隊と紅虎隊を呼べ

!!!」

「はい!!」

「それと全員馬で来い。装備はなるべく軽くしろ、あと俺の馬も頼む」

「了解しました!!」

伝令を聞いた兵は走って知らせに行った。

「ねえ、真紅狼…………」

「まだ、いるんかい…………、帰んなくていいのかよ？」

「聞きたいことがあってね」

「なんだ？」

「『蒼龍隊』とか『紅虎隊』って何？」

「ああ、それか。俺が率いてる部隊——『神狼』の中の一つの部隊だ」

「へえ、じゃ、私達は戻るわね！」

「おう、情報どうも」

帰っていった孫策を見送った後、華琳達の元に向かった。

「華琳、居るか！？」

「居ますよ、状況が変わりました」

「知ってる。さっき聞いた。呼んでくれたか？」

「はい、ここに居ますよ。真紅狼君」

「よし、いいか。紫苑達はまだ曹操軍に入って、まだ俺たちの“流れ”つてのを掴んでいない。だから、しばらくは観戦してくれ。まずは馴染むことから始めてくれ」

「「「わかった（わ）（りました）」」」

よし、あと言う事は……っと。

「華琳、これから『蒼龍隊』と『紅虎隊』を動かすぞ」
「何故ですか？」

「まだ門の中に張遼が居るらしい……、だから叩き出す」
「どうやってですか？」

「それはな、——————だ。」

聞いた華琳達は即座にダメ出しを出してきた。

「「「そんなの」」↑華琳、秋蘭、紫苑

「「ダメに」」↑桂花、風、雛里

「「「決まってるでしょう！」」↑雅と沙和を除いた全員
こんなとき息ぴったりって凄いな、オイ。」

「大丈夫だって、ちゃんと訓練してきたから」

「そういう問題じゃないだろうが!!」

「……………分かりました、いいですよ。兄さん」

「いいのか? ……」 「ただし!!」 ……なんですか?」

「ちゃんと帰ってくることに!! と、一日だけなんでも言う事を聞いてください」

「出来れば、俺が出来る範囲でお願いします」

「善処しますよ」

……ヤベエ、目が怖い。

何はともあれ俺たちはある場所に向かって馬を走らせた。

真紅狼 side out

……? side

連合の連中が門の向こう側における状態で、ある軍が叫んで来た。

聞こえてくるのはどうしようもない侮辱の言葉ばかりだったのでこれぐらい揺らぐはずもない筈やった……

が、一人だけこの言葉を見ても無視できない馬鹿が居るのにウチは気が付いた。

「ア、アカン!! 誰か華雄をとm……………」

ギギギギギイ……………

「遅かったか!!」

「張遼將軍！！　華雄隊が制止を振り切って外に出てしまいました！！」

あーもー、世話の焼ける！！　あの猪は！！

「連れ戻せそうか？」

「無理です、交戦しています」

「しゃあない、火を放ったあと撤退や」

「華雄將軍はどうします？」

「華雄なら自分で何とかするやろ、取り敢えず、全員に伝令を……」

…「行くぞ！！　蒼龍隊、紅虎隊！！　俺に続け！！」　なんや！？

いきなり声が上がって響いた。

……上から？

「何事や！？」

「大変です！！　曹操軍が崖の上から下ってきました！！」

「んなアホな！！」

そう言って、外に出てみると本当に崖を馬で下って突撃してきた。

ウチはあり得ない光景に口がふさがれへんやった。

『ウオオオオオオオオ！！　総長に続けえ！！』

次から次へと曹操軍の騎馬が襲いかかって来た。

「撤退やー！！　撤退するんやー！！」

その時、前から声を掛けられた。

「アンタが張遼か？」

その男は真紅の眼をした男だった。

く張遼side outく

く真紅狼sideく

俺たちは崖の上に来た後、全員に聞いた。

「さて、全員覚悟はいいか？」

「」「」「応!!!!」「」「」

「よし、じゃあ——————いくぞ!!」

黒鷹、頼んだぜ。

ガラガラガラッ……

『総隊長に続けえ!!! ウオオオオオオオオオオオ!!』

俺たちの策とは門が開いた瞬間、崖の上から奇襲をかけるということだった。

600近い騎馬兵が崖を下って攻めてくるという度肝を抜く方法に董卓軍は動けなかった。

その為か対応が遅れた。

「全員、張遼には手を出すな！！ それ以外なら構わん！！ 行け！！
ただし、敵は火を放ってる火が回る前に脱出しろ！！」

「「了解！！」」

俺は黒鷹から降りて、張遼の元に向かった。

「アンタが張遼か？」

「そういうアンタは誰や？」

「曹真だ」

「あの曹真か？ 『紅き獅子』と謂われた」

「ああ、そうだ。本来なら戦うつもりなんだが、ちょっと確認のためにココまで来た」

「その為にアレをやったんか？」

「ああ、そうだ。時間がないし単刀直入に聞け、董卓は都で悪政を引いてるってのは嘘か？」

「そうや」

「やはり、袁紹のでっちあげか。ま、責任をなすりつければいいか」
間違ったことをしたら責任はとってもらわなきゃねえ？

「酷いやツやな」

「籠城戦をしようとしたのは、董卓を逃がす為の時間稼ぎか？」

「……………なんで、分かったん？」

「勘だな。それよりもソレ手伝えるかもしれないぜ」

「なにホンマか？！」

「ああ、董卓やアンタ等全員この俺が救ってやるよ…………… 一つ聞きたいんだが董卓の後ろに居る黒幕って分かるか？」

「ウチは知らんなあ……あ！」

「見たのか？」

「ああ、優男で右腕がない男だった」

「……そいつって眼鏡かけてたか？」

「ああ。ってなんで知ってるん？」

「そいつの右腕を斬り落としたのが俺だからだ」

「へえ、曹真って結構強そうやな、次回一戦やらへんか？」

「次回と言うと虎牢関でか？」

「そうや！」

「まあいいだろう。情報もくれたしな、やってやるよ」

「ほな、約束やで……！」

「はいはい、ほらさっさと撤退しろって」

「あ、最後に……！ ウチの真名は霞っていうんや……！」

「……は？ なんで真名を教えるんだよ……？」

「救ってくれるんやろ？ なら真名を教えていいと思ってな！ 曹

真の真名は？」

「……真紅狼だ」

「真紅狼か……じゃ、真紅狼……！ また会おうや」

「なんというかちよつと雪蓮に似てんなあ……つと、さっさと俺も出るか」

そのあと？ 水関は焼け落ち、華雄は降伏して身柄を呉に預けた。

マクオ達には預けねえよ？

絶対え、手え出すもん。

そうして、俺たちは様々な思惑の中、？ 水関を破った。

（真紅狼 side out）

帰ったら、何故か、そう何故か雪蓮達が来てた。

アレ？ やな予感しかない……

？水関陥落（後書き）

はい、ということであっさりと？水関を陥落させました。
そして霞との真名交換・・・

次回は虎牢関に行くまでに数話ほど間を挟みます。

まあ、虎牢関では真紅狼はVS霞とVS呂布との二連戦ですがね。

あ、更新の件なんですが明日と明後日はこちらの都合で更新が出来ません。

申し訳ないです。

更新出来るのは月曜からなのでまたその時にお会いしましょう。

もしかしたら、時間があれば日曜出来るかもしれませんが、確率は低いです。

真紅狼に休む暇はない・・・（女性関係の意味で）（前書き）

時間が出来たので投稿・・・

でも、明日は絶対に無理です。

今度こそ、月曜にまた会いましょう。

真紅狼に休む暇はない・・・（女性関係の意味で）

＼真紅狼side＼

雪蓮達が居て、マジビツクリ。

というか、さっきから嫌な汗がダラダラと流れているんだが、どうやったら止まるか教えてくれ。

「えーと、雪蓮と冥琳は何故ココに？」

「ちよつと、お願いがあつてね・・・」

「お願い？」

「ああ、そうだ。これは出来れば内密にお願いしたいがよろしいか？」

そう言つて俺達を見渡す冥琳。

全員は頷く。

「感謝する。・・・願ひとは———呉の独立についてだ」

それを聞いたとき、俺は嫌な汗が止まった。

あー、よかった。

＼真紅狼side out＼

＼冥琳side＼

全員が頷いたのを確認した後、私は話し始めた。

「知つての通り、今呉は袁術の客將をやっていて未だに袁のお膝元にいる状態だ。だが、私達はいつまでも奴らの下に居るつもりはない。そこで呉の独立を手伝って欲しくお頼み申したい」

「……なるほどね。この反董卓連合を機に独立しようと考えてるわけね？」

「ああ、そうだ。そこで袁紹、袁術の兵力を少しでも減らして独立を狙いたいのだ……」

「だが、袁紹、袁術の兵力を合すと総計で十五万は軽く超えるぞ？ そんな相手にどう相手をするつもりだ？」

夏侯淵殿の言葉に皆黙るが、真紅狼が言葉を発した。

「……次の虎牢関、攻略の際に袁紹・袁術軍をぶつけさせたらどうだ？」

「「「「え？」」」」

「だってよ、俺たちだけが苦勞してるのに連中は何もしないなんて割に合わないだろ？ 順番だよ、順番。今度はアイツ等にやらせればいい。敗北確定で出撃させりゃいい、戦力は減ると思うがどうだ？ それに多少は董卓軍の兵力を減らしてくれるって……俺たちは双方が弱ったところを叩けばいい」

とんでもないことを提案する真紅狼に皆は啞然としていたが、確かに単純だが良い作戦かもしれない。

「それはいいかもな……」

「だろう？」

「ついでに同盟を結ばない？」

「何故急に？」

「この連合の間のみってことでどう？」

「……………どうする、華琳？」

曹操殿は悩んでいたが、答えを出した。

「ええ、いいわよ。結びましょう」

「契約は成立ってことね」

「ええ」

そう言って曹操殿と雪蓮は手を取り合った。

「あ、そうだ。俺からもいいか？」

真紅狼は思い出したように言った。

（冥琳 side out）

（真紅狼 side）

手を取り合っている最中に思いだしたことが二つあった。

「呉の独立だが、案外簡単にうまくいくかもしれないぞ？」

「どういうこと、真紅狼？」

「いや、先程？水関攻めた時、張遼と会ってちよいと話したんだがな……………董卓は全然悪政を強いていないんだよ。むしろ民から慕われているらしい」

「じゃ、袁紹が回した文は……………」

「事実無根だな。多分袁紹のことだから、皇帝が崩御されたのを理由に都に進軍しようと思ったんだろ。だけど、そこに董卓が割り込んできた……………袁紹にとっては董卓が目の上のたんこぶではない、だから攻め入る口実を作って連合を結成……………ってところか。

ここまで言えば、冥琳、お前は俺が言いたいことが分かるよな？」
「ああ、その文が嘘だと分かったら袁紹は責任を取らなければなら
ない。何せ連合の総大将だからな。しかも、袁術もそれなりに被害
を受けるな、多分そこまで誘導したのは張勳と袁術だろう」
「そういうことだ。つまり俺たちにとっては連中が暴走すればする
ほど、こちらに良い口実を勝手に作ってくれるのさ」
説明すると俺と冥琳、華琳以外は「なるほどなあ」と首を上下に
振っていた。

「でも、張遼とは俺が戦わなきゃならないがな……」

「なんでですか？ 兄さん」

「情報もらう代わりに次会ったときに「手合せして欲しい」って言
われたから」

「というか張遼の槍、誰かの武器に似ていたんだが誰だっけ？
まあ、いいか。」

本人に聞くことにしよう。

まだ、雪蓮が言いたそうだしね。

「雪蓮、まだなんか言いたそうだな？」

「ええ、もう一つお願いがあってね」

「なんだ？」

「真紅狼って部隊を率いてるじゃない？ えーと「『神狼』か？」
そうそう、それ！」

「『神狼』がどうした？」

「部隊の訓練とか見学できる？」

「訓練の見学か……、別にいいが……何故？」

「どんなモノか見たくなったし、それでウチの兵士たちや武将が意
識を高まればいいかなあ」と思って」

「ふむ、それは私も興味があるな」

「んじゃあ、明日な。今日はもう疲れた」

「ええ、それでいいわよ」

「そんじゃ、解散だ。皆ちゃんと休めよ」

皆それぞれ、自分の天幕に戻っていいこうとした時、雪蓮が――――

「あ、曹操と夏侯淵、あと黄忠は残って……真紅狼もさりげなく出ていいこうとしない」

なんでバレたんだ!?

とうか治まった筈の嫌な汗がダラダラと流れ始めたぞ?!
凄い嫌な予感がする……

「冥琳も先に戻っておいてくれる?」

「……分かった」

そう言っ出ていく。

ああ、出ていかないで! マジでここに居てください!!
今、天幕の中には俺、華琳、秋蘭、紫苑そして雪蓮がいる。

「……なんで、この三人を呼び止めたんだ?」

「誰にも言わないから、言ってもいい?」

おい馬鹿やめろ!! その次の言葉を絶対に言うなよ? 絶対に言

うなよ!?

「…………あなた達三人——真紅狼のこと愛してるでしょ?」

言いやがった!!

当の三人は顔を赤らめている。

さらに爆弾発言が続く。

「しかも、曹操と夏侯淵って正妻?」

ゲフツ!

俺のライフがどんどん減っていく…………

「…………な、なにが言いたいんだ、雪蓮?」

予想できるからこそ、時には外れて欲しいモノがある。

「あのね、そこに私も入るから」

……………………。

「「「……………ハア?!?!?!?!!」」」

俺の耳がおかしくなったのかな?

いや、多分疲れているんだろう。早く寝ることにしよう…………

「真紅狼、正気になりなさい」

「……ハッ！（；。ㄥ。）」

いかん、意識がぶっ飛んでた。

「貴方、本気で言ってるの？」

華琳の眼が据わってる…………これは十中八九、俺に飛び火するな。

「ええ、本気よ」

「兄さん、これはどういうことですか?!」

ほーら、来た（泣）

「俺にもわからねえよ!?!」

「私は真紅狼の“背中”に惚れたわ」

「―“背中”…………?!!?」

俺以外の三人は首を傾げた。

「真紅狼のあの時の“背中”を見た時、私は『貴方と共に歩きたい』
と思ったわ」

その告白の後、華琳が――

「兄さん、立ってあちら側に行って私達に“背中”を向けてください」

「…………分かった」

俺は新しく創ったトレンチコートを着て、華琳の言われたとおりに向こう側を向いた。

「…………どう？ 貴方達も感じるでしょ？ その辺の男ではないモノが真紅狼にはあることを」

「確かに感じるけど……………」

「感じるけど？」

「それでも正妻の座は渡さないわよ？」

華琳と雪蓮はその場で睨み合う、その横では秋蘭と紫苑が「やれやれ」と佇んでいた。

わー、乙女の戦いが勃発だ。

原因？ もちろん俺が原因に決まってんじゃん。

というか、もう寝たいんですけど……………」

明日訓練あるし……………」

「お二人さん、ちょっといいですか？」

「「なに!？」」

「…………（ビクッ!）その話はまた今度…………という事でもう寝たいんだが？」

「「なら、私と寝てください（なさい）!?!」」

二人は再び睨み合う。

龍と虎が見えとるがな……………」

二人は「わー、きゃー」と喧嘩中……………」それを余所に紫苑と秋蘭がちやっかり俺の両横に付いていた。

「私と寝るぞ、真紅狼」

「あらあら、私も居るのよ？ 真紅狼君？」

ヤバイ、こちらも喧嘩勃発になりそうだ。

その後、二人は「あー！！」と言ってこちらに駆け寄ってきた。

結局今日と明日の夜で寝る順番を決めて、今日は華琳と雪蓮が明日は紫苑と秋蘭が寝ることになった。

（真紅狼 side out）

次の朝、何故か二人の服が乱れており、しかも顔がすげえ真っ赤だった……

呼吸も乱れていたのである。

……………まさか、俺はアレをやったのか？！

真紅狼に休む暇はない・・・（女性関係の意味で）（後書き）

次回は真紅狼の恥ずかしい癖が出ます。

月曜までに二話分は創るぞ。

勢いが肝心なので・・・

見学会 前編

（真紅狼 side）

……まさか、俺はあの癖が出たのか？！
だとしたら、この二人の状態が説明がつくんだが、一応聞いてみるか。

「お二人さん、一応自分が何をしたのか見当が付いてるんだが、一応言ってくれないか？」

「夜寝てたら、いきなり……」

「兄さんが抱きついてきました……」

ああ、やっぱりですか…… orz

「……もうイイデス」

やっぱあの癖か……、たまにやらかす癖が出たな。

そして、あの二人は説明して欲しいと言う顔がメツチャ出とる。

「「真紅狼（兄さん）、説明してくれますよね？」」

「……ハイ。あの、なんつーか、俺がたまーにやらかす癖でな。寝て居る時に近くのものに抱きついて寝ることがたまにあるんだ。少し離れていても、手が届けば強引に引き寄せてたりもしてな……それが女性だと、華琳たちみたいに当然、抵抗するだろ？ 服が乱れていたなら、確実にやらかしたな……。ということですが」
しかし、ここ最近出なかったから大丈夫だと思ったんだが、「夜ぐらい気を抜くべき」だなと考えが甘かったか。

「真紅狼の抱きつき、凄かったわよ……………」

「本当にスイマセン」

「そうね。色々と触られたし……………」

「……………スイマセン」

もう俺のライフは少ない……………（色んな意味で）

＼真紅狼 side out＼

＼華琳・雪蓮 side＼

「曹操、あなた…………どこを触れられた？」

「「触れられる」と言うより「抱き寄せる」の方が正しいわね。肩とお腹、あと胸を……………揉まれたわ、それも激しく」

「……………（思考回路のギアが止まりかけています）」

「孫策……………あなたは？」

「私は肩と胸を……………ただ、胸は揉まれるより「ぎゅー！」と抱きつかれたから凄い力で掴まれたわ。手の跡が付くかもしれないってほどね。……………あと」

「……………あと？」

「寝ぼけたんでしょうね……………胸を掴まれた後、首筋を舐められたわ。……………思わずゾクゾクしちゃったわ／＼／／／」

「……………（ブッ壊れました！）」

真紅狼の癖を知った二人は「「これからも兄さん（真紅狼）と寝たら、また抱きつかれるかも」と言う事を想像すると顔がニヤけて「「また寝てもらおう」と心に決めた。」

「……………（未だにブツ壊れてます）」

「兄さんの意識が未だに戻ってきていないわね……」

「自分が寝ている間にそんなことしていたら、誰でも意識を飛ばすのじゃないのかしら？」

「どうやって戻そうかしら……」

「予想外の事でもして、無理矢理起こせばいいじゃない」

「どうするのよ？」

「それはね———よ」

華琳と雪蓮は真紅狼に近づいた後、まずは華琳から真紅狼の唇に———キスをした。

しかも、このまえ中断されたの分が足されて、だいぶ長い間していた。

「……………（兄さんとのキス……………）／／／／／」

そう認識すると顔が赤く染まりともに真紅狼の顔を見れなくなっていた。

「……………ハッ！（；。ㄥ）」

真紅狼は取り敢えず起きたが、ここで起きなかった方が真紅狼にとっては幸せだったかもしれない。

なにせ、雪蓮が待ちかまえていたのだから……………

「お、俺は一体……………？　って、雪蓮さん、なんでそんなに寄ってきてるの？」

「曹操だけはズルイから私もさせてもらおうわよ」

「あー、昨日連絡がいつてると思うが、今日の訓練は呉の兵士や武将が見学に来るぞ。だからと言って、予想以上に見せつけるとかアホなことやらないでいつも通りに訓練に励めよ」

「「「「はい！」」」」

「んじゃ、解散。各隊、最初は準備運動に入れ。少ししたら『蒼龍隊』から順番に回るぞー」

話が終わったら、各隊はそれぞれの訓練場所に向かって行った。

「さて、迎えに行くか……」

移動中……

迎えに行ったら、予想外の人数でした。

というか、何か知らんが趙雲と翠、公孫賛、雪蓮達と捕虜の身である華雄が居た。

「……なんでこんなに居んの？」

「……先程、孫策たちとあってなその時に「真紅狼が率いている部隊を見学する」と言う話を聞かせてもらったので、私達も見てみたいのだがいいか？」

「あー、うん。まあ、いいぞ。ただし、言っておくが中身見ても驚くなよ？」

「「「「……どういうこと？」」」」

「実際に見りゃわかるさ……んじゃ、行きますかね」

蒼龍隊の訓練場所に移動中・・・

「ここが俺が率いる『神狼』の一部隊『蒼龍隊』だ。おい、雅ー！」

そう言って、部隊長の雅を呼び出す。

「はいはい、真ちゃん。いらっしやい」

「今は皆、何をやっている？」

「半分が馬の乗馬訓練でもう半分は各自のスタイルに合せた構え方を練習中だよ」

「なるほどな……。分かった」

訓練の内容を知った俺は見学中の雪蓮達に説明した。

「今、蒼龍隊がやっている訓練は馬の乗馬訓練と各々にあった構え方を模索中だ。質問があれば答えるぞ？」

「真紅狼、いいか？」

「なんだ、翠？」

「なんで今更ながら馬の乗馬訓練なんてやってるんだ？」

「昨日の俺達を見ていなかったのか？ 『蒼龍隊』とこの後回る『紅虎隊』は馬の扱いが必須だからな。常に馬を乗りこなして貰わなければ困るのさ。あとは……昨日みたいに馬で崖を下るなどをやるから、そういう訓練も慣れてもらうために」

「「「「え」？！」「」「」」

全員が驚く、俺たちが昨日何をしたかを……

「し、真紅狼……………」

「どうした、雪蓮？」

「……馬で崖を下ったの？」

「下りましたが、なにか？ なんなら蒼龍隊の隊員に聞こうか？」

皆、昨日蒼龍隊と紅虎隊は馬で崖を下ったよなあ！？」

「「「はい！！！」」」」

「答えてくれて有難う。訓練を再開してくれ！！ ……このよう
な感じですが？」

「「「……あり得ない」」」

なんと失礼な！

「さて、質問が以上なら次を回るが……」

「いいか、曹真……だったか？」

「祭か……なんだ？」

「この隊の皆の武器は、なんじゃ？ 見慣れぬ武器だが……」

「ああ、この隊は“刀”と呼ばれる主な武器と“小太刀”と呼ばれる
武器だ。……まあ、簡単に言えば二刀流って言えばいいかな？

本来ならもっと本数が多いがな……」

「どうということじゃ？」

「元になった姿をみせてやるよ——『奥州筆頭』！！」

BASARA2の伊達政宗の姿になり、両腰には刀が三本ずつぶら
下がっていた。

「これが元になった姿だ。本来なら六本だが、無理だから二本まで
落とした」

「お主は、六本も扱えるのか？」

扱えなかったらこの姿になった意味がないだろうが……

「なら、ちょっと見せてやるよ」

雪蓮達を少し離れさせ、目の前に仮想の敵を想像し、素早く一本を抜いて袈裟切りした後、BASARA技を放った。

「癖になるなよ!!」

最初に一本で敵を右から下に斬り、その後左腰にある刀を抜き今度は左から下に斬る。そして、右腰の刀を抜くと言う形で腰に差している刀が全部なくなるまで斬り続けた後、最後に六本の刀が両手に収まった後、周りの敵を吹き飛ばした。……………ところで終えた。

「———こんな感じだ」

「……言葉では出しづらいが、流れるような形であったな」

「まあ、実際に対峙してみないと分からないかもな……。じゃあ、次に行くぞ」

紅虎隊に（ry……

「うい、ココが紅虎隊の訓練場所だな」

「ここも先程の『蒼龍隊』と同じで馬を乗りこなすことは必須なのか?」

今度は周瑜が聞いてくる。

「ああ、ある意味『蒼龍隊』と『紅虎隊』は『神狼』での騎馬隊も

兼任してるからな」

「武器は二槍か……？」

「元の姿はこれだ——『天覇絶槍』！！」

BASARA2の真田幸村の姿になりました。

「紅虎隊に渡している二槍は本来の槍よりも若干軽く、長さを短め
にしているがそれでも遠距離からの攻撃が可能だ。ここは二槍をち
ゃんと扱えるように訓練をさせないと逆に足を引っ張るからな。…
……そんなじゃ、次に行こうか」

翠鳳（ry……

「はい、ここが翠鳳隊の訓練場所だな」

ここにきて雪蓮達は驚く、翠鳳隊の持ってる武器に………

「………曹真殿、あれは武器ですか？」

趙雲が聞いてくる。

「ああ、武器だ。あれでも実際の長さより半分にしてるつもりなん
だが……？」

「「「あれで?!」「」」」

「………本来の姿、見せるか。ちょっと、離れてな——『絢
麗豪壮』!!!」

そう言って出てきたのは真紅狼よりも若干長い超刀だった。

「これが本来の長さだ……………」

「「「な、長い……………」」」

「あれ、総長、来てたんスか？」

「今はここ翠鳳隊を紹介中だよ」

「お疲れッス」

「はいよ。とまあ、一人で周りに居る敵、数十人は潰せるな」

「…………真紅狼殿、ここは何か特殊な技能が必要なのですか？」

趙雲は先程の説明から、「ここも何か必要ではないのか？」と思つて推測したと思うが…………

「いや、ないな…………「あるッスよ!!」…鴻、お前何言ってるの？」

「あるじゃないですか!!」

「…………何があるんですか？」

「総長はあの武器で風圧を出せるッス!!」

「どうなんですか？ 曹真殿？」

「出せるよ。それなりに…………」

「見せてもらってよろしいですか？」

「じゃあ、鴻、お前飛ばされろ」

「俺ですか?!」

「お前が言っただから、お前がやれ」

「分かりましたよ。……………この辺でいいッスかね？」

「ああ。じゃあ、やるか」

気持ちを整えた俺はまず最初に上から下に両断した後、持ち方を変えてそこから右に一回転する要領で『超刀・朱槍』を振りまわした。

「…………オオオ、おりゃあ!!」

ブン……………ブァッ!!

しっかりと地面を踏みしめていた鴻の足が浮き、そのまま数メートル吹き飛ばされた。

「くっ！ やっぱ総長の風圧だと簡単に人が浮くッスね!!」

「これでも抑えてんのを知ってるだろーが……」

「「「これで抑えてんの!？」」「」」

「総長が本気出したら、数十人は一気に吹っ飛びますよ」

「「「……………」」「」」

空いた口が塞がらないってのはこういうことを言うんだろうな。

あの冥琳でさえ、呆けているし。

趙雲は何やら気になった眼で超刀を見ていた。

「曹真殿、それを持ってもよろしいか？」

「あ、これは重いぞ？」

「……………フフ、冗談を……………!？」

こちらに寄ってきて、手に取ったのを確認したあと俺は手を離れたら、見事に「ズシンッ」という音が響いた。だから言ったのに……………

「人の話はちゃんと最後まで聞け、分かったか？」

「……………（コクコク!!）」

俺は返して貰った。

「お、重かった(泣)」

「コイツ等に渡したのはこれを全て半分にした状態で渡しているんだよ。だから、コイツ等が持つてるのはそれなりに軽いのさ。んじや、次行くわ。あと少ししたら勝手に終わっていいから」

「了解ッス!!」

紫鯨隊に(r y……

「紫鯨隊の武器は斧槍か……………」

公孫賛が聞いてきた。

「姿変わるの面倒だから、武器だけ出すぞ? ————— 『天衣無縫』
!!」

「……………槍の先端に付いてるのはなんだ?」

「これは船を止める“碇”ってヤツなんです、俺だけ専用ですよ」

「どんな風に扱うんだ?」

「この“碇槍”は鎖で槍と碇が繋がってるんだ、だから振りまわすと先が外れて少し離れている敵でも当たる仕組みだ」

そう言った後、離れた俺は碇槍を振りまわした。

そうすると、先が外れてさらに遠くまで有効範囲が伸びた後、再び戻ってくる碇は「ガシャンッ!」という音の後、先端に収まっていた。

「こんな感じだ」

「紫鯨隊はどういう部隊なんだ?」

「簡単に言えば、工作技術ですかね。戦況を変えるために戦場駆け

まわって、仕掛けを施す。それが紫鯨隊だ。求めるなら発想力とか後方支援も担ってるんだよ。弓兵隊とも連携をとる訓練をしている。そちらは秋蘭が監督してるよ。

……それじゃ、最後に行きますか」

黒獅子隊に（ry……

「黒獅子隊は武器が無い……素手と“気”戦う部隊だ。その為か部隊人数も少ない。量より質が主だ」

「「“気”??」」」

「今からちょっと組み手をおこなうから見ろ。黒獅子隊は全員集合!!」

「「はい!!!!」」」

「これから俺VS黒獅子隊全員な」

「「了解!!!!」」」

返事した後、隊員は何人かは波状攻撃を仕掛けてきた。

ブンッ!

ドゴン!!

ドガッ!

真紅狼は攻撃はいなしたり、そのまま同士討ちを狙うなどして避けていた。

「……ラァ!」

「ぐっ！ はあ！ “金剛剄”！！」

「練り方が甘い！！ ちゃんと発動しろ！！ 足元まで覆ってないぞ！！」

「！！ 今だ！！ 全員着地瞬間に総長を狙え！！」

「「応！」」

「空中でも撃てる技があることを忘れるなよ？」

活剄衝剄混合変化——『竜旋剄』！！

空中で体を回転させ衝剄と風圧で黒獅子隊員達と風を同時に吹き飛ばした。

その中の数人は着地と同時に勢いを殺したみたいでダメージがあまりなく再び向かってきた。

「全員、旋剄で動きを攪乱した後、攻撃だ……行くぞ！！」

風の合図の元、旋剄の使用で目で追う事は不可能となったので、待ちに入った。

そして眼を閉じた。

その時、一気に襲ってきた。

「これが本当の金剛剄だ」

活剄衝剄混合変化——『金剛剄』！！

バチッ……ゴォン!!

ぶつかる瞬間、一気に剄の障壁を全身に張り、纏めて前方に吹き飛ばした

「ここからは俺のオリジナルだ!! 金剛剄からの——」

活剄衝剄混合変化——『雷迅』!!

一瞬、雷が轟く。

真紅狼は人の眼では捕えないほどの速度で凧たちに突進し、衝撃波と雷撃を叩き込んだ。

「「つつう!!」」

「今日も俺の勝ちだな」

「「「有難う………ごさいました」」」

「はい、ご苦労さん。ちゃんと体を休めろよ」

「「「はい」」」

「とまあ、こんな感じだ………って、華琳達以外驚いてなににも言えないって状態か。一応最初に言っただけなんだから「驚くなよ」って」

「……それでも驚くものですよ」

「さいですか……」

それから2分後、再起動した。

そこからはもう凄い問答が凄まじかった。

そんな中、雪蓮達に捕虜の身である華雄が突然口を開いた。

「……………ちよつといいか？」

「なんだ、華雄？」

「……私と手合せしてもらいたい」

＼真紅狼 side out 〵

見学会 前編（後書き）

次回は華雄と勝負です。

前半はエロ、後半は真面目になっております。

この回で終わらすつもりだったんですが、長いと判断しましたので分けるようなことになりました。

次回、ちょっと文が荒くなるかもしれません。

ユーザー紹介文に「批判、中傷はおやめください」と書いてあるのに送ってくるバカ共が来るので現在すこぶる機嫌が悪いんです。

……っと、愚痴ってスミマセン。

見学会 後編（前書き）

前回、文が荒くなると言いましたが、どうにかまりました。

こんな小説でも見てくれる方達に失礼だと思い、怒りを抑えていつも通りに書き上げました。

今回の終わりはエロいです。

・・・一部だけけどね。

見学会 後編

（華雄 side）

全部見終わった後、私は口を開き、曹真に頼み込んだ。

「……………ちょっといいか？」

「なんだ、華雄？」

「…………私と手合せしてもらいたい」

周りは驚いていた。

捕虜の身であるため、手合せを出来るかどうか怪しいが、いくつもの武器を手足のように操るこの者と戦ってみたかった。

それに、この者を先程から見ると自分が未だに限界まで到達していない気がしてならなかったのである。

「で、どうだろうか？」

「…………ただ戦いだけか？ それとも何か思う所があって戦いのか？」

…………どっちだ？」

「…………後者だ」

「なら、やるか。悪いが冥琳、華雄の手を自由にして武器も渡してやってくれ」

「お、おい、真紅狼…………いいのか？ 手合せ最中に命を取られるかもしれないんだぞ?!」

「大丈夫だ、俺は死なねえよ」

「手合せしてくれることに感謝する」

「別に構わんさ…………場所を移すか」

そう言った曹真は場所を選定しにいき、私は手の拘束を解かれ武器も一時的に返してもらった。

「華雄、こっちだ。……この辺でいいな。さてと……」
そう言っ、曹真は私と間を取った後、地面に五つの武器を地面に刺した。

「挑戦者には選ばせてやるよ。どの武器で戦いたい、か、選べな！」
私は五つの内四つは知っていたが、一番左側の武器は見たことがなかった。それでそれを選んだ。

「私から見、一番左側の武器を選ぶ！」
曹真は私が選んだ武器を手にとった瞬間、姿が変わっていた。
全身黒の鎧で包まれており、異様な雰囲気だった。

「では、始めようか……」
曹真は構える。私も自分の武器である金剛爆斧を担いだ。
「華雄 side out」

「真紅狼 side」
俺は華雄にどの武器で戦いたい、か、選ばせた。
まさかよりによって、『征天魔王』を選ぶとは思わなかった。
だが、選んでしまったモノは仕方がないので、それを手に取り姿も
B A S A R A 2 のコス2に変化させた。
この姿は少なからず、相手を威圧させる。
実際に華雄もこの姿を見て、一步身を引いていた。
本来なら右手に大太刀と左手に長銃だが今回は手合せの為、長銃で

はなく、左手も大太刀になっている。

“殺し合い”のときなら当り前のように長銃を使うが殺しちゃマズイからな。

それでも相手を威圧するほどの禍々しさが大太刀から出ている。

何せ、この世の者とは思えないほどの顔が大太刀の腹に描かれているからだ。

「来ないのか？　なら……こちらから行くぞ!!」

俺は両手を伸ばしながら疾走し、右から凶刃を振るった。

ブンッ！

華雄は避ける……

避けられた俺は今度は左手の大太刀を下から振るった。

ブォン！

ガギン!!

さすがに二撃目は華雄は自分の得物で防ぐしかなかった。

「ぐっ?!」

受け止められたか………。

それなりに力を込めて振るったんだが、手に痺れすらないとはな………、コイツは厄介だ。

そこからは一方の攻撃を避けては、反撃するといった。
紙一重の戦いになり、避けきれない攻撃が何度かある度に金属音が
一帯に鳴り響いた。

「(チッ！ これじゃあ、何時まで：「ガキイン！」経っても決め
手に欠け「ギイン！」……るな。次の接触の際に大太刀で受けてそ
のまま“金剛剄”で吹き飛ばした後、BASARA技を放つか)」
「(あの両手の大太刀……近くに居るだけで：「ギャ……リイン！！」
禍々しさがもつと凄いな。そのせいか無意識の「キイイン！！」：
：内にいつもの威力で打てない……。次の一撃でよろめかせて、そ
こで決めるしかない！)」
お互い、次の一撃で決める事にした。

「疾ッ！」

華雄が金剛爆斧を右から一刀両断してきた。
俺は右側を向き、両刃を立てて受け止めた。

ガッ……ギャアアン……！！

「ぐうう！！ かつ、活……剄、活剄衝剄混合変化……！！！」

『金剛剄』……！！

どうにかして『金剛剄』を発動出来た俺は、BASARA技を発動

しようと思ったとき…………

「……フンッ!!」

キーン!!

「なっ!?!」

『金剛剋』で吹き飛ばしたはずの華雄が何故か立っており反撃したのである。

ちよ、ちよっと待て!?

なんで『金剛剋』受けてピンピンしてるんだよ?! コイツは!!

え、バグ? バグなの? ↑(超混乱中)

んなアホな!!

しよ、しょうがない!

『障壁深紅』で今度こそ吹き飛ばして、やるしかない!!

翻ったマントが華雄を吹き飛ばすことに成功し、俺は素早くBASARA技を放った。

「いざや開かん、冥底の門!!!!」

後ろのマントが自我を持ったように華雄に襲いかかり、右から左からと襲いかかる。

華雄は最初の方はなんとか対応出来ていたが、一瞬目を離してしま

い、そのままマントに叩きつけられて……………最後は盛大に吹き飛ばされた。

その際に手に持っていた得物を離してしまった。

「……………ふん、愚か者があ！」

「があー!!」

「……………まだ続けるか？」

首元に『魔神冥王』を突き付けて、問いただした。

「曹真、お前は強いな。……………私の負けだ」

「じゃあ、手合せは終わりだ」

俺は元の姿に戻り、華雄を立たせた。

「ほれ、（ぐいつ）……………大丈夫か？」

「ああ。しかし、私の武もまだまだ……………だな。まだ伸びそうだ……………」

「……………そうか。（実に伸びないで欲しい。しまいにはBASARA技を喰らっても、普通に立っていそうで怖い）」

俺は華雄の成長がちょっと怖くなった。

（真紅狼side out）

（華雄side）

手合せの結果、私は負けてしまったが、まだまだ自分の武が限界を超えてないことが分かった。

しかも、あの横薙ぎのときに吹き飛ばされた時の力……………どうやっても人の力では出せない威力だった。

「（……曹真の元で訓練すれば、あの力がなんなのか分かるかもしれないし……、うまくいけば自分のモノに出来るかもしれないな）」
私は新たな目標が出来たことが嬉しくなった。

（華雄 side out）

（真紅狼 side）

手合せも終わり、見学も終わりにして俺は早々に寝ることにした。
しかし、寝ようとした時入ってくる者達が居た。

「ああ、そう言えば今日は秋蘭と紫苑で寝るのか……orz」

「ああ、そうだぞ。」

「失礼するわね、真紅狼君？」

「ううかこの二人、胸デカイよなあ。」

間違ってもあの癖を出さないようにしないと……

そんなことを思っていると秋蘭は何か思ったのかは知らないが俺が懸念してる事とは別の事を口に出していった。

「安心しろ、真紅狼。この天幕には華琳様の命令で誰も近づかないように言ってるから」

「ああ、下準備は完璧ですか……。取り敢えず、俺は寝るぞ。…

……結構疲れた。」

初めてだ、金剛剉を喰らってケロッとしてる奴なんかみたの……。
そう思いながら寝た。

（真紅狼 side out）

———次の日の朝、起きてみたら……………

うん。案の定二人は顔が真っ赤というよりリアルタイムで息が荒くなっていた。

紫苑なんか、喘ぎ声まで出してる始末で、「なんでかな?」と思ったら俺の右手が直に胸を弄っていたからだった。

取り敢えず、一言。

奴は一度締めるべきだな（怒）！！
サクシャ

……………こっちは、やっちもうたorz

見学会 後編（後書き）

はい、ウチの華雄さんはバグです。
突っ込まないこと!!

次回は冒頭からエロに走ります。・・・多分

話が進まないなあ・・・

先日、外に出ていたら高校時代の友人と会い、お互いゲーセンに行くようだったのでメルブラで対戦しました。

お互いそれなりに出来ますが、たまにコンボをミスったりするので実力は五分五分です。

私のキャラはクレセントの七夜、友人はハーフのネコアルクでした。

私はネコアルクの全スタイルが大っ嫌いです!!

アレに負けるとイラッと来ます。

そして、私がアーケードをやると何故か絶対姫アルクが乱入してきます。

・・・チクシヨウ!!

“覚悟”の裏側・・・（前書き）

宣言通り、冒頭だけはエロくなった・・・

あ、この後皆さんは「アウトオオオオオオ！」って言う。

“覚悟”の裏側・・・

（真紅狼 side）

朝起きたんだが――――――――――オウフ o r z

「……………またか」

ああ、寝ている時の自分を殴りたい。
すでに右手は触っていないが、余韻が続いてるようです。

「ひゃうううう・・・・ハァー、ハァー？」

凄いエロい。

未亡人とあって余韻を味わっている紫苑の姿は艶やかだ。

「……………真紅狼、お前、夜は凄いな」

「言うな、秋蘭。言われると恥ずかしくて死にてえ……………」

「で、でも、……………真紅…狼君…がわ、私達の胸の……………触り方は凄かった……………わ」

「アレ、一応俺がたまにやらかす寝癖なんですが……………」

「ほお？ イイことを聞いた」

「……………墓穴掘った（泣）」

「また一緒に寝てくれるわよね？ 真紅狼君？」

「ああ、逃げ場がない……………（超泣）」

言った端から追い詰められていく俺……………身も心もボロボロだ。
そんな中、秋蘭達は誘惑且つ本心と言った。

「私は、真紅狼（君）に抱かれたら、嬉しい（ぞ）（わよ）」
「いや、まあ、そこまで言ってくれるのは有難いんだけどね……………」
「有難いんだけど？」

“（怖いんだよ）”

二人は真紅狼が何か言ったが小さくて聞こえなかった。
その後、華琳達がやってきた。

「兄さん（真紅狼）、入りますよ（るわよ）？」
何故か、雪蓮まで来てた。

真紅狼 side out

秋蘭・紫苑 side

寝ている間の真紅狼は凄かったな。
後ろからいきなり抱きついてきて、胸を弄られた時は驚いた。
しかもイジリ方がいやらしくて、いきそうでイケないところで止めるのだから、……………本当に無意識なのか疑ってしまったが、寝息を立てていたので無意識だったのを確認した。
しかも、それだけでは終わらず、服の間に手が入ってしまったって直接胸を触られて「ギューム！」と掴まれた時は、意識が飛びそうになった……………。

真紅狼君に抱きつかれた時、秋蘭さんを見たら、すでにやられた後だった。

私の場合、後ろから首筋を舐められた時はゾクゾクして、体が震えた。

その後、真紅狼君の方を向いたら、私を引き寄せて胸の中に顔を埋めて、寝てしまった。

私は真紅狼君の寝息が吹きかけられる度にくすぐったくてしようがなかった。

寝ている時、真紅狼君は小さな声で涙を少し流しながら……………

“……母さん”

と呟いていた。

この呟きを聞いた時「寝ている間だけでもいいから母親の代わりになろう」と思い、真紅狼君をやさしく抱き寄せた。

安心したように真紅狼君は涙を止めて、静かに寝た。

——ただ、起きるまで胸を撫で続けられるとは思わなかった。

そして、真紅狼は私達の誘惑に対して——

“（……よ）”

と小さな声で呟いた。

全然聞こえなかったもので、なんて言ったか聞こうと思ったら、華琳様と孫策が入ってきた。

＼秋蘭・紫苑 side out＼

＼華琳 side＼

朝早く、私は兄さんの天幕に向かおうとしたら、途中で孫策と会った。

「……なんでココに貴女がいるのかしら？」

「そう言う貴女はドコに行こうとしてるの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言で睨み合った後……………

「一緒に行きましょう？」

「そうね」

どうせ向かう場所は同じなので一緒に向かった。

「兄さん（真紅狼）、入りますよ（るわよ）？」

入ると案の定、服が乱れている二人の姿があった。

「秋蘭、紫苑……………貴女達も？」

「そういう華琳様に孫策様ですか？」

「……………ええ。どうだった？」

「……………色々凄かったです／＼／＼」

私は「やっぱり…………」と呟き、孫策は「でしょうね」と苦笑していた。

秋蘭達は兄さんに何かを聞こうとしていたので、私も聞いてみた。

「秋蘭達は何を聞こうとしてるの？」

「真紅狼が先程、小さな声で何かを喋ったので大きな声で言ってもらおうかと……」

「なんて言っただんですか？」

「……悪いが相手が華琳でもこれだけは言えない」
そう言って、口を閉ざす兄さんだった。

孫策はそんな事とは別の事を秋蘭達に聞いていた。

「貴女達、真紅狼に抱かれた？」

「「………いえ（いや）」」

「ねえ、真紅狼」

「なんだ、雪蓮？」

「私達がこんなにも積極的になってるのに……何故貴方は私達を抱こうとしないの？」

「——確かに言われてみればそうだった。

何時もやんわりと断られていた。

「……もしかして、あの男^{マクオ}みたい^{マクオ}に認識されるのが嫌なの？ 大丈夫

夫よ、私達は貴方をそんな風に見ないし、思わないわよ？」

兄さんは黙ったままだった。

「……真紅狼、答えてくれ」

「……真紅狼君」

「……兄さん」

兄さんは諦めたように口に出した。

「・・・だよ」

「聞こえないわ、もうちょっと大きく言って……」

「・・・んだよ」

「もっと、大きく言ってくれ……真紅狼」

“怖いんだよ……華琳達と繋がるのが”

「——何故ですか？」

「……華琳と秋蘭は俺の過去を知ってるな？」

「……過去って？」

孫策と紫苑はまだ兄さんと出会って短いから兄さんの過去を知らなかった。

「華琳、話してやってくれ」

「……いいんですか?!」

「俺みたいな奴を「愛してる」なんて言ってくれたんだ、隠し事は無しにしたい」

「……分かりました。これから話すことは、他言無用でお願い」

「「ええ」」

そこから兄さんの過去を話した。

兄さんがこの世界の者ではない事・・・
生前に自分の親族にされていた事・・・
その親族を殺しまわった事・・・

これを聞いている孫策と紫苑は、驚いたり、悲しんだり私達が聞かされたときと同じ表情だった。

〔華琳side out〕

〔真紅狼side〕

俺の過去を聞かされて上で俺は話し続けた。

「さて、俺の過去を聞いたうえで話すが……いいか？」

「「「……（コク）」」」

「先程言ったように俺は華琳達と繋がるのを恐れているんだよ……」。

嫌いとかじゃなくてな……『喪う』のが怖いんだ、俺はな。

“俺と繋がってしまったことで華琳達を喪ってしまうかもしれない”と考えると怖くて怖くて無意識の内に避けてしまうんだよ。だから、一定の距離を保てば喪わずに済むと考えてしまおうんだ。——もう二度と“大切な者達”を喪いたくないから……だから、俺は抱かないんだよ」

俺は自嘲しながら、本音を話した。

沈黙する四人の中で一人だけ静寂を破った。

「だから、真紅狼君は今日寝ている間に「……母さん」と呟きながら泣いていたのね」

「……そんなことを呟いていたのか」

そんなことを呟いているとは………な。

いつまでたっても心は弱えなあ。

「……兄さん、私は嬉しいです。兄さんがそこまで私達の事を想ってくれることに対して。……安心してください、私達は勝手に居なくなったりしませんよ」

「……そうね。真紅狼を置いてどこかに行こうとしないわ」

「むしろ、真紅狼がどこかに行きそうだがな……」

「その時は私達が止めますね」

四人は微笑みながら、俺の手を握ってくれた。

「……強そうに見えても心がこんなに弱いんだぞ？　いいのかそれで？」

「人間、誰かしらは弱いところの一つや二つ持ってるわ……」

「だから、真紅狼君がそういうのを持っても気にしないわ」

そう言った後四人は腕を組んだり、後ろから抱きついたりしていた。

（真紅狼 side out）

——ああ、本当に——

——俺には勿体無い女達だよ——

“覚悟”の裏側・・・（後書き）

なんというか後半がシリアスになってしまった。

後半は真紅狼が閉ざしていた本音です。

次回は霞戦ですよー！

スペースがあれば、恋戦の少しだけ入れるかも？

V S 張遼（前書き）

今回はちょっと書き方を変えまして、真紅狼と霞の戦い時のみ『side』を付けていません。

そちらの方がなんか臨場感が出るかな？と思って。

その辺でなにか意見がありましたら、送ってください。

今回はBlood Heartが聞きながらがよろしいかと・・・

VS張遼

（真紅狼side）

本心を話した後、俺たち連合は虎牢関に着いた。
着くと同時に軍議を始めると言ってきたので集まることになった。

「さて、皆さん！　ここまで来ましたわ！！　ここを抜ければ都は
すぐですわ。」

ですが、ここも門が閉まっています！！　貴方達のどちらかが先遣隊
を担ってくださいらない？」

と目上目線の袁紹。というか、朝っぱらからテンション高め……

そしていつも通りにマクオは華琳、雪蓮、冥琳、秋蘭、紫苑の胸を
ガン見していたので、前回は忠告だったが今回は警告にすることに
した。

マクオに見えないように右手にトランプの一枚を手を持ち、極死の
要領でマクオの首を掠めるように放った。

……………この場で極死が出来ればなあ。

ヒュッ！

カカツ！

ビィィィィン……………

「「「……………」」」

辺り一帯は俺の行動に驚き、静まりかえってる。

「な……なに……何するんだよ!？」

「やかましい……自分が行った行動を思い返せ、グズ」
もうこのやり取りもテンプレ化してきたな。

思いだそうとしていたとき、マクオの首元から血が薄ら滲み出てきたのを関羽たちが発見してから、あちらは喧しくてしょうがなかった。

連中をそちのけで話を進めることにした。

「袁紹、発言してもいいか？」

「どうぞ、曹真さん。良い策でも思いつきましたか？」

「ああ、とてもとても良い策が思いついたよ」

「本当ですよ!？」

「ああ。それはな……袁紹と袁術が行けばいい」

「は？」

L

いまいち俺が言ったことが理解できていないようだった。

「何をおっしゃってるのか、理解できませんわ!!」

「なに簡単な事だ……アンタ達が先遣隊を務めるんだよ」

「馬鹿にしていますの?!」

「……順番だよ、順番」

「順番ですって……？」

「そう順番だ。俺たちは？水関で働いた。なら今度はアンタ達が働く番だろ？」

それとも何もしないで都に入るつもりか？ この連合が終わった時に朝廷はなんて思うだろうな……何もしない袁紹・袁術軍と連合に大きく貢献した曹操軍と孫策軍——どちらに褒美を与えると

思う？」

すかさずマクオが「俺たちの名前が入っていないぞ！！」と叫んでいたがスルーした。

「……………！！？」

「子供でも分かるよな？　こんなことは。それに、もしうまく突破出来れば、最初に都に入れるのはアンタ達なんだぜ？」

自分たちに置かれた立場を教えつつ、口を滑らしたように誘導した。

「少し考える」と言って、（華琳に教えてもらったが）文醜と顔良、そして袁術、張勲で顔を合せて話し合っていた。

マクオと言うと、先程警告してやったばかりなのに、後ろを向いて会議している袁紹・文醜・顔良・張勲の尻を見ていた。

奴が想像していることが簡単に分かるっていうのが本当に嫌だ。

おそらく、バックでやっているシーンでも妄想しているんだろう。

「……兄さん、あの男……ニヤけてません？」

「脳内桃源郷にでも入りこんでるんだろうよ」

「気持ちわるっ！！」

「見たくなかったら、俺の背中の中にな。……お前らがマクオの汚ねえ気で穢されたくないし……だけど、ちょっと待ってな。もう一発放つから」

さっきは右側に放ったが、今度は左側に放つことにした。

「……………ま……また！？」

「もう帰れよ、種馬」

その後は恒例のスルーで。

ん？　悪口が酷くなってる？　なんでだろうね？

どうやら結論は出たらしい。

「分かりましたわ！ 私達が出ます！！」

「よし、決まったことだし。俺らは帰らせてもらう」

「ええ、どうぞ」

そう言って、天幕から出た。

「あー、無駄に疲れた……」

「ご苦労様です」

「さて、俺も戦わないとならないからな、準備……って言っても武器の点検ぐらいか」

「じゃあ、真紅狼。私達は戻るわね……」

「ああ。気をつけてな」

「そちらもね」

雪蓮達と別れた後、すぐに袁紹達は策も無く突撃した。

結果は何も言わずとも、圧倒的な敗退だった。

ま、こうなるよな。

「――今度は俺たちの番か」

＼真紅狼 side out＼

＼霞 side＼

遠くから連合の足音が聞こえてきた。

ようやくウチは戦える！

そんな風に思ってたら、最初に攻めてきたのは真紅狼やのうて袁紹・袁術の混合軍やった。

バカみたいに真正面から突っ込んでくるもんだから、対応が楽でし
ようがなかった。

気が付いていたら、いつの間にか袁紹・袁術軍は撤退していた。

「――ようやく、ウチは真紅狼と戦える!!」

「……霞」

「ん？ 恋、なんや？」

「……真紅狼…誰？」

「曹真っておるやろ？ 曹操の兄の」

「………（コクリ）」

「そいつや!! なんでも『紅き獅子』って呼ばれてるらしいんや」

「……聞いたことある」

「興味持ったん？」

「………うん」

「なら、恋も挑んでみたらどうや？ 一番手はウチやけど……」

「………そうする」

そんな話をしていたら、一人の見張り兵が報告に来た。

「張遼將軍！ 呂布將軍！ 曹操軍・孫策軍・劉備軍が侵攻してき
ました!!」

「よっしゃ！ 打って出るで!! 準備をしいや!!」

「はい!!」

「………音々音はお留守番」

「音々音も行きます!!」

「………ダメ、ここを抜けられたら、月の所まで敵がいつちやうか
ら」

「うっ！ 分かりました、待ってます」

「………いい子（ナデナデ）」

恋の方も準備が出来たようだった。

「門を開けろ！！」

ギギギイイイイイ……

「ほな、行くで！！」

そう言って、馬に跨り真紅狼の元に向かって行った。
そして――――

「また、逢ったな。………真紅狼」

これから戦う男の名を呟いた。

＼霞side out＼

＼真紅狼side＼

俺たちが虎牢関に向かうと、門が開き、中から霞ともう一人の女性にその部下たちが出てきた。

霞ともう一人の女性は真っ直ぐ俺の元に来るが、部下達は雪蓮達の方に半分、こちらに半分向かってきた。

なので、『神狼』を動かした。

「『蒼龍隊』と『紅虎隊』は右翼から迎撃しろ！ 『翠鳳隊』と『

黒獅子隊』は左翼からだ!! 『紫鯨隊』は華琳達を護れ!!」

「「「「はっ!!!!」」」」

「ただし! 一人も殺さず出来るだけ気絶させろ」

「「「「その命、確かに承りました!!」」」」

「では……往け!!」

『ウオオオオオオオオオオオオオオ!!!!』

そう指示し、舞台を整えた。

「中々、気が利くやないか……」

「俺と戦いたいんだろ? なら、周りは少ない方が良さだろう?」

「それもそうやな」

「ところで、そちらの方は?」

「……名は恋」

「それって……真名か?」

「……うん」

「上はなんて言うんだ?」

「……呂布奉先」

「――え?」

マジで? あの呂布かよ!!

これ、俺ヤバくね?

ちよつと予想外の出来事に頭を悩ませていたら、マクオ達が出しやばって来た。

……仕事しろって言おうと思ったが、止めた。

マクオの仕事と言ったら、ヤルことしか能がなかったな。

「おい、張遼!」

「なんや!!」

「俺たちの仲間にならないか?」

おお、いきなり副声音が酷いなあ。

「戦うなんて止めて、俺たちと乱世を平定しようぜ！」

《俺のモノになってくれよ！！　愉しませてやるから！！》

「なんや、あの男？」

「アレはマクオって言ってな正式名称は“まるで屑な種馬男”って言うんだ」

「た、種馬！？」

「ちなみに先程の言っていたことの本音は「俺のモノになって、抱かせろ」だってよ」

「だ、抱かせ……！！？」

「おや、顔が真っ赤だぞ？」

「あ、当り前や！！　そんなこと言われたことないんや！　笑いたければ笑えや！！」

「笑わないさ………　ただ、初々しくて可愛いじゃないか」

「なあ”？！　か、可愛い！！？！！？！！」

あれ？　逆効果だったっぽい……。

煙が出るんじゃないか？　ってぐらい真っ赤になってる。

「一言言っておくと、マクオの元には絶対行かない方がいいぞ？」

「な、なんで？」

「奴の隣に二人の女が居るだろう？」

「ああ、黒髪でポニーテールの女とツインテールでピンク色の髪の子が居るな……？」

「あの二人、あの男に骨抜きにされているから」

「………は？」

「つまり、抱かれてるんだよ。そんでもって霞も抱くって言うてんの」

「……………もしかして、あの男変態？」

「変態って言うか…………種馬？ 凄い手が早いし、女なら子供でも抱くぞ？」

「最低や……………」

「俺の見立てでは……………あ、張飛と諸葛亮も抱かれてやがる。本当に見境なく手を出してるみたいだな」

「アイツ等は無視した方がいいんじゃない？」

「それが一番だ」

「なら、無視して始めようか？」

「ああ……………やるか」

さて、武器は……………二槍だな。

そして、俺は武器を出した。

スパーダ
『棲羽亜蛇』

お互いに武器を構えて、舞台に立った。

く真紅狼 side outく

お互いに武器は構えたまま、動かず、常に相手の動きを静かに見ていた。

だが、その沈黙を先に破ったのは霞だった。

霞は『飛龍偃月刀』を突き出した。

ヒュッ！

突きによる風斬り音が真紅狼の耳に微かに届く。

真紅狼はかろうじて避けた。

真紅狼が思ってたよりも霞の槍捌きは早く、的確だったため侮っていたのである。

そうして霞の突きによる猛攻は続くが、何拍置いてから真紅狼が急にリズムを変えた為、霞は一時的に動けなかった。

真紅狼はその一瞬を逃すことなく、左手で弾き、右手でこちらも突き返していた。

ビュウッ！

風斬り音がかなり近くで聞こえた霞は冷や汗をかいた、そこから真

紅狼の反撃が始まった。

突き、薙ぎ払い、横薙ぎとフェイント混ぜ折りながら、攻めているので変動する動きについていくだけで霞には精一杯だったが、霞には考えがあった。

それは「あんな連撃を繰り返すのであれば、どこかで息継ぎがあるはずだ！」と……そう考えていた。

実際にその後、真紅狼は止まった。

霞はその瞬間を狙って、自分の中でも最速で槍を放った。

………ギン！！

最速で放った槍はいとも簡単に受け止められていた。

真紅狼は息継ぎだけで止まったのではなく、決めの一撃を待ちかまえるべく止まったのだ。

真紅狼は受け止めた後、大きな声で叫んだ。

「闘魂………絶唱！！」

そう言い放った後、いきなり強い風が吹き、さらに真紅狼は言った。

「燃えよ、我が魂!!」

両手を広げて、自分を独楽のように回し霞に迫る。

霞は『飛龍偃月刀』で真紅狼の猛攻を防いでいくが、次第に一撃が重くそして早くなっていき受け止めるのに、辛くなっていた。

真紅狼の最後の一撃が入った後、霞の『飛龍偃月刀』は耐えきれなくなり、真っ二つに折れ、霞も吹き飛ばされ起きあがろうとした時にはすでに真紅狼の武器が霞の目の前に突きつけられ……長く短い戦いが勝負を決した。

（霞side）

ウチの『飛龍偃月刀』が折れた時、ウチは負けを確信した。

チャキ……

「霞、お前の負けだ」

「ああ、真紅狼の勝ちや」

くつきりと勝敗を言ったら真紅狼は武器を収めた。

その後、手を差し出して――

「大丈夫か？」

などと、優しい声で無事を確認してきた。

最初は戸惑ったが、手に触れた時ウチは真紅狼の“何か”を感じた。

それが何なのかは分からへんやったけど、とても温かくそして強いモノだった。

そして、真紅狼が“背中”を見せると自然と頬が赤くなってくる。

「おい？ 霞に聞いてる？」

「…………ハッ！ な、なんや、真紅狼？」

「ボーツとしてたぞ？ 折れた武器どうしようか？ って聞いてたんだが…………」

「あー、そうやなあ。折れたんやっけ？」

「…………新しいの創ろうか？」

「え！？」

「俺が折ったんだし、俺が創るよ。形はこのままがいいか？」

「え、あ、うん。そういやウチはどうなるんや？」

「俺に負けたから、形式上魏に下るってことになるんじゃないのかな？」

そう曖昧に答えていた。

そこに恋が来た。

「…………終わった？」

「ああ、終わったで」

「…………勝った？」

「負けた。そっちはどこに行ってたんや？」

「…………関羽のそこ」

「強かったか？」

「……………（フルフル）。弱かった」

「やっぱり、骨抜きにされているから、弱くなったのかねえ。で、何故俺を見ているんだ？」

「……………戦ってみたい」

「……………今？」

「……………（コクリ）」

「しょうがねえ、連戦はキツイがやるかあ！！」

そうして、今度は恋と真紅狼が戦う事となった。

（霞side out）

V S 張遼（後書き）

次回は恋とのバトルです。

その時はBeot flom metty bloodがよろしいかと思っています。

いつの間にかお気に入り件数が500件突破してた。
番外編でも創ろうかな・・・

V S 呂布（前書き）

一応これで、虎牢関は終わりです。

V S 呂布

（真紅狼 side）

『豪炎轟如』を出して、間合いを取ろうとした時、悉くマクオがまた出しゃばって来た。

「おい、呂布、先程も言ったけど俺たちの仲間になってくれないか？」

副声音が聞こえないと……言う事は真面目に言ってるのか……。
だけど、仲間にしたら絶対抱くな、あれは。
というか、今のせいでテンポが狂ったから、ちょっとカーネフェル叩き込んでこよう、フルコンボで。

“SUPER CANSLE”！

408

「テメエは黙ってろ！！」

俺は高速で乱舞しながら切り刻み、仰け反ったマクオには持っていない程の技を叩き込んだ。

“DREAM CASELE”！！

ドゴォン！

みぞおちに入り、蹲ろうとするがそんな暇を与える俺では無かった。

「……魅せてやるよ、カーネフェルの真髄を……！」

ババババババババババツッ！！！！

右手と左手で持てるだけのトランプを高速で投げつける。マクオの左足、右足、左腿、右腿、左腕、右腕、左肩、右肩、腹に胸に、鎖骨に52枚のカードが襲いかかる。

「……………それではごきげんよう」

マクオの服装は至るところが破れかぶれになり、そこから切り傷や擦り傷があり、さらには血も薄らと出ていた。

関羽たちは睨んでいたが、無視し、恋の所に向かった。

「……待たせたな」

「……………ん」

「さて、先程は邪魔が入ったがもう入らない」

「……………」

――さあ、戦り合おう!!――

（真紅狼 side out）

真紅狼は『豪炎轟如』を鞘から出す瞬間、その鞘を恋に思いっきり投げ飛ばした。その後、一気に恋の元まで駆けた。

恋はまさかの攻撃に多少驚いたが、すぐさま頭を切り替えて、最小の動きでそれを避ける。

真紅狼はその攻撃が避けられること前提で投げ飛ばして、次の行動に移っていた。

恋が左右に避けるのではなく、前後の避けるのであれば真紅狼の次の行動にも避けれたかもしれないが恋は左右で避けてしまった為か、次の攻撃は避けるには難しくなってしまった。

真紅狼は約2m弱ある得物を横薙ぎした。

真紅狼は、この攻撃は得物で受けると確信していた………だが、恋は受けるのではなく、跳躍して自分の得物『方天画戟』を真紅狼の首元掛けて突きを繰り出した。

真紅狼は跳躍で避けられるという荒業を見せられた上に、相手の得物が自分の首元目掛けてくるといいう攻撃に対処が遅れ、若干首を掠めた。

こうも簡単に間合いの中に入られると、小回りのきくあちらの方が有利と判断した真紅狼は『豪炎轟如』を収めて、白金の棒らしきものを手に持ち「レストレーション!!!」と叫んだ。

そうすると、白金は剣になり恋の『方天画戟』を受け止めた。

そこからはお互いの牽制技が間合いの確保を巡る勝負となった。

真紅狼は、間合いの外から剣を振り抜き、『針剄』を放つなどをして恋の体勢を崩そうとするが恋は本能的にそれを回避し、型に嵌らない攻めで真紅狼に間合いを取らせないように牽制しあっていった。

恋も自分の間合いを取ろうとするが、真紅狼に全て捌いたり、避けられたりして体勢を崩せずにはいた。

たまりに刃が体に触れそうになりそうになるが、その瞬間、真紅狼は『金剛剄』を放ち、防御しつつ攻撃に転化するが華雄同様、恋も大したダメージを負っていない為、攻めきれずにいた。

だが、真紅狼は先程張遼と戦っている為か多少動きが鈍り始めた。その事に恋は気付き、攻めの威力が強くなった。

そして、真紅狼と恋の武器が接触するたびに、ほんの小さな衝撃波が飛ぶようになった。

真紅狼は攻めの威力に気付き、「このままでは押し切られる」と判断した。

だからこそ、待ちに入り……『剛雷迅』を撃つために神経を集中した。

恋は動かなくなった真紅狼に止めを刺す為に、自分の中で最高の一撃を、彼の武器目掛けて放った。

……が、真紅狼はその一撃が来ることが読めていた。

刃がぶつかる瞬間、出来るだけ剄を多く注ぎこみ『金剛剄』で弾き飛ばし、後ろに弾き飛ばされたのを見た瞬間、足に自分が出せる剄の半分を足に込めて突撃した。

『雷迅』!!

ピ…シャアアアアン…!!!

音が凄まじく、本当に雷がこの近くに落ちた程の威力だった。

真紅狼が通った地面は抉れ、火花が散っていた。

恋は直撃はしなかったものの、通った時の衝撃波と轟音で体の平衡感覚が狂った。

「……………!?!」

急いで気を戻そうとするが、その時にはフラフラになりながら真紅狼が、首元に刃を突きつけた。

「……………降参」

「……………そ、そうか……ハアハア、俺の勝ちだ」

そう言った後、二人は同時に倒れた。

ゆっくりと気を失いつつ、向こう側から俺と恋を呼ぶ声が聞こえた。

V S 呂布（後書き）

作中に出てきた劉はオリジナル劉です。

まあ、ただ単に二つの劉技を掛け合わせただけなんですけどね。

『剛雷迅』・・・『金剛劉』と『雷迅』を掛け合わせた劉技。

全力で放つと気を失ってしまう。

次回は後詰めですね。

救出劇（前書き）

眠い中、書いていたので文が荒くなってるかもです。
すみません。

救出劇

（真紅狼 side）

気が付いたら、俺は天幕の中に居た。

まあ、テンプレなセリフだな。

どうやら、俺は恋との戦い後に気を失ったようだった。

起きて横を見ると、華琳が座りながら寝ていた。

目元には若干涙が見えた。

俺は自然と華琳の頭を撫でてやった。

しばらくすると華琳は目が覚めたらしい。

「お早う、華琳。心配かけたな」

「兄さん……………心配したんですよ!!」

「うん、悪かったな……………」

「兄さんが死ぬかと思いました……………」

「ゴメンな……………」

「キスしてくれたら許します」

「分かった……………んう」

ちよつと待ってね!!

「これでいいか？」

「はい。これで許します」

「で、今はどんな状況なんだ？」

「取り敢えず、今は進軍していませんが、袁紹達先走りかけてます……………」

「それはマズイな……恋はドコに居る？」

「こちらで捕虜になっていますが？」

「案内してくれるか？」

「休まなくていいんですか？！」

「霞と恋に「董卓を助けてやるよ」って言っちゃったからなあ、助けねえと」

「分かりました……こっちです」

そう言って、天幕を出るとどうやら皆心配でこの近くで寝ていたらしい。

「まったく、こいつらも……」

「それだけ兄さんが心配だっただけですよ。あ、あと、兄さんが寝ている間に趙雲と馬超が来ました」

「へえ？　なんて言ってた？」

「『あの男を近くで様子見していたが、自分たちが信じていた志はもうどこにもない。だから、魏に仕官させてくれ』だそうです。しかも、趙雲は抱かれそうになったそうです」

「だから、早めにこちらに来ていって言ったのに……」

「まあ、しょうがないんじゃないんですかね？　特に趙雲に関して

は……ここです」

中に入ると、恋はおとなしくなっていた。

「よう、恋。気分はどうだ？」

「……ちょっとだけ、ふらつくけどもう大丈夫」

「そうか……ちょっとした、頼みがあるんだがいいか？」

「……なに？」

「董卓を救うためだ」

「……！！　分かった。何をすればいい？」

「これから、恋たちを解放する。俺が都まで送るから、董卓達を連れてきて欲しい」

「……連合軍が追い付くんじゃ？」

「送った後、ほんの少し山を崩して、足止めを起こす。その後、再び都に戻って、恋たちを回収してここに戻る。……どうだ？」

そう言うのと恋は考え始めた。

そのとき、恋の隣に居た武将（？）が声を上げた。

「恋殿！ そんな甘い罠にはまっちゃダメです！！」

「……お前は自分の主を救いたくないのか？」

「うるさいです！！ 救いたいです！ けど、お前たちも利用するに決まってるです！！」

「――あのなあ、言っておくが袁紹見つければ、その場で殺されるし、劉備たちと一緒に居た男に見つかったら、確実に抱かれるぞ？ ウチは何もしねえよ。ただ、救う。それだけだ。……それともお前は主が不幸になってもいいのか？ あ？」

黙らせながら、自分たちの立場を分からせながら、董卓の末路を教えてやった。

そうすると黙り、恋の方を向いた。

「……分かった。協力する」

「そうか。悪いが、手足の枷を外してやってくれ」

「はっ！」

「あと、この会話は他言無用だ、いいな？」

「了解です、総長！！」

檻から出てきた恋と陳宮は袁紹達に見つからないように、ついて来てくれた。

というか、『バニシュ』をかけた。

「ここまでくれば、良いだろう。『デスペル』
俺は召喚獣を呼びだした。」

「来い、『ケーツ・ハリー』！」
そう言うと、七色の羽根を持つ大きな鳥がこっちに低空飛行したの
で俺と恋、陳宮は乗りこみ、都に向かった。
華琳には鋼糸に音を乗せて伝えた。

『行ってくる』

と。

移動中・・・

都が見えてきた。
ケーツ・ハリーに地表に近付くように頼み、高度を下げたもらった
あと、飛び降りた。

「よし、都に到着だ。恋、ここからは頼む」
「……………うん」
「待ち合わせ場所はどこだ。分かったか？」
「……………分かった」

「よし！ 連れて来てくれ」

恋と陳宮は走っていった。

俺は鋼糸を飛ばし、都に入る前の谷を見つけた。

「いらいでいいな」

ヒュッ！

山を切り崩し、ほんの少しだけ岩を転がせた。

二、三時間ほど足止めをくらう規模程度に抑えた。

「あとは、恋たち次第か……」

そう言って、再び集合場所に戻り、都の街に鋼糸を飛ばして、恋たちが襲われてもサポート出来るようにした。

（真紅狼 side out）

（……？ side）

私は白装束の連中が目を盗み、月とセキトを連れて抜け出すことに成功した。

その途中で恋たちと会い、恋が事情を説明してくれた。

私達は“真紅狼”という人物に合うべく、その待ち合わせ場所に向かおうとするが脱走したのがバレて、白装束の連中が襲ってきた。

「くっ！ こいつらしつこいー！」

「詠ちゃん、私を置いて逃げて!!」

「…………それは出来ない」

「でも、このままじゃ!!」

「さあ、早く宮廷に戻ってもらいましょうか？」

白装束の連中はじりじりと寄ってくる……………そのとき、いきなりその男たちの首が……………飛んだ。

『恋、援護してやるから、早く来い』

「…………どこから声が来てるの!？」

「…………行くよ」

「え、ちよつと!!」

ガラガラッ!

恋は馬を走らせる。

その行く先々に白装束の連中が現れるが、対峙する前にすでに絶命するという現象が起きていた。

そうやって、白装束の追手をかわしながら、集合場所に着いた。

「…………ついた」

「ここに“真紅狼”と呼ばれる人がいるのね」

「…………俺が真紅狼だが、アンタは誰だ？」

その声の持ち主は、私達の前から聞こえた。
黒くて長い服を着て、紅い眼で顔に傷があった。

「私は賈馱と申します」

「俺は曹真だ。真名は真紅狼っていう」

「曹真殿ということは魏ですね？」

「そうだが、安心しろ。命はとらねえよ。むしろ恋と霞に「助けてくれ」って言われたから、救いに来た」

「そう、感謝するわ。ところで貴方が白装束の連中に使ったのって何？」

「取り敢えず、積もる話はあとだ。連合軍が近くまで来てるし、連中も来る。………チツ！ 遅かったか」

「遅かったか」と言った後、月を傀儡にしていた男が白装束の連中を大勢連れて目の前に現れた。

「——お久しぶりですね、曹真さん？」

「賈馱 side out」

「真紅狼 side」

ウゼエナルシスト野郎がやはり黒幕だったか。

「これはこれは、俺に無様に右手をぶった切られた于吉さん、久しぶりだなあ」

「減らず口を立てれるのもそこまですよ。私の妖術はこの“太平要術”で高まっています！ 貴方なんか一瞬で殺せるんですよ！！」
こういうバカには現実を叩き込むために連れてきた白装束の連中の

首に鋼糸を巻きつけて、一気に引っ張った。

ブシュッ！

何かが飛び散る音が聞こえた。

その後、白装束の連中の首が斜めにずり落ちて、死んだ。

「ハハハハ………はぁ!？」

「さて、お仲間全員一瞬であの世に逝ったぞ？ だいたい、そんなモノで俺を殺せる？ 笑わせるなよ、クズ野郎。そんなので殺せるなら、俺はとっくの当に死んでるぜ？」

俺は鋼糸を待機モードにして、ポケットから『七つ夜』を何時でも取り出せるようにした。

「な、なら！ この妖術を喰らえええええ!!！」

そういつて指先をこちらに向けるが、俺はすかさず『七つ夜』で妖術を斬った。

バシュン！

何かが消滅する音が聞こえた。

于吉は訳が分からなくなり、妖術を乱発したがそれら全てを真紅狼は“死の線”をなぞる様に斬り、次々と消滅させていった。

バシユン！
バシィン！
バチッ！

「ど、どうして、妖術が効かない！？」

「そりゃ“殺”してるからな」

「“殺す”？」

「俺の眼には『直死の魔眼』って言ってな。“モノ”の死が視えるんだよ」

「“モノ”の死……………だと……………！？」

「万物には全て綻びがある。」

人間には言うには及ばず、大気にも意志にも時間にだってだ。

だから俺は————

生きているなら、神様だって殺して見せる！！」

于吉は自分が不利になったことを悟ったのか、逃げようとしていた。

「くっ……………仕方がありません、ここは一度引きましょう」

「また一つ代償を払ってもらう！ ……弔毘八仙、無情に服す！！」

バリント！

斬った……が、その時にはもう于吉は消えていた。

だが、俺は“太平要術”と于吉の関係を“殺”した。

奴が無尽蔵に妖術を撃てたのは、“太平要術”と繋がっていたからだが、それを殺してしまった以上、奴は妖術を使うためには“代償”が必要になってくる。

『妖術』という理を捻じ曲げる力だから、代償は当然“命”ぐらいしかない。

まあ、しばらくは手出しは出来ねえな。

「さて、邪魔者も消えたし、華琳の所に戻るか……」

「……『直死の魔眼』ってもしかして“死を語る魔眼”のこと？」

「そうだな」

「じゃあ曹真は“天の御遣い”ってこと!？」

「ああ。そう言われたこともあったかな？ 好きじゃないけどな」

「好きじゃない？」

「その辺も含めて、あちらで話してやるよ……」

鋼糸を展開させた。

近くまで華琳達が来ていることがわかり、そのすぐ近くまで鋼糸で向かうこととなった。

「ちゃんとおとなしく捕まってるよ？」

そうして、俺たちは無事董卓達を救い、こっそりと魏に戻った。

（真紅狼 side out）

あとで董卓の正体が分かった時は………超ビックリした。

救出劇（後書き）

月を救出完了！

于吉は多分、一、二回は出るんじゃないだろうか・・・

次回は真紅狼は工作しながら、説明会ですね。

火種は投げられた・・・(前書き)

前回、「工作します」とか言っておきながら、やってなかったって
いうオチ

「」
スゲェ大音量だな。

「「いや、ちょ、ええ?!」」

「「「……どういことなの?」」」

うん。予想どおりな反応でどうも有難う。

そこに華琳が皆を静かにさせるために困惑する皆には凄い納得できる言葉（俺には納得できない言葉）を言った。

「落ち着きなさい。救出したのは兄さんよ? このぐらいで驚いて
どうするの?」

そう言うとは何故か皆は納得した顔になっていた。

……………グスン。……………泣いてないよ?（。|;）

「まあ、色々と邪魔が入ったけど董卓達を無事に救出してきました
よ。っと……………」

「「「邪魔?」」」

「……………于吉って覚えてるか?」

「「「ん~~~~、あ!」」」

「思いだしたようでなによりだ。そいつが董卓を傀儡にしていたら
しくてな。逃げだしたのを気付いた奴がお仲間を使って捕まえよう
としたけど、そこは俺の鋼糸を都に張り巡らせていたからな。出て
くる度に首を「スパンッ!」と叩き斬った。そしたら、于吉が直接
出てきて「“太平要術”があれば私は俺を殺せる」って言った後、
妖術カマしてきたから“死の線”を斬って、無効化した後、“太平
要術”と于吉の繋がりを“殺”したんで、しばらくは手を出せない
状況だ。……………簡単な出来事を纏めたが……………大丈夫か?」

今のを理解できたのは華琳、秋蘭、紫苑、雪蓮、霞、冥琳、祭ぐら
いだった。

若干、蓮華と桂花、風が分かりかけているみたいだった。

「で、今困ってるのは董卓達の扱いだな。どうしようかね？」
本当に困った。

取り敢えず、霞は魏に入ることは確定してるし、華雄は呉に行つて
もらう。

恋と陳宮はセットじゃないとダメだし、董卓達もセットじゃないと
ダメだろうし。うーむ、困った。

「取り敢えず、恋たちは要望とかある？ どこに入りたいとか……
…」

本人たちの意志も聞いておかないとね。
そうすると恋は————

「……………真紅狼のところに入りたい」

「恋はウチに来ると……………陳宮は？」

「恋殿が行くなら、ウチも行くです!!」

「陳宮もウチね……………董卓達に聞きたいことがあったんだが、答え
てもらってもらってもいいか？」

「……………なんででしょう？」

「お前たちは“何がしたい”？」

そこが問題だった。

そして、董卓が出した答えとは————

「――私は皆が苦しめない政治がしたいです」

そうやってきたのであった。

＼真紅狼side out＼

＼董卓side＼

真紅狼さんは私達を救出する一部始終を皆さんに話した後、私達の意志を聞いてきた。

恋ちゃん達は普通に自分の意志を言ったが、私の時は質問された。

「お前たちは“何がしたい”？」

この一言を言われた時、私は――――

「――私は皆が苦しめない政治がしたいです」

そう答えた。

噂では私は民に悪政を強いている。なんて噂が流れていたらしいけど、都に集まって来た民たちは皆、地方の役人から無理強いな政治を敷かれているところから逃げ出してきた人たちばかりだった。

だから、私は民に「この街は良い街だ」と思って欲しかったから努力した。

「厳しいことを言うが董卓、それは……………無理だ」

真紅狼さんは苦笑しながら答えた。

〔董卓 side out〕

〔真紅狼 side〕

“皆が苦しめない政治”か…………。

どこぞの偽善者共が謳っていたな、そんなことを。

「何故…………無理なんですか？」

「簡単だ。——人が誰しも幸せになれるとは限らないからだ」

董卓は首を傾げていた。

例を上げるか…………。

「劉備もな…………キミと同じことを言ってたよ。“誰も笑って暮らせる平和な世の中を作りたい”と。それを聞いた時、ハッキリ言ってたよ。「偽善者」ってな」

「…………なぜですか？」

「確かに、この戦乱を治めることが出来れば、一時的には劉備の野望は叶うかもしれないが、そんなものはあくまで一時的なんだよ。そのとき幸せになった人達の分だけ、この大陸のどこかで不幸な奴等が出てくるんだ。だいたいな、幸せになるってことはそれは誰かの幸せを犠牲にしてるんだよ。その矛盾も気付かずに“誰もが笑って暮らせる平和な世の中を作りたい”？笑わせるな！この時にまだ“覚悟”を持っているのであれば、多少はマシだったんだがな、それすら連中は持っていなかった。「皆でやればデキル！」っていう雰囲気だったんだぜ？言いかえれば「私は“覚悟”を持てないから、責任を皆で分かち合おう」って言ってるのと同じなんだよ。」

「……………何かを成し遂げたいのであれば“覚悟”が必要なんだ、分かるか？」

俺にはそれぐらいしか、出来ないしな。

「……………真紅狼さんの話を聞いてると、まるで真紅狼さんはもうその“覚悟”を持っているように聞こえるんですが……………持っているんですか？」

「ああ、持ってるよ。“覚悟”と“代償”を払ったしな。……………俺は護りたい者達を力でしか護れないんだよ。だから、時には人を殺してでも護ったりしてるんだ。だから、人々や世間からどんなに酷く言われようとも、護りたい者達が護れているのであれば、俺はどくなってもいいのさ」

「……………後悔しないんですか？ そんな生き方をして……………」

「後悔なんてねえよ。……………あるとしたら護れなかったとき……………かな」

そう言うのと董卓達は黙った。

「私達は……………真紅狼さんの所に行きます。真紅狼さんが目指してるモノをこの目で見てみたいです」

「……………好きにしな」

「ま、辛気臭い話になっちゃったが董卓達の身の振り方についてちょっと聞いてもらいたい」

「……………何よでしょう？」

「このままじゃ、袁紹達にはいずれバレる。だから、董卓と賈馱の名を捨てて、ただの月と詠として生きてもらうのが、一番安全だと思うんだが……………どうだ？」

「私は構いませんよ」
即決の月に対して、詠は渋っていたが月のことを思い、渋々了承を得た。

「そんじゃ、会議は終了だ。顔を合わせたくないがマクオと暴走中の袁紹の所に行こうか？」

「はい」

「ええ、そうね」

華琳と雪蓮は返事をした。

そう言って俺たちは魏の天幕を出て、袁紹の天幕に向かった。

〈真紅狼side out〉

〈マクオside〉

俺たちは都で卑弥呼と貂蟬に合ったが、俺の姿を見るやいなや冷めた目で見てきた。

「……噂には聞いていたが、ここまで酷いとは……………」

「もう支援するのをやめましょうよ」

「……うむ。そうだな。私達はこれ以降、貴方を支援することを止めさせていただく」

「なっ!?! ど、どういうことだ!?!」

「それは自分で考えなさい。……坊や」

「勝手に野たれ死ぬのもよし。そこに居る抱いた女たちを連れてどこか遠い地で暮らすのもよし。好きにしてください。それでは」

そう言って卑弥呼と貂蟬は俺たちの前から消えた。

「くそっ！ 何だっていうんだよ！！」

「大丈夫？ ご主人様？」

「ああ、大丈夫だよ」

「そうとは見えぬのですが……………」

「本当に大丈夫だよ」

その時、兵の一人が伝言を預って来た。

どうやら、袁紹が集まってくれと言う事だ。

俺たちは袁紹の元に向かった。

そろそろ、例の計画を始めるか……………

これで蒼騎の奴もさよならだな。

あー、はやく曹操達が手に入らないかな？

イイ声で啼かしてあげよう……………っと。

くマクオside outく

その後、袁紹は「連合軍解散」を宣言した。

曹操軍が自分たちの領地に帰ろうとこちらに背を向けた時に作戦を開始した。

「逆賊、曹操！！ 覚悟しろ！！」

そう言って、蒼騎が必ず守るであろう女達に向けて、矢を放った。

火種は投げられた・・・（後書き）

次回から、予定では三部作で収めるつもりです。

頑張らないと・・・

ようこそ……この素晴らしき惨殺空間へ（前書き）

コレを含めて、三部作か四部作のどちらかになる予定です。

ようこそ……………この素晴らしき惨殺空間へ

（真紅狼 side）

俺はマクオの叫び声を聞いた後、後ろを振り返ると矢が華琳、秋蘭、霞、紫苑、雪蓮達に向けられて放たれたことを察知して、素早く全ての矢を叩き落とそうと鋼糸を奔らせた。

霞、紫苑、雪蓮は鋼糸で全て落とすことが出来たが、華琳と秋蘭だけは間に合わなかった為、俺が射線上に飛び出て代わりに受けた。

ザシユシユシユシユ！！

「……………ぐう！」

「兄さん（真紅狼）！？」

足と頭以外に向けられた矢が全て刺さった。

「あの……………クソガキ共がア！！！！」

ブシュツ……

両手に刺さっていた矢を抜き、『神狼』に指示を出した。

「『蒼龍隊』と『紅虎隊』は先に行って退路を確保しろ！！
『黒獅子隊』は華琳達を護衛しろ！」

『紫鯨隊』と『翠鳳隊』は後ろにつき、追撃に気をつけろ!!

………（ゴーレム、俺と華琳達が離れたら岩の壁を作って分断しろ）」

「（………プシュー!）」

連中の狙いは俺だから、そこで一人留まれば、華琳達は追われることはない。

「さっさとしろ!!」

「「「りよ、了解!!!!」」「」」「」」

ガラガラ……!!

ドドドド……!!

指示したように『神狼』は動き、華琳達との距離が離れたのを見計らって、ゴーレムを召喚した。

「ゴーレム、今だ!! やれ!!」

ズドンッ!

ゴゴゴゴゴゴ……

壁の高さは、だいたい6m弱ってところか……、これなら矢を放

たれても撃たれる心配はない、よっぽど近づかない限りな。

「「「兄さん（真紅狼）（総長）???!!!!」」「」」」

「はやく行け!!」

「兄さんはどうするんですか!!?」

「連中は俺が狙いなんだよ。——だからここに残る」

「嫌ですっ!!!!!!」

「さっさと行けよ、華琳!! ……頼むから、俺にまた喪う気持ちを味わせないでくれ」

壁越しから、華琳が泣く声が聞こえる。

「必ず、お前の元に戻ってきてやるから……」

「……絶対ですよ」

「俺が約束を破ったことがあったか?」

「……ないです」

「だろう? 信じろよ、俺を」

「……国に戻ったら、体勢を整えて迎えに行きます」

「勝って戻ってくるさ」

「兄さん……愛してますよ」

「……ああ、俺もだよ。——全員、急いで撤退するわよ!!!!」」

華琳が大声で叫び、足音が次第に遠ざかっていくのが聞こえる。

撤退しながら、隊の者が「総長、絶対生き残ってください!!」や

「絶対に帰ってきてください!!」などと下がりながら、撤退していった。

完全に足音が聞こえなくなったのを聞いたとき、目の前にいきなり大きな岩が飛んで来た。

「なにっ!？」

かろうじて避けたがもう一個飛んで来ていた。

ガァン!

「……………ごア」

意識が飛びそうになる前に北郷の方を見ると、木で造られた投石機が次々と岩を投げ飛ばしていた。

……………俺たちが見学会していたときに、大工仕事のような音の原因はコレか!

その後、次々来る岩に俺は埋もれていった。

「ガァァァァァ……………」

そこで意識を失った。

＼真紅狼side out＼

＼北郷side＼

兵達からは「あの曹真を倒したぞ!」や「これで曹操や孫策達を討てるぞ!」という声が聞こえ、士気も上がっていた。

この勢いを利用して、曹操達を頂こう。
岩の隙間から見えている、蒼騎の手はピクリとも動かず、血も流れ出していた。

「蒼騎！ 曹操達は頂かせてもらうぜ！！」

死んでるが、一応断りを入れておかないと……………。

まあ、死んでるから返事は出来るわけないか！

バァカ、俺を散々侮辱するからこのような悲惨な目に合うんだよ！！

北郷は、先程真紅狼が手を若干動かしたことに気付けなかった。

そして、兵を進めようと号令を掛けようとしたとき……………

蒼騎を潰している一帯からいきなり業炎が出た。

ゴオオオオオオオオオ！！

その後、岩が急に吹き飛び、そこからユラリと人が立ち上がった。

（北郷 side out）

（真紅狼 side）

.....。

『蒼騎！ 曹操達は頂かせてもらうぜ！！』

俺の大事な女達の命を狙っておいて、貰うだと？
ふざけるなよ、小僧。

「…………ふざけるなア！！！！！」

角を出して、乗っかっている岩を吹き飛ばした。

その後、業炎が俺の居る一帯を燃やし始めた。

俺の体は所々から血が出ていて、全身紅に染まっていた。

髪も紅く染まり、周りで燃えている炎がいつそう煌めかせていた。

俺は周りの岩を連中の方に飛ばしまくった。

無意識の内に『長槍 鬼神』を背負い、北郷達を見据えて言葉を発した。

「往くぞ、天の御遣い軍————」

—————兵力と覚悟の貯蔵は十

分か？」

そこから俺は殺し合いを始めるべく駆けた。
（真紅狼 side out）

真紅狼は走り出すとそれにつられて天の御遣い軍も走り出した。

あちらの兵力は約三万、こちらは真紅狼ただ一人。

無謀であるが、真紅狼は駆ける。

護りたい者達の為に…………

真紅狼は駆けながら担いである『鬼神』を連中の手前に投げ、地面に深く刺さった。

兵士たちは最初はビックリしたが、届かないのがわかったら再び駆けだしたが、真紅狼は地面に深く刺さった『鬼神』の元まで来ており、そのまま柄の部分を掴んだまま兵士の元まで走ろうとするが、途中で鎖が「ピン！」と張った。

それを見た兵士たちは好機だと思い、急ぐが次の瞬間、とんでもない光景を目の辺りにする。

真紅狼が吼えると「ボゴォン！」という音が聞こえた後、北郷達に飛び込んできた光景は地面に深く刺さった“碇”の部分が周りを丸ごと引っっこ抜いていたのだ。

この光景に全員は呆ける。

その一瞬を真紅狼は逃すほど甘くは無く、ソレを勢いよく密集している地帯に叩き落とす。

グシヤツ！

今ので、数人は命を落とし血が飛び散る。

真紅狼はそのまま有効範囲の敵を全て潰しまくった。

グシヤ！

ベキバキ！

ゴキ、メキヨ、ブチブチ！！

人の潰れる音が、しばらく響き渡った。

その光景をみた者達は、恐怖で逃げる者やそれでも立ち向かう者と別れていたが逃げる者に関しては、北郷達より後ろに行ったときにはすでに首を切り落とされていた。

真紅狼は北郷達の後ろに鋼糸をいくつも張り、逃げだす者を殺す網となっていた。

北郷達は遠くから、自軍の兵もろとも大量の矢で撃った。

真紅狼は『鬼神』をしまい、腰にある『ガンブレード』で対応した。

バシイイイイン！！

カンッ、カンッ、カンッ！

キュイイイイイイン……………

ドオオオオン！！

真紅狼はまず、『ブラステイング・ゾーン』で直線的に向かってくる矢を消し、そのあと、避けながら弾いたり、切ったりして矢を潰し、最後に大量に火薬をバラ撒き……『フェイテッド・サークル』の衝撃波と爆発で真紅狼に向かってくる矢を吹き飛ばした。

「……………ウオオオオオオオオオ！！！」

真紅狼は吼えながら、再び『鬼神』を出した後、密集している一団にBASARA技を叩き込んだ。

“碇”の部分が炎を纏い、そのまま敵に斬りかかった。

左に右に炎を纏った碇が次々と兵士達をぶった切っていき、最後の薙ぎ払いで周りの敵を前方に吹き飛ばした後、上空から炎の砲弾が撃たれて、そこに居た一団に直撃し、死体の山が出来上がった。全身火だるまになってる者、下半分が吹き飛んだ者、片腕が取れている者と惨状だった。

すでに真紅狼に500近い兵士を殺されていた。

だが、真紅狼は止まることなく、次の獲物に襲いかかった。

まだ、生きている兵士たちは思う……………

「自分たちほとんどない相手に喧嘩を売ってしまったんだ」と……………

悲鳴や命乞い、憎しみの声がどこからもなく聞こえてくるが、真紅狼は止まらない。殺意が収まることなく、殺し続ける。

そこからの真紅狼は近くの敵を次々と両断、腕を引き千切る、貫く、押し潰す、轢き潰す、決る、首を絞めると人の殺し方のプレゼンをおこなう様に殺しまくった。

五時間後・・・

さすがに1万近い兵を殺すと、体力の方が限界に近くなったりして押し戻されたり、弾き飛ばされるといった事が多くなった。

「ぐああ!？」

さらには一対一は危険だと悟ったのか、複数で攻めてくるので体力が近い真紅狼にとってはキツイものだった。

せっかく、敵陣の中心まで喰い込んでいたのが、今では岩の壁のところまで押し戻されていた。

さらに追撃が入り、真紅狼は横から吹き飛ばされ真正面からの攻撃をまともに喰らい、壁に激突した後、座りこんでしまった。

そして、血を吐いた。

真紅狼は全身に裂傷に切り傷、内出血などと至る所に傷があり、血が止まることなく出ていた。

真紅狼は不老不死であるが、血を止めるまでには若干の時間が必要だった。
だから、治そうとしても次から次へと傷が出来るため、キリがない状態だった。

そんな時に壁に頭からぶつかった為か、意識が朦朧となり、ほんの数秒、意識を失った。

そして、真紅狼の意識は真紅狼を転生させた神の元に向かった。

その後、世界が一時的に止まった。

（真紅狼 side）

気が付いたら、真っ白い空間だった。

「俺は北郷の軍勢と戦っていた筈だ……………」

「——確かにその通りじゃ」

「……ジイサン！」

「真紅狼。お主に逢いたいという者達が居る」

「今じゃなくてもいいだろう！ はやく俺を戻してくれ！！」

「ダメじゃ、どうしても逢ってもらわなければならないのだ。……」

…これはその者達の願いでもある」

「……………誰だよ、その人……………「ゴン！」……………てえ?!」

聞こうと思ったとき、後ろから頭を叩かれた。

『私達だ』

「!？」

……二度と聞くことの無い人物達の声だった。

急いで後ろを振り向き、そこに居たのはなんと――――

「久しぶりね、真紅狼」

「元気にしてたか？」

「お、親父に母さん!？」

そう、そこに居たのは俺が転生する前の世界の本当の両親……………

父・巖嗣狼と母・楓の二人だった。

＼真紅狼 side out＼

ようこそ……………この素晴らしき惨殺空間へ（後書き）

最後に、転生前の父と母が登場。

父、巖嗣狼…げんじろう
母、楓 …かえで

炎を出して、岩を吹き飛ばすシーン…………どうみてもメルブラの軌間にしか見えない。A A Dフィニッシュを決めた後の姿を想像してみたら、イメージにピッタリだった。

7 t h H O a O e n がいいかと……

次回は父と母の会話から始まります。

胎動（前書き）

三部作になるかなーと思ったけど、四部作になりそうです。

後半はアン〇・マ〇を聞きながらいいかも・・・

胎動

（巖嗣狼・楓side）

神と呼ばれるヒトに声を掛けられた時は何事かと思ったが、どうやら、ウチの息子についてだった。

真紅狼が神様の手違いによって死んでしまい、他の異世界で第二の人生を歩んでいると聞かされた時、私は今度こそ幸せな人生を送って欲しいと願った。

そして、今、真紅狼は転生した異世界で大切な人達を護るために一人で戦っているのをココから見ていて……やはり、真紅狼は戦う運命からは逃れる事が出来ないのかと思ってしまった。

「……なにか思う所があるのかの？」

「神様は知ってますか？ 私達があの子に名を付ける時、不意に頭の中にある単語三文字が浮かんで来たんです」

「……なんじゃと？」

「ああ、そうだったな。あの時何故、あの単語が浮かんだのか分かんなかったが、この戦いを見てると今なら納得してしまう」

「……どういう意味じゃ？」

「今は真紅狼の漢字は“真実”の真に“紅”の紅、そして“狼”の狼ですが……私達が当初浮かんで来たのはその漢字じゃないんです」

「……………！！ いや、そんなことは無い筈じゃ……！」

神様はしばらくして何かに思い当たったとき、真紅狼の気が失ったので連れてくるように頼んだ。

「神サマ、息子が氣を失ったぜ、今の内に……………」

「うむ！ あとでその話聞かせてもらおうぞ？」

「久しぶりね、真紅狼」

「元氣にしてたか？」

「お、親父に母さん！？」

突然の訪問に驚いていた。

……………でかくなったなあ。

（巖嗣狼・楓side out）

（真紅狼side）

ジイサンによって、半ば強制的にココに連れて来られて、俺の頭を殴った存在は親父と母さんだった。

「…………え？ は？ ちょ、親父たちは死んだはずだろ！？ どうしてここに居るんだよ！」

「そりゃ、神様に呼ばれたからな」

そんなあっさり言うなよ、親父。

「…………死んだ後に再び会えるとはなあ」

「ああ、全くだな」

「ええ、そうね。…………して、真紅狼？」

「なに？ 母さん」

「貴方、あの世界ではモテモテね」

「ブフッ！？ い、いきなり何言ってるんだよ！？」

「本当に、親子は似るって言うけど……………だれかさんの血が似たみたいね」

「…………え？」

そう言っ、俺は親父を見る。

すると、親父は目を素早く逸らした。

……オイコラ、親父。

何故目を逸らす？

「この人もね、学生時代は、表立ってモテるより裏が凄かったのよ？」

「……ちょ、楓！ 学生時代の話はタブーだろう！？」

親父は母さんを止めようとするが、一睨みで沈黙した。

ああ、今でも戦力図は母さんが上ですか…………。

いつの時代も『母は強し』ってか？

「しかも、気にかけていないのにさりげなく大事な場面で優しく手を差し伸ばすものだから、それで何人もの女性が恋心を抱いて大変だったわ。——でも、真紅狼はその気持ちには鈍感ではなかったようだったから、その点は安心ね」

「親父は鈍感だったのか？」

「鈍感よ「違う！」……なら言ってみなさい、ここで」

「俺はその時には楓に一途だったよ！！！」

「だそうですよ？ 母さん？」

「あらあら…………ときどき、他の女をちら見していたのに？」

そういうと親父はしどろもどろになった。

ちなみに母さんは笑っている時が物凄く怖い。

なんつーか、言葉の棘の威力が凄まじいのである。

母さんは俺を生んだ後も二十代後半の姿を自然と維持出来ており、

俺がまだ小学生だった頃、俺を連れて街に出かけた時運悪く二人組のナンパに出会った。例の如く誘ったりしてたが、そこで母さんの言葉の棘が炸裂した。

結果は予想通りに撃退した。

それもトラウマを覚えるレベルで……

あの光景は凄まじかった。

最初は笑顔だったのが、二分後には泣き顔になり、さらに五分後には膝抱えていじけていたからな。

今思えば……パネエ。

そう思っていると、親父が……

「どうだ、真紅狼。肩の力は抜けたか？」

「へ？」

「落ち着いたかしら？」

「え、あ、まあ。だいぶ」

「そう、よかった。……神様よろしくお願いします」

「……もういいのじゃな？」

「ああ、充分だ」

「分かった。真紅狼、これより再びお主をあの世界に戻すぞ」

「……ま、そうだよなあ。親父たちは死人、俺は生者。会えるにもこういう機会のみだし」

「真紅狼！ お前はまだ限界まで力を出していないだろう！？ なら、護りたい者達の為に限界まで飛ばせ！！」

「真紅狼、私達は離れていても側に居ます。それを忘れないようにしなさい」

「ああ。親父に母さん。……死後まで世話をしてくれて有難う」

「では、真紅狼よ。元の世界に戻るのじゃ！」

そこで俺の意識は暗くなった。

＼真紅狼side out＼

＼ジイサン神side＼

真紅狼が完全にあの世界に戻ったのを確認した後、再び蒼騎夫妻に聞いた。だした。

「真紅狼の名前のことじゃが……」

「……私達が最初に浮かんだ名は————“神喰狼”なんですよ」

「……予想はしていたが、まさか当たるとは……」

頭を抱え込んでしまうワシに構わず、夫人は話す。

「私達も信じられませんでしたよ。まさかあの北欧神話に出てくる

“天を裂き、地を呑み込む化物”の名が自分の息子につくとはね。

私達は必死に違う漢字でシンクロウと名付ける為に、今の名となったわけ……」

「……真紅狼がこの事には？」

「まだ、気付いていません」

「出来れば、この真実を知らずにこのまま生きて欲しいのう」

「ああ。俺たちもそれを望んでいる」

本当に顕現して欲しくないものじゃ……

＼ジイサン神side out＼

＼真紅狼side＼

意識が戻り、俺は『鬼神』を杖代わりにしながら、立ち上がった。親父の言う通りだ、俺はまだ限界まで飛ばしきっちゃいねえ。

だからこそ……

「限界まで――――――――――」

飛ばすZ……「蒼騎、聞こえるか!!」…

ええー」

また! 邪魔しやがったな!!

北郷の方を見ると目を剥いた。

何故なら、北郷の両手には逃がしたはずの華琳と雪蓮が居たのだから……

＼真紅狼side out＼

＼華琳・雪蓮side＼

撤退をしていた私だったが、兄さんの様子を一目見ようと途中で一人で引き返していくと、雪蓮も同じ方向に向かっていた。

「雪蓮!」

「あら……華琳も?」

「ええ、行きましょう!!」

「そうね!」

そうして向かうと岩の壁は未だにあったので、危険だがあの男の側から見るしかなかった。

移動していると北郷の兵士達に見つかり、すかさず私は兄さんに鍛えてもらった『絶』を兵士達に向けると、バタバタと気を失い倒

れていった。

「何をしたの？」

「ただ、向けただけよ。この武器兄さんに鍛えてもらったのよ……その時に何かしら付加されたのじゃないかしら？」

「なるほどねえ……「ぐう?!」……華琳!？」

後ろを見ると華琳が殴られていた。

その隙に私も抑えつけられて、あの男の元に連れて来られた。

〔華琳・雪蓮 side out〕

〔北郷 side〕

何人かの兵士から「曹操と孫策を捕えた」と言う報告が届いたので、すぐに連れてくるように促した。

「やあ、お二人さん」

「離しなさいよ!!」

「まあまあ、取り合えず………よっと!」

二人の腰に手を回して、抱き上げた。

「触れるな!!」

「そう言わずに、味わせてよ」

ベチヨ……

「くううう!!」

孫策の首筋を舐めさせて貰った。
イイにおいで美味しいな!

「曹操は……どんな味かな?」

ぐにゅうううう・・・

「……ああああ」

少し小さいけど揉んであげたら大きくなるかな?
さて、この二人の状況をあのバカに教えてあげるか……
どんな表情をするか、愉しみだなあ!!

「蒼騎、聞こえるか!!」

そういうところらを見て、驚いていた。

ヤベエ、超愉快WWW

「お前の大事な大事な女を今ここで犯してやるから、そこで見てな
!!」

そう言った後、曹操の下半身や孫策の尻を弄ろうとすると曹操達は
悲鳴を上げた。

「いやあああああああああ!!!!!!」

「真紅狼、助けてええええ!!」

その『殺意』が次第に世界に干渉し始めた。

真紅狼がイレギュラーだからか？

それとも、この世界が外史だからか？

そんなものを連中に分かるハズがなく、さらには天からも《死ねシ
ネしね》と囁かれ始め、不気味になって後止まった瞬間……………

世界は———侵蝕された。

胎動（後書き）

真紅狼の理性が飛びました。……………悪い意味で。

次回の内容が先回りされそうで怖い。

神喰狼（前書き）

今回はグロいです。

最初からクライマックスなのでそれに見合った曲でお楽しみください

神喰狼

〔北郷side〕

俺たちは気が付いたら、先程と居た場所とは違う場所にいた。周りは暗く、どうにか近くの方が視認できるほどの明るさだった。足首までしか到達はしていないが、辺り一帯に血が来ていた。遠くからはどこから流れてくるのか分からないが、液体の流れる音が聞こえてくる。

おそらく血が流れているのだろう……………

その時、上から小さな光球が落ちてきていた。

俺たちは追いかけようとしたが、俺たちが立っている高さよりさらに下に行くのを見たので追いかけるのを止めた。

そして、光球が一番下まで行ったとき、光は弾けた。

俺たちはその時、下に何かが居ることに気が付いた。

「「「「「！」「」」」」」

一瞬だった為、全体は見えなかったが俺が見えたのは……………蒼い眼をしたナニカだった。

「…………愛紗、キミには何が見えた？」

「…………私には巨大な鎖につながっていたナニカが見えました」

「…………桃香は？」

「…………私には血で紅く染まった毛並みが見えたよ…………」

“毛並み”ということとは獣か……

鈴々と朱里にも聞いてみよう。

「鈴々は何が見えた？」

「……宮廷ぐらいの大きさの獣だったのだ」

「朱里は？」

「周りに骸の山が何個も見えました……………触れたら崩れそうな山が何個も……………」

その後、下から咆哮が聞こえた……………

[illegible]

それだけで兵士たちは竦んだ。

何せ、周りは異常だからだ。

上から血が止まることなく流れ続け、辺りは一帯の闇でしかも、足元は血の海と来てまともな精神を保てる筈はない。

ベギン！！

ジャラジャラ・・・

バシヤンツ！！

バギンッ!!
ジャラララララ・・・
バシャン・・・

先程から愛紗が言っていた“巨大な鎖”が一つ、また一つと外れている音が聞こえた後、鎖で封印されていたモノが現れた。その後、再び暗闇に覆われ、目を開けた時には元の場所に戻っていた。

俺たちは困惑する、『先程の場所は何だったのか?』と……。その後、兵の一人が声を上げる。

「巨大な紅く染まった狼が居る!!!」

「そんなバカな」と思い、前を見ると口が塞がらなかった。

目の前には軽く15mは優に超える巨大な紅い狼が居たのだから………

その前には蒼騎(?)がいるので問いたでした。

「蒼騎、なんだソレは!?!」

問いたでしたが返事は無かったが代わりに後ろの狼が吼えて答えた。

「オオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

その後、蒼騎と巨大な狼はこちらに突撃してきた。

北郷 side out

真紅狼はすでに氣を失っており、立っていることが出来ないハズだった。……その体を動かしているのは純粋な『殺意』のみだった。

「北郷をこの世から“消滅”させる」という、『殺意』のみで動いていたのである。

そして、今は鋼糸も展開されていない。
元より真紅狼の意識があるならの話だが……今は氣を失っている
為、展開出来ない、だから今なら逃げることも出来るが天の御
遣い軍はそれが出来なかった。

目の前の恐怖で足を動かさうにも動かせていないからだ。

そして狼は小石を退けるように右前脚を振ると、たった一振りですぐ1000人の兵士たちが絶命した。

胴体が丸ごと吹き飛ばされた者や脳漿をぶちまけた者、頭を丸ごと吹き飛ばされたモノ、下半身だけが残った者、大きく腹が抉れた者、左半身もしくは右半身が無い者と惨劇が一瞬の内に創られた。

そして、その脚には人間の臓器や血、肉がこびりついていったが気にすることなく、ゆっくりと次の獲物に襲いかかっていった。

ようやく兵士たちは動くことが出来た。

彼らが行う行動はたった一つ……… この場から逃げることだった。だが、彼らは逃げながらも思う———

「どんなに遠く離れても、逃げた気がしない」

と。

狼は逃げるには最優先で潰しまわった。

狼が走るだけで、地震が起こり、立つことさえも不可能とし、兵士たちは転んでしまう。そこに狼が巨大な口で兵士達を貪り喰らう。

噛み砕くたびに、人の骨を砕く音が聞こえる。

バキッ！

ゴキン！！

バリバリ・・・

ブシャアアア！！！！！！

グチャッグチャ！！

口の隙間から飛び出る血が北郷達の近くで血の雨となり、振り続けた。

その時、狼が口から何かを吐きだした。

カランッ！

それは張飛が持っていた『蛇矛 丈八蛇矛』であり、無残にも噛み砕かれてなんとか刃と柄の部分だけが残っていたので狼は異物と感じ取り、吐きだしたのだった。

その時、劉備は崩れ落ち、関羽は虚ろな目となっていた。

さらに兵士たちは錯乱し、自害する者や狂気して自軍の仲間を殺す者、必死に逃げる者、今の光景を見てなお戦う者と様々だったが、そんなコトを許さず狼は喰らいまくった。

そこは“地獄”だった。

兵士たちの悲鳴が効果音となって舞台をさらに盛り上げていく。

しばらくすると、地面は血や臓器、肉塊で埋め尽くされた中、北郷と囚われた二人と劉備と関羽、軍師の諸葛亮がだけになっていた。

袁紹達は地獄絵図になる前に撤退しており、公孫賛はこの戦場から離れていたところで事態を見ていたみたいだった。

狼は仕事を終えたのか真紅狼の所まで戻った後、空間が割れ再び、あの深い深い闇の奥底に戻っていた。

それと同時に真紅狼の意識は取り戻された。

そして、自分が知らなかった事実を知ってしまった。

（神喰狼 side）

意識を取り戻した時、頭に俺の本来の名や自分が持ってしまったモノについての情報がインストールされた。

「……ああ、俺はそんなモノを抱えていたのか」

コレをリアルタイムで見っていた華琳と雪蓮に拒絶されるんだろうな。

と思いつつ、重い足取りで元凶の元に一步ずつ近づいていった。

ジャリ・・・ジャリ・・・

手には『七つ夜』を持ち、『直死の魔眼』を発動させながらゆっくりと近づく。

「く、来るな!! 曹操達がどうなってもいいのか?!」
華琳達を前に出して、盾の代わりにするつもりらしいが…………甘い。
俺は限界の体を無理矢理動かして、七夜の体術を使って北郷の裏に回った。

閃鞘・八穿

裏からの上段攻撃で、よろけさせた後『七つ夜』で素早く足元を掬った。

「ぐあっ!?!」

北郷の体は宙に浮いた。

そして俺は奴の体を見て、“死の点”を見定めた後…………

「その魂――」

――二度と転生を許さない、故に――

――“消滅”しろ」

宙に浮いてる北郷の魂の点を穿いた後、北郷は消滅した。
そこに残っているのは奴の服のみだけだった。

く神喰狼side outく

俺は力尽きて倒れると思ったが、誰もいないところで支えられていた。

神喰狼（後書き）

北郷抹殺完了！！

ついでに張飛も巻き込まれてご臨終。

だれか、固有結界の名前を考えてくれる人いないかなあ？
全然、思いつかない・・・

あったらコメントを送ってください

次回は戦後みたいなものです。

【さらに追記】

ちよっと、北郷の死に方を変えました。
終わり方がしっくりこない為、再び変えました。
まあ、セリフを変えたただけなんですけどね・・・

殺戮の果てに・・・（前書き）

短いです。

書くのがちよつと難しかった。

殺戮の果てに・・・

〔華琳 side〕

兄さんがあの男を殺した（？）あと、私は隠し持ってた小太刀で縄を切って私と雪蓮の拘束を解いた。

兄さんは糸が切れたように倒れようとしていたが、それが突然途中で止まった。

私と雪蓮は兄さんの両肩を支えている人物達が見えた。

だけど、その人物達は薄く白い輪郭だった。

そして、こちらを見た後…………… 頭の中に声が響いた。

《俺たちの息子を支えてくれて有難う》

——え？ 今なんて？

《真紅狼は不器用でしょうがないけど、よろしくね。……………華琳さん、雪蓮さん》

——貴方達は……………一体？

《俺は真紅狼の父“蒼騎 巖嗣狼”》

《私は真紅狼の母“蒼騎 楓”》

——兄さんの本当のご両親!?

《真紅狼に伝えたいってくれるか?》

——なにを?

《「その世界で幸せになれ」と》

——確かに伝えます。

《有難うございます。華琳さん、雪蓮さん》

——いえ。

《では、私達はもう逝きます》

——出来るなら、生きているうちにお会いしたかったです。

《いや、こうして話すことが出来た。俺達はそれで充分だ》

——兄さん、いえ真紅狼は私達で支えていきます！

《……………さようなら》

その言葉が頭の中に響いた後、白い輪郭は微笑みながらゆっくりと消えていった。

「……………本当に生きているうちに兄さんのご両親に逢いたかったわ」

「……………そうね」

「取り敢えず、兄さんを！」

「ええ!!！」

兄さんの元に駆け寄り、息があることが確認出来た。

「……………生きてるわ」

「……………はあ、よかったわ」

私達は安心したが、その後ろで関羽たちが喚き始めた。

く華琳 side outく

く劉備 sideく

鈴々ちゃんが大きな狼に喰い殺された時、私は崩れ落ちてしまった。愛紗ちゃんなんか、虚ろな目で鈴々ちゃんが持ってた『蛇矛 丈八蛇矛』を抱え込みながら何度も何度も名前を呟いていた。

そこに大好きなご主人様が“殺”された。

私達はかけがえない者達を失ってしまった。

「――返してよ」

「……………」

「――返してよ!」

「……………」

「――返してよ!! 私達の大切な人達を!!!!」

「……………貴女達が無事に生きているだけでも、有難いと思いなさい」

曹操さんはこちらを見向きもせず冷たく言いあしらった。

大切な人達を殺しといて、いけしゃあしゃあと!!

その心の中を読み取ったのか孫策さんが……………

「……………華琳の言う通りよ? あなた達はね、勝手な言いがかりで曹操軍と孫策軍に“喧嘩”を吹っ掛けてきたのよ。その上で戦に負けたの……………だから、その言いがかりを作った本人を討ち取っただけ……………何か問題でもあるの?」

自分たちが正論を言ってるように聞こえる、この人達は操られているんだ、そこに倒れている男の力によって!!

「ご主人様は“天の御遣い”なんですよ!? この乱世を平定する方なのに!!」

「あら、真紅狼もあなたの言う“天の御遣い”よ?」

「その人は“天の御遣い”でもなんでもないです!! ご主人様は言ってきました!! 『蒼騎は“天の御遣い”でもないんだ……………アレは化物なんだ』と!! ―――曹操さん、孫策さん。「その男を

渡してください」……愛紗ちゃん？」

「姉上、申し訳ありません。……私はご主人様と鈴々を奪ったあの男を殺したくてしょうがないです」

「いいよ、愛紗ちゃん。――さすがの私も今回だけは同じ気持ちだから！」

そう言って、武器を取ってあの男の元に近づいていく。

「……………黙りなさい」

「……………ええ、そうね。黙ってちょうだい。正直貴女達の声を聞く――いえ、姿を見てるだけで吐き気がするから、どこにでもなくなり消え失せなさい」

私達が襲いかかろうとした時、目の前に矢が放たれた。

周りをまたが弓兵の姿は無く、ただ、遙か先に誰かが立っており、その後ろから、大勢の騎馬がやってきたのが見える。

（劉備 side out）

（華琳 side）

劉備の目の前の地面に矢が数本刺さったのを見て、呟いた。

「……………秋蘭ね」

まだかなり後ろに居るが、騎馬隊がこちらに向かっている。状況的に不利を悟ったのか、劉備は生き残った二人を連れて、去りに告げた。

「――必ず、復讐します。お二人さんとその男に!!」

そう言って、去っていった。

「…………その時が貴女達の最後よ」

こちらも言い、それからは兄さんの様子を見た。

全身真っ赤になって、切り傷や裂傷、擦り傷に矢が刺さっていた痕など様々な傷痕が体に残っていた。

そして……………

「黒かった髪が“真紅”になってるわね……………」

「血…………じゃないわ。髪の毛自体が“真紅”みたいね……………」

その後、秋蘭達が到着した後、兄さんは自宅に帰り治療を受けた。

こうして、反董卓連合を完全に解散した。

〈華琳 side out〉

…………五日経ったが、未だに兄さんは目覚めない…………

殺戮の果てに・・・（後書き）

劉備たちを殺さなかったのはラスボスの役目があるからです。

・・・石は投げないで！

真紅狼の髪の毛が“真紅”になってるのは『シャナ』みたいな感じ
です。

ただ、一つ違うのは真紅狼がマジギレするゲージだと思ってくださ
い。

例えるなら、髪の毛の半分が“真紅”なら半ギレ感じます。

次回は、また神の領域から始まります。

固有結界（前書き）

短くてゴメンナサイ

固有結界

（真紅狼 side）

北郷を消滅させてから、俺は墜ちていった。

ただただ、墜ちていく。深い闇の底に……

その時、突然、意識が神の所^{ジイサン}に連れてこられた。

「目が覚めたかの？」

「……ああ、俺の意識を拾い上げたのはジイサンか」

「そうじゃ。お主には伝えなければならぬことがあったの……」

“神喰狼”のことか？」

「そうじゃ、やはり気がついておったか」

「……狼が戻ろうとした時に情報が頭の中に流れた」

「なら、ワシから伝えることはあと二つぐらいかの……」

「……二つ？」

まだ、あるのか？

「一つは真紅狼、お主がアレを発現させてから後遺症みたいなもの？
が残ったの、機嫌が悪くなったりするとお主の髪が端から“真

紅”になっていくんじゃ。

完全に“真紅”に染まると、再び“神喰狼”を無意識の内に呼び出すみたいじゃ」

もう呼び出す機会がなければいいが……

「あと、もう一つは？」

「もう一つは、“神喰狼”と呼ばれているぐらいだから“神”もし

くは“神”として認識されている力や言葉、さらには言いかえられているモノに対しては吸収もしくは無効する力が備わったみたいじゃ」

「“神”を語る愚か者達にはまさに天敵って訳か……」

だいいーぶ前だが、于吉も自身のことを“神”って名乗ってたが、死亡フラグ建ったんじゃないね？

「それと先程の業は間違いなく……」

「——『固有結界』か？」

「そうじゃ。だが、まあ、世間で認識されているような『無限の剣製』のようなモノじゃなくて、お主の場合、中にいる存在を召喚させる為の舞台みたいなものだ」

「そんな感じはしていたさ。……固有結界の名はどうすんだ？」

「『天狼繋ぐ神滅の獄』ヴァナルガンド（White Seal様 命名）じゃ」

「ヴァナルガンドね……覚えておくよ」

「では、戻るがいい。お主を心配して付きっきりになってる者達を安心させてやれ」

「……………ああ」

そうして、意識を再び失った。

起きたら、自分の家で寝ていた。

周りには華琳達が寝ていた、目元には涙がわずかに残っていた。

（真紅狼side out）

（先生side）

真紅狼君を治療してから、五日経ちましたが未だに起きる気配は無く、「そのまま死んでしまうのではないか？」と思ったことがある

ましたが、すぐさまそのような気持ちを振り払いました。
華琳さん達は、私が治療を終えてからずっと真紅狼君に付きつきりで見護っており、食事もあることがなかったので無理矢理でも食べるように促しましたが……。
さらには、民の方たちが見舞いの品をたくさん持って来ており、居間は溢れかえって状態です。

私は桶の中の水を変える為、外に行ったあとこちらに戻ってきたら、真紅狼君の姿が布団から消えていました。

「!？」

辺りを探すと、障子の向こう側に影が見えたので、障子を開けると真紅狼君が縁側に座って月を見ていました。

「起きられたなら、声ぐらいかけてもいいじゃないですか？」

「……寝不足は女にとって天敵だからな。起こさないにしたんだ」

「……相変わらず、自分よりも他者を優先するんですね」

「……別に良いだろう？ 護れるならそれでいいさ」

「具合はどうですか？」

「まあ、四割がた回復したが……。辛いな」

「そこまで動ける方が不思議ですよ。……どうします？ 華琳さ

ん達を起しますか？」

「寝かしといてやってくれよ。明日の朝、声を掛けるさ」

「そうですね……。では私は戻りますね」

「有難うな、先生」

「いえいえ、真紅狼君の意識が目覚めてよかったですよ」
「そういいながら、私は家を去り、宮廷に戻った。」

＼先生side out＼

＼真紅狼side＼

俺は先生が去った後、どうかして立ち上がり、お茶を淹れた後再び縁側に戻って来た。

「いつつつ……、ふう、お茶が美味い」

俺が気を失った後の事が気になったが、明日にした。
今はゆっくりと寝てもらおう事にした。

＼真紅狼side out＼

隣の部屋が見舞いの品で溢れかえってるのを朝早く起きた時に気が付いた。

畳が見えねえ……………

固有結界（後書き）

固有結界の名を考えてくれた、アナザー様、White Seal様有難うございました。

固有結界の名はWhite Seal様が考えた『天狼繋ぐ神滅のヴァナルガンド獄』を使わせてもらいます。

本当に有難うございます！！

次回からはほのぼの（？）とした日常生活を書くつもりです。
まあ、真紅狼にとってはほのぼのではないかもしれませんが・・・（笑）

戻って来た日常

（真紅狼 side）

誰よりも早く、朝起きた俺は今だ縁側でお茶を飲んでる。

……ジジイみたいって言うな。

骨がガタガタなんだよ、節々が軋んでしょうがない。

イテテテテ……。

ダメだこりゃ、当分は休まねえと役に立たん。

日がだいぶ昇って来た、時間はだいたい朝の9時ぐらいか……。障子の隙間から朝日が入りこみ、華琳達に日が当たる。

『……ん、もう朝？』

あー、この後が大変だ。

『……兄さんの姿が無い！？』

『『『ええっ！？』』』』

辺りを探す五人は、縁側の障子を開けた。

ガラッ！！

「よう、よく寝れたか？」

さあ、どう出る!!

「……………にいい」

「「「……………真紅」」」

あ、やなy……………

「「「「兄さん（真紅狼）のバカー……………!!!!!!」」」」

キーーーーンッ!!!!

デスヨネー。

超、耳が痛え。

その後、華琳達は泣きながら抱きついてきた。

「あー、その、なんだ？ 済まなかったな」

「済まなかったじゃないわよ、真紅狼くん!!」

「そうやで！ ウチらを悲しませる気か!!」

「……………（無言の圧力）」

「「……………」」

上から紫苑、霞、秋蘭、そして華琳と雪蓮なんだが、秋蘭が凄く怖い。

ヤメテ、無言の圧力だけはヤメテ!!

「ところで、華琳と雪蓮は何故黙ってるんだ？」

「あの時、現れた狼のことを聞きたくて……………」

「「狼？」」「」

まあ、当然だよなあ。

アレで袁紹・袁術・劉備軍をほぼ壊滅させたんだし。

「「真紅狼……………話してくれるよね？」」「」

「……………ハイ。何と言うかね、華琳達が北郷に捕まった後、意識がぶっ飛んだと言えはいいのかな？　その後、俺の心の奥底に眠っていた獣の封印みたいなものが解けて『固有結界』が発動したんだよ」

「「「「『固有……………結界』???」」「」」「」」

説明どうしようかな？

「簡単に言えば、俺の心の心象風景を具現化して、相手を引き摺りこむ。みたいなモノだ」

（作者の解釈ですので注意!）

「「じゃあ、アレが兄さん（真紅狼）の心の中だって言うの?!」」「」

「……………ああ」

「そんな酷い」

「……………もう治せないの?」

「一度確立してしまったら、二度とな……………」

二人は黙る。

華琳は小さな声で「また護れなかった……………」と呟き、雪蓮も小さな声で「…………こんなの理不尽よ」と呟いていた。

「心配してくれるだけでも嬉しいよ。華琳に雪蓮……………ふあゝ」

「眠いんですか？」

「茶を飲みながら月見してたから寝てない」

「なら、私の膝を使ってください」

「ああ、そうする……………zzzz」

いつもなら断るが、眠気が強かったのか。そんなこと気にせずに華琳の上で寝てしまった。

ゝ真紅狼side outゝ

ゝ五人sideゝ

兄さんが目覚めてから、あの後の事を覚えている限りを話した。

その後、兄さんがあくびしていたので思い切って膝の上を枕代わりにどうぞと言ったら、あっさりと頭を乗せて、寝てしまった。

「「「（あゝゝゝ!!）」」「」」

「（ちよっと、華琳様、ズルイ!!）」」

「（ウ、ウチもしたいんや!!）」

「（…………二番目でいいので私にもさせてください!）」

「(ちょっと抜け駆けはナシでしょ!?)」

「(早い者勝ちよ!!)」

兄さんは「スースー」と寝息を立てながら寝ているが、これは膝枕したところのある者しか分からないことだが、兄さんの寝顔は可愛いところがある。

たまに子供っぽい表情が出てくるのだ。

それがまた愛おしくなる。

「(そう来るなら、私は真紅狼の右で寝るわ! 上手く行けばまた抱きついてくれるかもしれないし)」

「(なら、私は真紅狼くんの左を貰うわね!)」

「(しまった!! 出遅れた!!)」

そんなこんなで3時間ぐらい過ぎた。

＼五人 side out＼

＼真紅狼 side＼

俺が起きた時、雪蓮と紫苑がしたいことが一目散に分かった。

抱きつきを狙いに来やがったな…………。

華琳は膝枕していたとして、秋蘭と霞は普通に寝ているみたいだったが、小刻みに体が震えているのは何故?

「あれ、兄さん。起きたんですか?」

「悪いな、華琳。お前の膝を枕代わりにして……」

「こんな形で兄さんの役に立てるなら、嬉しいです」

「そうかい」

「あ、伝言があつたんですよ」

「伝言って誰から？」

「――兄さんの本当の両親からです」

「親父と母さんに逢ったのか？！」

「はい。姿ははっきりと見ていませんが、声は確かに聞きました」

「で、なんて？」

「《「その世界で幸せになれ」》だそうです」

「親父らしい伝言だな、母さんは何か言っていたか？」

「いえ、ただ《不器用でしょうがない》とは言っていました」

「母さん……俺を貶してんのか、心配してくれてるのかどっちかにしてくれ」

「優しそうな方ですね」

「……言っておくが母さんは親父よりも強いからな？ 色んな意味で……」

「……………」

本当に色んな意味で強いんだよ……………

そんな話を話していたら、いつの間にか雪蓮達が起きていた。

「あら、真紅狼が起きたみたいだし、そろそろ本題に移りましょうか……………！」

「本題ってなんだよ？ ていうかなんでそんなにやる気なんだ？」

「真紅狼……………私達を抱きなさい！！」

寝過ぎて俺の耳がおかしくなったかな？

「……………ハア？？」

「YOU！ 抱いちゃいなYO！」

「なんで雪蓮はそんなネタ知ってんの？」

「いや、なんか電波を受け取ったわ」

「……………さいですか。つーか、抱くって言ったって他の四人は準備と言うか気持ちの整理も出来ていないだろ!？」

ここで上手く味方になってくれる人が……………

「私はいつでも兄さんが好きな時に抱いてくれていいですよ？」

「真紅狼に抱かれるなら、嬉しい限りだ」

「ウチは初めてやけど、真紅狼が喜んでくれるように頑張るで!!」

「ああ、はやく真紅狼くんと繋がってみたいわ……………ハアハア」

居ねええええええええええええええええ!!

とうか、一人ヤバイ! 非常にヤバイ!!

いや、まだだ! まだ、手はある!!

「雪蓮、お前は呉の君主だろう?! 呉の現君主と肉体関係を持つのはヤバイだろ!!」

「大丈夫よ!! 皆は分かってくれるわ!!」

「どう見てもヤバイ方向でしか理解できねえよ!!」

「なら……………“君主”じゃなければいいのね？」

「へ? あ、まあ……………」

「分かったわ、ここは一時引き下がるわ。ちよっと、一度呉に戻るから、先に抱かないでよ?」

「俺はこの事に関しては、誰一人欠けはさせねえよ」

「とにかく真紅狼は私が“君主”だから抱けないのよね? なら見てなさいよ??」

そう言いながら、雪蓮は呉に戻った。

真紅狼 side out

なんかマズイ事と言った気がする……………。

戻って来た日常（後書き）

次回は真紅狼は抱くぞー！ー！！！！

しかも、50話というキリのいいところで……

しかし、50話いくとは思わなかった……。

ということで次回の予定では後半がエロくなるので待っててね！

死闘（別の意味で）（前書き）

宣言通りエロい………のか？

死闘（別の意味で）

（真紅狼 side）

はい、雪蓮が呉に帰ってから三日が経った後いきなりその雪蓮がフラッと戻ってきました。

今はもう辺り一帯も暗くなり、居ても違和感を感じない四人が居る。そこに最後の一人が登場する。

「しーーーーんーーーーくろーーーーう？♪」

「なっ!？」

ドタドタ・・・

「さあ、準備は整ったわ!! 私達を抱きなさい!!」

「いきなり来てお前は何を言ってるんだ!!」

「だから、真紅狼は“君主”だから抱かなかったのよね？」

「オイコラ……………まさか……………!？」

コイツまさか、君主を孫権に引き継ぎさせたんじゃないかなろうな!？」

「真紅狼の思っている限りだと思うわよ？ 君主の座を私、孫策から妹の孫権に移したわ」

「ちよつと……………マテやーーーーー!!!!!!」

というか、冥琳止めろよ!!

「冥琳とかは制止しなかったのか?!」

「冥琳や祭は止めなかったわ、むしろ祭に関しては「後日一緒に酒を飲むぞ♪」って言ってたわ」

オウフ…………

止めろよ、お二人さん。そして、孫権すまない。

後ろではようやく抱かれるとあって、息が上がりかけて居る者や既に脱ぎかけてる者が居る。

ちなみに一人だけ、すでに「言えないよ!!」の方が居る。

俺が「喰う」んじゃないくて「喰われ」そうだ。

取り敢えず、防音の結界張っておくか…………

あと、障子を閉めて…………「…パタンッ」…これでよし。

後ろをみると、…………普通の男なら狂喜するレベルの光景が目の前にある。

「さて、五人とも覚悟はいいな？」

五人は体を火照りながら頷いた。

〈真紅狼side out〉

〈紫苑side〉

雪蓮さんが来てから、流れ的に抱くんだろうなと思うと体が火照ってきて息が次第に荒くなってきたのが自分でも分かる。

真紅狼くんが、周りをよく見ながら戸を念入りに閉めていった。

その間に私達は服を脱ぎ始め、真紅狼くんを待っていた。

……表現描写が出来ないからじゃないよ？
……出来ないからじゃないからね！？

??? 「……久しぶりに仕事をしたと思ったらこれかね？ 私をこ
き使うのもいい加減にしたまえ」

——あ、ワラキアさん。お疲れ様です。

「私の出番はないのかね？」

——まだ、当分先だけど“真恋姫”が終わったら、これの続編を創
るかもしれないから、そのときにキミとロアさんの能力を付加させ
るかもしれないんでよろしく。

「ふむ、それなら、まあいいだろう」

——では、続きをどうぞ。

（真紅狼 side）
あー、もう朝かー（疲）

いやー、長い戦いだっただ。

ん？ 内容が知りたい？ 教えるかバカ！

前も言ったが俺は独占欲が強いんだよ、誰がアイツ等の艶やかな姿の時の状況を教えるか。

だが、まあ結果ぐらいいは教えというてやるか。

華琳とは三回。

しかも、絞め付けが五人の中で一番強い。

秋蘭とは三回だな。

華琳とは反対で包みこむような感じ。

霞とは二回。

一回目でダウンしたんだが、「……頑張る」って二回目で完全にダウン。

ここからが俺も相手もギリギリの戦いだっただ。

雪蓮は四回。

直情的で、貪ってくる。しかも、絞め付けは華琳程ではないが結構強いからヤバかった。

最後に紫苑は五回。

もう何も言えないほどだった。

至高と言っても過言じゃないほどの威力だった。

五回中二回は先に俺がいった。

やってる途中で、紫苑は○乳が出るから、飲んでました。
味は言えん。というか言いたくない。

まあ、そんなこんな結果です。

各自内容は想像してくれ。所謂“心の眼”で見てくれと言うヤツだ。
……取り敢えず、風呂に入るか。

入浴中……

さっぱりした俺は、着物に着替えた後、お茶を入れて縁側でお茶を
飲んだ。

「はぁ〜、お茶が美味い。……あ、茶柱立ってる」
いいことがあればいいな。

ガヤガヤ……

どうやら、起き始めたようだった。

「……兄さん、お、お早うございます／＼／＼」
「おう、おはようさん。風呂に入ってきたらどうだ？ さっぱりす
るぞ？」

「……そうします。……出来ればですね、兄さん……」

「なんだ？」

「……また相手をしてもらってもいいですか？／／／／」
おおう、一夜でここまで大胆になるとは…………

「まあ、求められたらやってやるよ」

「あ、有難うございます／／／／……」ただ……はい？」

「ただ、今回は数回だけだったけど、“一人”の時は寝かせないかな？」

「……の、望むところです／／／／」

臨むなよ……

「……ほれ…「バサッ」」

「これは？」

「雪蓮がいない間に創っておいた華琳達用の着物だ。華琳は黄、秋蘭は藍、紫苑は紫、雪蓮は朱、霞は橙だ。間違えるなよ？」

「分かりました」

そう言った後、華琳達は風呂場に行った。

ウチの風呂場は、この前改造して約10人位までは一緒に入れる広さにしたから、大丈夫な広さだ。

…………ああ、そう言えば今日は呉の皆さんが来るんだっけ？

（真紅狼 side out）

…………さて、今日はどうやって過ごそうかねえ？

死闘（別の意味で）（後書き）

本当なら細かく書きたかったが、書いたらマジで削除されかねないので、回避しました。

というか、“ハイスクールD×D”で一線超えてから、躊躇いが無くなるって恐ろしい。

そして途中、作者とワリアさん出張したときに言っていた事なんです。が、“真恋姫”が終わったらの話なので当分先です。

頭の片隅においてくれたら結構です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4958v/>

転生先は“ネギま”じゃなくて真恋姫！？

2011年11月10日16時50分発行